静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第64集

上 土 遺 跡 II

静　　岡　　市

平成29年度～令和４年度　二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）
総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２２

静 岡 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

上土遺跡は、静岡平野に立地する、弥生時代から近世・近代に至るまでの水田を中心とした遺跡です。

この遺跡は、過去に実施された国道１号静清バイパス建設、二級河川巴川総合治水対策特定河川事業等に伴う発掘調査において、古代条里制に基づく奈良時代から平安時代の水田を中心として、弥生時代以降の各時代の水田が検出されるなど、静岡平野における重層的な水田遺跡として、典型的なありかたを示しています。既に報告された地点の調査成果は、学界の共有財産として広く受容されており、県民の財産としてもかけがえの無い文化財として受け入れられていると考えています。

平成 29 年度から再開された上土遺跡の調査は、上土遺跡の遺跡範囲の中で北西側に位置し、遺跡の北西側限界を探ることを、調査の目的の一つとして行いました。結果としては全ての調査区で、古代条里制に基づく畦畔を発見することができました。これにより、調査地点までは確実に条里水田が拡がっていたことが明らかになり、静岡平野における、条里水田の拡がりを考える上で重要な成果が得られたと考えています。

また、今回の調査では、農具や建築材等からなる多数の木製品が出土した調査区もあります。これは、過去の上土遺跡の調査と同様か、さらに上回る密度での出土であり、古代の木製品の研究のために、多くの情報を提供できたと考えています。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県静岡土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2022 年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長
野村浩司

例　　言

1　本書は静岡県静岡市葵区立石（あおいくたていし）７－18 他に所在する上土遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県静岡土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　上土遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

本調査　　平成 29 年 10 月～平成 30 年２月　実掘削面積 2,101 ㎡
　　平成 30 年９月～平成 31 年２月　　実掘削面積 3,641 ㎡
　　令和元年 10 月～令和２年２月　　実掘削面積 2,556 ㎡

資料整理　令和２年６月～令和３年３月
　　令和３年７月～令和４年３月（保存処理は令和４年度まで）
　　※資料整理には、保存処理期間、報告書刊行作業期間を含む。

4　調査体制は以下のとおりである。

平成 29 年度（現地調査）
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　山本広子　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　笹原千賀子　　主査　岩﨑しのぶ

平成 30 年度（現地調査）
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　山本広子　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　溝口彰啓　　主任　木崎道昭

令和元年度（平成 31 年度）（現地調査）
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　中野克彦　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　溝口彰啓　　主任　木崎道昭

令和２年度（資料整理・保存処理）
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　中野克彦　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　島田真紀　　調査課長代理兼調査班長　富樫孝志　　主幹　中川律子
　主査　大森信宏（保存処理担当）　主任　木崎道昭

令和３年度（資料整理・保存処理）
　所長　野村浩司　　次長兼総務課長　吉田光廣　　技監兼調査課長　中鉢賢治
　総務班長　島田真紀　　調査課長代理兼調査係長　富樫孝志　　主幹　中川律子
　主査　大森信宏（保存処理担当）

5　本書の執筆は凡例、第１章～第４章第３節を木崎道昭、第４章第４節～第５章、抄録を中川律子が行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　外部委託については以下のとおりである。

掘削等・遺跡測量等業務　株式会社イビソク（平成 29 年度～令和元年度）
整理作業・保存処理業務　株式会社イビソク（令和２年度～４年度）
プラントオパール・火山灰分析業務　　株式会社古環境研究所
木製品樹種調査業務　東北大学名誉教授　鈴木三男
種実同定業務　株式会社古環境研究所

8　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
河合修、鈴木三男、矢田勝、山田昌久（五十音順・敬称略）。

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
（X＝－ 110,250.000　Y＝－ 9,260.000）＝（A，0）

3　出土遺物は通し番号（＝遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。

4　遺構図、遺物実測図等の縮尺は、図ごとに適当な縮尺とし、それぞれにスケールを付した。

5　色彩に関する用語・記号は、『新版　標準土色帳　1999 年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局他監修 1999）を使用した。

6　土層名は第３章第２節の基本土層柱状図（第６図）に表示した名称を用いる。なお、平成 29 年度・30 年度の現地調査においては、年度ごとに独自の層名による分層を行い、図面の作成、土層注記等を行った。今回の報告書作成にあたり、それらの成果を改めて検討した結果、平成８年発刊の、静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 77 集『上土遺跡（立石地区）Ⅰ（遺構編）』（静文研 1996 ｂ）で使用した層位の呼称をそのまま用いた方が望ましいと考えるに至った。そこで本報告ではその方向で層名を用いた。したがって、平成 29 ～ 30 年度調査の層名は整理段階で改変している。そのため原図や土層写真の分層線と異なる土層断面図が掲載されている場合がある。また、写真の分層線は直してはいない。なお、令和元年度の現地調査は、現地段階で（静文研 1996 ｂ）の土層名を用いた。したがって、土層名の変更はない。

7　第２章第２節の周辺遺跡分布図（第４図）は国土地理院発行１:25,000 地形図「静岡東部」・「清水」を複写し加工・加筆した。

8　木製品の分類は、伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学　出土木製品用材データベース』（伊東・山田編 2012）掲載の分類基準に則って行った。

9　本報告書作成にあたり利用した引用・参考文献は、第６章の自然科学分析以外は 96・97 ページにまとめて掲載した。第６章の自然科学分析の各節でとりあげられた引用・参考文献については、各節が別個の報告として本センターに提出されたことを考慮して、各節の終わりにそれぞれ掲載した。なお，引用・参考文献を表記する際、以下のように省略した場合がある（本文中でもこの略称を用いた場合がある）。
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
埋蔵文化財センター→埋文センター
教育委員会→教委
静岡県教育委員会→県教委

10　参考文献名等の旧漢字は、原則として新漢字に改めた。

目　　次

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　上土遺跡・岳美遺跡他のこれまでの調査成果 …… 2

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境 …… 6

第２節　歴史的環境 …… 8

第３章　調査の方法と経過等

第１節　調査の方法 …… 14

第２節　基本土層 …… 18

第３節　調査の経過 …… 23

第４章　調査の成果

第１節　平成 29 年度の調査（1 － 1 区の調査） …… 27

第２節　平成 30 年度の調査（1 － 2 区、2 区の調査） …… 32

第３節　令和元年度の調査（1 － 3 区、3 区、4 区の調査） …… 42

第４節　出土遺物 …… 55

第５章　まとめ

第１節　条里型水田について－これまでの調査成果をふまえて－ …… 94

第２節　出土遺物について …… 94

第６章　自然科学分析

第１節　上土遺跡出土木材の樹種 …… 119

第２節　上土遺跡種実同定 …… 140

第３節　上土遺跡検出の火山灰同定分析 …… 144

第４節　上土遺跡出土プラント・オパール分析 …… 147

写真図版

抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　周辺地形図 …… 7
第４図　周辺遺跡分布図 …… 12
第５図　調査区配置図 …… 15
第６図　基本土層柱状図 …… 19
第７図　土層図１ …… 20
第８図　土層図２ …… 21
第９図　土層図３ …… 22
第10図　１－１区全体図 …… 28
第11図　１－１区遺構詳細図１ …… 29
第12図　１－１区遺構詳細図２ …… 30
第13図　１－１区遺物出土状況図 …… 31
第14図　１－２区全体図 …… 33
第15図　１－２区遺構詳細図１ …… 34
第16図　１－２区遺構詳細図２ …… 35
第17図　１－２区遺物出土状況図 …… 36
第18図　２区全体図 …… 37
第19図　２区遺構詳細図１ …… 38
第20図　２区遺構詳細図２ …… 39
第21図　２区遺物出土状況図１ …… 40
第22図　２区遺物出土状況図２ …… 40
第23図　２区遺物出土状況図３ …… 41
第24図　１－３区全体図 …… 43
第25図　１－３区遺構詳細図１ …… 44
第26図　１－３区遺構詳細図２ …… 45
第27図　１－３区遺物出土状況図 …… 46
第28図　３区全体図 …… 47
第29図　３区遺構詳細図１ …… 48
第30図　３区遺構詳細図２ …… 49
第31図　３区遺構詳細図３ …… 49
第32図　３区遺物出土状況図１ …… 50
第33図　３区遺物出土状況図２ …… 51
第34図　４区全体図 …… 52
第35図　４区遺構詳細図 …… 53
第36図　４区遺物出土状況図 …… 54
第37図　出土遺物実測図１ …… 74
第38図　出土遺物実測図２ …… 75
第39図　出土遺物実測図３ …… 76
第40図　出土遺物実測図４ …… 77
第41図　出土遺物実測図５ …… 78
第42図　出土遺物実測図６ …… 79
第43図　出土遺物実測図７ …… 80
第44図　出土遺物実測図８ …… 81
第45図　出土遺物実測図９ …… 82
第46図　出土遺物実測図10 …… 83
第47図　出土遺物実測図11 …… 84
第48図　出土遺物実測図12 …… 85
第49図　出土遺物実測図13 …… 86
第50図　出土遺物実測図14 …… 87
第51図　出土遺物実測図15 …… 88
第52図　出土遺物実測図16 …… 89
第53図　出土遺物実測図17 …… 90
第54図　出土遺物実測図18 …… 91
第55図　出土遺物実測図19 …… 92
第56図　出土遺物実測図20 …… 93
第57図　これまでの調査との関連性 …… 94
第58図　モモ核変遷図 …… 142
第59図　上土遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム …… 145
第60図　プラント・オパール分析結果１ …… 149
第61図　プラント・オパール分析結果２ …… 150

挿表目次

第１表　調査実施面積一覧表 …… 5
第２表　周辺遺跡地名表 …… 13
第３表　土層総括表 …… 25
第４表　調査工程表 …… 26
第５表　畦畔計測表 …… 53
第６表　出土土器観察表 …… 98
第７表　出土石製品観察表 …… 98
第８表　出土木製品観察表 …… 98
第９表　出土木製品一覧表 …… 104
第10表　上土遺跡出土木材樹種一覧表 …… 130
第11表　出土種実一覧表 …… 140
第12表　出土モモ核の計測値一覧表 …… 141
第13表　テフラ検出分析表 …… 144
第14表　火山ガラス比分析結果 …… 145
第15表　屈折率測定結果 …… 146
第16表　プラント・オパール分析結果 …… 148

挿写真目次

写真１　表土除去作業（１－２区）…… 17
写真２　畦畔掘削作業（１－３区）…… 17
写真３　実測作業（木柄付鉄鎌）…… 17
写真４　保存処理作業（含浸）…… 17
写真５　出土木材顕微鏡写真１…… 131
写真６　出土木材顕微鏡写真２…… 132
写真７　出土木材顕微鏡写真３…… 133
写真８　出土木材顕微鏡写真４…… 134
写真９　出土木材顕微鏡写真５…… 135
写真10　出土木材顕微鏡写真６…… 136
写真11　出土木材顕微鏡写真７…… 137
写真12　出土木材顕微鏡写真８…… 138
写真13　出土木材顕微鏡写真９…… 139
写真14　出土種子…… 143
写真15　上土遺跡のプラント・オパール写真１…… 151
写真16　上土遺跡のプラント・オパール写真２…… 152

写真図版目次

図版１　立石エリア調査区全景（合成写真）
図版２　１　１－１区調査区西側および畦畔１（北東から）
　　２　１－１区調査区全景
図版３　１　１－２区調査区遠景（北西から）
　　２　１－２区調査区全景
図版４　１　１－３区調査区遠景（南から）
　　２　１－３区調査区西側および畦畔４（南東から）
図版５　１　２区調査区遠景（北西から）
　　２　２区調査区全景
図版６　１　３区調査区遠景（南西から）
　　２　３区調査区全景
図版７　１　４区調査区遠景（北西から）
　　２　４区調査区北側および畦畔７
図版８　１　１－１区畦畔１土層断面（土層帯４）（南西から）
　　２　１－２区畦畔２土層断面（第５ベルト南面）（南東から）
　　３　１－３区畦畔４とその付近の土層断面（調査区南壁）（北西から）
　　４　１－３区畦畔５とその付近の土層断面（調査区北壁）（東南から）
　　５　２区畦畔３土層断面（第１ベルト）（南西から）
　　６　３区畦畔６土層断面（調査区北東壁）（南東から）
　　７　３区畦畔６土層断面（調査区南西壁）（北東から）
　　８　４区畦畔７土層断面（調査区西壁北端部）（北東から）
図版９　１　１－１区畦畔１土層断面（土層帯５）（北東から）
　　２　１－１区遺物出土状況（椀と田下駄）
　　３　１－１区木製品集中地点１遺物出土状況（畦畔東端部）（北東から）
　　４　１－１区木製品集中地点１遺物出土状況（畦畔東端部）（北東から）
　　５　１－１区角枠型田下駄出土状況
　　６　１－１区畦畔内泥除け出土状況
　　７　１－１区泥除け他出土状況
　　８　１－１区田下駄出土状況
図版10　１　１－２区畦畔２検出状況（南東から）
　　２　１－２区畦畔２土層断面（第２ベルト南側）（南東から）
　　３　１－２区畦畔２土層断面（第４ベルト南側）（南東から）
　　４　１－２区畦畔２取水口？北側の土層断面（南西から）
　　５　１－２区畦畔２取水口？南側の土層断面（南西から）
　　６　１－２区円枠型田下駄の円枠と足板出土状況
　　７　１－２区田下駄出土状況
　　８　１－３区畦畔４検出状況（南東から）
図版11　１　１－３区畦畔４土層断面（調査区西壁）（南東から）
　　２　１－３区調査区南東壁西端部土層断面（北西から）
　　３　１－３区調査区北東壁土層断面（南西から）
　　４　１－３区調査区北西壁東端部土層断面（南東から）
　　５　１－３区畦畔４下部遺物出土状況（南東から）
　　６　１－３区畦畔４補強材検出状況（東から）
　　７　１－３区調査区東側遺物出土状況（南西から）
　　８　２区畦畔３検出状況（北東から）
図版12　１　２区畦畔３土層断面（第３ベルト北東側）（北東から）
　　２　２区畦畔３土層断面（第５ベルト南西側）（南西から）

３　２区畦畔３補強材検出状況
４　２区畦畔３補強材？検出状況（調査区西側）
５　２区木製品集中地点２遺物出土状況（北から）
６　２区木製品集中地点２遺物出土状況
７　２区火きり臼と火きり杵出土状況
８　２区天秤棒出土状況
図版13　１　２区田下駄出土状況
２　２区田下駄等出土状況
３　２区田下駄出土状況
４　２区木柄付鉄鎌出土状況（北東から）
５　２区田下駄出土状況
６　２区泥除け出土状況
７　３区畦畔６土層断面（第１ベルト西側）（南西から）
８　３区畦畔６土層断面（第２ベルト西側）（南西から）
図版14　１　３区畦畔下遺物出土状況
２　３区遺物出土状況（調査区南西コーナー部）（北東から）
３　４区調査区北半および畦畔７検出状況（南西から）
４　４区畦畔７（西側）検出状況（東から）
５　４区畦畔７（東側）検出状況（南西から）
６　４区調査区東南端部遺物出土状況（北西から）
７　４区用途不明木製品出土状況（北東から）
８　４区田下駄出土状況
図版15　出土遺物１
図版16　出土遺物２
図版17　出土遺物３
図版18　出土遺物４
図版19　出土遺物５
図版20　出土遺物６
図版21　出土遺物７
図版22　出土遺物８
図版23　出土遺物９
図版24　出土遺物10
図版25　出土遺物11
図版26　出土遺物12
図版27　出土遺物13
図版28　出土遺物14
図版29　出土遺物15
図版30　出土遺物16
図版31　出土遺物17

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

二級河川巴川総合治水対策特定河川事業

静岡市内を流れる二級河川巴川は勾配が緩く、流下能力が低いために、台風等の大量降雨時には浸水等の被害を多くもたらしてきた。特に昭和 49（1974）年の七夕豪雨においては、死者 27 人、床上・床下浸水約 26,000 戸をはじめとする大被害を流域の地域にもたらした。これらにより、静岡県では流域整備事業を行い、大谷川放水路の開削と、麻機遊水地第３、第４工区の事業等により、巴川の治水対策を行った。

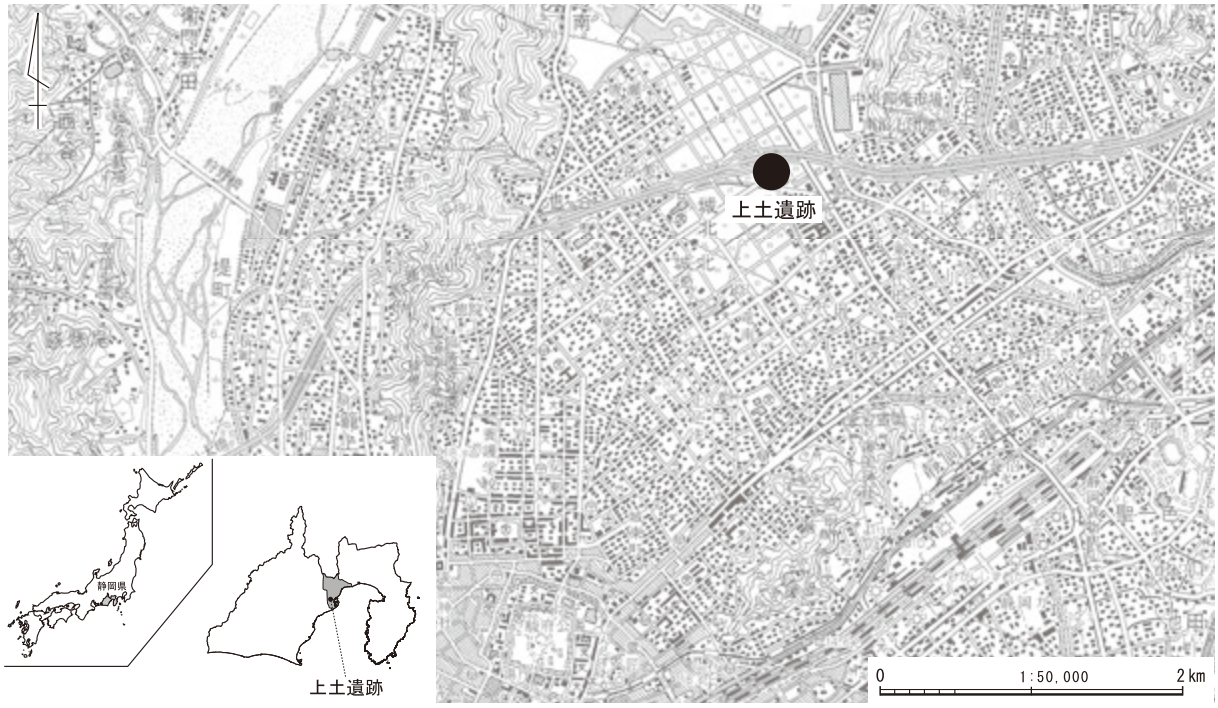
麻機遊水地第２工区

静岡県では、さらなる流出水の抑制をはかる等の目的のため、平成 11（1999）年度からの新流域整備計画により、麻機遊水地第１、第２工区等の事業に着手した。このうち、麻機遊水地第１工区から事業に着手し、第１工区事業終了後に第２工区の事業に着手する運びとなった。

加藤島エリア・安東川エリアの埋蔵文化財調査

麻機遊水地第２工区の計画策定に伴い、平成 22 年４月に静岡県静岡土木事務所から、静岡県教育委員会文化財保護課（当時。以下、保護課と略）に埋蔵文化財取扱いについての照会があった。事業箇所の一部が、周知の上土遺跡・岳美遺跡の範囲内に位置するため、保護課では平成 22 年８月に加藤島エリアで、平成 23 年３月、安東川エリアで試掘・確認調査を行い、遺構（水田）の存在を確認した。

これにより、事業箇所のうち、遺構の存在が予測され、かつそれが工事により破壊される地域については本発掘調査が必要となり、協議の結果、静岡県埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターと略）が調査を担当することになった。



第１図　遺跡位置図

埋蔵文化財センターによる、麻機遊水地第２工区の事業に伴う上土・岳美遺跡の本調査は、平成 23 年度に加藤島エリアで（12 月～平成 24 年３月）、平成 24 ～ 26 年度に安東川エリアで行われた。当初の想定どおり、古代の水田畦畔が検出され、多くの遺物（ほとんどが木製品）が出土した。

埋蔵文化財センターでは、平成 23 ～ 26 年度の現地調査の成果について、平成 27･28 年度に整理作業・報告書作成作業を実施し、平成 29 年３月に報告書を刊行した（埋文センター 2017）

立石エリアの埋蔵文化財調査

麻機遊水地第２工区の事業は、平成 29 年度からは、静清バイパスより北側の地区である、立石エリアでも着手されることになった。平成 29 年２～３月にかけて、文化財保護課が試掘・確認調査を行ったところ、古墳時代後期～中世の水田が２面以上にわたって認められた（県教委文化財保護課 2017）。また、平成 30 年２月にも保護課により、条里水田の限界が想定できる資料を得るために、立石エリアで再度試掘・確認調査を行ったところ、条里水田の大畦畔と水田面が検出され、限界線を想定できる資料を得ることができた（県教委文化財保護課 2018）。

これらの成果を受け、平成 29 年度から令和元（2019）年度（平成 31 年度）まで本調査を埋蔵文化財センターで行った。これが、今回報告する立石地区の調査である。

なお、静清バイパスの建設に伴い、平成４～５年度に上土遺跡、岳美遺跡の調査が、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（当時）によっておこなわれているが、これらの調査成果については、次節で述べる（平成４～５年度の、静岡市教育委員会（以下静岡市教委と略）による上土遺跡加藤島地区の調査も同様である）。

第２節　上土遺跡・岳美遺跡他のこれまでの調査成果

ここでは、上土遺跡・岳美遺跡他の過去の調査歴・調査成果について述べる。なお、岳美遺跡の南側に所在する城北永ケ島遺跡は岳美遺跡にほぼ隣接しており、同一遺跡と考えられるのでここに含めた形で述べたい。さらに、上土遺跡・岳美遺跡と連続し、ほとんど同一の立地条件（麻機低地）にある池ヶ谷遺跡にも言及する。なお､今回の調査で検出された遺構の時代である古代（奈良～平安時代）の遺構、遺物にほとんど限定する。

静清バイパス関連の調査経過と城北永ケ島遺跡の調査

国道１号線静清バイパスは、静岡市清水区興津東町から駿河区丸子二軒屋までの 24.4km の区間であり、昭和 43（1968）年に事業化された。それに伴う埋蔵文化財の調査は、旧静岡市内においては、昭和 50 年に開始された。昭和 59 年には、当センターの前身である、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が発足し、その年の川合遺跡宮下地区・内荒地区の本調査を皮切りに大規模な調査が行われ、静清平野の歴史の究明に大きな成果をもたらすことになる。

静清バイパスの、上土遺跡から池ヶ谷遺跡までの区間については、静清バイパス事業に伴う昭和 62 年度からの静岡市教育委員会による試掘確認調査によって、遺跡の存在が確認された。

この上土遺跡以西の地区の本調査は、昭和 63 年の池ヶ谷遺跡の第Ⅰ期調査により開始され、平成４～５年度にこの地区の大半の本調査が行われることになる（静岡市教委調査分を含む）。

また、この時期には、岳美遺跡の南に隣接する城北永ケ島遺跡の調査も行われている（平成３年度）。平成４年度からのこの地区の本格調査に先立つ調査であるので､その成果についてここで概略を述べる。

城北永ケ島遺跡の調査は、現静岡県立静岡中央高校の建設に伴う事前調査である。静岡県教育委員会文化課（当時）により調査が実施された。当初は未周知であったため、確認調査により遺跡の存在を確

認した上で本調査に移行した。大きく分けて２箇所の調査区からなり、２箇所とも大畦畔の交点が検出された。ただし、交点の部分は畦畔が検出されておらず、２調査区とも途切れることが判明した。概報ではこの途切れ部分を送水関連の施設と想定している。また、２調査区の間にも掘削を行い東西方向の畦畔を検出した。これにより、２箇所の調査区で検出された、東西方向の畦畔が連続する可能性が高いことが指摘されている。

調査概報（県教委 1994）を読む限り、この大畦畔は古代（平安時代）の条里制の大畦畔であり、交点部分が隣接する２箇所で切れていることは興味深い。また、大畦畔の補強材についても述べられている。さらにこの水田（Ｖ層水田とする）より上層にも水田耕作土が存在することが指摘されている。さらに、大畦畔内部の下部に耕作痕の見られる土層があることから、大畦畔構築以前の耕作土の痕跡ではないかという指摘もある。これは今回報告する地区の大畦畔と概ね共通することであり、重要な指摘である。

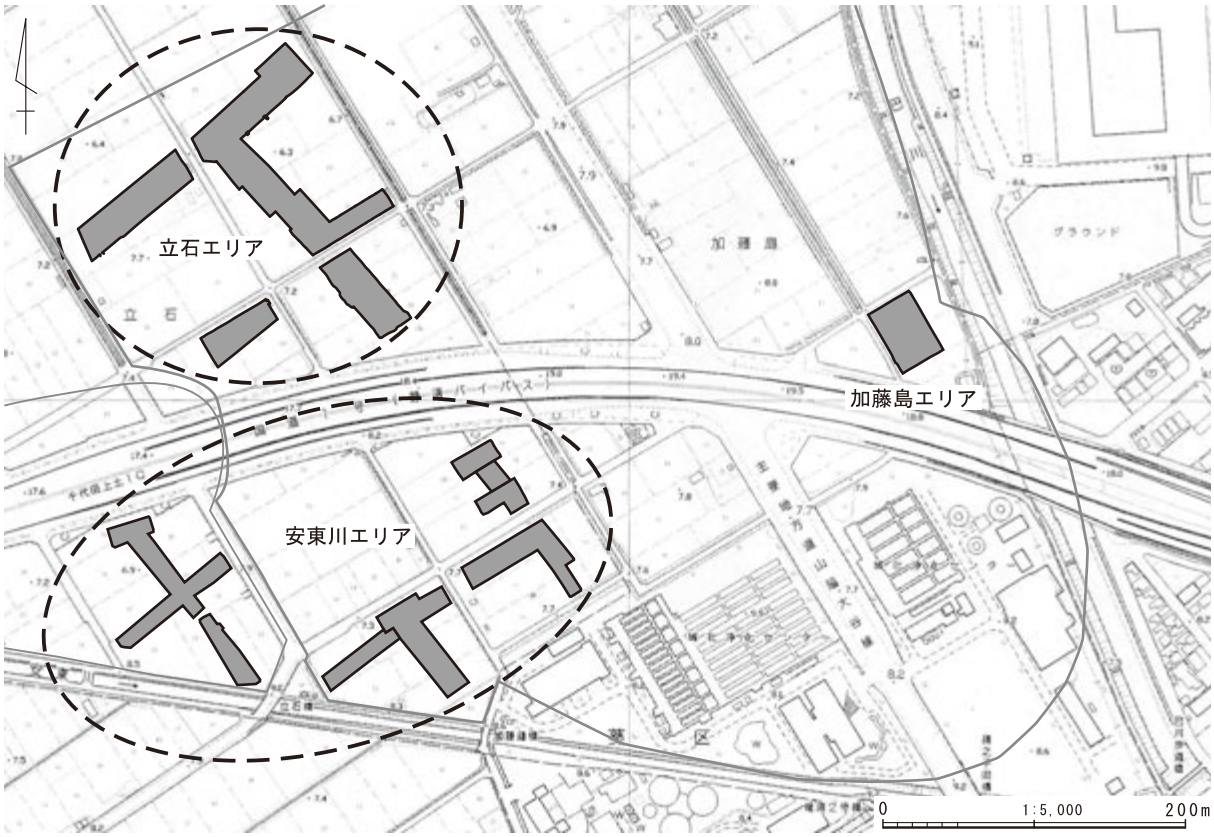
以上のような事実の指摘は、上土遺跡で一般的に見られる（大畦畔の交点が途切れることは一般的ではない）ことであり、この調査と池ヶ谷遺跡の調査でそれが確認された意義は大きい。

平成４～５年度の上土遺跡・岳美遺跡の本調査（県調査分）

平成４～５年度に上土遺跡・岳美遺跡の静清バイパス分の本調査が一挙に行われた。その成果については遺跡ごとに述べる。

①岳美遺跡

岳美遺跡の本調査であるが、古代の大畦畔の存在が図上で想定される部分のみの調査であり、10 箇所の調査区（１区～ 16 区。13 区は欠番。接続している区は１箇所としてカウント）で調査が行われた。ほとんど全ての調査区で南北方向ないし東西方向（正確には南北方向の畦畔は北西へ約 39 度、東西方向の畦畔は南西に約 39 度傾く）の大畦畔が検出された。したがって、東西ならびに南北方向の大畦畔



第２図　調査区位置図

はバイパスの調査対象地域全体に広がっていたと考えられる。これらから、大畦畔の間隔は、南北間で平均 109.6 m、東西方向で平均 106.3 m（東西間隔は歪みのある SK-04 の両側間隔を除いた数値で、報告書のものとは異なる）と計測される。また、大畦畔の特徴として、南北方向の大畦畔は杭列や板材による補強がなされていることが大半であるのに対して、東西方向の大畦畔にはそれがほとんど見られない点が指摘されている。また、南北方向の大畦畔でも補強の程度に差があること（西側は濃密に補強されているのに対して、東側の補強の密度は薄い）にも言及されている。

なお、大畦畔とセットとなる小畦畔も各地区で検出されているほか、古代と思われる溝状遺構、自然流路も発見されている。また、植物種子の集中している箇所が数ヶ所あり、祭祀に関わる可能性を提示している（静文研 1995）。

②上土遺跡

上土遺跡では、岳美遺跡と異なり、バイパス道路（側道含む）が建設される幅いっぱいまでの調査区を３箇所設定して調査を行った（西から３区、２区で、最も東が１区）。ここでは、当該期の水田を中心にのべる（弥生時代中期後葉～古墳時代前期とされる 15 層水田と、中世以降の水田については原則的に言及しない）。

上土遺跡の古墳時代中・後期～律令期においては、岳美遺跡と同様の条里制大畦畔と中・小畦畔が検出されている。報告書で 12 層水田遺構群と呼んでいるのがそれである。報告書ではこれを 12 層上部（条里制（新）水田と呼称）と、12 層下部水田（非広域条里系と呼称）とに分けて調査している。大畦畔は各区とも南北方向、東西方向とも全て検出されているが、1 区は大畦畔の圧密が強く、大畦畔そのものが不明瞭であった。大畦畔内の中の小区画水田についても非常に詳細な調査がなされている。12 層下部水田では条里制以前のＮ 13°　Ｅ系、正方位系などの水田区画が部分的にではあるが検出されている。

このほか、県調査分の上土遺跡の報告については畦畔の補強等について非常に詳細な記述がある（静文研 1996 ｂ）が、ここでは深入りせず、必要に応じてこれ以降の記述で述べていきたい。

平成４・５年度の上土遺跡の調査（静岡市教委分）

静清バイパス関連他の調査は県教委だけではなく、静岡市教育委員会によっても行われている。平成５年２月～５年 11 月まで静清バイパス加藤島地内、５年 11 月～６年３月には城北下水処理場沈殿池築造に伴う調査（註１）が行われ、概報が刊行されている。以下の記述は、概報での記述をそのまま要約した。

加藤島地区では、①弥生時代～古墳時代前期、②古墳時代の終わり～奈良時代の疑似畦畔Ｂ、③平安時代の条里地割りに基づく水田の３面が検出、調査された。①は大畦畔と小畦畔による小区画水田であり、②は③によって撹拌されていること。③では坪界線は出土しなかったが、土盛畦畔による約５m四方の区画等が検出されている（鈴木 1995）。

城北下水処理場地区では、①弥生時代小区画水田、②平安時代の条里地割に基づくと思われる水田跡、が検出された。②には坪界線と思われる大畦畔のほかに小畦畔が検出されている（八木 1995）。

両者ともに、現在に至るまで本報告書が刊行されておらず、調査区の詳細な位置関係も不明であるが、平成４～５年分の県報告分と同様の成果と考えられる。ただし、平安時代とされた条里水田は奈良～平安時代とすべきであろう。

二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）総合治水対策特定河川事業に伴う県調査

平成 23 ～ 26 年度に当埋蔵文化財センターで行った本調査が、今回の報告以前の調査として最新のものと思われる。調査は加藤島エリアの他に、静清バイパス南側の安東川エリアが対象となった。また、調査後の工事掘削が深くは及ばないため、古代の条里水田までの深度が調査の対象となった。

加藤島地区では、第１面では近世の遺物のほか、溝状遺構と畦畔状遺構が出土した。泥炭層直下の第２面では小区画水田が小畦畔を伴って検出された。小区画は概ね東西方向に細長く、97 面を数える。面積が判明するもの（推定含む）の最大は 20.52 ㎡、最少は 2.88 ㎡である。調査区の東側には小区画の空白部分がある。この小区画水田は、平成４～５年度調査の上土遺跡立石地区のバイパス関連県調査分の、12 層下面の水田と同一層位である可能性がある。

安東川地区では想定される坪界線の箇所のみの調査となった。１～４区に便宜上分けたが、いずれの調査区からも条里制の大畦畔が検出された。西側の４区を中心に、大畦畔と方向を同じくする小畦畔も発見されている。そのほか、溝状遺構等も検出されている（埋文センター 2017）。

③池ヶ谷遺跡

前にも述べたとおり、上土遺跡・岳美遺跡の西側に連続する池ヶ谷遺跡については、別遺跡としての扱いであるが、岳美遺跡からほぼ連続しており、麻機低地の最も西側にある遺跡のため、ここでは過去の調査の概略について述べたい。

昭和 62（1987）年度の静岡市の予備調査により、静清バイパス事業地での遺跡の存在が明らかとなり、昭和 63 ～平成２（1990）年度に第Ⅰ期調査（静文研 1992）、平成５年度に第Ⅱ期調査（静文研 1996 a）が行われている。遺跡の状況は上土遺跡、岳美遺跡とほぼ同様であるが、各時期の水田を覆う自然堆積の間層が上土遺跡、岳美遺跡では粘土層であるのに対し、砂礫層である点は異なる。

条里制に関連する水田であるが、ＤⅢ層水田として調査が行われている。それによれば、全地区にわたって条里制に関連すると思われる畦畔と水田耕作土が検出されている。畦畔は、①大畦畔、②中畦畔、③小畦畔に分類されており、①は南北方向の１基のみで里界線と推定している。②は南北方向、東西方向ともにあり、交点も検出されている。坪界線と推定している。③は①・②以外の小規模な畦畔で、坪内部を分割する畦畔とする。全体としては、①の里界線の畦畔を検出、指摘したことが大きいであろう。

今回の調査の課題

以上過去の調査の成果について述べてきたが、静清バイパスの路線内と、その南側と北側にも条里制大畦畔を伴う水田が広がることが明らかとなった。ただし、南側、北側ともにどこまでそれが広がるかについては、必ずしも明らかではなかった。また、詳細に見てゆくならば、畦畔の補強の状況は地区ごとに少しずつ異なっており、それが一定の傾向を有するのかも問題であった。今回の調査の主眼はこのような点に置かれることになった。特に北側にどこまで大畦畔の延長部分が伸びるかが最大の眼目である。

註

１　概報（八木 1995）において、当調査区の調査期間は、平成５年 11 月１日から平成５年３月 20 日までとなっているが、終了時期は平成６年の誤りであろう。本文では訂正して記述した。

第１表　調査実施面積一覧表

調査年度	調査区	遺構調査面の面積（㎡）
H29 年度	1-1 区	1,392
H30 年度	1-2 区	1,418
	2 区	1,435
R1 年度	1-3 区	625
	3 区	774
	4 区	1,024
合計		6,668

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

上土遺跡は、国道１号線静清バイパス千代田上土ICとその周辺に位置する。現在において上土遺跡と、隣接する岳美遺跡は一体的な遺跡として把握されている。このうち、上土遺跡部分は静岡市葵区加藤島、安東川、立石の各地区に広がっている。岳美遺跡は岳美１丁目、北安東４丁目他に位置する。

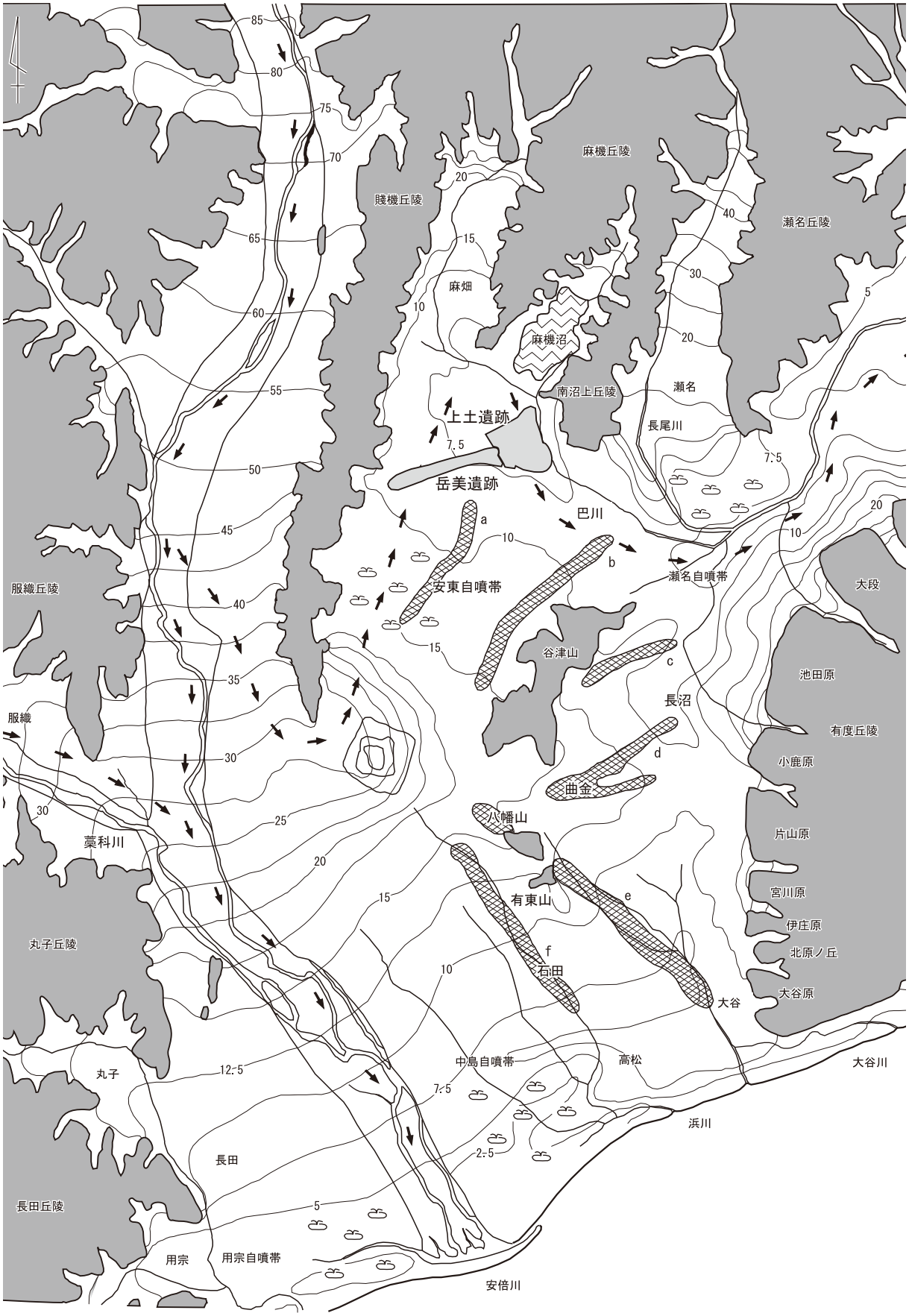
上土遺跡の位置する静岡平野は、北側と東西側が山塊により囲まれ、南側が駿河湾に直接面するといった地形上の特徴をもつ。これらの山塊と、平野を南北に流れる安倍川が、平野の低地部分が形成される上で大きな影響を与えている（第３図）。

山塊としては、安倍川の西岸では、北から服織丘陵、藁科川を挟んで丸子丘陵、長田丘陵と続き、最も海岸沿いには用宗丘陵がある。大半が東西方向に延びている。安倍川の東側には、南北方向に延びる山塊として、西から賤機丘陵、麻機丘陵、南沼上丘陵、瀬名丘陵がある。平野の東には有度丘陵があり、先の瀬名丘陵とこの有度丘陵の間はやや狭くなっているが、巴川流域の低地であり、ここより東側は清水平野となっている（清水平野も静岡平野の一部とみなす意見もある）。

安倍川は静岡平野第一の河川であり、典型的な東海型河川として大量の砂礫を平野に堆積させた。この安倍川の流れは平野部分では蛇行しながらも南側に流れているが、最も下流部分は東南側に折れ曲がっている。これは同じく東海型河川である藁科川が安倍川に流れ込んでいるためである。このため、賤機山地の南端部を起点にして砂礫の堆積が東方向を志向することになり、軸を東西方向にもつ扇状地（安倍川扇状地）を形成している。この安倍川扇状地は扇状地本体と末端の扇端部に分かれる。両者の境界は概ね標高 17 m程度である（加藤 1993）。扇端部からは、静岡平野に残された山地の痕跡である谷津山、八幡山、有東山等の規制を受けながら、礫質自然堤防、（表層粘土が薄い）後背低地Ⅰ（両者合わせてここでは自然堤防と称す）が蛸足状に数本広がっている。上土遺跡・岳美遺跡に最も近い自然堤防は北安東～上足洗に至る細長い自然堤防であるが、上土遺跡･岳美遺跡の位置までは延びていない。また、この部分の扇端部から自然堤防付近には、扇状地の被圧地下水が地上に湧出する自噴帯（安東自噴帯）が存在する。

また、上土遺跡・岳美遺跡の東北側に、南北に延びる南沼上丘陵が存在するが、巴川は、その東側に位置し、南北に延びる瀬名丘陵の間には、典型的な東海型河川である長尾川が南流しており、低地に出る地点に小扇状地を形成している。また、その先端部には瀬名自噴帯が存在する。

上土遺跡・岳美遺跡の立地する麻機低地は、上で述べた安倍川扇状地と長尾川扇状地に挟まれた位置にある。扇状地堆積物は上土遺跡の位置まで到達せず、平野の中では海浜部を除き、標高が最も低い状況である。例えば、低地中の最も標高の低い箇所の標高は約６ｍであるが、安倍川扇状地が東に張り出す基部である駿府城跡の標高は約 25 ｍである。したがって駿府城跡の位置から見れば北に行くほど標高が低くなることになる。このような麻機低地の低さは､約 10 万年前から始まった土地の沈降運動（これは有度丘陵の隆起運動と強い関連を有する）も大きな要因をなしている。このような状況のため、麻機低地は大半が長期にわたって低湿地の状態であり、巴川等により流れ込む川水が滞水する状況であった（その名残が現在の麻機沼である）。ただし、歴史的には陸化し、湿田を造ることのできた時期があることが、これまでの埋蔵文化財調査で明らかになっている。



※静岡県埋蔵文化財センター 2017 より引用。一部改変。

第３図　周辺地形図

第２節　歴史的環境

上土遺跡･岳美遺跡周辺の歴史的環境について、古い時代からの概説については、埋蔵文化財センター調査報告第 54 集の『上土遺跡・岳美遺跡』の報告書に記載があるので、今回の報告では、古墳時代～平安時代にほぼ時代を限定し、詳しく述べていきたい（第４図)。

第１章第２節と重複する点もあるが、今回の報告遺跡の上土遺跡（31）は、静文研、県教委、静岡市教育委員会によって、静清バイパス地点と、麻機遊水地第２工区関連他の調査が行われている。調査された大半の地点で、条里制の坪界線の大畦畔が検出されているほか、坪内を区画する小畦畔も発見されている。８世紀前半に構築され、９世紀前半に放棄されたと考えられる。また、下層からは弥生中期後葉～古墳前期の水田が検出されているほかに、古墳後期？～奈良時代の非条里制水田と畦畔も検出したとされる。弥生時代～古代は溝状遺構のほかには、水田関連の遺構しか発見されていない（中世以降も水田関連の遺構が検出されている)。

その西に位置する岳美遺跡（29）と城北永ヶ島遺跡（30）であるが、上土遺跡も含む一帯的な遺跡であり、内容的にもほぼ同一である。県教委、静文研により調査され、古代他の水田遺構他が検出されている。条里制水田と畦畔も、もちろん発見されている（静文研 1995 ａ）（県教委 1994)。

池ヶ谷遺跡（28）は静文研により、静清バイパス関連で調査された。岳美遺跡とほぼ連続しており、麻機低地の西端に立地する。内容的には、上土遺跡、岳美遺跡とほぼ共通するが、ここでは、坪界線の条里畦畔のほかに、里界線と思われる大規模な畦畔が検出されている。また、前に述べた安倍川扇状地の扇端部上に立地するため、水田耕作土等に挟まれる間層は砂礫層が目立つ。

上土遺跡、岳美遺跡の東側には、南沼上丘陵、その東には長尾川の小扇状地が位置するが、前者の丘陵のすぐ南側に川合遺跡（32)、後者のほぼ中央には瀬名遺跡（62）という、静岡平野北部を代表する遺跡が存在する。

川合遺跡（32）は静文研によって調査され､縄文時代から近代に至る多層遺跡として把握されている。上土遺跡の近接地であり、強い関連性が窺える遺跡なので、詳細に見ていきたい。

静清バイパス調査時点では、西から内荒、川合、宮下の各遺跡名で呼んだが、連続しており、同一遺跡として把握されている。また、静清バイパス以外にも、八反田地区、志保田地区の調査が静文研により行われており、それぞれの地点で古墳時代～古代の遺構・遺物が検出されている。以下地点ごとに詳細に述べる。

内荒遺跡は最も西の地区であり、川合遺跡内では、上土遺跡に最も近い距離にある（現巴川で隔てられているが)。この地点では､柵等で区切られた区画の中に掘立柱建物､井戸等の遺構が発見されている。建物等に関する遺物はほぼ平安時代初期のものに限られ、特殊な遺物（「造大神印（印はあるいは仏)」銅印や銙帯金具、付札風木簡、緑釉陶器等）の出土も含めて官衙遺跡と考えられる。報告書等では駿河国安倍郡衙の一部に比定する見解が提示されている（静文研 1986）（平野 1990)。

次の川合遺跡である。古墳時代以降の遺構としては、以下のようなものが発見された。①第７遺構面の古墳時代前期の集落（45 棟以上の掘立柱建物のうち大半)。②第６遺構面では古墳時代中期の集落跡とそれとセットになった水田（２面)。及び古墳時代中期の墳丘墓（２基）である。墳丘墓のうち規模がほぼ明らかな１号墳丘墓は全長約 13 ｍで、前方後方形である。人骨とガラス小玉等が出土した。２号墳丘墓は規模等が不明であるが、多量の玉類と小型仿製鏡１面が出土している。③第５遺構面は古墳時代中期後半とされており、大量の木製品を含む旧河道跡、竪穴住居跡、方形周溝墓、祭祀跡等が検出されている。④第４遺構面は古墳時代後期に比定されており、水田と溝状遺構、自然流路が検出されて

おり、居住の場ではなくなっている。⑤第３遺構面も同様で、古墳時代後期の水田のみである。第１、２遺構面は近世であり、この間に人の活動の痕跡はない（静文研 1990）（平野 1990）。

最も東になる宮下遺跡であるが、検出した遺構はⅠ～Ⅲ期に分けられている。Ⅰ期は奈良～平安前期で、遺物包含層と護岸杭列、旧長尾川と推定される流路のみが発見され、水田や居住域は見られない。Ⅱ期は平安時代中期で、Ⅱａ期とⅡｂ期に分けられている。後半のⅡｂ期は折戸 53 窯式期に比定されている。掘立柱建物群、溝状遺構、井戸等が検出されており、緑釉陶器、「専當」墨書土器、石帯等も出土している。報告書では、平安中期（10 ～ 11 世紀）の何らかの公的施設の一部、または地方豪族層の居館の一部に推定している。Ⅲ期は近世以降の水田関連の遺構群である（静文研 1985）。

次に川合遺跡でも静清バイパス以外の地点について見て行きたい。まず八反田地区についてである。静清バイパスの調査地点より北側、南沼上丘陵の最南端部に接する低地で、すぐ麓の地点である。内容的には前述の川合遺跡と類似している。①６・７遺構面では弥生中期～古墳前期の遺構・遺物が検出されている。３基以上発見されている方形周溝墓や土塁は弥生時代の所産であると考えられるが、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる遺構として、大畦畔・小畦畔を伴う小区画水田、溝状遺構等が検出されている。②第５遺構面は古墳時代後期の水田が検出されている。③第４遺構面は古墳時代末～平安時代で、掘立柱建物 84 棟、井戸８基、溝状遺構 47 本以上、土坑 100 基以上、柵列２条、畝状遺構、ピット群他が検出されている（Ⅰ期・Ⅱ期調査合わせて）。Ⅱ期調査の報告書（静文研 1995 ｂ）では、遺構群の時期別の変遷が想定されており、奈良時代（特に前半）に遺構数が多くなることが提示され、富農層ないし公的施設等の建物群であることが示唆されている。遺物としては、「下代謹解申高諸□大刀？□□□」木簡、「川万呂」等の墨書土器、物差、絵馬、瑞花八稜鏡等の特徴的なものが出土している。④第３遺構面は、Ⅰ期調査（静文研 1991）では平安時代後期、Ⅱ期調査では平安中期～後期とされている。掘立柱建物 11 棟、ピット群、条里型水田？等が検出されている。遺物としては、緑釉陶器、物差等が出土している。

次に志保田地区について述べる（静文研 1998）。調査地点は川合遺跡全体の北部、沼上丘陵の南側末端のすぐ南麓の低地に立地し、八反田地区の東側、川合遺跡と宮下遺跡の北側にあたる。調査面ごとに述べる。①第６面では、小区画水田が検出された。出土した土器等から古墳時代前期～中期のものと考えられる。②第５面では大畦畔と小畦畔からなる水田、杭列等が検出された。報告では上下の２期でとらえている。①と同様、古墳時代前期～中期のものと推定されている。第４面と第３面は律令期であり、③第４面からは掘立柱建物１基、多数の柱穴群、井戸１基、土器集中が見られる祭祀跡１基、自然流路１があった。④第３面からは、土器集中が見られる祭祀跡５基、石組遺構１基、木組み遺構１基、井戸１基、自然流路１条、多数の溝条遺構が検出されている。遺物としては、大半のものが第４、３面で一括して記述されている。少数の７世紀代、９世紀以降の土器も出土しているが、大半は８世紀の土器（多くは前半）である。多量の土器の他に、動物形（馬形含む）土製品、人形土製品、ミニチュア土器が目立つ。多くは特定の祭祀遺構に伴って発見されている。木簡、墨書土器（「大伴マ子若麻万呂」・「沙弥万」・「弥万呂」・「川万呂」・「俗月」等）、絵馬、帯金具、銭貨「隆平永宝」等の特徴的な遺物の出土もある。

以上、川合遺跡について述べてきたが、まとめるならば次のとおりである。①古墳時代前期の大規模な集落は川合遺跡で見られ、八反田地区、志保田地区では水田が検出されている、②古墳時代中期には、川合遺跡で墳丘墓が作られた。また集落も継続した。中期後半も同じ川合遺跡で集落と墓域が継続した。③古墳時代後期になると、川合遺跡一帯は湿地化し、一面水田化したようである。川合遺跡では２面にわたる水田が検出されている。③奈良時代にはこの地域には官衙に関連する可能性がある施設がつくられるようになる。八反田地区では大規模な掘立柱建物群が検出され、志保田地区では祭祀を行う場が確立する。④平安時代前期には、内荒遺跡で、官衙遺跡の可能性の高い遺構群と遺物が検出されている。

駿河国安倍郡衙に比定する説も提出されているが、決定的な証拠はまだ発見されていない。⑤平安時代中～後期には宮下遺跡や八反田地区で集落が検出されている。官衙の可能性もある。

この川合遺跡のすぐ北の、沼上丘陵の南側末端部分に、南沼上古墳群（23）がある。今回報告する上土遺跡から最も近い距離に位置する古墳群である。「前方後円墳の可能性のある古墳をはじめとして、三基前後の高塚古墳が認めら」れ、「恐らく横穴式石室を内部主体とする後期古墳であろう」（中野1985）とされてきた。ここでは、1994 年に静岡市教委により確認調査が実施されている。それによれば、２基の円墳（北側が２号墳、南側が３号墳）が調査された。２号墳は直径約 22 ～ 24 m、現況高さ約３ｍで、主体部は木棺直葬で複数が重複している可能性が高いとされている。大刀が副葬されていた。３号墳は直径約 16 ～ 17 m、現況高さ約 1.5 ｍで、主体部は木棺直葬と考えられ、大刀２振、三環鈴２、鉄鏃、短甲？破片多数が出土した。三環鈴は現在においても、静岡県内で数例検出されているのみであり、珍しい遺物である。３号墳は副葬品から古墳時代中期後半（５世紀後半）の年代が与えられている。また２号墳は土層の観察によって３号墳より古いとされているが、内容的には近い年代が考えられる（天石 1995）。

前述したとおり、丘陵直下の川合遺跡では古墳中期の墳丘墓が検出されており、該期の集落も発見されているので、それとの関連性が問題になるであろう。

南沼上丘陵では、南沼上古墳群の北に（南沼上）諏訪神社古墳がある（14）。測量図が作成されており、中期末～後期初の帆立貝式古墳とされている（静岡市立登呂博物館 1990）。

次に麻機丘陵上の遺跡について述べたい。丘陵の南部、西側斜面には「安倍郡印」出土地とされる地点がある（10）。旧静岡県史第二巻（静岡県 1931）には、写真と印影、法量、外筐墨書などのデータが掲載されている。それによれば、印面は 11 × 9.5 ㎝の縦長の銅印で「安倍郡」の三文字がある。孔のある摘みがあり、印高は 11 ㎝とある。外筐墨書には、「駿河国安倍郡／漆山従鈴石天／神麓掘出處古／印　明治十二年十一月／松廼屋所蔵」（／は改行か）とあり、「中邨」印？がある。掘り出されたのが古く、現物も外筐も行方不明なため確かめようがないのであるが、偽造等とは断定できず、そのまま受け取ってよければ、発見された場所に郡衙が存在する可能性がある。また、筐の記載に「鈴石天神麓」とあり、山麓の低地部分の可能性が高く、第４図の（10）の箇所の下の麓の低地と考えられる。いずれにせよ、近年になって安倍郡衙関連遺跡に比定されている（前述の）川合遺跡からはかなり隔たっており、こちらの地点（低地部分）を未発見の安倍郡衙の候補地にする説も成り立つと思われる。

次に麻機丘陵の古墳群を取り上げる。南沼上丘陵に面する東側の斜面部には、南から惣ヶ谷古墳群（９）、小渕ヶ谷古墳群（８）、三滝ヶ谷古墳群（７）、田成ヶ谷古墳群（６）がある。

惣ヶ谷古墳群では 1984 ～ 85 年に２基の古墳が調査された。１号墳は直径約 12 ｍ× 15 ｍの長円形をした円墳であり、周溝を有する。主体部は横穴式石室であるが石材は攪乱のために失われていた。根石の痕跡と主体部の掘り方から、長さ約 5.5 ｍ、幅約１.２ｍ程度と推測している。床面から鈴付銅釧１、棗玉、丸玉、刀子２が出土しているほか、掘り方攪乱土中より須恵器等が発見された。報告書では須恵器の年代により６世紀後半に比定している。

２号墳は墳丘が既に工事により失われており、極めて小規模な石室と掘り方が奥壁部側で一部残っていただけであった。遺物は発見されなかったが、石室の規模は幅が現存部で約 40 ㎝、推定長が約１～ 1.5 ｍ程度であり、報告書では７世紀後半～８世紀初頭の終末期の古墳としている（静岡市教委 1999）。

次の小渕ヶ谷古墳群は調査が行われておらず、詳細は不明ながら、「横穴式石室の古墳２以上」で、６世紀後半～７世紀の古墳群とされている（静岡市立登呂博物館 1990）。

その北側の三滝ヶ谷古墳群は、1980 年に発掘調査がおこなわれているが、正式報告は未刊行である。７基の古墳が調査され、そのうち２基は痕跡を残すだけであったが、全ての古墳が横穴式石室墳である。

墳形が不明な４号墳を除いて円墳のみである。２号墳からは、鉄鏃、刀子、小型の殊文鏡、耳環、玉類等が出土した。４号墳は小横穴式石室が発見されており、「ハリガネ状の鉄芯に連携された中実の金銅玉も出土してい」る（中野 1985）。調査者は８世紀に比定している（静岡市立登呂博物館 1990）。５号墳は全長約 8.4 m、最大幅約 1.5 mの、かなり大型の石室（無袖式）を有し、石室内に組合式石棺を置く（静岡県考古学会 2003）。以上のように、全体としては古墳時代終末期～律令期の古墳群と言えそうである。

三滝ヶ谷古墳群のすぐ北側に、田成ヶ谷古墳群がある。1995 ～ 97 年に市教委により発掘調査が行われ、古墳６基が検出された。何れも残存状況は悪く、墳丘はもとより、石室も多くの部分が失われていた。最も残りの良かった１号墳の石室は、残存部幅約 80 ㎝、残存長約 110 ㎝であった。他の古墳も造りは総じて小型であった。概報（石川 1999）によれば、1 号墳は須恵器坏が出土しており、奈良時代に比定できる。４号墳からは須恵器長頸壺等が出土しており、７世紀後半としている。他の古墳も総じて同時期の可能性が強いとする。

次に上土遺跡より西側に目を向けたい。まず注目すべきなのは、賤機丘陵の南端に位置する賤機山古墳である（48）。直径約 32 mの円墳で、畿内系両袖式の巨大な横穴式石室を有し、寄棟造りの有蓋家形石棺が収められていた。金銅装馬具や装飾付き大刀などの豪華な副葬品を多数もつ。６世紀後半の築造と考えられ、該期において静岡平野で第一の古墳である。また、畿内色の濃い古墳であることも指摘されている（鈴木・田村編 2019）。ヤマト政権から派遣された中央豪族（アへ（べ）氏の一員か）の墓の可能性もある。また、この賤機山古墳の麓には、産土神である大歳御祖神社、駿河総社である神部神社、駿河国一宮を移した浅間神社などが密集して存在しており、「地域社会の精神的支柱ともいえる「聖地」に築かれた始祖墓としての性格も見出すことができる」という意見（鈴木 2019）もある。

また、山地上には賤機山古墳を含む形で、賤機山古墳群が存在し（47）、一本松古墳（賤機山１号墳）、麓山神社後古墳（同２号墳）が含まれる（賤機山古墳は同３号墳）。また、この３古墳のほかに、３基程度の円墳状の高まりも確認されている。一本松古墳は５世紀の木棺直葬の円墳とされ（静岡市立登呂博物館 1990）、獣形鏡が出土している。また、麓山神社後古墳からは大刀、常総型石枕が出土しており、後者は関東地方との関連が考えられる（滝沢・久永 2018）。また、大きな河原石が出ていることから、６世紀の横穴式石室墳とも言われる（静岡市立登呂博物館 1990）。

賤機山丘陵で賤機山古墳群より北には、臨済寺古墳（35）舩原古墳（27）、池ヶ谷古墳群（26）、唐瀬古墳群（25）、マルゾッコウ古墳（20）谷久保古墳（19）、八津口古墳（11）、平山古墳群（５）、有永前田古墳群（２）、そして低地部の前方後円墳とされてきた有永古墳（有永１号墳）（３）がある。これらの古墳は正規の発掘調査がされた古墳がほとんどなく、詳細が不明なものが大半である。この中で、唐瀬古墳群は古くから知られ、横穴式石室をもつ古墳６以上で、須恵器と「凝灰岩製の大形丸玉」、匂玉等が出土している（静岡県 1930）。また、池ヶ谷古墳群は、横穴式石室の古墳３以上とされる。他の古墳（群）も７世紀段階の横穴式石室墳が大半とされる（静岡市立登呂博物館　1990）。有永古墳は、平成４年度に静岡市教委により、「墳丘」測量及び範囲確認調査が行われている。これらによっても、前方後円墳はおろか、古墳としての確証もない状況であり（ただし須恵器等の遺物は出土した）（静岡市教委 1993）、ここでは名称をあげるだけにとどめておきたい。（33）の大在家遺跡は古くから知られた遺跡で、古墳時代の低地の集落遺跡であろう（静岡県 1930）

駿府城内遺跡（56）は、近世の駿府城跡と大部分重なるが、駿河国府跡の可能性が指摘されている。古代の遺構の検出箇所は少ないが、旧「三ノ丸跡」等では、奈良時代～の溝状遺構（区画溝？）、土塁、柱穴列、掘立建物群や井戸等の遺構、緑釉陶器、墨書土器、屋瓦等が出土したほかに、平安末～鎌倉初期の青磁、白磁等が多量に出土している。国府ないし国衙と断定するには証拠に乏しいが、大規模な官

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
福田ケ谷
池ケ谷
有永
東
南
城北
葵区
中央卸売市場
0
1:25,000
1km

第４図　周辺遺跡分布図

第２表　周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	有永前田遺跡	縄文・古墳	32	川合遺跡	弥生～近世
2	有永前田古墳群	古墳	33	大在家遺跡	古墳
3	有永古墳	古墳	34	賤機山城	中世
4	遺物採集地点（有永）	古墳	35	臨済寺境内遺跡	弥生
5	平山古墳群	古墳	36	北川殿屋敷跡	中世
6	田成ヶ谷古墳群	古墳	37	千代田遺跡	弥生
7	三滝ヶ谷古墳群	古墳	38	沓谷四丁目遺跡	古墳
8	小渕ヶ谷古墳群	古墳	39	井上邸古墳	古墳
9	惣ヶ谷古墳群	古墳	40	愛宕山城跡	中世・近世
10	「安倍郡印」出土地	古代	41	茶臼山古墳	古墳
11	八津口古墳	古墳	42	長沼古城跡	中世
12	八津口遺跡	弥生・古墳・古代	43	遺物採集地点（上足洗）	古墳
13	漆山遺跡	縄文	44	安東二丁目公園遺跡	古墳・古代
14	南沼上諏訪神社古墳	古墳	45	大岩遺跡	弥生
15	佐敷堂遺跡	縄文～古代	46	西千代田遺跡	弥生
16	水梨古墳群	古墳	47	賤機山古墳群	古墳
17	利倉神社古墳	古墳	48	浅間神社境内遺跡	弥生
18	切石遺跡	古墳・古代	49	静岡高校々地内遺跡	弥生
19	谷久保古墳	古墳	50	城東町遺跡	古墳
20	マルゾッコウ遺跡	古墳	51	柚木瓦窯跡（本郷坪地点）	古代
21	時ヶ谷遺跡	縄文・弥生	52	本郷坪遺跡	古墳～中世
22	長崎鼻遺跡	縄文	53	柚木瓦窯跡（仕舞海道坪地点）	古代
23	南沼上古墳群	古墳	54	仕舞海道坪遺跡	弥生
24	川合仙石遺跡	弥生・古墳	55	東草深遺跡	弥生～近世
25	唐瀬古墳群	古墳	56	駿府城内遺跡	弥生～中世
26	池ヶ谷古墳	古墳	57	駿府城跡	近世
27	船原古墳	古墳	58	谷津山古墳群	古墳
28	池ヶ谷遺跡	弥生～古代	59	長沼遺跡	弥生～古代
29	岳美遺跡	古代	60	曲金北遺跡	弥生・古墳・古代
30	城北永ヶ島遺跡	古代	61	棚田遺跡	中世
31	上土遺跡	弥生～近世	62	瀬名遺跡	弥生～中世

衙遺跡の可能性は高い（平野 1990）（長谷川 2003）。

平野中の独立山地である谷津山にも谷津山古墳群（58）が存在する。その盟主墳は全長約 110 mの前期古墳である柚木山神古墳（柚木１号墳）である。葺石を伴い、朱塗りの竪穴式石室が主体部であると思われ、神獣鏡６面、銅鏃、鉄検、鉄鉾等が出土したとされる（県教委　2001）。静清平野で最大の前方後円墳であり、４世紀前半に比定される（鈴木他編 2019）。該期において静清平野全体を支配した首長の墓である。

谷津山古墳群中には、４基以上の古墳があり、２号墳は墳長約 36 mで前方後円墳とされている（疑う説もある）。未調査のため詳細不明であるが、柚木山神古墳に続く４世紀前半～中頃のものと考える説がある（鈴木 2019）。３号墳は詳細不明だが、次の４号墳と同じく後期の円墳であろう。４号墳は清（きよ）水公園古墳とも呼ばれ、古くに石室内から４基の組み合わせ式箱形石棺が検出されたことで知られる。銅鋺や環頭大刀、鉄斧、耳環が出土しており、後期の有力古墳であろう。谷津山の東北部分には井上邸

古墳（39）、茶臼山古墳（41）等があり、後期の円墳であろう。この二つの古墳を含めて、別の古墳と思われる地点を入れ、愛宕山古墳群を想定する向きもある（静岡市立登呂博物館 1990）。

以上、古墳時代～平安時代にほぼ限定してであるが、上土遺跡周辺の遺跡について述べた。大半が水田域であるが、微高地上には集落が点在する。ただし、古墳時代後期には、ほぼ一面水田化したのではないかと思われる。同じく、古墳時代後期の古墳群が丘陵上を中心にして多く作られる。奈良時代～平安時代には条里制水田が形成される。また、郡衙、国衙の可能性のある遺跡が近在して現れる。平安時代中期以降にも官衙ないし、有力者の居館の可能性のある遺跡が作られる。

第３章　調査の方法と経過等

第１節　調査の方法

１　現地調査

（１）平成 29 年度の調査

平成 29 年度の調査は、第１章第１節で述べた経過に従い、平成 23 ～ 28 年度の本センターの調査方法を踏襲し､条里区画に伴う大畦畔の調査を主とすることになった。この調査範囲についての考え方は、令和元年度の調査まで引き継がれることになる。調査区については、これまでの周辺の調査（主に平成４～５年度の静文研による静清バイパスの調査と、県教委文化財保護課による試掘調査）で確認された条里の区画線から想定される推定線に沿う形で設定した。

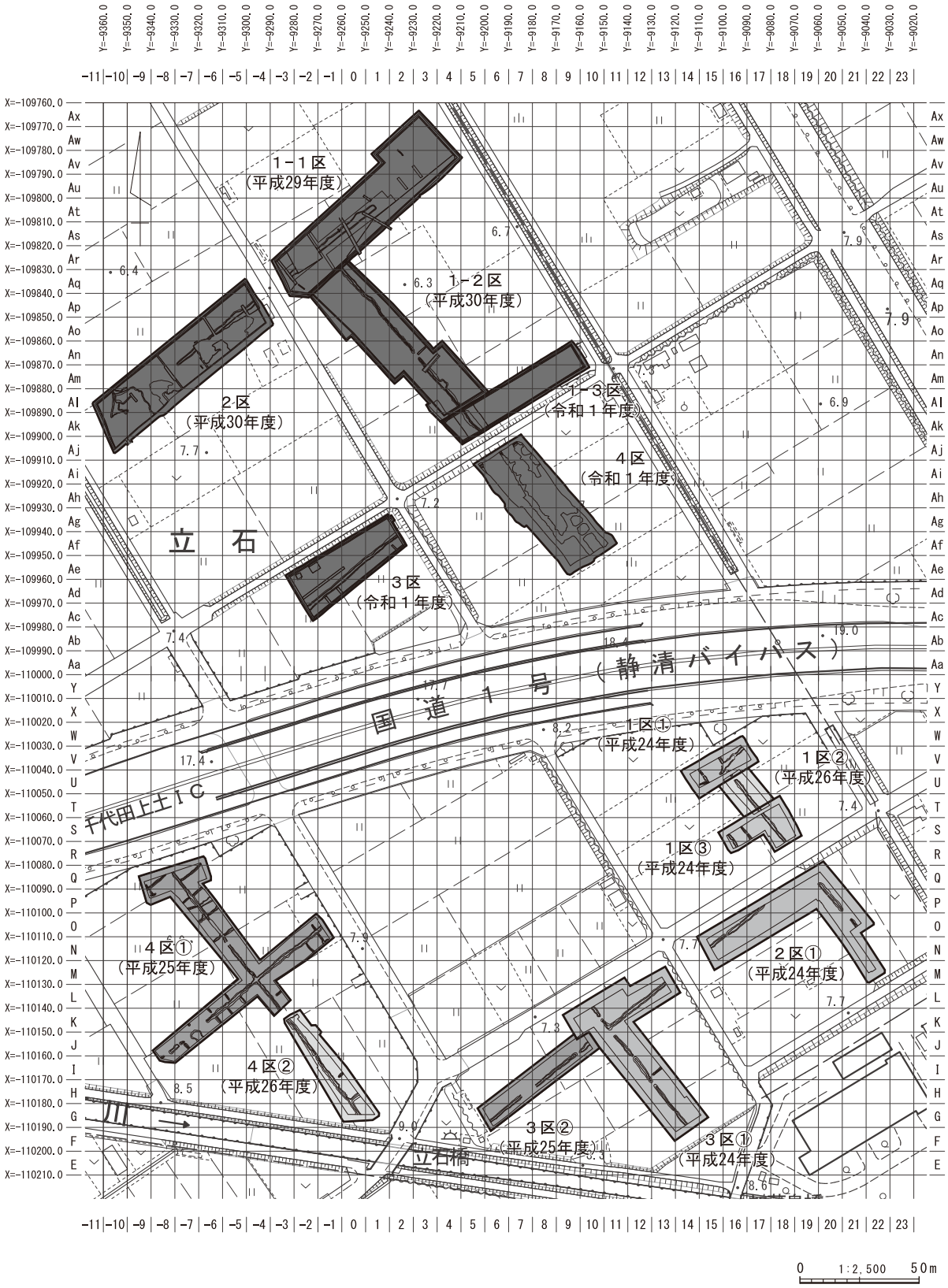
麻機遊水地第２工区の事業は、立石地区で埋蔵文化財が存在する範囲において、３箇年度にわたって調査が必要と考えられた。それに伴い、遊水地工事が最も早く着手される予定であった、事業地の北側から調査を開始することになり、１－１区から調査に着手することになった。

調査グリッドについては、世界測地系に基づいて、10 ｍの方眼を調査区全体に設置した。平成 23 ～ 26 年度の調査との整合性を保つため、それと同一のものを基準にしてグリッドのメッシュを拡張した。Ｙ軸方向はアルファベットを付し、ＡをＸ＝－ 110250.0 とし、10 ｍ間隔で北へＢ、Ｃ……Ｚとした（平成 23 ～ 26 年度と同様）。今回の調査ではその北側延長上に、Aa、Ab、Ac……Ba、Bb……Zz とした。

Ｘ軸方向は算用数字を付し、０をＹ＝－ 9260.0 とし、東へ１、２、３……、西へ－１、－２、－３……とした。これは平成 23 ～ 28 年度のものと全く同一である。

掘削作業は、表土から第６層（令和元年度の調査で統一した層名であり、平成 29・30 年度は別の層名を用いた。層位の統一の次第については、第４章２節を参照）までは重機で一気に除去し、第７層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行き、畦畔（大畦畔・小畦畔ともに）の頭を出すことで、泥炭層の中での線状の畦畔列の検出に努めた。この結果、東西方向の大畦畔を検出したので、畦畔両側の泥炭層で残った部分を含め、水田耕作土の第 12 層を主に包含層掘削を行った。この間に遺構検出として、大畦畔の輪郭と小畦畔の検出につとめたが、小畦畔は検出されなかった。また、大畦畔も調査区東側では縮小し、東端部では消失していることが判明した。

これらの掘削作業と併行して、調査区への基準杭の設置、遺構検出段階でのラジコンヘリコプターによる空中写真撮影及び実測を行い、１/20 平面図と１/100 全体図の作成を行った。その後、遺構掘削として畦畔の解体作業を行い、遺物の出土状況図や土層図の作成も併行して行った。調査記録としての写真撮影は、中判カメラ（６×７判）のモノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムによる撮影を


１－１区
（平成29年度）
１－２区
（平成30年度）
１－３区
（令和１年度）
２区
（平成30年度）
４区
（令和１年度）
３区
（令和１年度）
立　石
国　道　１　号　（静清バイパス）
１区①
（平成24年度）
１区②
（平成26年度）
１区③
（平成24年度）
２区①
（平成24年度）
４区①
（平成25年度）
４区②
（平成26年度）
３区②
（平成25年度）
３区①
（平成24年度）
千代田上土ＩＣ
立石橋
0　1:2,500　50m

第５図　調査区配置図

基本とした。このほか、調査経過の記録用も含め、デジタルカメラも併用して、埋蔵文化財センター職員が撮影した。なお、遺物出土状況図や遺構図等の細密な図の作成のため、測量受託業者もデジタルカメラを使用している。

なお、火山灰、プラントオパールの現地での採取と分析は、株式会社古環境研究所に委託し、現地調査終了までに成果を報告して頂いた（平成 30 年度・令和元年度も同様）。

（２）平成 30 年度の調査

平成 30 年度の調査は、平成 29 年度の調査成果に基づき、東西方向で検出された大畦畔の西側延長方向の追求のため、南北方向の市道を挟んだ西側に２区を設定した。また、平成 29 年度調査の１－１区の南側から南北方向の畦畔を検出する目的で、１－１区に接続し、南北に細長い調査区である１－２区を設定した。平成 30 年度の調査はこの２つの調査区を調査することになった。調査の方法・手順等は平成 29 年度とほぼ同じである。ただし、調査の目的が畦畔の検出とその構造の究明、及び畦畔の拡がりの追求にあった関係で、水田耕作土の人力掘削は、畦畔下とその両側面部分に限定せざるを得なかった。これは調査期間の制約が主な要因であるが、グリッド等は１－１区で設定したものを延長して利用した。

両区とも大畦畔は想定通り検出されたが、小畦畔の検出はなかった。また、２区の西側は自然流路の痕跡があり、その部分からは大畦畔の検出はできなかった。また、前述の木製品の集中出土箇所はこの調査区西側であった。

（３）令和元年（平成 31 年）度の調査

令和元年度の調査は、最終年度であり、遊水地工事が遅く着手される予定である事業地の南側部分の調査である。平成 29・30 年度の調査区である、１－１区と２区で検出された東西方向の大畦畔より、107 m南側に存在すると想定される坪界線を追求するため、東西方向の調査区である１－３区と３区を設定した。なお、１－３区は、平成 30 年度調査区である１－２区の南側に接して設定し、１－２区で検出された南北方向の大畦畔の検出も目的にしていた。この南北方向の大畦畔の南側の延長部分の存在を確認するため、１－３区の南側、市道を挟んだ更に南側部分に４区を設定した。４区は南北方向に細長い調査区で、南端部は静清バイパスの現側道に近い箇所で、調査可能な部分まで拡げた。

調査の方法・手順等は平成 29・30 年度とほぼ同じである。今回は調査範囲内の水田耕作土を極力掘削する方針で調査に臨んだ。１－３区ではほぼ達成することができた。３区においては、調査区西南側の耕作土中に、木製品の集中箇所が検出されたため、遺物の有無や多寡を確認するためトレンチを掘削して、遺物集中部以外の水田耕作土中の遺物が僅少であることを確認した上で、畦畔下と両側面部分のみの掘削を行った。

４区は掘削開始後に、調査区が全面地盤改良を受け、深い部分まで土取りされたうえ、大量の瓦礫により盛土されていることが判明した。調査面は「島」状にしか残存しておらず、大畦畔の検出すら困難な状況であった。このような状況の中で、３区の方向から延びる、東西方向の大畦畔のみ、断続的ではあるがかろうじて検出、調査することができた。南北方向の大畦畔はついに検出できなかった。存在したであろう箇所が、全て削り取られていたためと想定された。このような状況のため、３区においては水田耕作土の掘削は、大畦畔の下部の一部を除いて行わなかった。

２　資料整理

遺物洗浄、木製品のシーラーパック詰め、記録類の整理等は、本発掘調査期間内に基礎整理作業として、掘削業務受託業者が実施した。

出土した遺物は実測作業を経て、実測図をAdobe Illustrator CS６によってトレース・版組作業を実施した。木製品、金属製品は、これらの整理作業を経て保存処理を実施した。

保存処理については木製品の出土数が多いことから、遺物を３分割し、３箇年度の期間をかけて、前半処理（処理前記録～安定化処理）と後半処理（修理～梱包・収納）を交互に行うことにした。安定化処理については、PEG含浸、真空凍結乾燥を行い、遺物の形状を安定化させ、修復を行った。

また、木製品については東北大学との委託契約に基づき、同大学名誉教授鈴木三男氏による樹種同定を実施した。出土種実の同定は株式会社古環境研究所に委託した。

遺構図版は、現地での写真測量のデータをコンピューターに取り込み、編集作業を行った上で、Adobe Illustrator CS６によってトレース・版組作業を実施した。遺物写真は中判カメラ（６×７判）のモノクロフィルム及びデジタル一眼レフカメラによる撮影を行った。また、報告書の作成とともに収納作業を実施している。

写真１　表土除去作業（１－２区）

写真２　畦畔掘削作業（１－３区）

写真３　実測作業（木柄付鉄鎌）

写真４　保存処理作業（含浸）

第２節　基本土層

基本土層の層名については、平成 29・30 年度の現地調査においては、今回の調査独自のものを使用したが、過去の調査例を検討した結果、平成４～５年度の静清バイパス関連上土遺跡調査の報告書（静文研 1996b）で用いられた層位名を使用しても問題がないことが判明した。令和元年度の調査からは、現地においてもこの層名を使用し、今回の報告書でも前掲報告書の層名に統一する。ただし、調査地区が同一ではないため、以下の土層説明は過去のものと完全には同一ではない。なお、ここでの層名は記述上、第〇層と呼び、静清バイパスの層の呼称とは区別した。また、今回の調査での掘削深度は第 13 層中までであり（(静文研 1996b）の 13 －１層中か)、第 14 層以下は掘削していないため、ここでは記述しない。

盛土層…近代以降の水田を造成するための盛土層である。全体に小粒な砂利を含んでいる。１－３区などでは砂利のみが盛られている箇所がある。４区では最近において、大規模な地盤改良が行われており、土を採取した後に、建築廃材等を含んだ土砂の投入が行われている。これらも盛土層として一括した。

第１層…黄灰色シルト質粘土層。2.5 Ｙ 4/1。粘性無し。しまり有り。土層断面の観察では、ほとんどの箇所で次の第２層と区別できない。その場合は第２層とともに、第１～２層として扱う。静清バイパスの調査成果では、この第１層は近世の「新田開発」水田耕作土とされている。

第２層…灰色粘土層。7.5 Ｙ 4/1。粘性やや有り。しまり有り。上述のように、大半の箇所で、第１層と分離できない。過去の調査では、中世後半～近世の洪水堆積層に比定されている。

第３層…極暗褐色泥炭層。7.5YR2/3。粘性少ない。腐植やや多い。今回の調査では、３区東壁の断面で、極めて部分的に観察されたのみであり、調査区全体でもこの泥炭層は見出すことができなかった。また、３区東壁断面で見いだされた泥炭層も、静清バイパスの調査で検出された３層に比定できるか否か確証はない。平成４～５年度の調査では土層断面図を見る限りにおいて比較的普遍的に存在する層であり、この層が今回の調査でほとんど見いだされなかったのは、地形的ないし位置的な理由を考える必要がある。静清バイパスの上土遺跡の報告書では、中世水田水没時の湿地植物が堆積したものとされている。

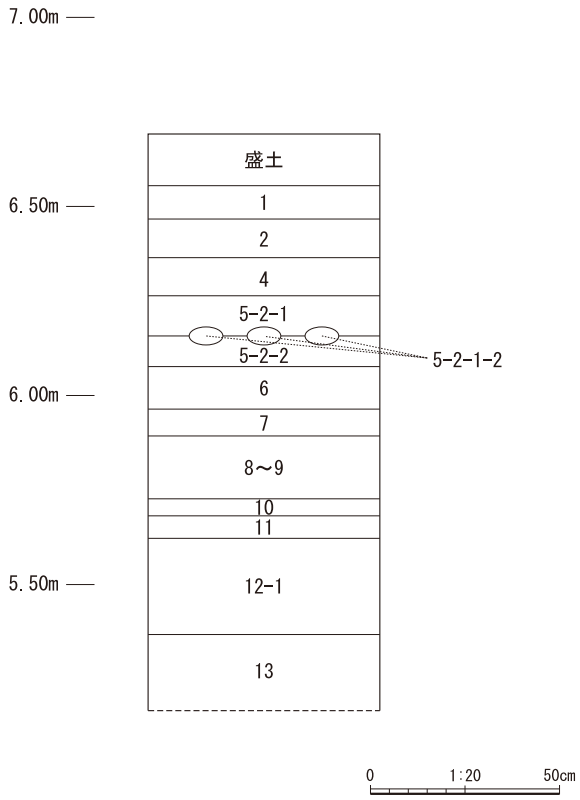
第４層…灰色粘土層。7.5 Ｙ 4/1。粘性やや強い。腐植少ない。第２層ないし第１～２層との差異は、粘性等から比較的明瞭である。なお、過去の調査では、この層の下に灰色ないしオリーブ黒色粘土層があり、撹拌の無い５－１層に比定されているが、今回の調査では認識できなかった。上下の層に含まれてしまっているか。

第５－２－１層…オリーブ黒色粘土層。5 Ｙ 3/1。径５㎜程度の白色粘土（次の第５－２－１－２層が巻上げられたもの思われる）を多く含む。水田耕作土（過去の調査では、５－２－１層水田と呼称）であり、中世（鎌倉時代：13 世紀代）の層に比定されており、中世小氷期のものとされている。断面を観察したが、今回の調査区では、この層中に畦畔は見出すことができなかった。

第５－２－１－２層…灰色粘土層。Ｎ 4/1。薄層で、耕作により失われている箇所がある。また、残存していてもパッチ状を呈す部分が多い。粘性強い。腐植なし。層の凹凸と湾曲が著しい。前述の５－２－１層水田の水田床土であろう。過去の調査では洪水堆積層とされている。

第５－２－２層…オリーブ黒色粘土層。7.5 Ｙ 3/2。ラミナ無し。粘性強い。腐植ややあり。径３～６

cm程度の灰色粘土（次の第６層であろう）の巻上げ土のブロックを含む。径５mm程度の灰色粘土の粒子を多く含む。木片をわずかに含む。水田耕作土（過去の調査では、５－２－２層水田と呼称）であり、中世（鎌倉時代：13 世紀代）の層に比定されている。断面を観察したが、僅かではあるがこの層中に、次の第６層による畦畔を発見することができた。小区画水田の畦畔であると思われる。



第６図　基本土層柱状図

第６層…灰色粘土層。7.5 Y 4/1。ラミナあり。粘性強い。腐植ややあり（縞状に入る部分あり）。層の上端部に撹拌痕の見られる箇所が多い。１－３区にはこの層による小畦畔の見られる箇所がある。３区西側においては、第５－２－２層の耕作（５－２－２層水田）によりこの層が失われている（西壁土層断面の位置では、第５－２－２層の耕作は、次の第７層以下にも及んでいる）。過去の調査では、平安時代末？～鎌倉時代？の洪水堆積により形成された層とされている。

第７層…黒泥層。10YR2/1。ラミナあり。粘性少ない。腐植少ない。過去の調査では、７層以下 11 層までは平安時代の湿地性堆積物の泥炭層であり、平安海進期？のものとする。

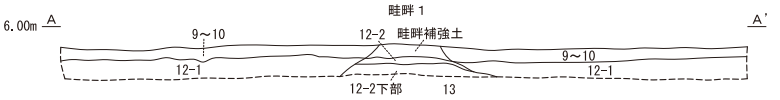
第８～９層…過去の調査の８層と９層であるが、今回の調査においては、この２つの層は分離できなかった。従ってまとめて土層説明をする。黒褐色泥炭層。7.5YR2/3。ラミナあり。粘性ややあり。腐植は濃淡あるが全体的に多い。

第 10 層…黒褐色粘土質泥炭層。7.5YR3/1。ラミナあり。粘性ややあり。腐植やや多い。第８～９層との区別はやや困難な箇所がある。この層の層中の上部に、白濁色を呈する火山灰層が３～５mm 程度の厚さでパッチ状に含まれる。これは、火山灰分析の成果から 838（承和５）年噴出の、伊豆神津島天上山火山灰であることは明らかである。したがって、この第 10 層は、9 世紀前半を前後する時期の層であることは確定的である。なお、静清バイパスの調査では、10 層上面にこの火山灰が堆積している（従って、10 層と９層を分かつことになる）とされているが、今回の調査の所見では 10 層中に堆積していると思われ、過去の報告書（静文研 1996b）の記載と異なっていることを明記しておく

第 11 層…泥炭混じり黒褐色粘土層。2.5 Y 4/1。粘性強い。腐植少ない。原則的に条里制の大畦畔（坪界畦畔）を直接被覆する層である。

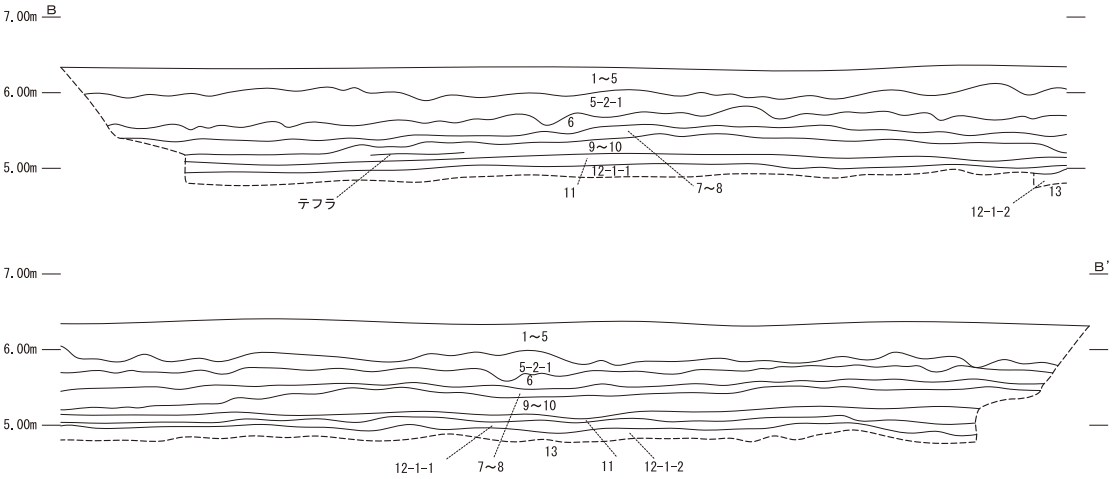
第 12 －１層…黄灰色粘土層。2.5 Y 4/1。粘性やや強い。腐植わずかに混じる。灰色粘土ブロック（径５cm以上のものが多い。第 13 層が中心）を層の下部を中心として大量に巻き上げている箇所が多い。過去の調査では、条里型の（一部に非条里型を混在）、奈良～平安時代初頭水田（12 層上部水田とする）の耕作土とされている。なお、土層断面図ではこの第 12 - １層を色調等

１－１区西壁

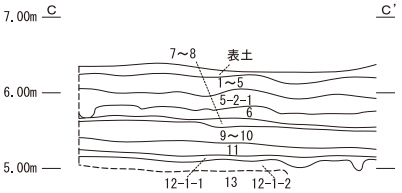


9～10層　10YR3/2　黒褐　泥炭質土
自然堆積層　粘性弱　植物遺体非常に多く含む
層中位に火山灰が堆積している
畦畔補強土　10YR5/1　褐灰　粘土
粘性やや強　植物遺体少量含む
12-1層　10YR3/1　黒褐　粘土
水田耕作土　粘性やや強　植物遺体少量含む
2～3cm大の13層土の巻上土非常に多く含む
1cm大の炭化物粒少量含む
12-2層　10YR3/2　黒褐　粘土　粘性強　植物遺体少量含む
12-2層下部　10YR2/1　黒　泥炭質土
粘性弱　植物遺体多く含む　1cm大の炭化物粒多く含む
13層　10YR5/1　褐灰　粘土　自然堆積層　粘性強

１－１区東壁

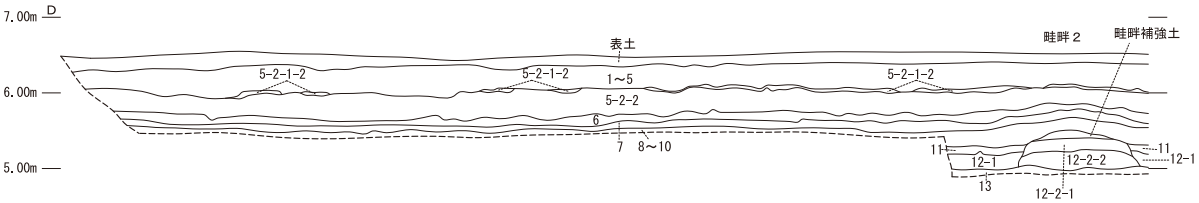


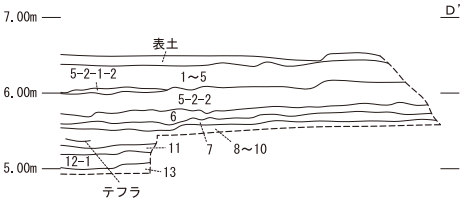
１－１区北壁



1～5層　10YR4/1　褐灰　粘土　水田耕作土　粘性強　1～2cm大の巻上土少量含む
5-2-1層　10YR4/1　褐灰　シルト質粘土　水田耕作土　粘性強　2～3cm大の6層土の巻上土少量含む
6層　10YR6/1　褐灰　粘土　自然堆積層　粘性強
7～8層　10YR2/2　黒褐　泥炭質土　自然堆積層　粘性弱　植物遺体多く含む
9～10層　10YR3/2　黒褐　泥炭質土　自然堆積層　粘性弱　植物遺体非常に多く含む
層中位に火山灰が堆積している
11層　10YR5/1　褐灰　粘土 水田耕作土？　粘性やや強　植物遺体少量含む
12-1-1層　10YR3/1　黒褐　粘土　水田耕作土　粘性やや強
植物遺体少量含む 2～3cm大の13層土の巻上土非常に多く含む　1cm大の炭化物粒少量含む
12-1-2層　10YR3/2　黒褐　粘土　水田耕作土？　粘性弱　植物遺体含む　1cm大の炭化物粒少量含む
13層　10YR5/1　褐灰　粘土　自然堆積層　粘性強

１－２区南壁



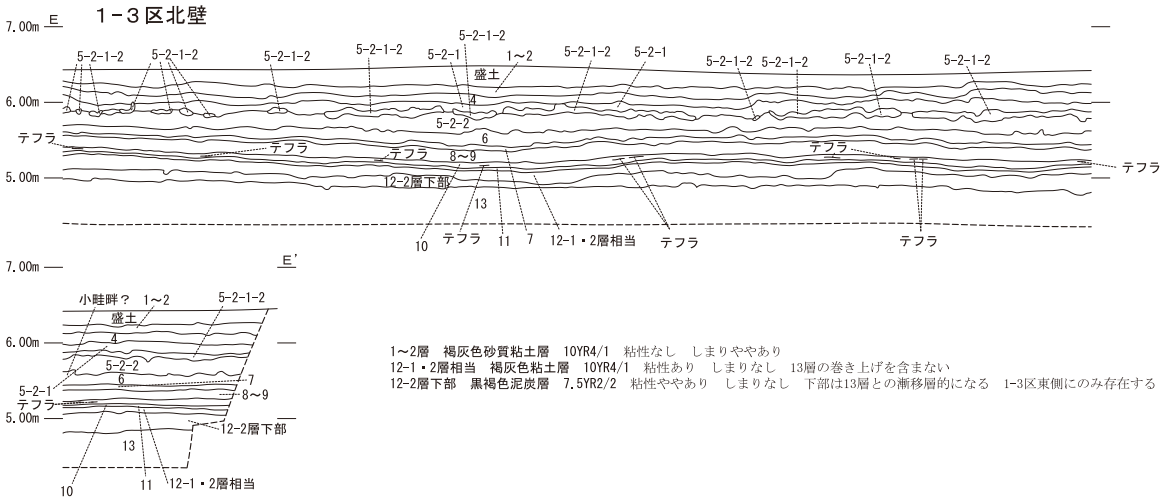


1層～5層　褐灰　10YR4/1　水田耕作土　5-2-1-2層の巻上げ土
（φ1cm以下）を、土層の最下部にごく少量含む
粘性あり　しまりほとんどなし　酸化鉄の貫入やや多し
5-2-1-2層　褐灰　10YR5/1　粘土層　粘性強し　しまり強し　層厚は薄く、層が認められない箇所も見られる
5-2-2層　褐灰　10YR4/1　水田耕作土　シルト質　層の下部に、
φ5cm以下の6層の巻上げ土を少量含む　粘性あり　しまりほとんどなし
6層　褐灰　10YR5/1　自然堆積層　粘性強し　しまりあり　部分的に水平方向のラミナの見られる箇所あり
7層　黒褐　10YR2/2　泥炭層　植物遺体を多く含む　しまりなし
8～10層　黒褐　10YR3/2　泥炭層　植物遺体を極めて多く含む　層全体は茶色がかって見える　しまりなし
層の下部に、濁った白色を呈する火山灰層を含む
11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり　しまりややあり
植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む
植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　しまりややあり　水田耕作土
畦畔補強土　褐灰　10YR4/1　11層に類似するが、よりシルト質　植物遺体を少量含む　しまりあり
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　しまりあり

0　1:100　4m

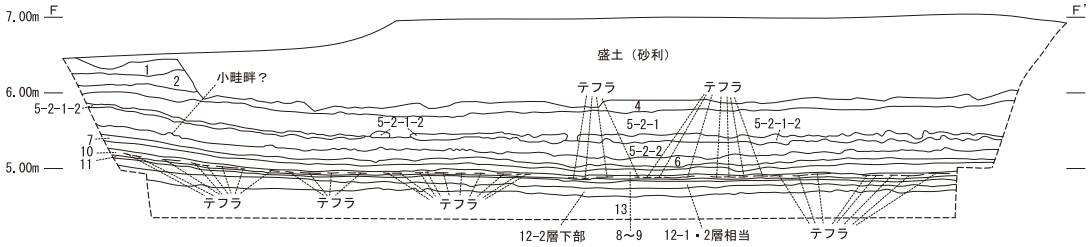
第７図　土層図１

１－３区北壁



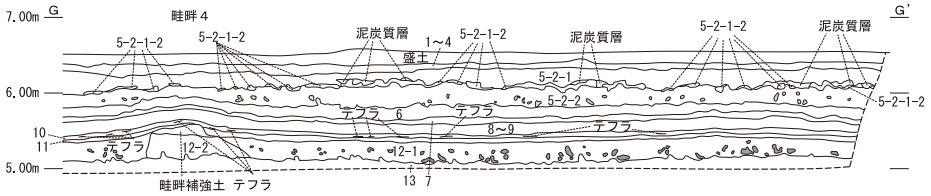
1～2層　褐灰色砂質粘土層　10YR4/1　粘性なし　しまりややあり
12-1・2層相当　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　13層の巻き上げを含まない
12-2層下部　黒褐色泥炭層　7.5YR2/2　粘性ややあり　しまりなし　下部は13層との漸移層的になる　1-3区東側にのみ存在する

１－３区東壁



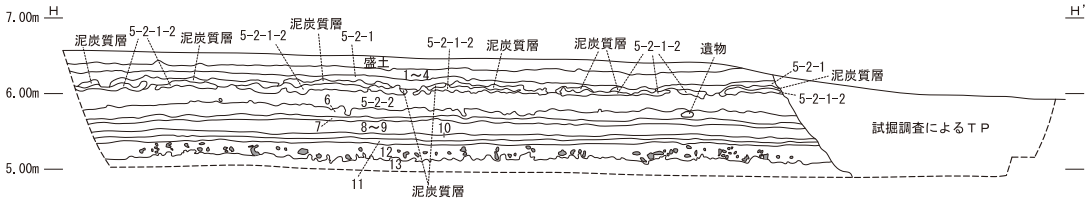
12-1・2層相当　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　13層の巻き上げを含まない
12-2層下部　黒褐色泥炭層　7.5YR2/2　粘性ややあり　しまりなし　下部は13層との漸移層的になる　1-3区東側にのみ存在する

１－３区南壁



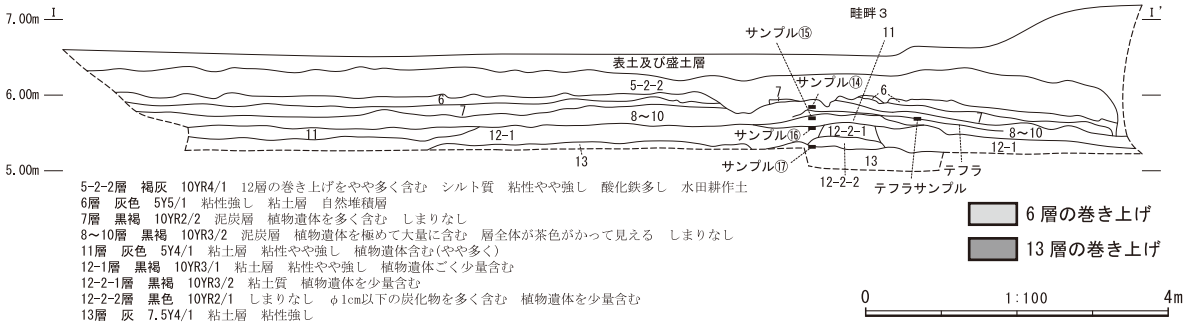
畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR5/1　粘性あり　しまりなし　植物遺体を若干含む
5-2-1-2層に接して部分的に存在する泥炭質層の土層説明　黒褐色泥炭質層　10YR2/3　粘性なし　しまりなし　植物遺体をわずかに含む　酸化鉄の集積あり

１－３区西壁



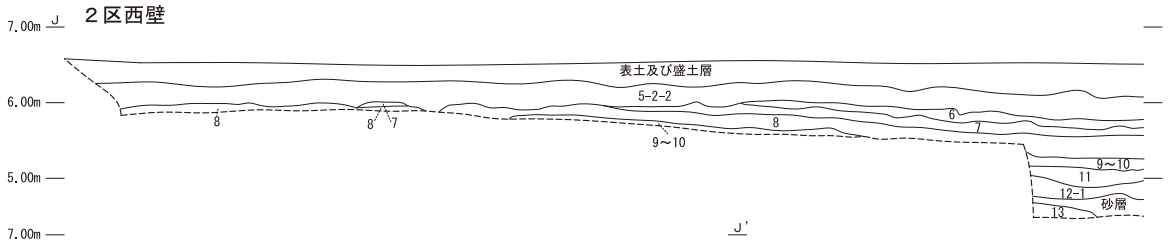
5-2-1-2層に接して部分的に存在する泥炭質層の土層説明　黒褐色泥炭質層　10YR2/3　粘性なし　しまりなし　植物遺体をわずかに含む　酸化鉄の集積あり

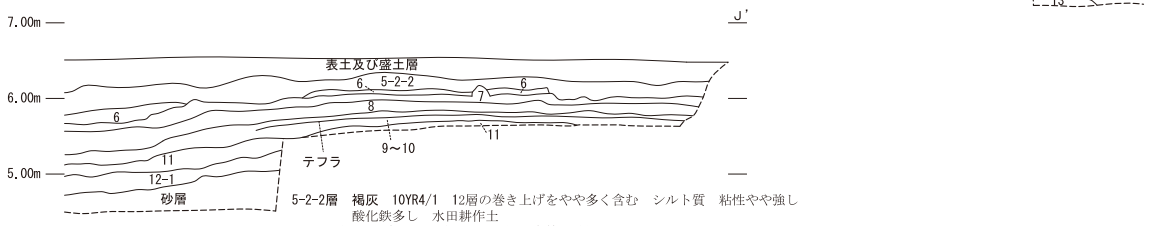
２区東壁



5-2-2層　褐灰　10YR4/1　12層の巻き上げをやや多く含む　シルト質　粘性やや強し　酸化鉄多し　水田耕作土
6層　灰色　5Y5/1　粘性強し　粘土層　自然堆積層
7層　黒褐　10YR2/2　泥炭層　植物遺体を多く含む　しまりなし
8～10層　黒褐　10YR3/2　泥炭層　植物遺体を極めて大量に含む　層全体が茶色がかって見える　しまりなし
11層　灰色　5Y4/1　粘土層　粘性やや強し　植物遺体含む(やや多く)
12-1層　黒褐　10YR3/1　粘土層　粘性やや強し　植物遺体ごく少量含む
12-2-1層　黒褐　10YR3/2　粘土質　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒色　10YR2/1　しまりなし　φ1cm以下の炭化物を多く含む　植物遺体を少量含む
13層　灰　7.5Y4/1　粘土層　粘性強し

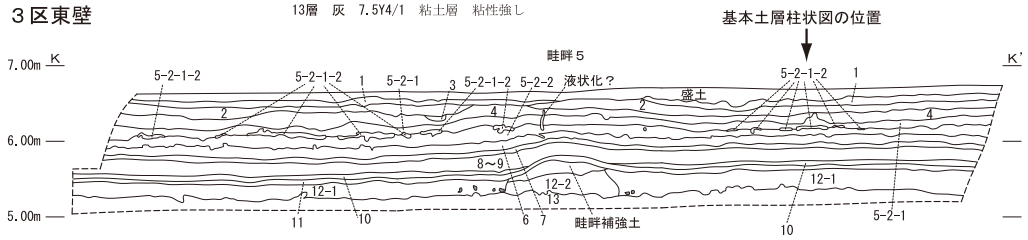
第８図　土層図２





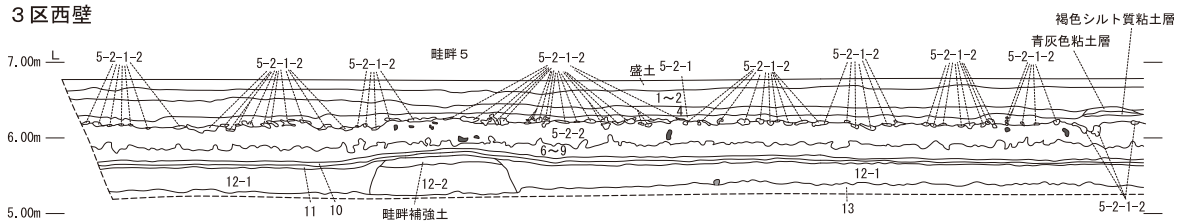
5-2-2層　褐灰　10YR4/1　12層の巻き上げをやや多く含む　シルト質　粘性やや強し
酸化鉄多し　水田耕作土
6層　灰色　5Y5/1　粘性強し　粘土層　自然堆積層
7層　黒褐　10YR2/2　泥炭層　植物遺体を多く含む　しまりなし
8層　黒褐　10YR2/2　泥炭層　植物遺体を極めて大量に含む
層全体が茶色がかって見える　しまりなし
9～10層　褐灰　7.5YR4/1　しまりなし　粘性あり　植物遺体やや多く含む
上部にテフラを含む
11層　灰　5YR4/1　粘土層　粘性やや強し　植物遺体やや多く含む
12-1層　黒褐　10YR3/1　粘性やや強し　植物遺体をごく少量含む
13層　灰　7.5Y4/1　粘土層　粘性強し

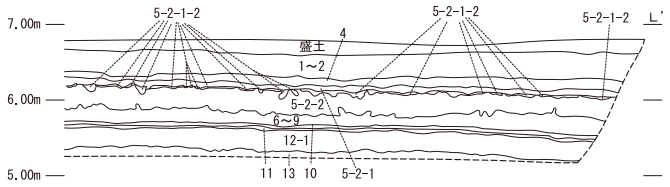
３区東壁



畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR5/1　粘性あり　しまりなし　植物遺体を若干含む

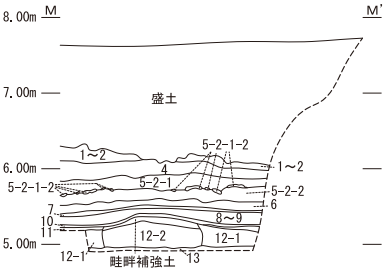
３区西壁





畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR5/1　粘性あり　しまりなし　植物遺体を若干含む
青灰色粘土層　7.5Y4/1　粘性強い　腐植わずかにあり　畦畔補強土か？
褐色シルト質粘土層　7.5YR4/3　粘性ややあり　腐植わずかにあり　畦畔構築土か？

４区西壁



6 層の巻き上げ
6 層～ 9 層の巻き上げ
13 層の巻き上げ
0　1:100　4m

1層　黄灰色シルト質粘土層　2.5Y4/1　粘性なし　しまりあり
1～2層　褐灰色砂質粘土層　10YR4/1　粘性なし　しまりややあり
3層　極暗褐色泥炭層　7.5YR2/3　粘性少ない　腐植やや多い　今年度の調査地区では、3区東壁に部分的にわずかに見られるのみである
4層　灰色粘土層　7.5Y4/1　粘性やや強い　腐植少ない
5-2-1層　オリーブ黒色粘土　5Y3/1　φ5mm程度の白色粘土の巻き上げ（5-2-1-2層と思われる）を多く含む
5-2-1-2層　白色粘土層　N4/1（灰色）　薄層　耕作により失われている箇所が多い　粘性強い　腐植なし　層の凹凸と湾曲が激しい
5-2-2層　オリーブ黒色粘土　7.5Y3/2　ラミナなし　粘性強い　腐植ややあり
φ3～6cm程度の灰色土のブロック（6層であろう）の巻き上げ含む
φ5mm程度の灰色粒子を多く含む　木片わずかに含む
6層　灰色粘土層　7.5Y4/1　粘性強い　ラミナあり　腐植ややあり（縞状に入る部分あり）　層の上端部に攪拌痕の見られる箇所あり
1-3区にはこの層による小畦畔？の見られる箇所がある　3区西側の土層断面においては5-2-2層の耕作により大半が失われている
（この箇所においては、5-2-2層の耕作は7層以下にも及んでいる）
7層　黒泥層　10YR2/1　ラミナあり。粘性少ない。腐植少ない
8～9層　黒褐色泥炭層　7.5YR2/3　8層と9層は今年度の調査地点では分層できなかった　ラミナあり
腐植は濃淡あるが全体的に多い　粘性ややあり
10層　黒褐色粘土質泥炭層　7.5YR3/1　ラミナあり　粘性ややあり　腐植やや多し
8～9層との区別はやや困難な部分がある　この層の中間あたりに伊豆神津島天上山火山灰がパッチ状に含まれる
この火山灰は肉眼において、令和1年度の調査区では東側の1-3区で最も顕著に確認でき、西側の3区ではほとんど見られなくなる
11層　泥炭混じり黒褐色粘土層　2.5Y3/1　粘性強い　腐植少ない　大畦畔を原則的に被覆する
12-１層　黄灰色粘土層　2.5Y4/1　粘性やや強い
13層が攪拌され、灰色粘土ブロック（φ5cm以上のものが多い）を層の下部を中心として大量に巻き上げる
腐植わずかに混じる　12層水田の耕作土である（（(財)静文研 1996)では奈良時代～平安時代初頭とする）
12-2層　黄灰色粘土層　10YR4/1　粘性やや強い
13層が攪拌されるが、第12-2層に接する13層上面の形状は、12-1層の下面と比較して攪拌痕が一層顕著になる箇所が多い
13層の巻き上げは12-１層より少ない箇所が多い　腐植わずかに混じる　大畦畔の下部層としてのみ残存する
条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる
（（(財)静文研 1996)では古墳時代中後期？～奈良時代の非条里型水田耕作土とする）
13層　灰色シルト質粘土層　7.5Y4/1　粘性非常に強い　ラミナあり　腐植極めて少ない
過去の調査（（(財)静文研 1996)の13-１層と思われる

第９図　土層図３

により上部と下部に分けた箇所がある

第 12 －２層…黄灰色粘土層。10YR4/1。粘性やや強い。腐植わずかに混じる。第 13 層が巻き上げられるが、第 12 －２層に接する第 13 層上面ラインの形状は、第 12 －１層の下面ラインと比較して、撹拌痕が一層顕著になる箇所が多い。大畦畔本体の下部層としてのみ残存する。条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる（過去の調査では古墳時代中後期～奈良時代の非条里型水田を主とする水田の耕作土とする）。この層も下の第 13 層の巻き上げの多少等により、第 12 －２－１層と第 12 －２－２層に分層した箇所がある。

第 12 －２層下部…黒褐色泥炭層。7.5YR2/2。粘性やや有り。しまり無し。今回の調査の調査区では、１－３区東側にのみ見られる。過去の調査では、古墳時代中期に比定されている。

第 13 層…灰色シルト質粘土層。7.5 Y 4/1。粘性非常に強い。腐植極めて少ない。ラミナあり。過去の調査の 13- １層の可能性がある。過去の調査では古墳時代中期洪水堆積層とする。今回の調査の掘削はこの層の上部の中途まで行った。

第３節　調査の経過

１　現地調査

（１）平成 29 年度の調査

平成 29 年 10 月 26 日に現地事務所等を立ち上げ、30 日から重機による表土等除去作業を開始した。途中重機等によるトラブルがあり、一時期中断したが 11 月 14 日に再開し、12 月１日に終了した。同日、包含層掘削を開始し、12 月５日からは遺構検出も同時併行で進めた。24 日は包含層掘削、遺構検出ともに終了した。

翌１月 10 日にはラジコンヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った。１月 11 日から畦畔部分の遺構掘削（畦畔の解体作業）を開始した。29 日に遺構掘削を完了し、以降は撤収作業と出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続した。３月 26 日に現地事務所を撤去し、撤収作業を完了させた。

（２）平成 30 年度の調査

（ア）２区

平成 30 年９月３日に現地事務所等を立ち上げ、調査準備等の作業を行い、21 日から、重機による表土等除去作業を開始した。産業廃棄物が多量に埋められている部分があり、そこは盛土が極めて厚く、除去作業にかなりの時間を要したが、10 月 29 日に２区全体の表土等除去作業を終了した。翌 30 日から包含層掘削を開始し、11 月 26 日に終了した。27 日に清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、28 日にはラジコンヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った（景観写真撮影には高所作業車も併用）。翌 29 日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。２区西側において、多量の木製品が出土したため、掘削作業と遺物の記録及び取り上げ作業を同時並行で行い、年末年始をはさんだ翌１月８日に遺構掘削作業を完了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、２月 20 日に、１－２区の基礎整理作業も含めて終了した。

（イ）１－２区

２区の調査に併行する形で、10 月 29 日より掘削のための準備作業を行い、11 月５日から、重機による表土等除去作業を開始し、12 月３日に終了した。翌４日から包含層掘削を開始し、年が明けた１月７日に完了した。８日から 10 日にかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、11 日にはラジコン

ヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った（景観写真撮影には高所作業車も併用）。15 日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。24 日に遺構掘削作業を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、２月 20 日に終了した。21 日からは２区も含めた撤去作業を行い、３月５日に調査関連の施設等の撤去作業を完了し、現地から撤収した。

（３）令和元年度（平成 31 年度）の調査

（ア）１－３区

令和元年９月２日に現地事務所等を立ち上げ、調査準備等の作業を行い、10 月７日より表土等除去作業を開始し、11 月５日に終了した。翌６日から包含層掘削を開始し、11 月 19 日に上段部分の包含層掘削を完了した。25 ～ 26 日に清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、26 日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。12 月３～４日に下段部分の包含層掘削を行い、４日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。遺物出土状況の記録及び取り上げ作業を同時並行で行い、10 日に遺構掘削作業を完了した。なお、１－３区は発掘区側面の土層図作成の作業のみを掘削作業中から行い、遺構掘削完了後の 12 月 11 ～ 12 日、18 ～ 25 日、令和２年１月７日～ 24 日まで実測を含めて断続的に行った。終了後は他地区の遺物も合わせて、3 月５日まで現地での出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を行った。

（イ）４区

１－３区の調査に併行する形で、11 月６日から、重機による表土等除去作業を開始した。既に述べたように、この調査区は極めて深い深度まで地盤改良による削平がなされており、その上に大量の建築関連の廃棄物が捨てられていた。更にその上に１m以上もの盛土がなされていた。その上で調査前まで大半が畑として利用されていた状況であったが、このような状況が判明したのは、表土等除去作業開始後であった。そのため、表土等の土量が当初設計より大幅に増加し、また、法面の安全対策を十分に行う必要があった。このような理由により、この区の表土等除去作業は予定より大幅な作業日数増を要すことになった。12 月 10 日に表土等除去作業を終了した。翌 11 日から包含層掘削を開始し、年が明けた１月 16 日に完了した。日数がやや経過しているが、１月 31 日から２月６日にかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、7 日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。10 日と 12 日には僅かに残存した畦畔部分の解体を行い、25 日に写真撮影を終えて４区の調査を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、３月５日に終了した。

（ウ）３区

１－３区、４区の調査に併行する形で、12 月 18 日から、重機による表土等除去作業を開始し、12 月 25 日に終了した。翌 26 日から包含層掘削を開始し、年が明けた２月３日に完了した（途中の１－３区、４区の調査の工程上、数回の中断期間あり）。３～５日からにかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、６日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。７日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。20 日に遺構掘削作業を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、３月５日に終了した。３月６日には、現地の監督員詰所の撤去作業を行い。現地から完全撤収した。

２　資料整理・保存処理

（１）令和２年度

資料整理（記録類整理・出土品整理）、報告書刊行作業（原稿執筆）を実施した。また、木製品及び金属製品については保存処理作業を実施した。これとともに、木製品の樹種同定作業、種実の同定作業

第３表　　土層総括表

平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	調査区	出土位置	掲載図面	備考
6 層		1 層～５層	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	
10 層		５－２層	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	
12 層		6 層	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	
13 a 層		７～８層	１－１区	調査区東・北壁、畦畔土層帯	土層図№.３	
13b 層		９～10 層	１－１区	調査区東・北壁、畦畔土層帯	土層図№.３・１	
14 層		11 層	１－１区	調査区東・北壁、畦畔土層帯	土層図№.３・１・２	
15 層		12-1 層（上部）	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	12-１層の土層説明とは別には原図のものを使用する
16 層		12-1 層（下部）	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	
17 a 層		12-1 層～13 層	１－１区	調査区東・北壁	土層図№.３	
17b 層		13 層	１－１区	調査区東・北壁、畦畔土層帯	土層図№.３・１・２	
15-16 層		12-1 層	１－１区	調査区東・北壁、畦畔土層帯	土層図№.３・１・２	
14 層の一部		畦畔補強土	１－１区	畦畔土層帯	土層図№.１・２	
畦畔構築土②		12-2 層	１－１区	畦畔土層帯西壁・土層帯１	土層図№.１	
畦畔構築土③		12-2 層下部	１－１区	畦畔土層帯西壁・土層帯１・２	土層図№.１・２	土層帯１では１層として表現する。原図の分割線（中間線）は消す
17 a 層		12-2 層下部	１－１区	畦畔土層帯西壁・土層帯１	土層図№.１	
13b ～ 14 層		10 ～ 11 層	１－１区	、畦畔土層帯２	土層図№.２	
畦畔構築土①		12-2 層	１－１区	、畦畔土層帯２	土層図№.２	土層帯２では１層として表現する。原図の分割線（中間線）は消す
畦畔構築土②						
畦畔構築土④		畦畔補強土①	１－１区	畦畔土層帯－４・5	土層図№.２	土層説明は原図のものを使用する
畦畔構築土⑤		畦畔補強土②	１－１区	畦畔土層帯－４・5	土層図№.２	
畦畔構築土⑥		畦畔補強土③	１－１区	畦畔土層帯－４・5	土層図№.２	
	10 層	５－2-2 層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	12 層	6 層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	13a 層	７層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	13b 層	８～10 層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	14 層	11 層	2 区	調査区東壁畦畔部分	土層図№.８	
	15 ～ 16 層	12-１層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	17b 層	13 層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	畦畔構築土①	12-2 層	2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	東壁土層帯１では１層として表現する。原図の分割線（中間線）は消す
	畦畔構築土②		2 区	調査区東壁・畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	13b 層	８～10 層	2 区	畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	15 層	12-1 層（上部）	2 区	畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	16 層	12-1 層（下部）	2 区	畦畔第１ベルト	土層図№.８	
	13b 層	10 層	2 区	畦畔第３ベルト	土層図№.９	
	畦畔構築土②	12 －２層	2 区	畦畔第４ベルト	土層図№.９	
	6 層	1 層～５層	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	7 または 9 層	5-2-1-2 層	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	10 層	５－2-2 層	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	12 層	6 層	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	17b 層	13 層	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	畦畔構築土①	畦畔補強土	1-2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	畦畔構築土②	12-2 層上部	2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	畦畔構築土③	12-2 層下部	2 区	調査区南壁	土層図№.６	
	13b 層	10 層	2 区	畦畔第４ベルト	土層図№.６	

を委託し、実施した。

（２）令和３年度

資料整理（出土品整理）、報告書刊行作業（原稿執筆・編集作業）を実施した。これにより令和４年３月に報告書を刊行した。また、木製品については保存処理作業を継続した。

木製品の樹種同定作業を委託し、３箇年度で全て終了した。

（３）令和４年度

木製品の保存処理作業を実施し、全点数を完了した。これにより、今回の上土遺跡の調査に係る全作業が終了した。

第４表　調査工程表

調査項目	平成 29 年度				平成 30 年度				平成 31（令和１）年度				令和２年度				令和３年度				令和４年度			
【現地調査】																								
１区			━	━																				
２区						━	━	━																
１－２区							━	━																
１－３区											━	━												
４区											━													
３区												━												
【資料整理】																								
資料整理作業														━	━	━		━	━	━				
報告書作成作業													━	━	━	━	━	━	━	━				
【保存処理】																								
出土品保存処理														━	━	━		━	━	━		━	━	━
木製品樹種同定														━	━	━		━	━	━				

第４章　調査の成果

第１節　平成 29 年度の調査（１－１区の調査）

１　遺構の検出状況

平成 29 年度の調査は、第１章第１節で述べた経過に従い、平成 23 ～ 28 年度の調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

掘削作業は、表土から第６層（統一した層名であり、調査当初は別の層名を用いた。以下同じ。）までは重機で一気に除去し、第７層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行ったが、この地区は畦畔の高さが低く、検出は困難を伴った。そのため、ある程度の深度（第 13 層までである場合が多い）をもつトレンチを、想定される畦畔の方向と垂直に交差するように設定し、断面からの畦畔の検出に努めた。この結果、調査区西側で東西方向の大畦畔を検出した。

畦畔１

調査区を南西壁から北東方向に延びる大畦畔である。西側はAq－-3 グリッドから検出されているが、東側は、第７～ 10 層に及ぶ泥炭層の除去のみでは検出できなかった。第 10 図の畦畔は泥炭層除去段階での平面的な検出状況を図化したものである。これによれば、黒色泥炭層中に突き出ていた部分は At－１グリッドまでで、それより東はこの図には表現されていない。ただし、土層帯４と５からは高さの低い畦畔が痕跡的に検出されており（第 11 図）、本来的には畦畔が調査区の東北壁まで（あるいはその近くまで）設定されていた可能性は高い。ただし、この畦畔１の東側部分は補強等が不十分で、畦畔としての使用は他の箇所に比べて早期に終了した可能性が高く、水田も含めて早い段階で耕作が行われなくなったと思われる。

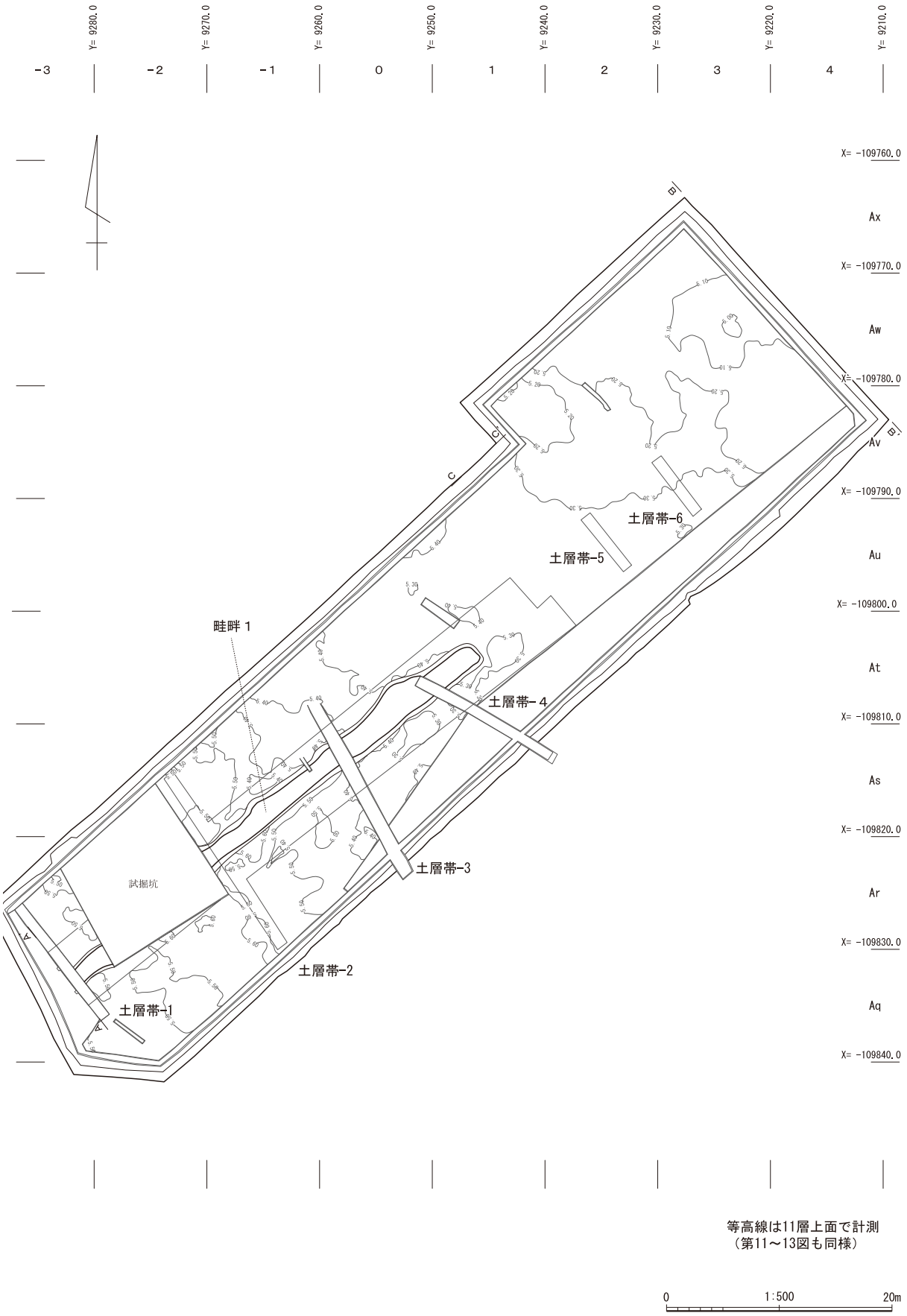
上述した通り、第 10 図での泥炭層中に突き出て検出された長さは約 45 ｍであり、幅は約 3.2 ～ 0.8 ｍである。床土である第 13 層の直上部分における幅は、3.2 ｍ～ 0.6 ｍである。ただしこれはトレンチ掘削に伴う土層帯部分のみによる所見である。

畦畔１は高さ（第 13 層上面からの）は全体として西側部の方が高く、前述した At －１グリッド以東は急激に高さを減ずる。

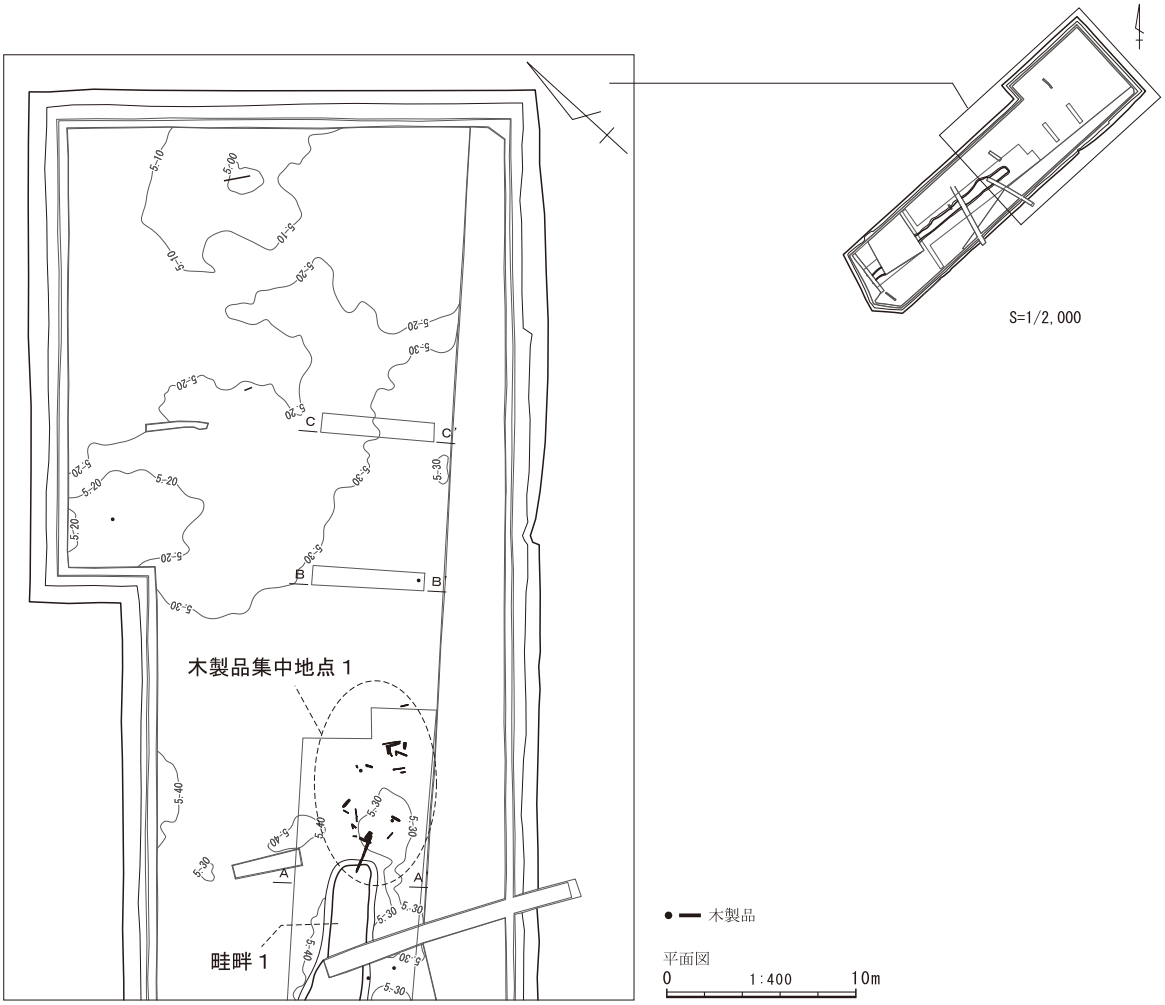
遺物は畦畔中ないし畦畔上からは非常に少ない。ただし、At －１グリッドを中心とした畦畔付近には次項で述べる木製品集中地点１が存在する。

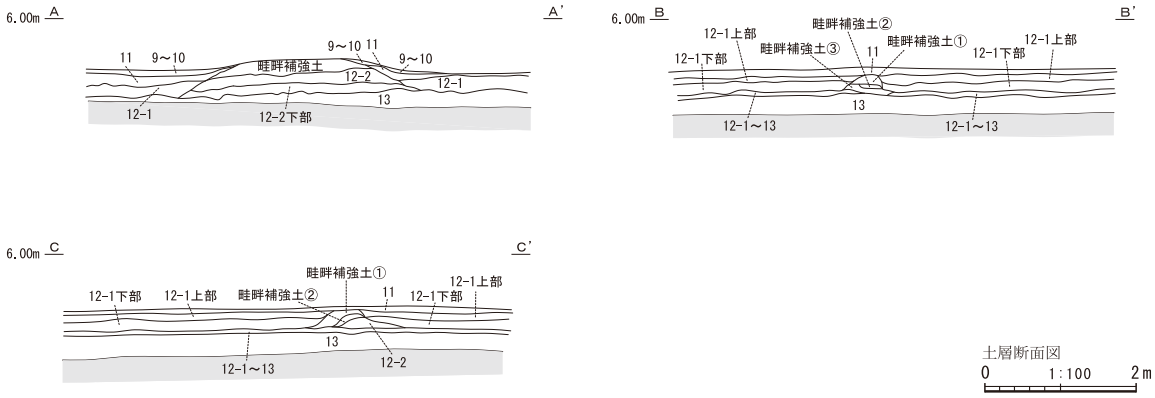
木製品集中地点１

畦畔１の北東に木製品が集中していた箇所があり、木製品集中地点１として扱う。分布状況は長径約 10 ｍ程度の楕円形を呈し、細長い木製品が比較的目立つ。注意すべきなのは木製品が畦畔１の頂部にかけて出土していることである。第 10 図ではこの木製品集中部が、畦畔の痕跡だけを残した土層帯４の方向へ延びていることがわかる。このことから、この遺物集中地点１を構成する材の多くが畦畔１の補強材であり、原位置から若干ずれた形で出土していると推測される。


Y= 9280.0
Y= 9270.0
Y= 9260.0
Y= 9250.0
Y= 9240.0
Y= 9230.0
Y= 9220.0
Y= 9210.0
-3
-2
-1
0
1
2
3
4
X= -109760.0
Ax
X= -109770.0
Aw
X= -109780.0
Av
X= -109790.0
Au
X= -109800.0
At
X= -109810.0
As
X= -109820.0
Ar
X= -109830.0
Aq
X= -109840.0
B
C
A
畦畔１
土層帯-6
土層帯-5
土層帯-４
土層帯-3
土層帯-2
土層帯-1
試掘坑
等高線は11層上面で計測
（第11～13図も同様）
0
1:500
20m

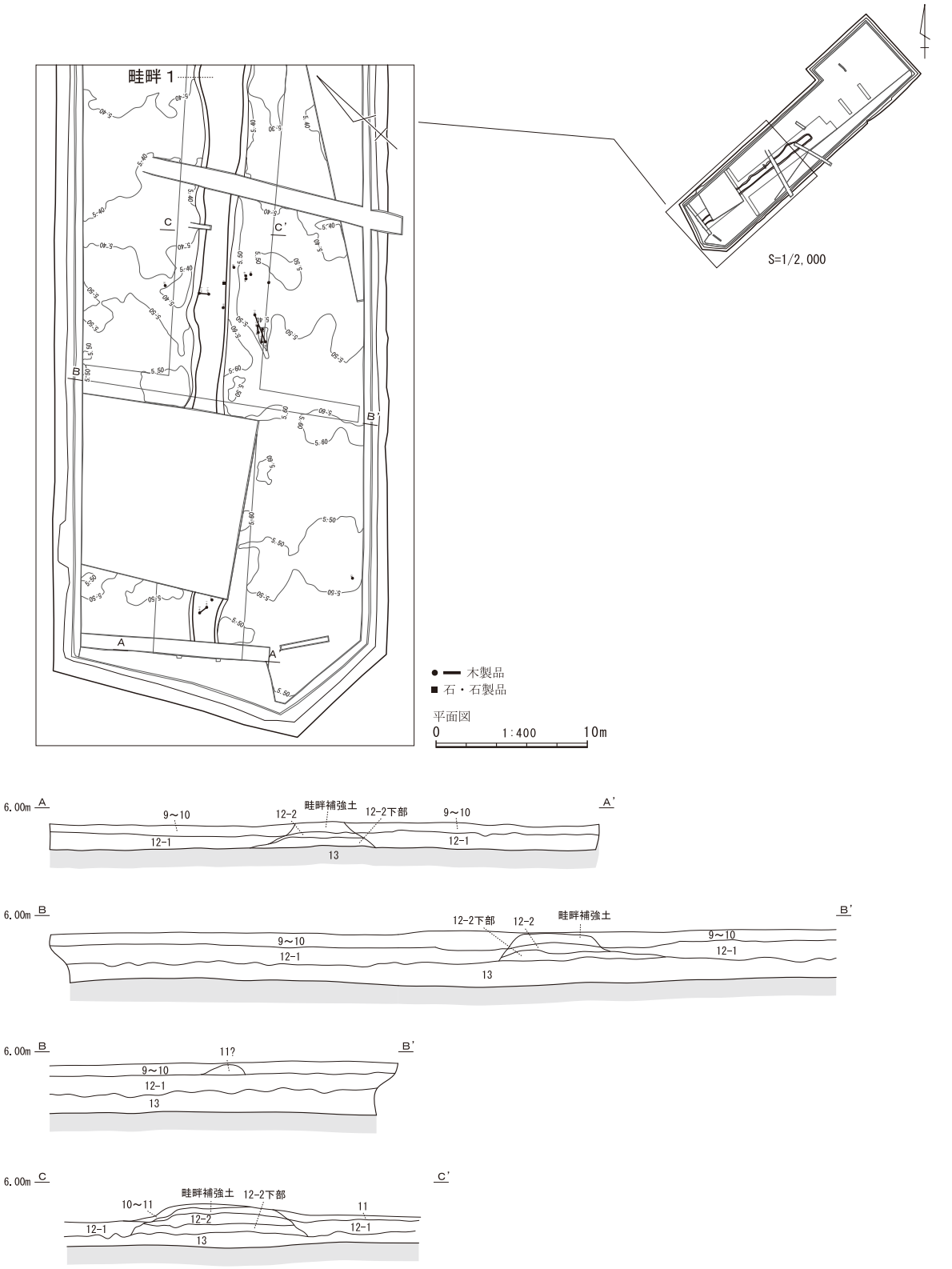
第 10 図　１－１区全体図





畦畔補強土　10YR5/1　**褐灰色粘土**　水田耕作土？　粘性やや強　植物遺体少量含む
畦畔補強土①　10YR3/1　**黒褐色粘土**　粘性弱　植物遺体多く含む
畦畔補強土②　10YR5/1　**褐灰色粘土**　粘性やや強　1cm大の炭化物粒少量含む
畦畔補強土③層土が少量互層として入る
畦畔補強土③　10YR4/1　**褐灰色シルト質粘土**　粘性弱　植物遺体少量含む　1cm大の炭化物粒少量含む
12-1層下部土が少量互層として入る
9～10層　10YR3/2　**黒褐色泥炭質土**　自然堆積層　粘性弱　植物遺体非常に多く含む　層中位に火山灰が堆積している
11層　10YR5/1　**褐灰色粘土**　水田耕作土？　粘性やや強　植物遺体少量含む
12-1層　10YR3/1　**黒褐色粘土**　水田耕作土　粘性やや強　植物遺体少量含む
2～3センチ大の13層土の巻上土非常に多く含む　1cm大の炭化物粒少量
12-1層上部　10YR4/1　**褐灰色シルト質粘土**　水田耕作土　粘性弱　植物遺体少量含む
12-1層下部　10YR3/2　**黒褐色粘土**　水田耕作土　粘性弱　植物遺体含む　1cm大の炭化物粒少量含む
12-1～13層　12-1層下部と13層の互層堆積　自然堆積層　粘性強　水平に水性堆積を示すラミナが入る
12-2層　10YR3/1　**黒褐色粘土**　粘性弱　植物遺体含む　1cm大の炭化物粒少量含む
12-2層下部　10YR2/1　**黒色泥炭質土**　粘性弱　植物遺体多く含む　1cm大の炭化物粒多く含む
13層　10YR5/1　**褐灰色粘土**　自然堆積層　粘性強

第 11 図　１－１区遺構詳細図１



畦畔補強土　10YR5/1　褐灰色粘土　水田耕作土？　粘性やや強　植物遺体少量含む
9～10層　10YR3/2　黒褐色泥炭質土　自然堆積層　粘性弱　植物遺体非常に多く含む　層中位に火山灰が堆積している
11層　10YR5/1　褐灰色粘土　水田耕作土？　粘性やや強　植物遺体少量含む
12-1層　10YR3/1　黒褐色粘土　水田耕作土　粘性やや強　植物遺体少量含む 2～3cm大の13層土の巻上痕非常に多く含む　1cm大の炭化物粒少量含む
12-2層　10YR3/2　黒褐色粘土　粘性強　植物遺体少量含む
12-2層下部　10YR2/1　黒色泥炭質土　粘性弱　植物遺体多く含む　1cm大の炭化物粒多く含む
13層　10YR5/1　褐灰色粘土　自然堆積層　粘性強

土層断面図
0　1:100　2m

第12図　１－１区遺構詳細図２

第 13 図　１－１区遺物出土状況図

第２節　平成 30 年度の調査（１－２区、２区の調査）

１　遺構の検出状況

平成 30 年度の調査は、第１章第１節で述べた経過に従い、平成 29 年度の本センターの調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

掘削作業は、表土から第６層（統一した層名であり、調査当初は別の層名を用いた。以下同じ。）までは重機で一気に除去し、第７層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行った。最初は２区を、２区の調査途中から１－２区の調査を開始し、同時併行で進めた後、２区を終了させ、その後は１－２区のみになり、１－２区を終了させてこの年度の作業が終了した。

両地区の概略を述べると、２区は、平成 29 年度調査の１－１区の南西側、市道を挟んだ箇所に設定し、１－１区の畦畔１の続きを検出する目的で調査した。１－１区の状況に類似して、大畦畔の検出にはやや困難が伴ったが、一応調査区東北壁から延びる大畦畔を検出することができた（畦畔３）。

１－２区では、泥炭層中に突き出る大畦畔の頭を容易に検出することができた（畦畔２）。この畦畔は調査区の北西壁から南東壁まで、一か所の切れ目部分を除いて一直線につながっていた。この切れ目は水田の出水口の可能性があり、以下で詳述する

（１）１－２区

畦畔２

調査区の北西壁から南東壁まで、１箇所の切れ目を除き、一直線に延びる大畦畔である。これを検出した１－２区では、調査区北西側は前述１－１区と接続している。したがって畦畔２の北側延長部分は、１－１区で検出されるのが自然であると思われるが、１－１区ではこの畦畔２の延長部分は検出されていない。理由は不明である。

また、南東側延長部分には後述する１－３区を設定し調査を行った（令和元年度）が、こちらでは畦畔３の延長上に大畦畔が検出されている（畦畔４）。

この畦畔２は全体的に高さが高く、泥炭層中での遺構検出作業においても容易に頭を出すこと可能であった。第 11 層と考えられる灰色粘土層は畦畔上を覆っておらず、畦畔補強土が直接泥炭層中に姿をあらわす形で検出できた。

畦畔の断面は全体にわたってほぼ一律であり、地山である第 12 －２層の上に灰褐色の畦畔補強土が盛られて造られている。その点では他地区の畦畔と共通するが、第 12 －２層は上下の２層に分層可能である。これについては既に第３章２節の土層説明の箇所で述べた。

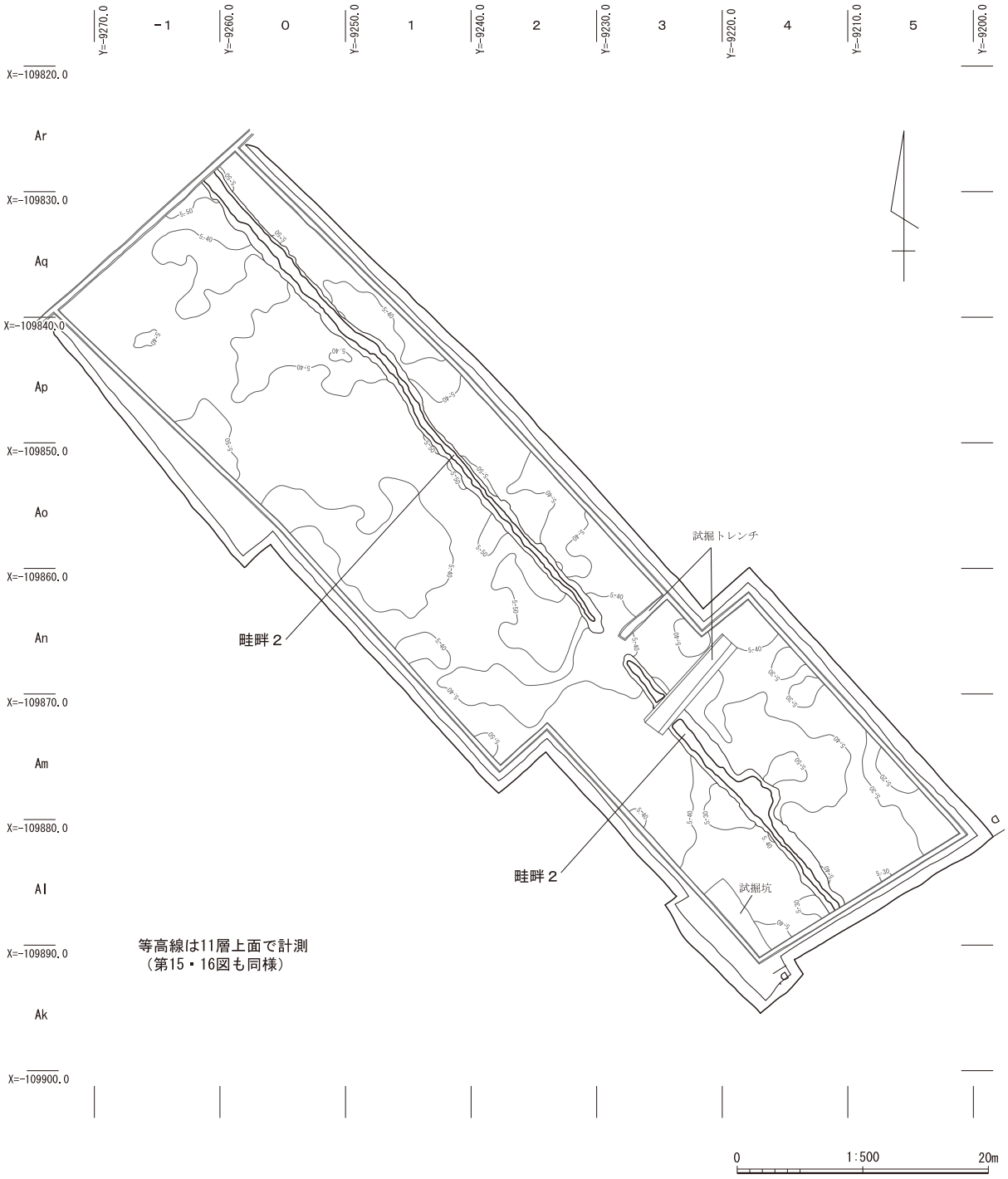
このほか、この畦畔２には An―２～３グリッドにおいて、出水口の可能性がある切れ目が発見されている。畦畔補強土が内側に傾斜する形で盛られていることが確認できるため、これは明らかに人工的に作られた切れ目である。ただし、畦畔設置当初からこの切れ目が存在したか否かは不明である。

第 14 図での泥炭層中に突き出て検出された長さは、北（西）壁から出水口（？）までは約 48 ｍであり、出水口（？）から南（東）側、南（東）壁までは約 26 ｍである。

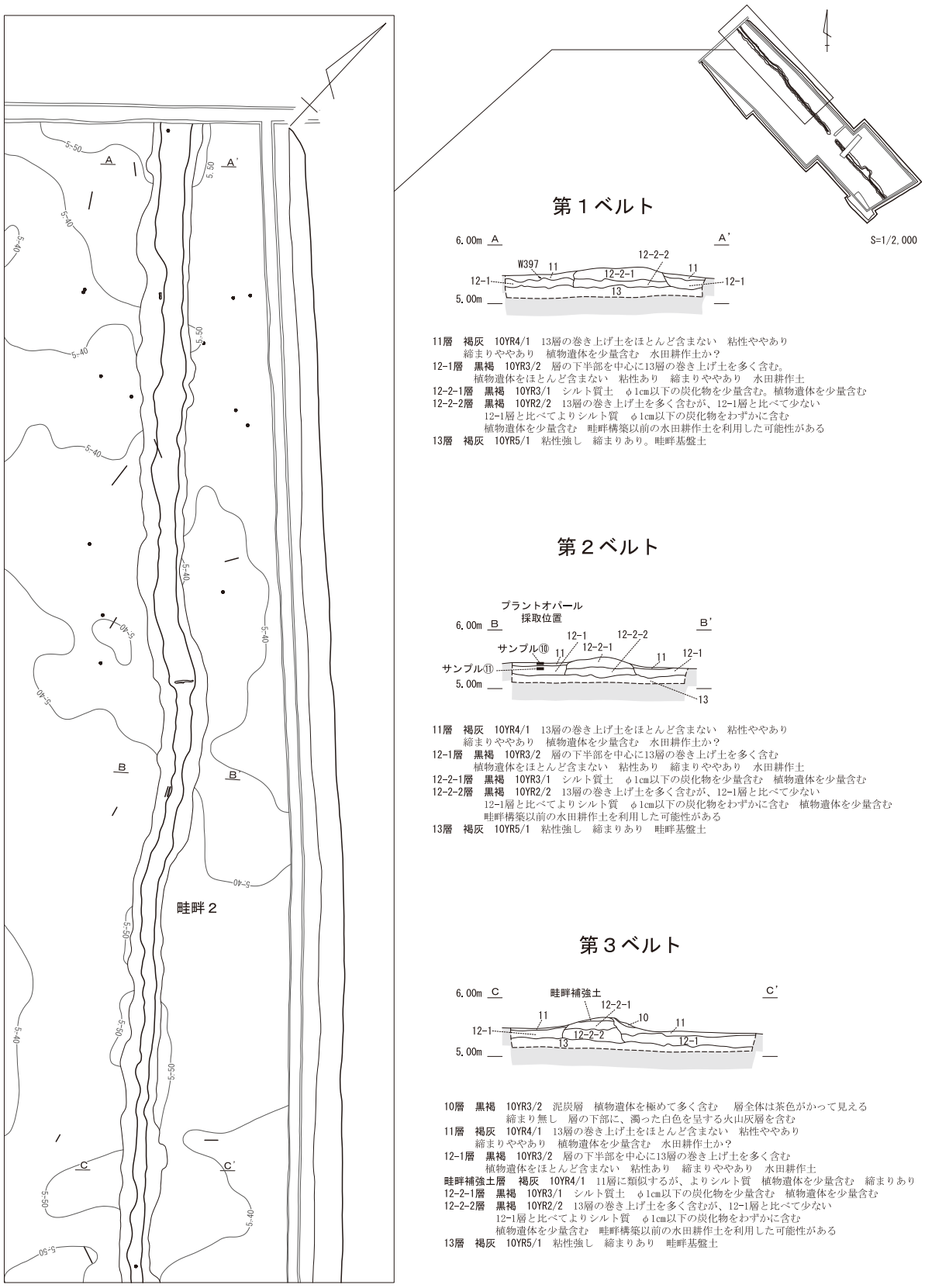
出水口（？）の幅は、第 13 層上面で約 2.6 ｍである。

畦畔全体の最大幅は約 3.3 ｍであるが、これは出水口（？）の南側で一段と太くなっている箇所である（第 16 図）。最も細い部分は約 1.0 ｍ程度であろう（床土である第 13 層の直上部分における幅）。平均的には 1.6 ｍ～ 1.2 ｍである（土層ベルト部分のみによる所見）。

この１－２区では遺物の集中地区は見られない。畦畔３から離れた箇所で円枠型田下駄の枠と踏み板が近接して出土しているのが目立つ程度である（第 17 図）。


Y=-9270.0
-1
Y=-9260.0
0
Y=-9250.0
1
Y=-9240.0
2
Y=-9230.0
3
Y=-9220.0
4
Y=-9210.0
5
Y=-9200.0
X=-109820.0
Ar
X=-109830.0
Aq
X=-109840.0
Ap
X=-109850.0
Ao
X=-109860.0
An
X=-109870.0
Am
X=-109880.0
Al
X=-109890.0
Ak
X=-109900.0
試掘トレンチ
畦畔２
畦畔２
試掘坑
等高線は11層上面で計測
（第15・16図も同様）
0
1:500
20m

第 14 図　１－２区全体図



第１ベルト

11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり
　　締まりややあり　植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む。
　　植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　締まりややあり　水田耕作土
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む。植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
　　12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
　　植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり。畦畔基盤土

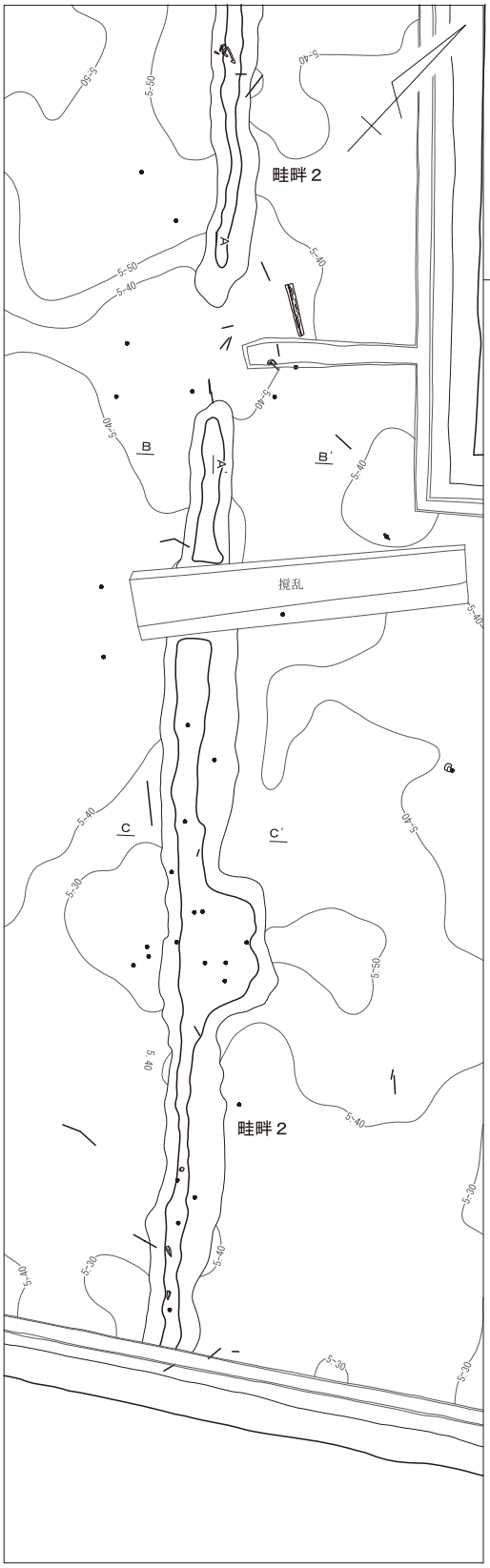
第２ベルト

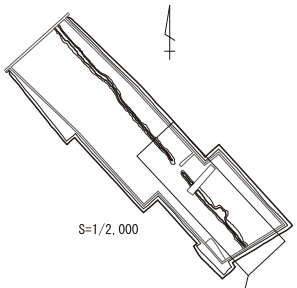
11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり
　　締まりややあり　植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む
　　植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　締まりややあり　水田耕作土
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
　　12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む　植物遺体を少量含む
　　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり　畦畔基盤土

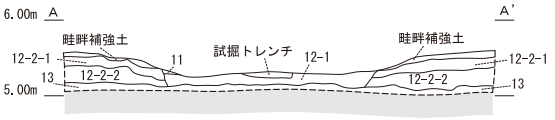
第３ベルト

10層　黒褐　10YR3/2　泥炭層　植物遺体を極めて多く含む　層全体は茶色がかって見える
　　締まり無し　層の下部に、濁った白色を呈する火山灰層を含む
11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり
　　締まりややあり　植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む
　　植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　締まりややあり　水田耕作土
畦畔補強土層　褐灰　10YR4/1　11層に類似するが、よりシルト質　植物遺体を少量含む　締まりあり
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
　　12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
　　植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり　畦畔基盤土

第 15 図　１－２区遺構詳細図１

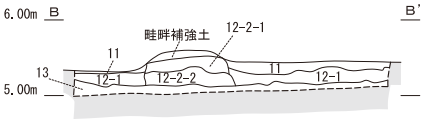






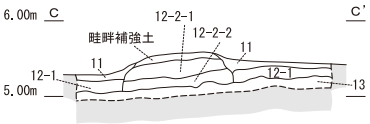
11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり　締まりややあり
植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/3　13層の巻き上げ土（φ2cm程度）少量含む
簾状の植物遺体を横方向にやや多く含む（人為的に敷かれたと思われる）
φ1cm以下の炭化物粒子をわずかに含む　粘性あり　締まり無し　水田耕作土
畦畔補強土　褐灰　10YR4/1　11層に類似するが、よりシルト質　植物遺体を少量含む　締まりあり
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり　畦畔基盤土

第４ベルト



11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり
締まりややあり　植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む
植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　締まりややあり　水田耕作土
畦畔補強土　褐灰　10YR4/1　11層に類似するが、よりシルト質　植物遺体を少量含む　締まりあり
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり　畦畔基盤土

第５ベルト



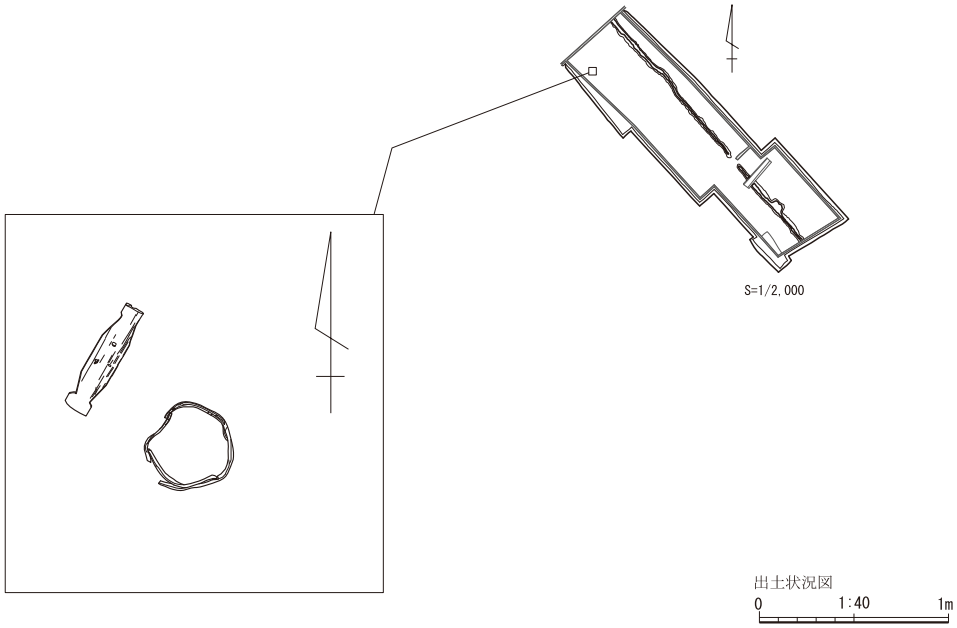
11層　褐灰　10YR4/1　13層の巻き上げ土をほとんど含まない　粘性ややあり
締まりややあり　植物遺体を少量含む　水田耕作土か？
12-1層　黒褐　10YR3/2　層の下半部を中心に13層の巻き上げ土を多く含む
植物遺体をほとんど含まない　粘性あり　締まりややあり　水田耕作土
畦畔補強土　褐灰　10YR4/1　11層に類似するが、よりシルト質　植物遺体を少量含む　締まりあり
12-2-1層　黒褐　10YR3/1　シルト質土　φ1cm以下の炭化物を少量含む　植物遺体を少量含む
12-2-2層　黒褐　10YR2/2　13層の巻き上げ土を多く含むが、12-1層と比べて少ない
12-1層と比べてよりシルト質　φ1cm以下の炭化物をわずかに含む
植物遺体を少量含む　畦畔構築以前の水田耕作土を利用した可能性がある
13層　褐灰　10YR5/1　粘性強し　締まりあり　畦畔基盤土

● ━ 木製品

平面図
0　1:200　5m

土層断面図
0　1:100　2m

第 16 図　１－２区遺構詳細図２



第 17 図　１－２区遺物出土状況図

（２）２区

畦畔３

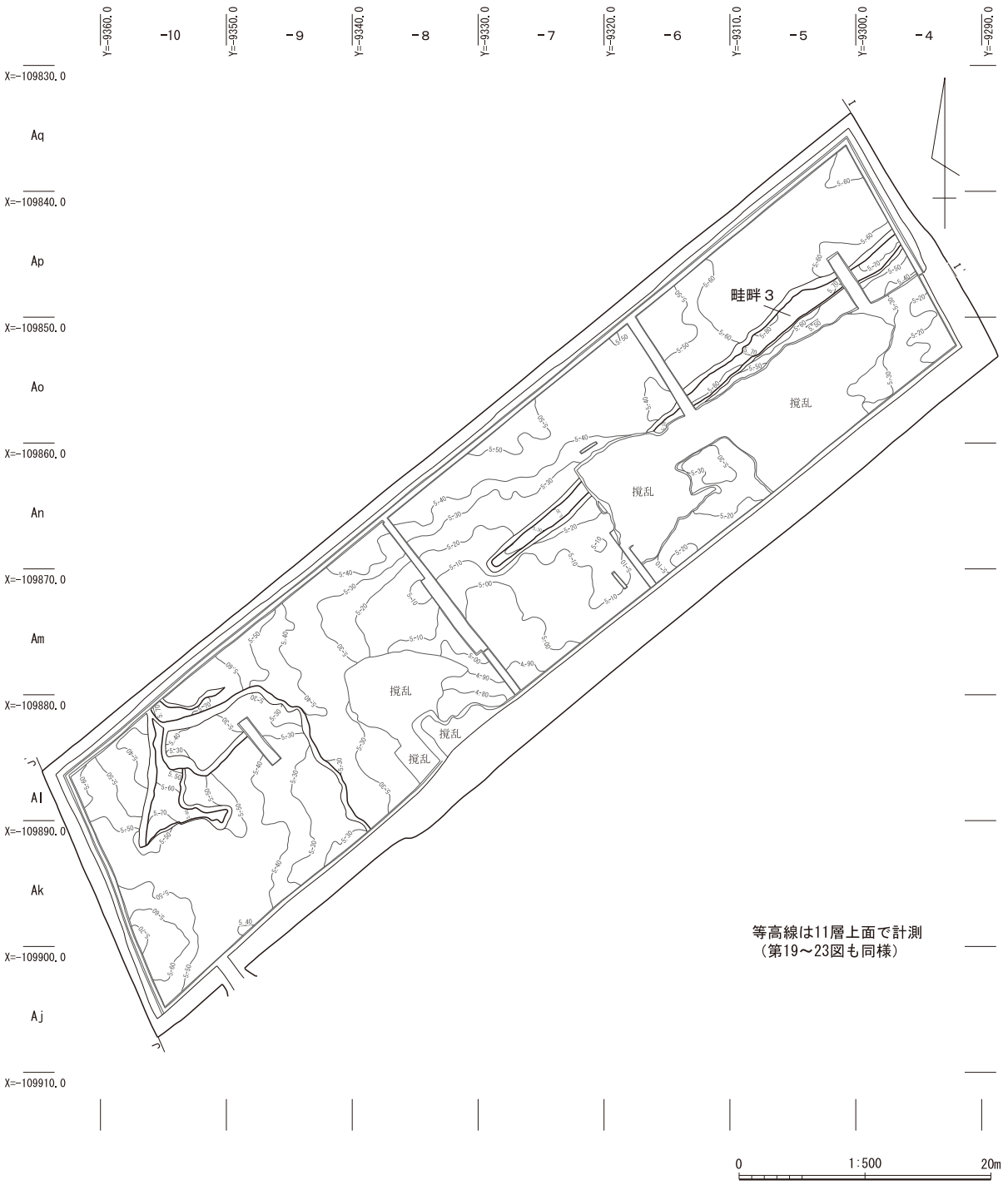
調査区を北（東）壁から南西方向に延びる大畦畔である。北東側は調査区の北東壁に断面が現れているので、これより北東側に延びるのは確実である。１－１区で検出された畦畔１の延長上にあるため、現静岡市道の路面下を通って畦畔１に接続すると思われる。

全体的に、第７～10 層に及ぶ泥炭層の除去によっては検出できなかったが、第 11 層と考えられる灰色粘土層が疑似畦畔状に盛り上がっている箇所もあり、これにより畦畔の存在を確認できた。第 18 図の畦畔の平面図は、11 層上面を出した状況で作成している。この図では南西部分は An －－７グリッドまで畦畔を表現することが可能で、それより南西側は土層断面図で判断するほかは無い。第 20 図は最も西側の土層確認用トレンチの土層断面であるが、ここには低平な畦畔の断面が見えており、ここまでは畦畔が延びていたことが確認できる。調査区南（西）壁部の土層断面図（第８図）では畦畔の断面は見えず、ここまでは畦畔が延びていなかったことは明らかである。

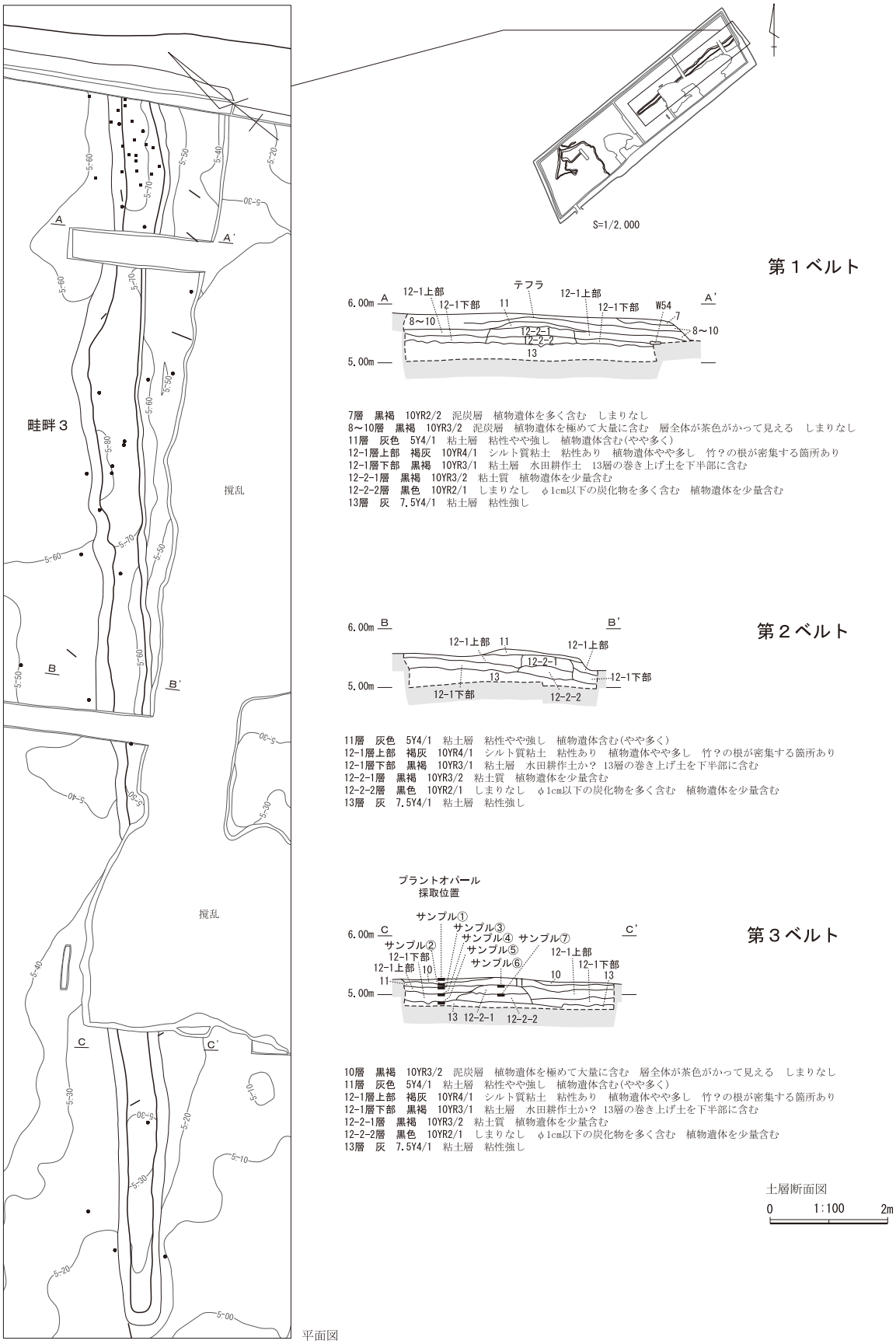
また、シガラ状の木枝の集積が畦畔上に数か所で見られたが、そのうちの Am －－８グリッド付近で検出されたものを図化し、写真撮影を行った。

なお、調査区で最も西南側の土層確認トレンチ付近から西南側は、第 13 層上面に至るまで不規則な凹凸が認められ、恐らくは洪水時などに形成された窪地のような地形であろう（洪水時等には水が流れる）。畦畔の痕跡が見いだされた第５ベルトはこの窪地状の地形の東側部分にある。ここから西南側で畦畔の痕跡が見いだされなかったのは、この窪地状の地形が形成される時点で何らかの作用（恐らくは洪水等であろう）で削り取られた等の事情が考えられる。この調査区南西部の窪地状の凹凸は、極めてイレギュラーで明確なプランを示さないため、遺構とは認定しなかった。

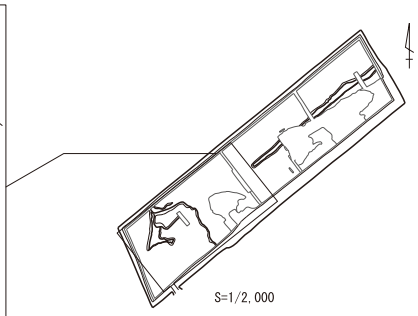
第 19 図での泥炭層中に突き出て検出された長さは、北（東）壁から約 42 ｍである（途中に大きな撹乱箇所がある）。畦畔の痕跡が確認できる土層確認トレンチまでは約 62 ｍである。最大幅は約 2.4 ｍ、最も細い部分は約1.4ｍ程度であろう。床土である13層の直上部分における幅は、1.6ｍ～0.9ｍである。ただしこれは土層ベルト部分のみによる所見である。


Y=-9360.0
-10
Y=-9350.0
-9
Y=-9340.0
-8
Y=-9330.0
-7
Y=-9320.0
-6
Y=-9310.0
-5
Y=-9300.0
-4
Y=-9290.0
X=-109830.0
Aq
X=-109840.0
Ap
X=-109850.0
Ao
X=-109860.0
An
X=-109870.0
Am
X=-109880.0
Al
X=-109890.0
Ak
X=-109900.0
Aj
X=-109910.0
畦畔３
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
等高線は11層上面で計測
（第19～23図も同様）
0
1:500
20m

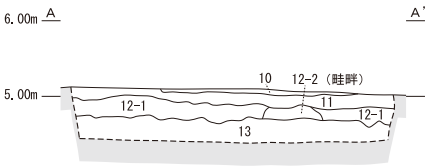
第 18 図　２区全体図



第 19 図　２区遺構詳細図１



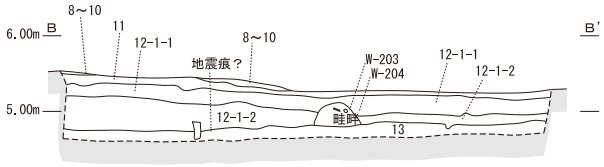
第４ベルト



10層　黒褐　10YR3/2　泥炭層　植物遺体を極めて大量に含む
　　層全体が茶色がかって見える　しまりなし
11層　灰色　5Y4/1　粘土層　粘性やや強し
　　植物遺体含む(やや多く)
12-1層　黒褐　10YR3/2　水田耕作土　粘性やや強し
　　植物遺体をわずかに含む
　　13層の巻き上げ土を層の下部についてわずかに含む
　　φ1cm程の炭化物を少量含む
　　12-1-1と12-1-2層の分離は土質では不可能
12-2層　黒色　10YR2/1　しまりなし　φ1cm以下の炭化物を多く含む
　　植物遺体を少量含む
13層　灰　7.5Y4/1　粘土層　粘性強し

● ━ 木製品
■ 石・石製品
▲ 金属製品

平面図
0　1:200　5m

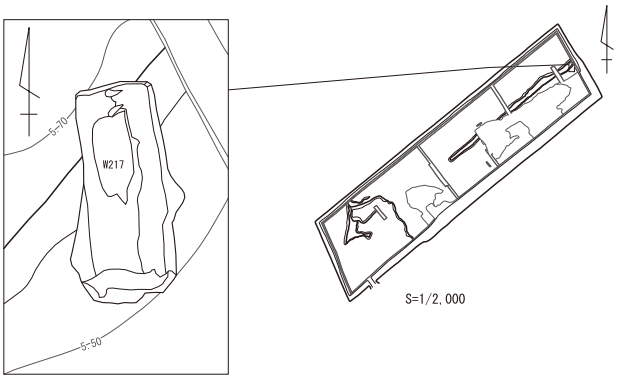


第５ベルト

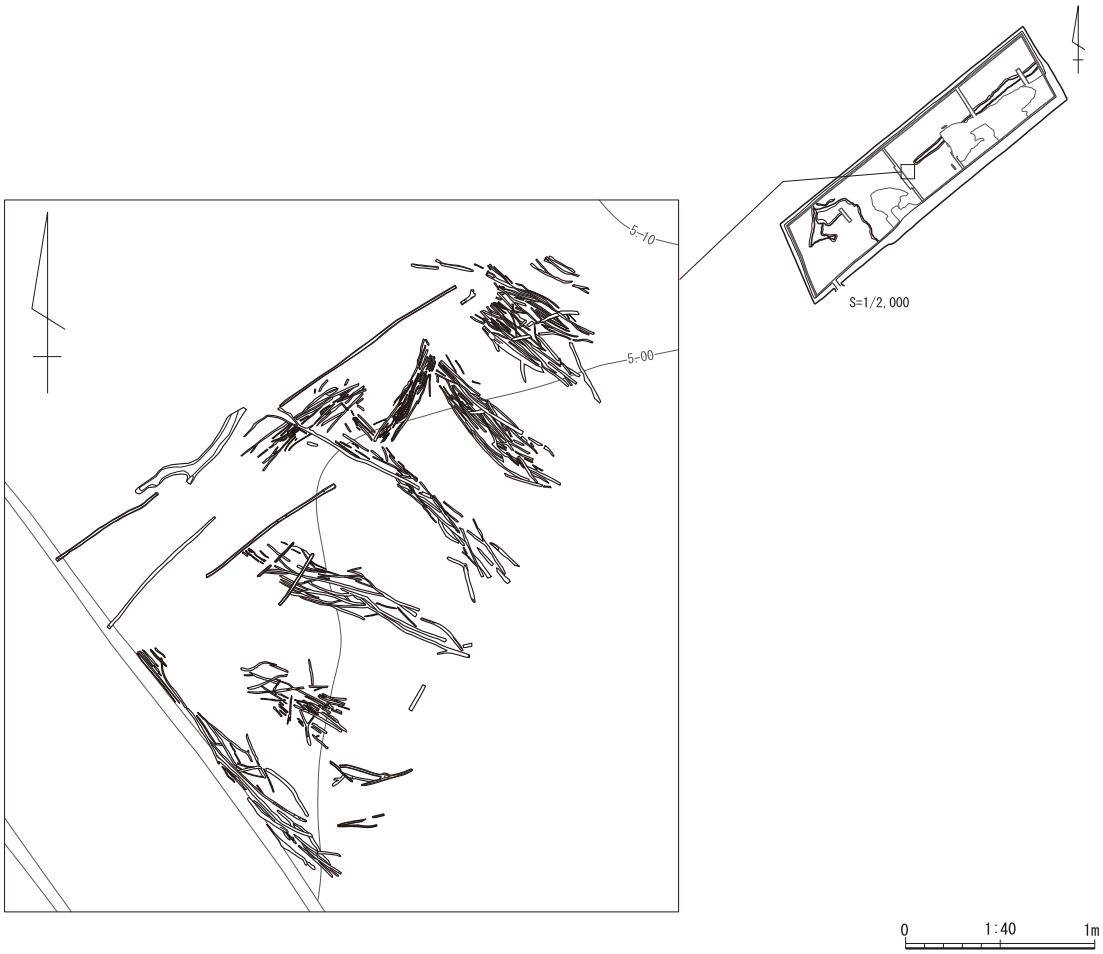
土層断面図
0　1:100　2m

8～10層　黒褐　10YR3/2　泥炭層　植物遺体を極めて大量に含む　層全体が茶色がかって見える　しまりなし
11層　灰色　5Y4/1　粘土層　粘性やや強し　植物遺体含む(やや多く)
12-1-1層　褐灰　10YR4/1　シルト質粘土　粘性あり　植物遺体やや多し　竹？の根が密集する箇所あり
12-1-2層　黒褐　10YR3/1　粘土層　水田耕作土か？　13層の巻き上げ土を下部に含む
13層　灰　7.5Y4/1　粘土層　粘性強し
畦畔　黒色　10YR2/1　しまりなし　φ1cm以下の炭化物を多く含む　植物遺体を少量含む

第 20 図　２区遺構詳細図２



第 21 図　２区遺物出土状況図１



第 22 図　２区遺物出土状況図２

木製品集中地点２

前記の窪地状部分周辺から相当に多くの木製品が検出されたので、これを木製品集中地点２として扱う。分布はA1 ーー 9 グリッド付近である。点上げした遺物は第 20 図に載せ、これと重なるが、最も遺物が密集している箇所は、出土状況詳細図として第23図に掲げた。個々の遺物についての詳細は次の「遺物」の項で述べるので、ここではこの遺物集中地点の概略について述べたい。

遺物全体の分布は先述の窪地の中で大枠としては長楕円状に広がる。出土状況詳細図では中央付近に細長い木枝を加工した木製品が集中した箇所があり、その周りを取り巻くように板材や田下駄等の遺物

第 23 図　２区遺物出土状況図３

が分布する。木枝加工の木製品の向きは、非常に大きな括りでは北方向を志向している。これらの遺物は恐らく洪水等によりこの場所に移動し、埋没したと思われ、現状での遺物分布から原位置での情報を推測するのは困難を伴うが、木枝状の木製品がある程度共通した方向でかたまって出土しているのは、意味のある分布状況と考えられる。この木枝状木製品は畦畔の補強材であると考えられる。おそらくは杭であろう。

なお、Am －－８付近にシガラ状の木枝の集中箇所があり詳細図（第 22 図）を掲載した。９束程度のまとまりが認められ、畦畔の方向と垂直方向の束が大半を占める。この部分は低平な畦畔が続いている箇所であり、このシガラ状の木枝は畦畔の補強材の可能性が考えられる。このシガラ状の木枝は出土状態を図化し、写真撮影を行ったが、個々の木枝の取り上げは行っていない。

また、２区北東の Ap －－４グリッド畦畔下で、第 13 層にめり込む形で、大型の加工痕のある木幹が出土した（第 21 図 図版 31）。遺物については、第４節で述べたい。

第３節　令和元年度の調査（１－３区、３区、４区の調査）

１　遺構の検出状況

令和元（平成 31）年度の調査は、第１章第１節で述べた経過に従い、平成 29 年度の調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

１－３区は平成 30 年度の１－２区の南東側に接続し、東西方向（南西～東北）に走行する大畦畔を検出することが主な目的であるため、東西方向に長い調査区になった。また、想定どおり１－２区の畦畔２に接続すると思われる大畦畔も検出できた（畦畔４）。ただし、当初想定していた東西（南西～北東）方向の畦畔は検出できなかった（結局この畦畔は、さらに南側の４区で検出された）。また、Am―６グリッド付近に存在したと想定され、断面が調査区北（西）壁に現れる畦畔（後述する小畦畔で、畦畔５）は泥炭層の重機掘削中、存在に気付かず、誤って削平してしまった。

３区は、１－３区で検出するはずであった東西方向（北東～南西）の大畦畔の続きを検出する目的で設定した調査区である。後述するとおり、この畦畔は４区で検出されたが、３区ではその延長上から大畦畔が検出された（畦畔６）。また、調査区西側部から木製品集中地点（木製品集中地点３）が検出された。

４区は、調査前は他地区と同様の状況と想定していたが、全域で大規模な削平を行った後に、大量の建築廃材（現在のものに近い極めて新しいもの）等が埋められており、遺構の残りは極めて悪かった（第 13 層以下まで削平が行われている箇所も多かった）。しかし残存部で、断続的に東西方向（南西～北東）の大畦畔を検出することができた。ただし、遺構面の攪乱がひどく、南北（北西～南東）方向の大畦畔（この区を設定した当初狙っていた畦畔）を検出することはできなかった。

（１）１－３区

畦畔４

調査区西側で北（西）壁から南（東）壁にかけて検出された大畦畔である。１－２区で検出された畦畔３の延長上にあり、かつ畦畔４の北端部と畦畔３の南端部が極めて近い位置関係にあるので、連続する畦畔であることは間違いない。

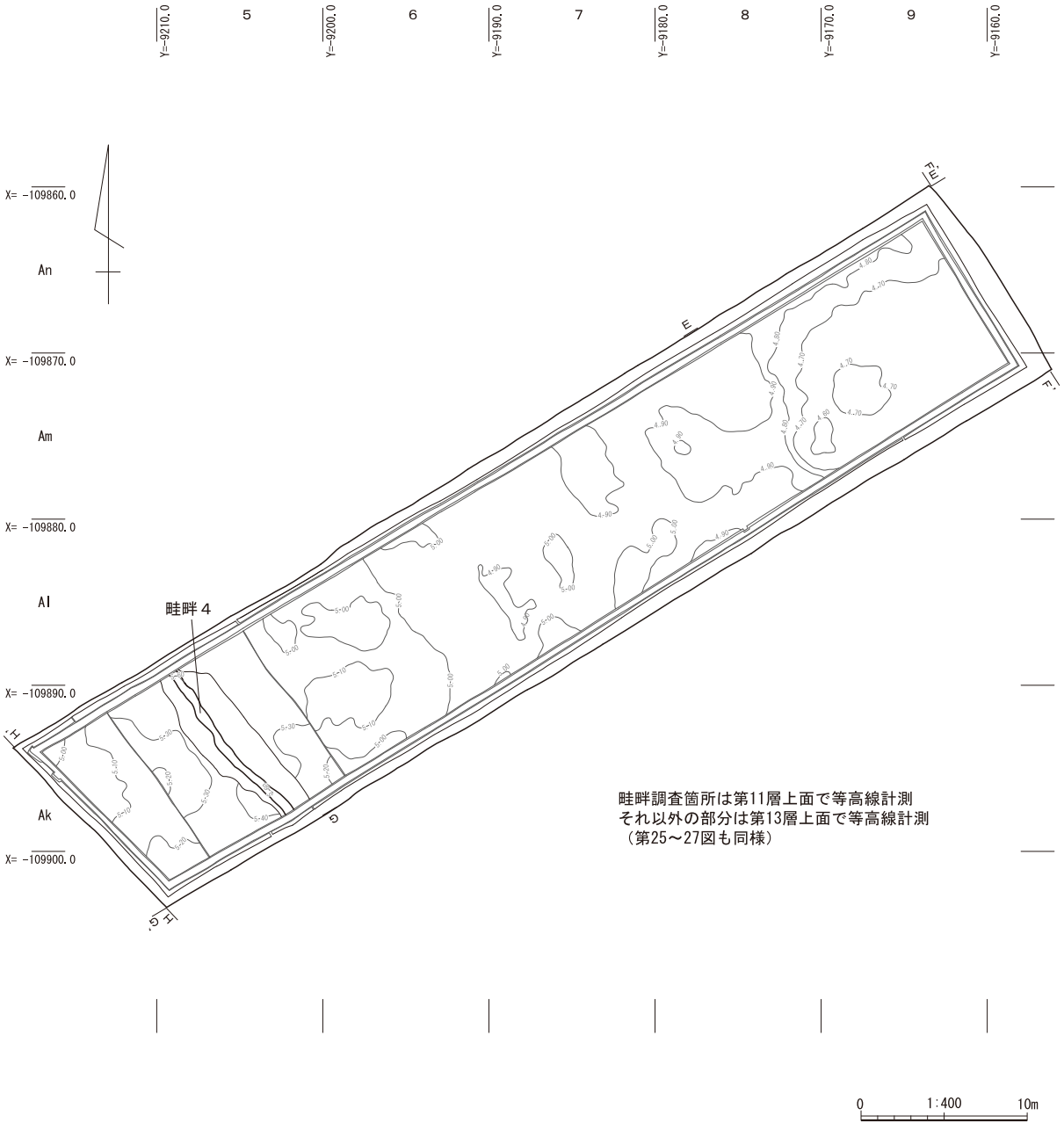
この畦畔４は全体的に高さが高く、泥炭層中での遺構検出作業においても、畦畔３と同様に容易に頭を出すこと可能であった。第 11 層に被覆されており、11 層が疑似畦畔を構成している。11 層直上の泥炭層である第 10 層中には、伊豆神津島天上山の火山灰 Iz － Kt が、畦畔付近と畦畔上に断続的ながら明確に認められる。

第 13 層上面からの高さは調査区北西壁、南西壁の断面部分で約 40 ～ 50 ㎝であり、幅は底辺部分（13 層直上部分）で約 110 ～ 140 ㎝である。第 12 －２層は上下に分層しなかった（できなかった）。

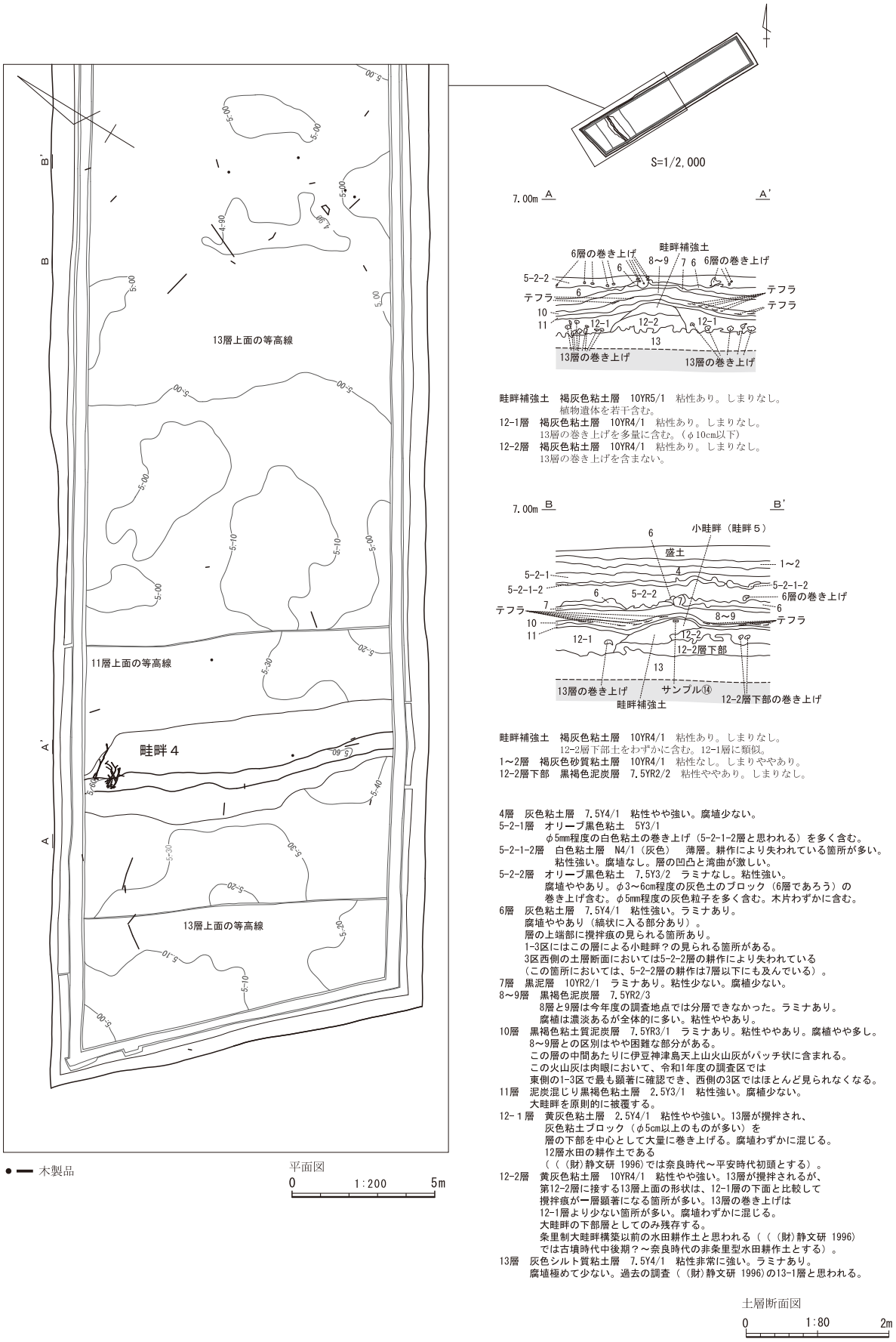
畦畔５

調査区の西側、北西壁に現れた畦畔の断面を畦畔５とした。前述のとおり、この畦畔の存在は重機による表土等除去作業中には気づかれず、調査区内に存在していたであろう畦畔本体は重機により削ってしまった。したがって、現状では断面のみからの記述になる。

畦畔は第 12 層とその上の畦畔補強土とからなる。ただし第 25 図では、西側に比べて東側は第 12 －２層が畦畔中に食い込むように表現されており、やや不審である。段差ないし断層上に設定された畦畔の可能性がある。それでも東側の畦畔裾部の土層の状況は不自然ではある。この畦畔の上には 11 層と泥炭層である 10 層がのっており、疑似畦畔を構成している。10 層中に断続的にであるが、伊豆神津島天上山の火山灰 Iz － Kt が明確に認められる。


Y=-9210.0
5
Y=-9200.0
6
Y=-9190.0
7
Y=-9180.0
8
Y=-9170.0
9
Y=-9160.0
X= -109860.0
An
X= -109870.0
Am
X= -109880.0
Al
X= -109890.0
Ak
X= -109900.0
畦畔４
畦畔調査箇所は第11層上面で等高線計測
それ以外の部分は第13層上面で等高線計測
（第25～27図も同様）
0
1:400
10m

第 24 図　１－３区全体図

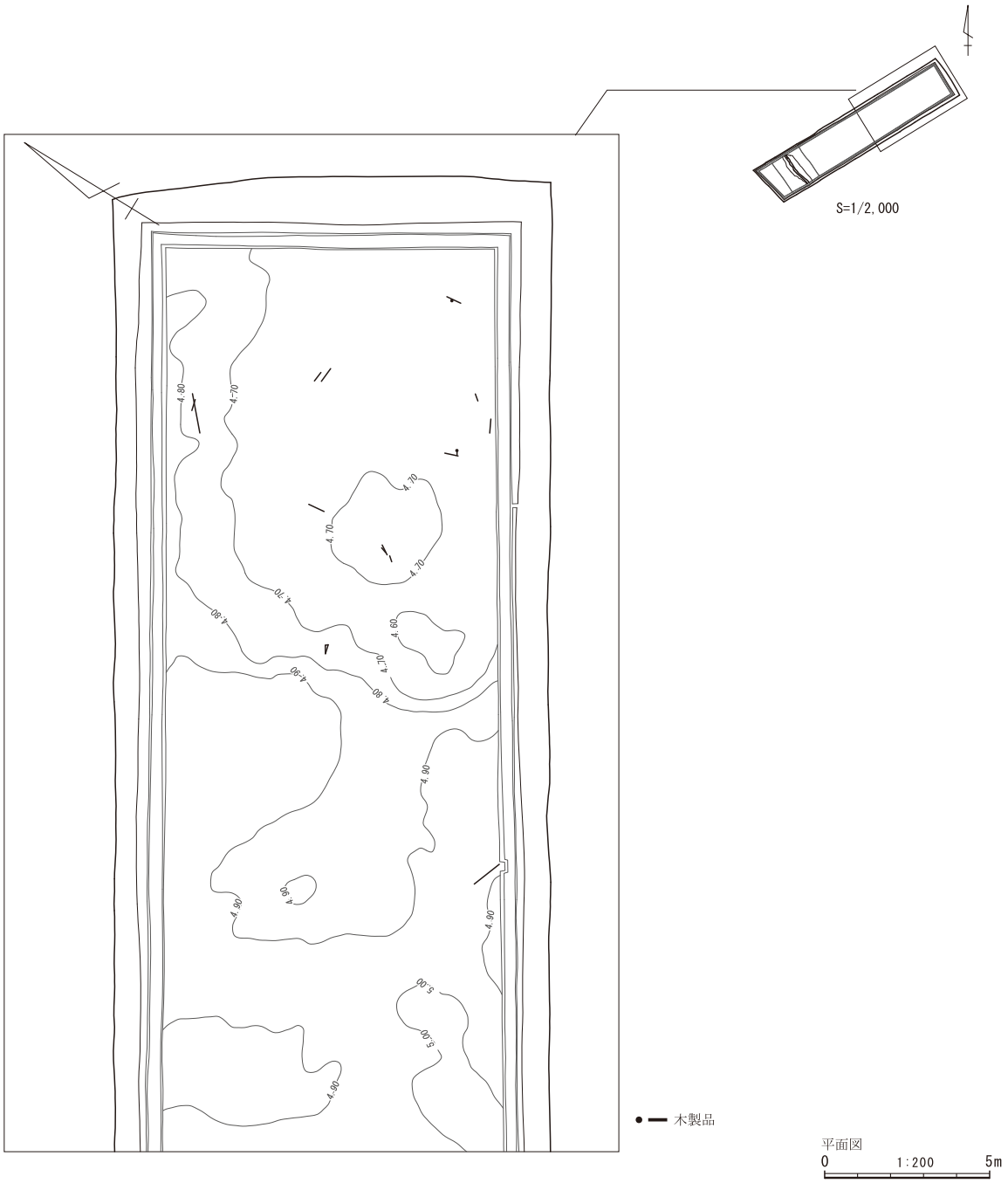


畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR5/1　粘性あり。しまりなし。
植物遺体を若干含む。
12-1層　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり。しまりなし。
13層の巻き上げを多量に含む。（φ10cm以下）
12-2層　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり。しまりなし。
13層の巻き上げを含まない。

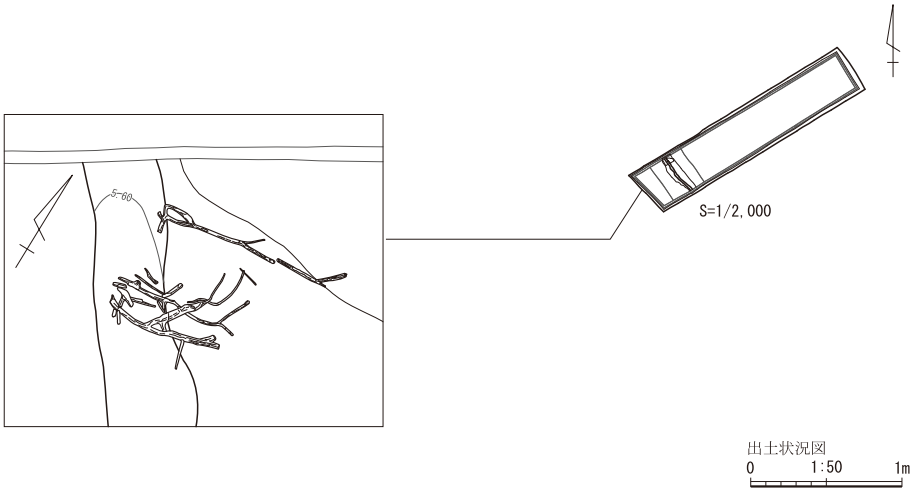
畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR5/1　粘性あり。しまりなし。
12-2層下部土をわずかに含む。12-1層に類似。
1～2層　褐灰色砂質粘土層　10YR4/1　粘性なし。しまりややあり。
12-2層下部　黒褐色泥炭層　7.5YR2/2　粘性ややあり。しまりなし。

4層　灰色粘土層　7.5Y4/1　粘性やや強い。腐埴少ない。
5-2-1層　オリーブ黒色粘土　5Y3/1
φ5mm程度の白色粘土の巻き上げ（5-2-1-2層と思われる）を多く含む。
5-2-1-2層　白色粘土層　N4/1（灰色）　薄層。耕作により失われている箇所が多い。
粘性強い。腐埴なし。層の凹凸と湾曲が激しい。
5-2-2層　オリーブ黒色粘土　7.5Y3/2　ラミナなし。粘性強い。
腐埴ややあり。φ3～6cm程度の灰色土のブロック（6層であろう）の
巻き上げ含む。φ5mm程度の灰色粒子を多く含む。木片わずかに含む。
6層　灰色粘土層　7.5Y4/1　粘性強い。ラミナあり。
腐埴ややあり（縞状に入る部分あり）。
層の上端部に攪拌痕の見られる箇所あり。
1-3区にはこの層による小畦畔？の見られる箇所がある。
3区西側の土層断面においては5-2-2層の耕作により失われている
（この箇所においては、5-2-2層の耕作は7層以下にも及んでいる）。
7層　黒泥層　10YR2/1　ラミナあり。粘性少ない。腐植少ない。
8～9層　黒褐色泥炭層　7.5YR2/3
8層と9層は今年度の調査地点では分層できなかった。ラミナあり。
腐植は濃淡あるが全体的に多い。粘性ややあり。
10層　黒褐色粘土質泥炭層　7.5YR3/1　ラミナあり。粘性ややあり。腐植やや多し。
8～9層との区別はやや困難な部分がある。
この層の中間あたりに伊豆神津島天上山火山灰がパッチ状に含まれる。
この火山灰は肉眼において、令和1年度の調査区では
東側の1-3区で最も顕著に確認でき、西側の3区ではほとんど見られなくなる。
11層　泥炭混じり黒褐色粘土層　2.5Y3/1　粘性強い。腐植少ない。
大畦畔を原則的に被覆する。
12-１層　黄灰色粘土層　2.5Y4/1　粘性やや強い。13層が攪拌され、
灰色粘土ブロック（φ5cm以上のものが多い）を
層の下部を中心として大量に巻き上げる。腐埴わずかに混じる。
12層水田の耕作土である
（（(財)静文研 1996)では奈良時代～平安時代初頭とする）。
12-2層　黄灰色粘土層　10YR4/1　粘性やや強い。13層が攪拌されるが、
第12-2層に接する13層上面の形状は、12-1層の下面と比較して
攪拌痕が一層顕著になる箇所が多い。13層の巻き上げは
12-1層より少ない箇所が多い。腐埴わずかに混じる。
大畦畔の下部層としてのみ残存する。
条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる（（(財)静文研 1996)
では古墳時代中後期？～奈良時代の非条里型水田耕作土とする）。
13層　灰色シルト質粘土層　7.5Y4/1　粘性非常に強い。ラミナあり。
腐埴極めて少ない。過去の調査（(財)静文研 1996)の13-1層と思われる。

第 25 図　１－３区遺構詳細図１



第 26 図　１－３区遺構詳細図２



第 27 図　１－３区遺物出土状況図

（２）３区

畦畔６

北東壁から南西壁にかけて検出された大畦畔である。４区で検出された畦畔７の延長上にあり、間に未調査部分があるが、連続する畦畔である可能性は高い。

この畦畔６は全体的に高さが高く、泥炭層中での遺構検出作業においても、容易に頭を出すことが可能であった。

畦畔の構造は他地区の大畦畔と同様であり、第 12 －２層を畦畔土にして上に畦畔補強土をのせる形である。層厚は薄いが第 11 層が調査区全体で見られ、この畦畔６も 11 層で被覆されており、調査区端部の南西壁、東北壁の土層断面図においては、第 10、11 層が疑似畦畔を構成している。北東壁の断面では、第 10 層は畦畔直上部分では存在しない（第 9 図土層図③）。これに対して南西壁では 10 層は畦畔全体を被覆し、第 11 層とともに疑似畦畔を構成している。

畦畔の幅は 1.2 m～ 2.2 m（第 11 層上面での幅）である。底辺部分（13 層直上部分）で 1.5 ～ 3.8 mである。畦畔の上部や裾部に補強材とみられる木枝が見られる箇所もあり、やや集中する部分もあった。これらの木枝は、加工痕（裁断痕は除く）が見られるもの以外は記録のみ作成し、遺物としての取り上げを行わなかった。

木製品集中地点３

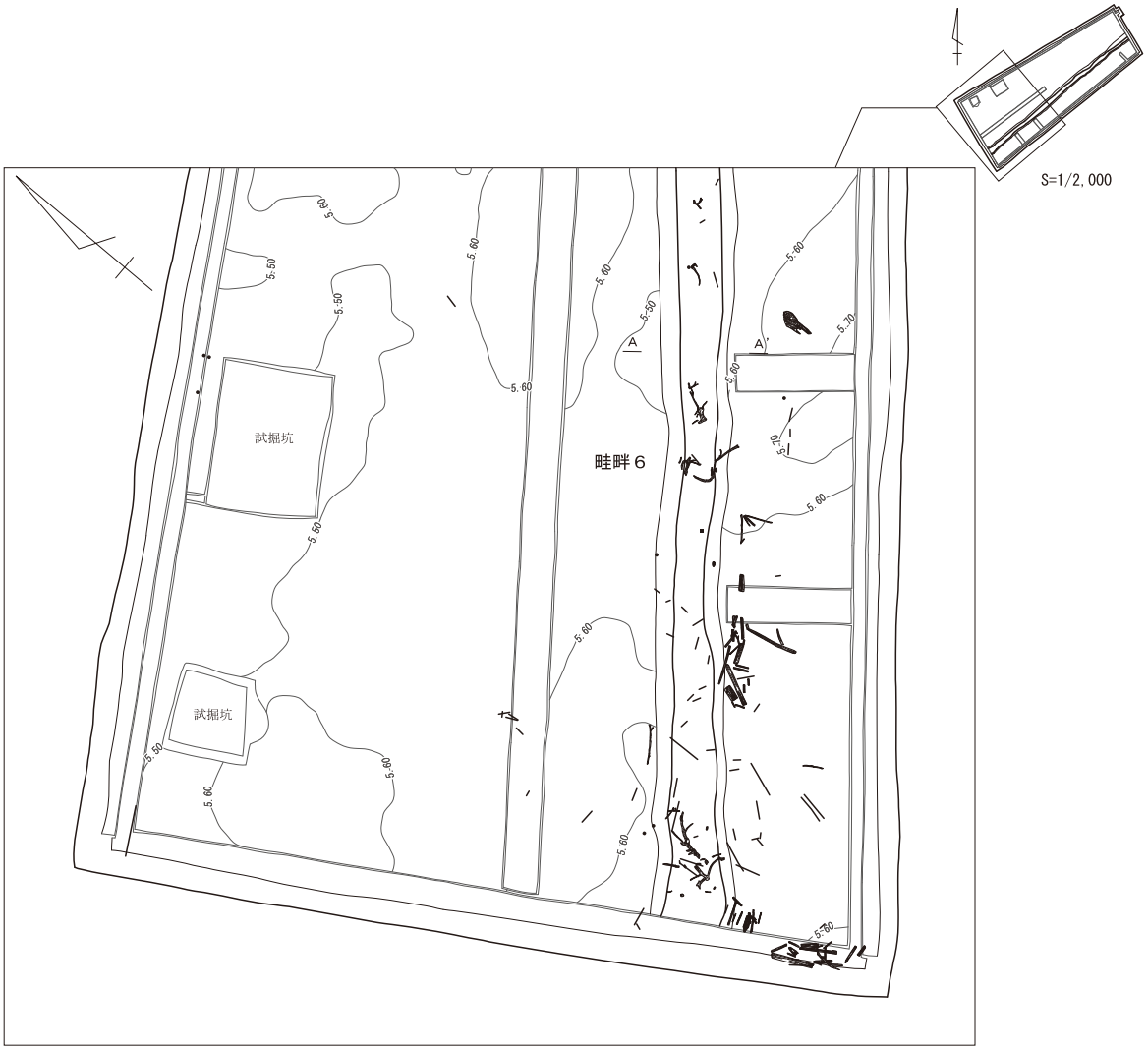
３区の調査区西南部を中心に（特に南西壁南側の調査区端部が中心）、多くの木製品が検出されたので、これを木製品集中地点３として扱う。分布は Ac －－１～－２グリッド付近である。点上げした遺物は第 29 図に載せ、これと重なるが、最も遺物が密集している箇所は、出土状況詳細図として第 32 図に掲げた。個々の遺物についての詳細は次の「遺物」の項で述べるので、ここではこの遺物集中地点の概略について述べたい。

この集中地点は、全体としては遺物の分布は疎である。ただし４個所以上の密な部分がある。密な部分も含めて、遺物の分布状況と畦畔が直接関係するとは言い難い。補強材や構築材として確実にいえるものはない。おそらくは、条里制水田耕作において、何らかの事情で水田耕作が放棄される際、あるいは放棄後に、田面中に廃棄された遺物である可能性が高い。

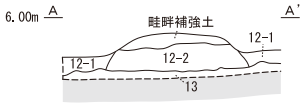
また、遺物も農耕関連のものはほとんどみられず、細い柱材と思われる木製品が目立つ、建築材（他のものも含む）を廃棄したのであろうか。

-3
Y=-9280.0
-2
Y=-9270.0
-1
Y=-9260.0
0
Y=-9250.0
1
Y=-9240.0
2
Y=-9230.0
X= -109930.0
Ag
X= -109940.0
Af
X= -109950.0
Ae
X= -109960.0
Ad
X= -109970.0
Ac
X= -109980.0
試掘坑
畦畔６
等高線は11層上面で計測
（第29～33図も同様）
0
1:400
10m

第 28 図　３区全体図



第１ベルト

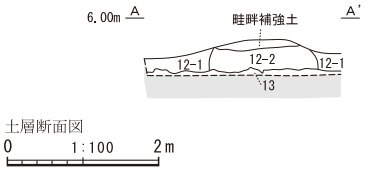


土層断面図
0　1:100　2m

畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　12-2層下部土をわずかに含む　12-1層に類似
12-1層　黄灰色粘土層　2.5Y4/1　粘性やや強い　13層が攪拌され、灰色粘土ブロック（φ5cm以上のものが多い）を層の下部を中心として大量に巻き上げる　腐埴わずかに混じる　12層水田の耕作土である
（（(財)静文研 1996)では奈良時代～平安時代初頭とする）
12-2層　黄灰色粘土層　10YR4/1　粘性やや強い　13層が攪拌されるが、第12-2層に接する13層上面の形状は、12-1層の下面と比較して攪拌痕が一層顕著になる箇所が多い　13層の巻き上げは12-1層より少ない箇所が多い
腐埴わずかに混じる　大畦畔の下部層としてのみ残存する　条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる
（（(財)静文研 1996)では古墳時代中後期？～奈良時代の非条里型水田耕作土とする）
13層　灰色シルト質粘土層　7.5Y4/1　粘性非常に強い　ラミナあり　腐埴極めて少ない
過去の調査（（(財)静文研 1996)の13-1層と思われる

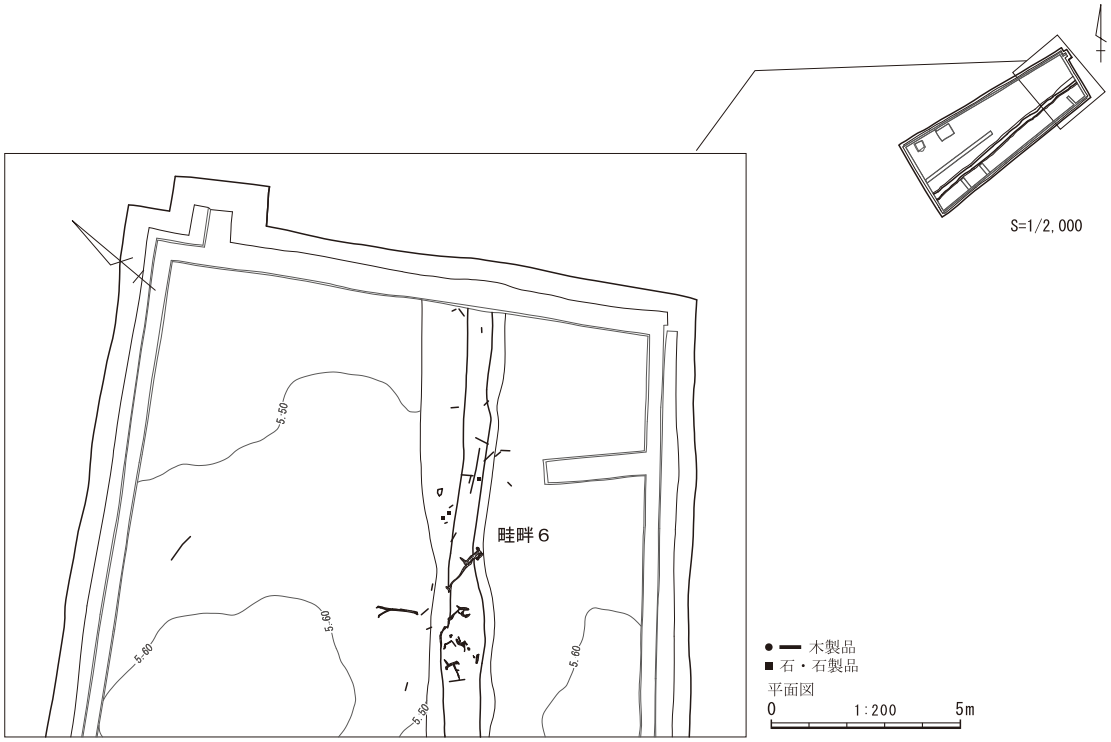
第 29 図　３区遺構詳細図１

第２ベルト

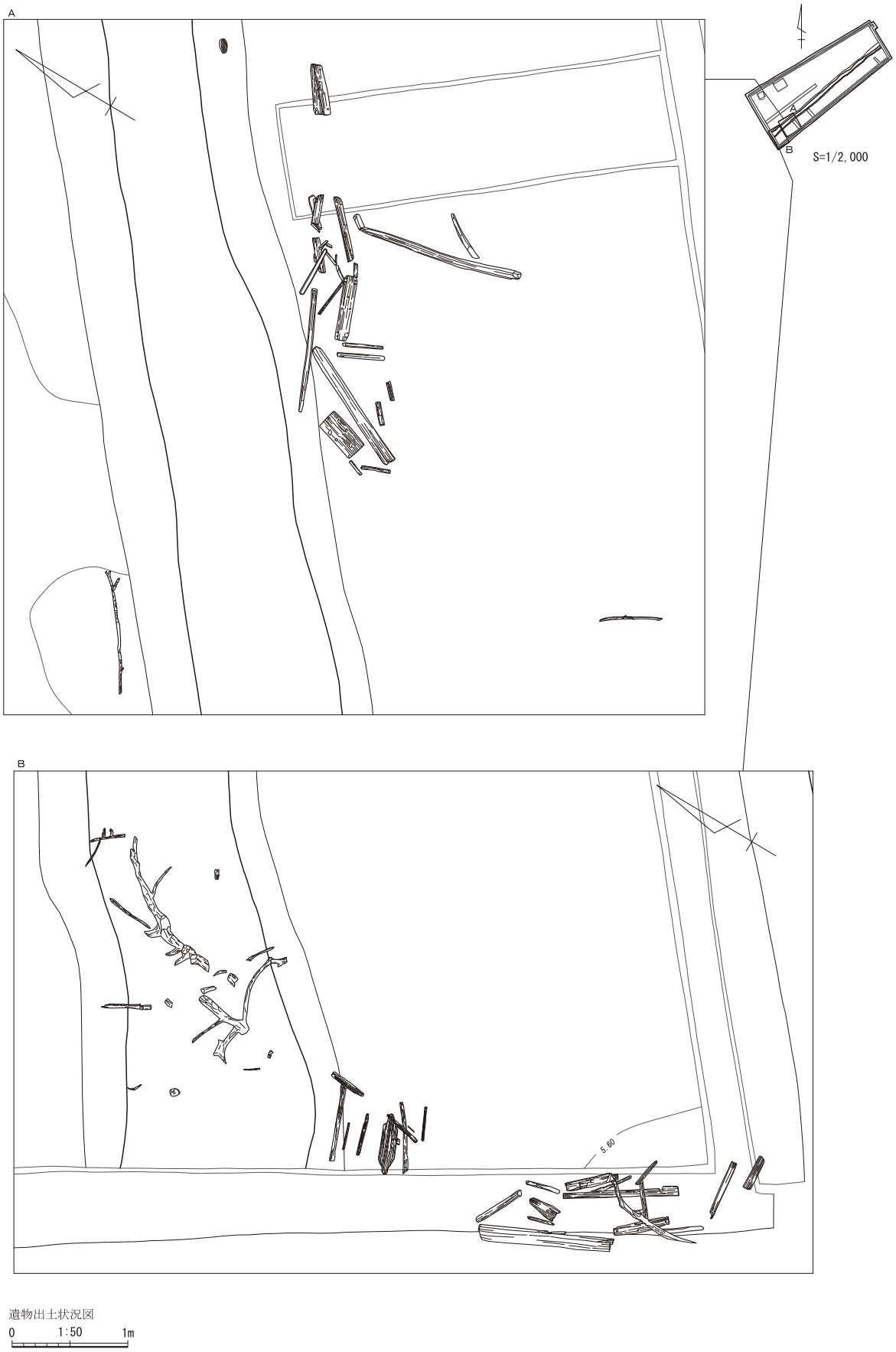


畦畔補強土　褐灰色粘土層　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　12-2層下部土をわずかに含む　12-1層に類似
12-１層　黄灰色粘土層　2.5Y4/1　粘性やや強い　13層が攪拌され、灰色粘土ブロック（φ5cm以上のものが多い）を層の下部を中心として大量に巻き上げる　腐植わずかに混じる　12層水田の耕作土である
（（(財)静文研 1996)では奈良時代～平安時代初頭とする）
12-2層　黄灰色粘土層　10YR4/1　粘性やや強い　13層が攪拌されるが、第12-2層に接する13層上面の形状は、12-1層の下面と比較して攪拌痕が一層顕著になる箇所が多い　13層の巻き上げは12-1層より少ない箇所が多い　腐植わずかに混じる　大畦畔の下部層としてのみ残存する　条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる
（（(財)静文研 1996)では古墳時代中後期？～奈良時代の非条里型水田耕作土とする）
13層　灰色シルト質粘土層　7.5Y4/1　粘性非常に強い　ラミナあり　腐植極めて少ない
過去の調査（（(財)静文研 1996)の13-1層と思われる

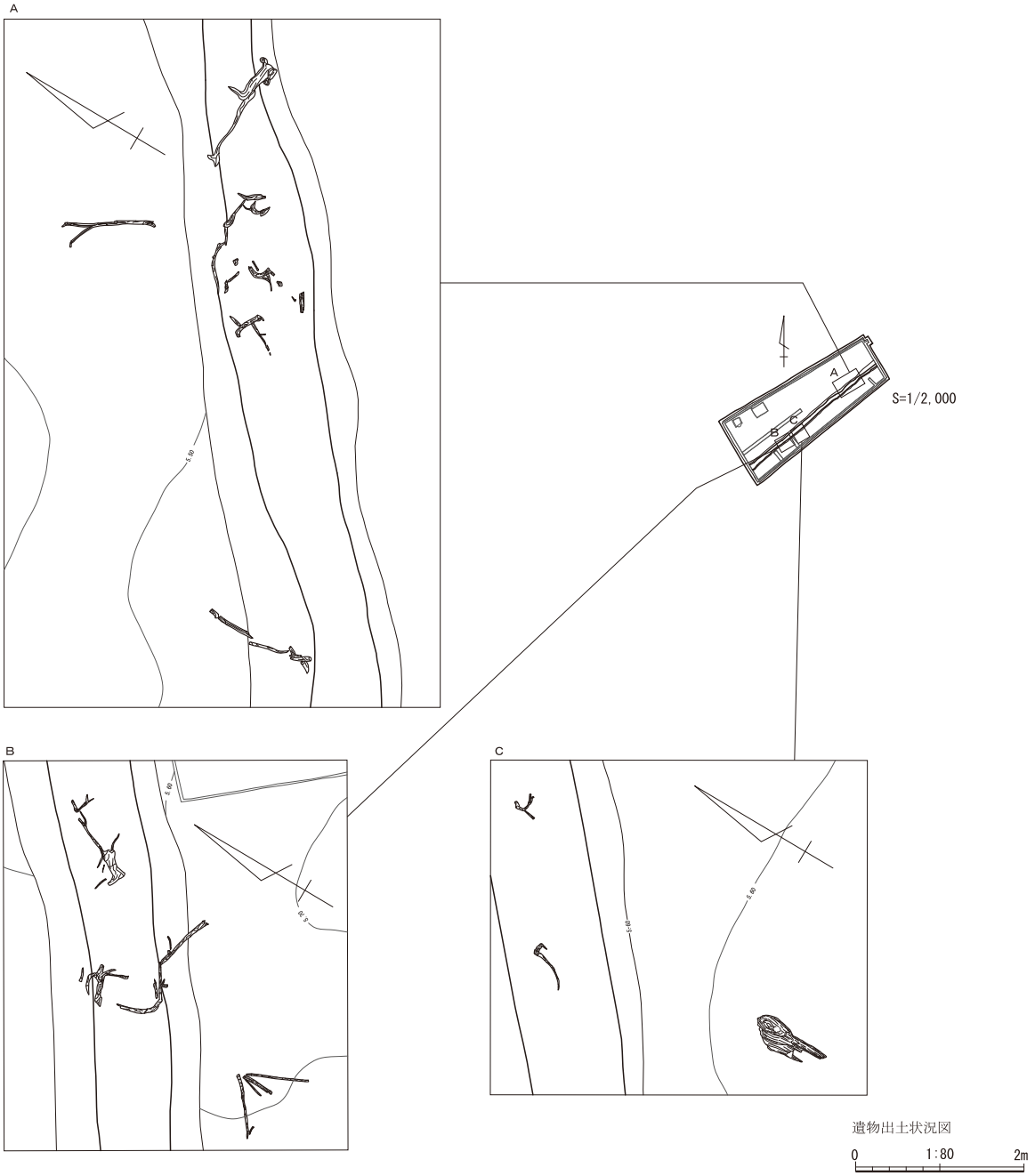
第 30 図　３区遺構詳細図２



第 31 図　３区遺構詳細図３



第 32 図　３区遺物出土状況図１



第 33 図　３区遺物出土状況図２

（３）４区

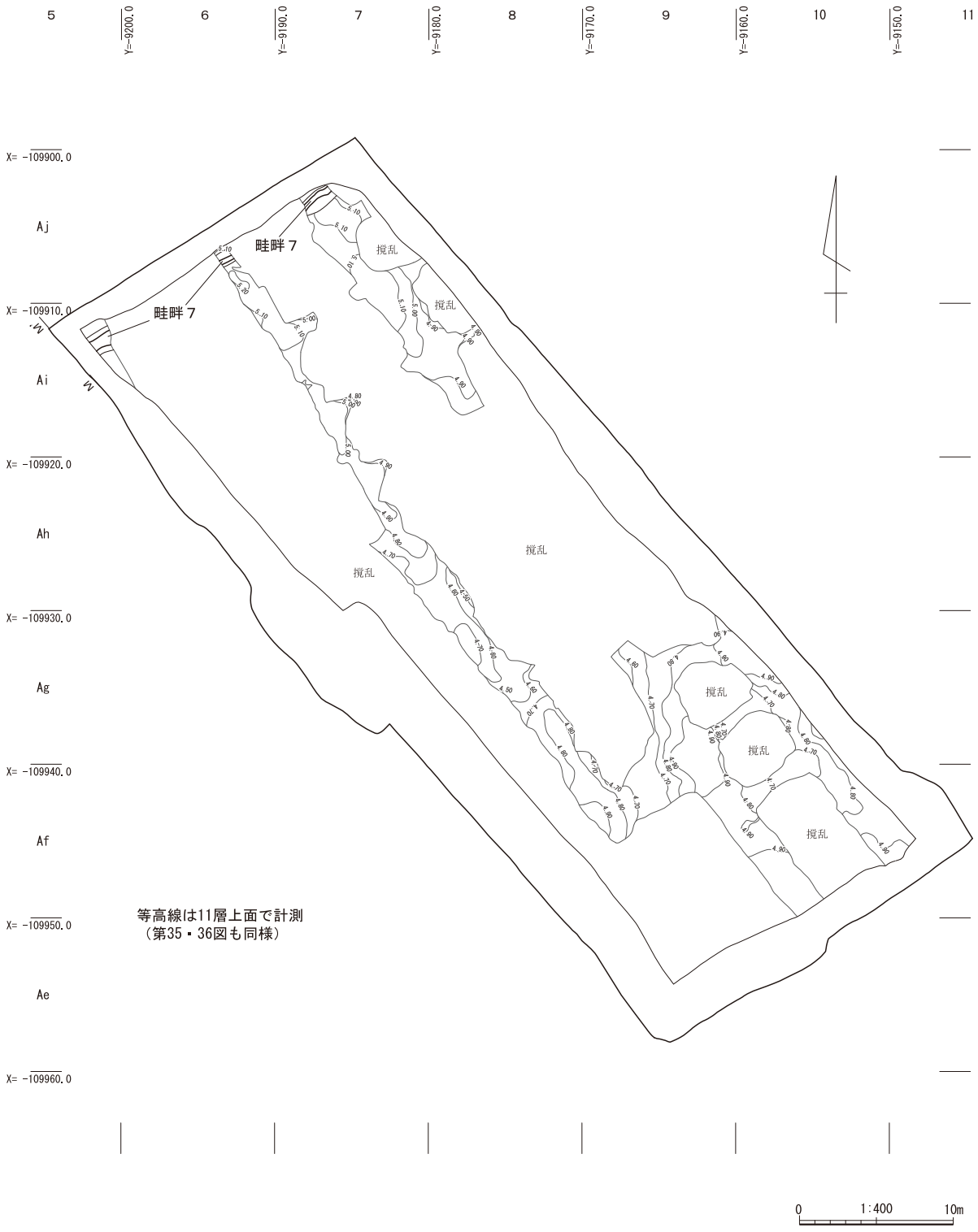
畦畔７

調査区北側（北西側）に、東西方向（東北～南西方向）に走る大畦畔である。前に述べたように４区は攪乱がひどく、この大畦畔も連続的に検出できたわけではない。第 13 層上面より深い深度まで攪乱が及んでいる箇所は、遺構そのものが残存しないわけであり、この畦畔６はいわば「島」状に残った残存部に断続的に検出された畦畔である。また、調査区北東側の畦畔は、残存していても畦畔の上部～中部が削られて基部に近い部分が僅かに残存しているにすぎない（その状態で図化した）。

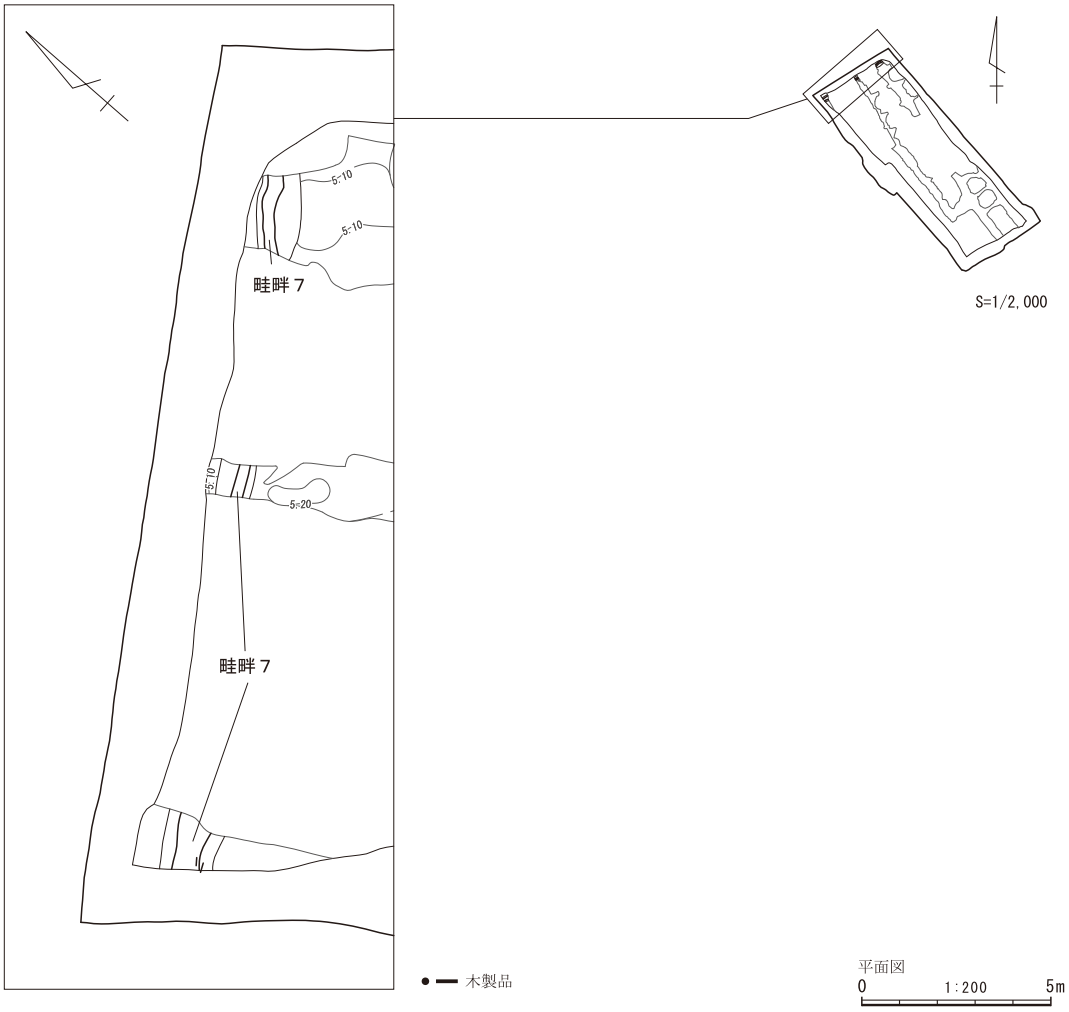
調査区南西壁近くは第１～２層以下が残存し、この部分で畦畔断面の記載を行う（第９図）。畦畔は他地区と同様に第 12 － ２層により構築され、その上部に畦畔補強土が乗ってい

る。第 11 層は畦畔直上部では被覆せず、泥炭層の最下部の第 10 層により疑似畦畔が生じている。

この大畦畔が検出されたことにより、１－３区よりさらに南側（市道下を含む）に大畦畔が通っていたことが証明されたわけである。



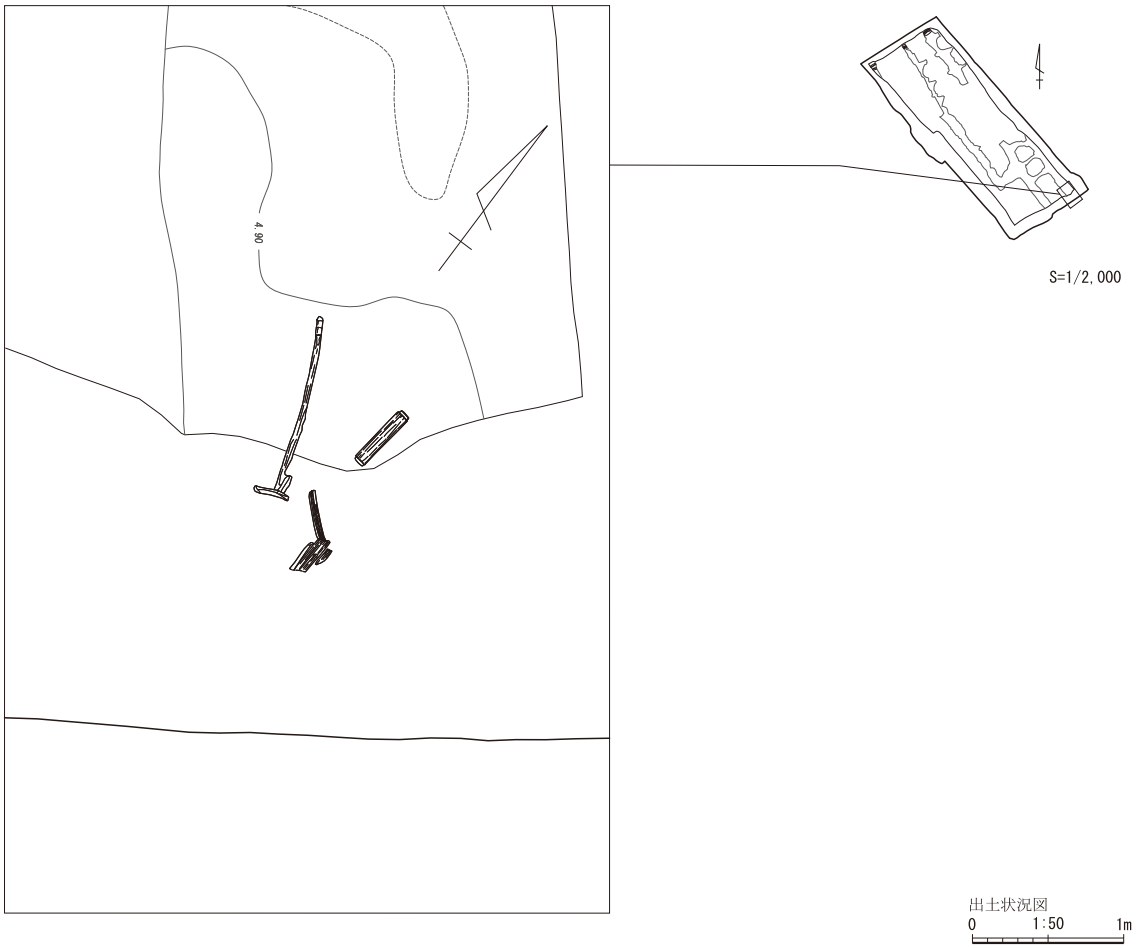
第 34 図　４区全体図



第 35 図　４区遺構詳細図

第５表　畦畔計測表

遺構名	調査区	長 (m)	幅 (m)	高さ (m)	備考
畦畔１	1-1	45	0.8 ～ 3.2	0.25 ～ 0.44	
畦畔２	1-2	74	1.2 ～ 1.6	0.28 ～ 0.42	
畦畔３	2	42	1.4 ～ 2.4	0.29 ～ 0.38	
畦畔４	1-3	11	1.1 ～ 1.4	0.4 ～ 0.5	
畦畔５	1-3	－	－	－	調査区壁でのみ確認
畦畔６	3	48	1.2 ～ 2.2	4.4 ～ 0.5	
畦畔７	4	18	0.3 ～ 0.6	－	



第 36 図　４区遺物出土状況図

第４節　出土遺物

上土遺跡の平成29年度から令和元年までの調査では、奈良時代から平安時代の年代に属する土器１点、石製品１点、木製品577点、金属製品が１点出土した。大半が水田の覆土より出土した。おそらく水田の畦畔の構築材として、あるいは農耕土木具として使用された製品が大半を占める。生活用具として使われた製品はごく僅かである。今回の調査では、検出された遺構が水田畦畔であったことから、生産域としての性格を持つ。そのため、出土する遺物も水田に関わるものが中心となる。調査区は複数箇所に分かれているが、年代は奈良・平安時代に限られていることから、器種分類ごとに記述する。

第37図１（図版15）は須恵器の坏身口縁部片である。３区の12a層の畦畔６裾より出土した。復原口径は13.0㎝、残存高は3.2㎝である。外面は黒く、非常に薄いつくりで、やや風化して脆い状態となっている。今回の調査で出土した土器は、この１片のみである。

第37図２（図版15）は１－１区の畦畔盛土内より出土した。長方形の柱状礫で表・裏面は平坦となっている。表面の一部と裏面は全体に磨り面がある。側面は磨り面がない。水田で耕作作業時に使われた砥石で、畦に据え置かれて、鎌等の研ぎ直しに使われていた、所謂、置き砥石と推定される。石材は砂岩質である。

第37図３（図版15）は柄付きの鉄製鎌である。２区16層下層より鉄製の鎌刃に木製の柄が付いた状態で出土した（図版13－４）。西端部トレンチ内で見つかったため、畦畔内なのか包含層からなのかは特定できなかった。

鎌刃は緩やかな曲刃で、先端部分が欠損し、中央付近で折れている。長さは21.9㎝、幅は2.95㎝で、背面は厚みが0.25㎝である。基部端は柄の装着時に外れないよう、手前方向へ直角に、折り曲げられている。基部端は欠損している。木製の鎌柄に重なっていた部分には、表面・裏面ともに木質部分が残っている。特に鎌刃の裏面に残る木質は、はっきりと別部材であることがわかる（図版15最下段）。木質は2.45×2.6㎝の大きさであった。保存処理前の観察状況では板目の薄板が確認できた。別部材は鎌柄側でも確認できている。鎌刃が装着された隙間に、明らかに鎌柄の木目とは異なる板目の薄板が見えていた（図版15最下段）。鎌柄に鉄製の鎌刃を装着したときに、刃と柄の隙間の両側に、咬ませて固定させていた木製の「楔」と考えられる（註１）。

鎌柄は中央が破損しているものの、全体の形状が復元できる。全長は33.4㎝、最大幅は4.4㎝、厚さは1.8㎝を測る。頭部は小振りの鶏頭状に作られていて、鎌刃の直上にあたる右側は浅く窪んでいる。鎌刃の装着部分は上端より3.7㎝のところから、長さ3.6㎝×幅0.5㎝の隙間がある。基部の断面は鎌刃に近いほうは、厚みのある長方形で、握部に近いほうは楕円形である。下端部は握部の突起が作り出されている。下端部は欠損している。裏面には整形時の手斧痕が見える部分もある。この鎌柄の形状と鎌刃の向きから、右利き用の鎌であろう。

鎌柄の樹種はカキノキ属の分割材から加工されている。カキノキ属で作られた鎌柄は、樹種同定では適材とされているが、県内で鎌柄に使われた初例とのことである（第６章第１節）。柄に装着された鎌刃は鈍角で、着柄角度は113度である。

第38図４以降は今回の調査で出土した木製品である。器種ごとに記述していくこととする。第38図４～８（図版16）は発火具の燃えさし（付け木）又は火切り杵と考えられる。樹種はスギ、ヒノキ、

サワラ等の針葉樹が使われている。

第 38 図４（図版 16）はヒノキ材で全て割面の棒状である。長さは 53.5 ㎝、幅は 1.9 ㎝、厚さは 1.1 ㎝である。３区の畦畔上部より出土した。下端部の先端は炭化している。切れ端材で付け木として使われたものであろう。

第 38 図５（図版 16）は２区の疑似畦畔の基盤より出土した火切り杵である。スギの分割材から作られている。一部、折れているが、ほぼ完形品で、全長は 37.9 ㎝、直径は 1.2 ～ 1.45 ㎝である。表面は全体に加工され、断面は円形の棒状である。第 35 図 10 の火切り臼と共に出土した（図版 12 － 7）。

第 38 図６（図版 16）は１－２区の 13 ｂ層より出土した。ヒノキ材で、上部は切断された痕がある。全て割面で、下端部は炭化している。全長は 15.6 ㎝、幅は 1.6 ㎝、厚さは 1.05 ㎝の細い棒状である。

第 38 図７（図版 16）は１－１区の 14 層より出土した火切り杵の破片で、上半部は欠損している。全体に風化のため加工の痕は見えない。棒状で断面形は丸く、下端部面が炭化している。樹種はスギである。残存長は 15.6 ㎝、直径は 1.35 ～ 1.55 ㎝である。

第 38 図８（図版 16）は３区の畦畔６内より出土した。樹種はサワラで、上部は欠損し、各面とも割面である。表に一部、工具の痕がある。残存長は 14.9 ㎝、幅は 4.2 ㎝、厚さは 1.95 ㎝を測る。下方部が炭化していることから、付け木として使用されたものであろう。

第 38 図９（図版 16）は１－２区の畦畔２裾より出土した。薄板状のスギ板目材で、下端部が火を受けて焦げている。残存長は 27.5 ㎝、幅は 3.35 ㎝、厚さは 0.65 ㎝と薄い。４面とも割面で、上半部は欠損している。これも付け木として使われたものであろう。

第 38 図 10（図版 16）は２区の疑似畦畔の基盤より、火切り杵（第 38 図５）と共に出土した火切り臼である（図版 12 － 7）。スギの柾目材で、残存長は 27.2 ㎝、幅は 2.0 ㎝、厚さは 1.2 ㎝を測る。上端部は丸く整形され、下端部は欠損している。全面、丁寧に整形加工されている。臼の部分は７箇所が確認できる。擦り面は 1.4 × 1.4 ㎝程で、上部３箇所の臼部分は左側に抜け落ちている。かなり使い込まれた状況であることが観察できる。

第 38 図 11・12（図版 16）、第 39 図 13・14（図版 16）は農具等の柄と思われる木製品である。ただしいずれも破損しているものであるため、用途は異なる可能性もある。

第 38 図 11（図版 16）はスギの柾目材で作られた製品である。１－１区の 14 層より出土した。残存長は 88.2 ㎝、最大幅は 4.1 ㎝、厚さは 3.6 ㎝である。上端部は丸く整形され、上部断面は円形に近い。一方、下方は下から 15 ㎝程のところから幅が広がっている。下端部は欠損している。左側面だけが加工面で、それ以外は割面の状態であることから、未完成品の可能性もある。樹種選択からして鍬・鋤の柄ではないと思われるが、水田域で見つかっていることから、農耕土木具等の一部と考えられる。

第 38 図 12（図版 16）も同図 11 とほぼ同形で、同じような寸法のスギの分割材より作られた製品である。１－２区 13 ｂ層より出土した。全長は 85.7 ㎝、最大幅は 6.5 ㎝、厚さは 2.8 ㎝で、全面、整形加工されている。上端部は丸く整形している。上半部は幅が 5.1 ㎝程で、下端部の 25 ㎝辺りから徐々に幅が広がっている。左側面の中央に長さ 3.5 ㎝程の浅い窪みがある。右側面下方にも長さ 1.2 ㎝の窪みがある。整形されている製品ではあるが、未完成の状態に思える。

第 39 図 13（図版 16）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した、上部が欠損した棒状の製品で、樹種はアカガシ亜属である。分割材から整形されている。残存長は 69.4 ㎝、断面は上部が 3.9 ㎝、下部は 2.6 ～ 2.7 ㎝を測る。全面、丁寧に整形されており、下方には握部が作り出されており、上方へ行くほど幅が太くなる。表面の加工痕は見えないことから、仕上げに磨いた可能性がある。この形状や樹種選択からして、鍬の柄である可能性が高い。上部が欠損しているため、鍬身との組み合わせ状態はわからない。

第 39 図 14（図版 16）は２区の 17 ｂ層より出土した。材質はスギで、分割材から加工されている。断面は円形の棒状木製品である。上部中央は突起状の部分を切断した痕がある。下方は欠損している。残存する面は、すべて加工が施されている。残存長は 42.8 ㎝、直径は 2.5 ～ 2.8 ㎝を測る。材質がスギであることから、鍬・鋤の柄とは考えにくいが、農耕土木具のなかに含めた。

第 39 図 15 ～第 40 図 29（図版 17）は鍬等の柄に付けられた泥除けである。この時期の泥除けは本遺跡のほかに隣接する岳美遺跡や池ヶ谷遺跡、過去の上土遺跡でも数多く出土している。長さ 20 ～ 28 ㎝程のスギ又はヒノキの板目材で、薄板を用いて作られているが、スギの使用率が圧倒的に多い。いずれも柄孔が通る部分が半円形に刳り込まれ、孔の上下にある小孔で左右対称の板を綴じ合わせて、２枚１組で泥除けとして使用される。

第 39 図 15(図版 17)は３区の 12a 上層より出土した泥除けで、ほぼ完形の半身である。全長は 23.5 ㎝、幅は 7.7 ㎝、厚さは 0.9 ㎝で、樹種はスギの板目材を使って作られている。柄を通す孔として、片方の側面が半月形に抉り込まれている。綴じ合せの孔は 0.5 ～ 0.8 ㎝径の円形孔が上下に２箇所ずつある。

第 39 図 16（図版 17）は２区の 14 層上面より出土した。スギの板目材で、一部欠損するが全体の残りは良い。全長は 25.6 ㎝、幅は 7.5 ㎝、厚さは 0.7 ㎝を測る。丁寧に加工されているが、上下端部は切断した痕が残っている。上部の小孔は１箇所、下部の小孔は２箇所である。孔は円形で、0.5 ～ 0.6 ㎝径である。

第 39 図 17（図版 17）は１－２区の 13 ｂ層より出土した、全長 20 ㎝程の小振りな泥除けである。スギの板目材で、上下に２箇所ずつの綴じ孔がある。上半部の一部を欠損するが、ほぼ完全な形で残っている。全長は 19.9 ㎝、幅は 7.5 ㎝、厚さは 0.8 ㎝で、円形の綴じ孔は 0.55 ～ 0.8 ㎝である。

第 39 図 18(図版 17)は１－２区の畦畔２最上部より出土した。スギの板目材で、全体に加工してある。全長は 21.2 ㎝、幅は 7.05 ㎝、厚さは 0.85 ㎝で、柄孔を通すため半円形の抉りを入れる加工はあるものの、側面部の整形や上下の小孔は見当たらない。まだ完成形ではない未製品であろうか。

第 39 図 19（図版 17）は３区の 12 層上面より出土した。全体に火を受けており、炭化して元の形状は一部にしか残っていない。スギの追い柾目材で、柄孔を通す刳り込みと小孔１箇所が辛うじて残っていることから、泥除けであったことが判別できる。残存長は 21.2 ㎝、幅は 8.8 ㎝、厚さは 0.8 ㎝で、上方にある円形孔は 1.0 ㎝である

第 39 図 20（図版 17）は１－２区の 13 ｂ層より出土した泥除けである。上半部は残りが良いが、下方の左側面が欠損している。表には平滑面とするための手斧痕が見える。側面も丁寧に加工している。小孔は上部に１箇所、下方には残存孔が１箇所見える。スギの板目材で各面とも加工面である。全長は 23.0 ㎝、幅は 7.5 ㎝、厚さは 0.8 ㎝、上部の綴じ孔は 0.4 × 0.5 ㎝の円形孔が貫通している。

第 40 図 21（図版 17）は２区 14 層上部より出土した。スギ材の追い柾目板で作られた泥除けである。右側面の一部が欠損し、表面が風化している。残存長は 26.6 ㎝、幅は 7.6 ㎝、厚さは 0.7 ㎝を測る。柄孔部分は 7.2 ㎝の長さがある。上部には円形の小孔が１箇所、下部の小孔は２箇所で、並列せず、ずれている。孔は 0.7 ～ 1.0 ㎝の径がある。また上部右側には筋状の刃物痕がある。

第 40 図 22（図版 17）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した泥除けである。スギ材の板目板で、上下端部は切断痕がある。左側に柄が通る孔があり、右側面にも浅い抉りが入る。上部には小孔１箇所、下部は２箇所の小孔がある。第 40 図 21 と同様に小孔の位置がずれている。全長は 23.9 ㎝、幅は 8.5 ㎝、厚さは 0.9 ㎝を測る。

第 40 図 23 と 25（図版 17）は１－１区の 14 層より重なり合った状態で出土した（図版９－７）。使用材もヒノキと同一の樹種であることから、対になり同じ鍬柄等に装着されていた可能性もある。今回、

出土した泥除けで、唯一のヒノキ材である。

第 40 図 23（図版 17）は長方形で、上下端部は切断面で、左右側面は割面である。表・裏は平坦に加工されている。左側に柄が通る孔がある。全長は 22.0 ㎝、残存幅は 5.0 ㎝、厚さは 0.5 ㎝で、上下に１箇所ずつ、0.6 ～ 0.7 ㎝の円形孔がある。

第 40 図 25（図版 17）は長方形で、上下端部は切断している。右側に柄が通る部分が抉られている。全長は 22.5 ㎝、残存幅は 4.3 ㎝、厚さは 0.5 ㎝である。寸法は 23 とほぼ同じである。綴じ孔は上部に１箇所、下部に２箇所ある。0.6 × 0.8 ㎝の円形孔がある。

第 40 図 24（図版 17）は１－２区の遺構外 14 層上部より出土した。長方形を呈するスギ材の板で、右側中央に刳り込みと下部に小孔１箇所のみがある。小孔は円形で 0.65 × 0.8 ㎝であった。上下端部は切断痕で、裏と左右側面は割面である。小孔が１箇所しかないことや左側面も整形加工もないことから未製品の可能性もある。

第 40 図 26（図版 17）は３区の畦畔６真上より出土した泥除けの破片である。上下欠損した破片だが、材質と小孔の状況から泥除けに含めた。スギの板目材で、側面の一部が火を受けて炭化している。左側面寄りに小孔が２箇所ある。孔は 0.7 ～ 0.9 ㎝の径がある。破片は残存長が 13.0 ㎝、幅は 5.3 ㎝、厚さは 0.8 ㎝である。

第 40 図 27・28（図版 17）も 26 と同様の泥除けの破片である。

第 40 図 27(図版 17)は２区の 15 ～ 16 層より出土した。右側面と下方が欠損している。スギの板目材で､両面とも割面である。左側面寄りに小孔が１箇所ある。小孔は 0.75 × 0.9 ㎝の径を持つ円形である。寸法は長さ 14.45 ㎝、幅は 3.4 ㎝、厚さは 0.9 ㎝を測る。

第 40 図 28（図版 17）は１－２区 13 ｂ層より出土した。泥除けは上半部の一部が欠損している。スギの板目材で、表面と側面は面調整されているが、裏面は割面のままである。下方の左側面寄りに円形の小孔が２箇所ある。小孔は 0.4 ～ 0.55 ㎝の径がある。残存長は 22.2 ㎝、幅は 7.4 ㎝、厚さは 0.9 ㎝である。

第 40 図 29（図版 17）は１－２区の遺構外 13 ｂ層最下部より出土した。泥除けは全面加工されたスギの薄板だが､抉り込みと小孔はない。表面には数本の傷がある。長さは 27.1 ㎝､幅は 5.4 ㎝､厚さは 5.4 ㎝形状とスギ材であることから泥除けとした。

第 40 図 30 ～ 32（図版 18）は馬鍬の台木とした。樹種は、いずれもスギ材である。馬鍬の場合、耕起具として使われることから、台木はアカガシ亜属等の強靭な樹種を使うことが多い。スギ材は馬鍬の台木としては、やや強度が劣るように思われる。馬鍬としたが、大足の縦枠等、他の用途である可能性も否定できない。

第 40 図 30 は２区の木製品集中区 15 ～ 16 より出土した。角柱状のスギ材の破片で、全面加工されている。上方は切断面で、下方は欠損している。残存長は 21.7 ㎝、幅は 3.5 ㎝、厚さは 2.9 ㎝である。方形のホゾ穴が３箇所確認できる。２箇所の孔は、長さが 2.4 ～ 2.5 ㎝と大きさが揃っている。上部端の孔周辺は左右の角に圧痕があり、別部材を緊縛していた可能性もある。

第 40 図 31 は１－２区の 13 ｂ層より出土した。角柱状で、分割材から加工してある。上下端部は欠損している。方形孔が見られないが､表面に工具で加工をしようとした窪み痕がある。残存長は 20.7 ㎝、幅は 4.3 ㎝、厚さは 2.9 ㎝程ある。表面は風化が著しく進んでいる。

第 40 図 32 は 31 と同様、１－２区の 13 ｂ層より出土した。方形孔の一部が残る破片である。表面と下方は欠損し、裏面は面加工してある。残存長は 15.25 ㎝、幅は 3.7 ㎝、厚さは 1.3 ㎝である。表面の風化が著しい。破損部分も大きく、原形が想定が困難である。

第 41 図 33 ～第 45 図 68（図版 18 ～ 21）は円枠型田下駄の足板や角枠型田下駄等である。田下駄に含めた木製品は、すべてスギ材であった。

第 41 図 33 は１－２区の遺構外 14 層上面より出土した円枠型田下駄の足板である。カキ底（註２）の大型楕円形曲物の底板から円枠型田下駄の足板へと転用している。全長は 63.7 ㎝、最大幅は 15.6 ㎝、厚さは最大で 1.55 ㎝であった。表裏と両側面とも加工面であるが、上部と中央付近の側面の一部には割面が残っている。中央には長方形の貫通孔がある。幅は 2.1 ～ 2.25 ㎝、長さは 1.25 ～ 1.8 ㎝の孔で、横長の形状である。上端部は切断痕があり、カキ底の痕跡は下方に残っている。上下とも側面方向から切り込みを入れて頭に張り出し部分を作り出している。第 44 図 60 も楕円形曲物の底板から田下駄の足板に転用している。33 は円枠も共伴していたが、破損が酷く、図化は不可能であった（図版 10 － 6）。

第 41 図 34 は１－１区の 14 層より出土した。角枠型田下駄の足板の可能性がある。スギの板目材で、正面は木表である。右側面の上部が一部欠損しているが、ほぼ完全な形で残っている。全長は 51.3 ㎝、最大幅は 11.9 ㎝、厚さは 1.4 ㎝で、板の上下は側面を両側から切り取り、本体よりも幅狭く、長方形に作り出されている。この端部は第 44 図 59 のような角枠型田下駄の桟木に差し込まれたものと考えられる。上下端部は切断された痕が残っている。中央には鼻緒状に３箇所の方形孔がある。方形孔の一辺は 1.3 ～ 1.7 ㎝の長さがある。

第 41 図 35 は２区の調査区西側トレンチ内 16 層最下より出土した、円枠型田下駄の足板である。全長は 55.25 ㎝、最大幅は 8.3 ㎝、厚さは 2.0 ㎝である。細身の板状で、４面とも割面のスギ板目材を加工している。上・下端部は両側面から削られて有頭状になっている。中央には方形孔が３箇所切り込まれている。孔の一辺は 1.6 ㎝～ 2.1 ㎝程になっている。下方の裏面には短軸方向に刃物で削られた痕跡がある。やはり上下側面に切り込みを入れて、円枠の部材と固定するのであろう。

第 41 図 36 は３区の 13 ｂ層より出土した円枠型田下駄で、全面、丁寧に整形された足板である。表面には面調整した手斧痕が見える。スギ材の板目板である。全長は 49.2 ㎝、最大幅は 8.5 ㎝、厚さは 1.8 ㎝を測る。上下の両側面にはＶ字状の切り込みがあり、両側に張り出す頭部を作り出している。中央には３箇所の方形貫通孔がある。孔の一辺は 1.1 ～ 1.4 ㎝である。更に上下１箇所ずつ、1.0 × 1.2 ㎝と 1.1 × 1.4 ㎝の方形孔があることから、円枠部材との固定に使われた孔と思われる。

第 41 図 37 も同じ形状を有する足板である。2 区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。右側面の上部が一部欠損している。全長は 40.2 ㎝、幅は 11.7 ㎝、厚さは 1.3 ㎝で、胴部に最大幅を持つ。スギ材の板目板で、正面は木表面である。中央には円形の小孔が３箇所あるが、上下には貫通孔がない。孔は 0.8 ～ 1.0 ㎝の径を持つ。足板の表面は風化しているが、加工面であったと思われる。

第 41 図 38 は２区の 15 ～ 16 層最上部より出土した円枠型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、表と裏、側面は割面、上下端部は切断痕がある。全長は 52.1 ㎝、最大幅は 12.4 ㎝、厚さは 1.4 ㎝で、長方形の板の側面を削って、上下端部に行くほど幅が狭くなり、胴部に最大幅がある。風化しているため、はっきりとしていないが、一部に面加工されていたように見える。貫通孔は中央の３箇所以外に、上下に１箇所ずつ、大きめの方形孔がある。中央の孔は方形で、横方向が 2.6 ～ 2.8 ㎝、縦方向が 3.0 ～ 3.6 ㎝を測る。上端部の孔は 2.8 × 3.6 ㎝、下端部の孔は 2.7 × 3.2 ㎝で、鼻緒孔と同じような方形孔である。

第 41 図 39 は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。別々の取り上げ番号が付いた木製品が、資料整理の段階で、接合することがわかった。やや小振りの円枠型田下駄の足板で、全長 39.2 ㎝、最大幅は 10.6 ㎝、厚さは 1.7 ㎝で、胴部が最も張り出す形状を持つ。スギ材の板目板を素材とし、表・裏とも割面の状態で、両側面は加工されていた。上下の側面には、粗く刃物で切り欠いて、紐をかける場所を作り出している。貫通孔は中央の３箇所で、0.6 ～ 0.8 ㎝径の円形の小孔である。形状や小孔の状況が第 41 図 37 と酷似していることや同じ調査区の層より出土したこと等から、対になっていた可能

性がある。

第 41 図 40 は３区の 13 層上面より出土した円枠型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、全長は 51.9 ㎝、最大幅は中央付近の 13.7 ㎝で、板の厚さは 2.3 ㎝である。側面は平行する中央部から上下方向へ行くと斜めに削られ、先端は小さな頭部を作り出している。表･裏は割面のままで面調整痕はない。側面は両側とも加工している。中央には小さめの貫通孔が鼻緒状に並ぶが、下方の孔は２箇所ずつあり、足に合わせて穿ち直されたのであろうか。孔は方形に近い楕円形で、一辺は縦方向が 0.85 ～ 1.25 ㎝、横方向が 1.15 ～ 1.45 ㎝を測る。

第 42 図 41（図版 19）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した（図版 13 － 2)、円枠型田下駄の足板である。ほぼ完形で、全体、丁寧に整形されており、表・裏ともに手斧痕が見える。スギ材の板目板で、全長は 62.7 ㎝、最大幅は 11.9 ㎝、厚みも 2.8 ㎝程ある。全体の形状は中央に最も幅を持ち、上下の端に向かって窄まる。板の左右よりも、中央に膨らみを持つ。上下端部は左右に張り出し、緊縛する部分を作り出している。中央に位置する鼻緒の孔は、1.3 ～ 1.4 ㎝径の円形で、鋭利な工具で穿孔されたことがわかる。

第 42 図 42(図版 19)は１－１区の 14 層より出土した円枠型田下駄の足板である。細長い長方形状で、全長は 66.7 ㎝､幅は 9.9 ㎝､厚さは 1.5 ㎝である。スギ材の板目板で作られている。正面は木表側になる。そのため木表側に緩やかに湾曲している。各面とも割面のまま加工を加えていない。上下端部は切断痕が残っている。板の上下側面にＶ字状の切り込みを入れているが､上部は２箇所ずつ切り込まれている。中央の貫通孔は小さめの方形である。孔は 1.0 ～ 1.3 ㎝の方形で鋭利な刃物で切り込まれている。

第 42 図 43（図版 19）は１－２区の畦畔２裾 15 ～ 16 層より出土した円枠型田下駄の足板である。スギ材の板目板で作られており、全面に面加工の痕跡がある。上端部は切断痕が残り、下端部は欠損している。長方形板の上下側面から切り込みを入れて、左右に張り出す頭部を作り出している。残存長は 46.0 ㎝、最大幅は 13.5 ㎝、厚さは 1.0 ㎝を測る。中央の３箇所の貫通孔は円形で、直径が 1.2 ～ 1.7 ㎝である。上部中央にも 1.6 × 1.8 ㎝の１箇所の円形孔がある。下方にも対となる貫通孔があったであろう。

第 42 図 44 (図版 19) は４区の 12 層上部より出土した円枠型田下駄の足板で､右半分が欠損している。スギ材の板目板で作られている。左右側面を削って切り欠き、上下端部に突起状の頭部を作り出し、鼻緒部分の貫通孔も２箇所残っていることから。田下駄の足板と判断できる。残存長は 50.8 ㎝、残存幅は 7.2 ㎝、厚さは 1.4 ㎝を測る。表･裏や側面は割面で、面加工はない。残存する貫通孔は、2.0 × 2.6 ㎝の方形孔である。

第 42 図 45（図版 19）は１－２区の畦畔２内 17 ｂ層上面より出土した。円枠型田下駄の足板であろうが、上部に特徴的な形状を持つ。スギの板目材で、残存長 32.5 ㎝、幅は 10.5 ㎝、厚さは 1.25 ㎝である。上部は左右に張り出す頭部と軸部のような部分があり、他の足板に比べ、やや特異な形状を作り出している。すべて加工面で、表面は摩滅しているが、軸部分に浅い圧痕が見える。また裏面にも圧痕や大きな刃物状の深い傷が数条ある。下方の破損部分に方形の貫通孔らしき痕が見えるため、円枠型田下駄の足板に含めた。

第 42 図 46（図版 19）は３区の畦畔６上部より出土した円枠型田下駄の足板破片と思われる。下方と右側面が欠損しているため、全体の形状が不明である。残存長は 26.0 ㎝、幅は 7.5 ㎝、厚さは 1.4 ㎝で、スギ材の板目板である。上部の作り出しはやや粗雑で、全体に風化が進んでいる。欠損部に方形と思われる貫通孔の痕がある。孔の一辺は 1.2 ㎝程である。

第 42 図 47・48（図版 19）も円枠型田下駄の足板に含めた。

第 42 図 47（図版 19）は１－１区の 14 層より出土した。全体に風化が著しく進んでいるため、表裏

の判断も難しい。足板上半部の破片で、残存長は 29.8 ㎝、幅は 10.6 ㎝、厚さは 1.4 ㎝で、中央には 2.6 × 1.5 ㎝の方形孔が１箇所、貫通している。上端部は破損しているが、貫通孔があった可能性がある。

第 42 図 48（図版 19）は２区の 13 ｂ層より出土した。スギの柾目材で作られた曲物底板の破片を再加工したものであろう。残存する部分が少なく、全体の形状が分からない。残存長は 13.9 ㎝、幅は 5.3 ㎝、厚さは 0.9 ㎝を測る。裏面に樺綴じの痕跡がある。右上部には 0.3 ～ 0.4 ㎝の円形孔がある。そのほか、欠損しているが、円形孔の直下と下方に、大きめの円形孔の痕跡がある。田下駄の足板に含めたが、泥除けまたは、曲物底板に孔を穿ち、曲物の蒸器として使用したものの可能性もある。

第 42 図 49（図版 19）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した円枠型田下駄の足板である。全長は 64.3 ㎝、最大幅は 10.2 ㎝、板の厚さは 2.6 ㎝で、ほぼ直線的な長方形を呈する。スギの板目材である。各面とも割面で、表は樹皮直下の表皮面で、面加工は無い。上端部は丸い形状に仕上げ、側面から浅い切り込みを入れて、頭を作り出している。下端部は切り離しの状態である。中央の貫通孔は３箇所で、やや雑な長方形に穿たれている。方形孔の一辺は 1.4 × 1.5 ㎝を測る。

第 43 図 50（図版 19）は３区の 13 層上面・12 層下部より出土した。足板の右下部分が欠損している。全長は 57.5 ㎝で、最大幅は 12.4 ㎝、板の厚さは 1.4 ㎝である。スギ材の板目板から、側面を削って上端部が窄まる形状を作り出し、下方も丸みを帯びた形状となっている。表・裏は割面のままで、両側面は加工されている。鼻緒は３箇所の長方形孔で、1.3 ～ 1.5 ㎝角、上下端部にも同様の長方形孔があり、一辺が 1.1 ～ 1.4 ㎝である。

第 43 図 51（図版 19）は１－１区の 14 層より出土した円枠型田下駄の足板である。全長が 49.1 ㎝、幅は 10.0 ㎝、厚さは 1.0 ㎝と小振りな足板である。スギ材で、板目の長方形板の上下角を削り、端部に行くほど幅が狭くなっている。貫通孔が多く上部に２箇所、中央に３箇所、下方に３箇所の方形孔がある。上部の方形孔は一辺が 1.5 ～ 1.8 ㎝、鼻緒の３箇所は 1.3 ～ 2.1 ㎝の幅を持つ。

第 43 図 52（図版 19）は２区の畦畔３内より出土した円枠型田下駄の足板破片である。残存長は 24.5 ㎝、幅は 10.6 ㎝、厚さは 1.2 ㎝を測る。スギ材で、長方形の板目板の上部角を落としてあり、貫通孔は上に２箇所、破損部分に２箇所の円形孔の痕がある。孔は直径が 1.0 ～ 1.1 ㎝で、右上の小孔横には、穿ち損ねの痕が残っている。上端面は切断の痕があり、左側面は割面、右側面は加工面となっている。

第 43 図 53（図版 20）は３区の畦畔６裾 12a 層より出土した円枠型田下駄で、全体形状が長い小判形をした足板である。上下には括れ部分を作らず、端部は丸く仕上げている。貫通孔は上下に２箇所ずつ、径が 1.0 ㎝前後の円形孔、中央は３箇所の方形孔がある。方形孔は縦が 1.8 ～ 1.9 ㎝、横が 1.1 ～ 1.3 ㎝と縦長である。ほぼ完形で全長は 53.1 ㎝、最大幅は 16.2 ㎝、厚さは 1.9 ㎝と幅広になっている。側面だけ加工し、表・裏面は割面のまま作られている。

第 43 図 54（図版 20）は３区の畦畔６内 12 ｂ下層より出土した。３つの破片が接合した円枠型田下駄の足板である。長方形板の上下角を丸く削った形状で、ほぼ完全な形を持っている。全長は 57.4 ㎝、幅は 13.0 ㎝、厚さは 1.2 ㎝を測る。貫通孔が多く、上部には３箇所の円形孔、中央に３箇所の方形孔、下方には４か所の円形孔が並ぶ。形状の特徴が第 43 図 56 と酷似しており、近い位置で出土していることからも、対になっていた可能性もある。

第 43 図 55（図版 20）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した円枠型田下駄の足板である。全長が 59.1 ㎝、幅は 10.4 ㎝、板の厚さは 1.9 ㎝で、右下側面がわずかに欠損している。スギ材の板目板である。表・裏面と両側面とも手斧による調整痕がある。側面に括れは作り出されていない。上下に方形孔が１箇所ずつ、中央には方形孔が３箇所ある。上下の方形孔は 2.6 × 2.6 ㎝と 1.6 × 2.5 ㎝とやや大きめの孔である。鼻緒部分の方形孔は一辺が 1.8 ～ 2.5 ㎝で粗く穿っている。

第 43 図 56（図版 20）は第 43 図 54 と良く似た作りをしている。出土した場所も３区の畦畔６内 12

ｂ下層と同じであることから、対で使用されたか、同一の板材から分割して作られた可能性もある。スギ材の板目板で、全長は57.9㎝、幅は11.6㎝、厚さは1.8㎝を測る。54と56は、ほぼ同じ形状であるが、56の方は上部の並列した貫通孔が４箇所ある。表・裏と右側面が割面で、左側面は面加工されている。全体に摩滅しているため、加工痕は拾えなかった。

第43図57（図版20）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した円枠型田下駄の足板である。全体に風化が著しく進んで、破損している。中央よりも端部へ向かうほど窄まる形状と想定される。残存長は63.7㎝、幅は8.15㎝、厚さは1.4㎝を測る。上部と右側面の一部と中央の円形孔が２箇所あることは確認できることから、田下駄の足板に含めた。

第44図58（図版20）は田下駄の足板を製作する方法を表す貴重な資料と言える。１－２区の15～16層より出土した。全長は75.8㎝、最大幅は17.6㎝、厚さは2.9㎝で、スギの板目材である。全て割面のままで、面調整は、なされていない。長い板目材を適当な長さに切り分ける途中の未製品段階と思われるが、既にこの段階で３箇所ずつ方形孔を穿っている。方形孔は一辺が1.3～2.1㎝である。上端部には両側から刃物を入れ、中央で折り取った痕跡がある。本資料は資料整理段階に接合できたことから、中央部分も同じ折り取る段階であったことが分かっている。

第44図59（図版20）は１－１区14層より出土した角枠型田下駄の足板横枠である（註３）。角枠型田下駄は、通称、大足とも言われる。スギの板目材で、残存幅は44.5㎝、高さ9.1㎝で、全面加工されている。上辺は中央に最も高さがある山形の形状で、下辺は水平である。中央には6.65×2.7㎝の長方形孔がある。この孔には足板の上下端部が差し込まれる。また左右両脇は角枠の縦枠に差し込まれる部分だが、両脇とも欠損している。

第44図60（図版20）は２区の木製品集中区15～16層より出土した円枠型田下駄の足板である。カキ底の楕円形曲物の底板から足板へ転用している。全長は68.6㎝、幅は9.3㎝、厚さは1.1㎝、上下にはカキ底部分の加工がそのまま残っている。表・裏とも全面加工面である。中央には方形の孔が３箇所ある。孔の一辺は1.1～2.0㎝である。側面近くには底板と側板を固定するための0.6～0.7㎝の円形孔が２箇所あり、一部に木釘が残存している。

第44図61（図版20）は２区の木製品集中区15～16層より出土した羽子板状の木製品である。全長は56.2㎝、最大幅は9.9㎝、厚さは2.0㎝を測る。表・裏と左側面は割面で、右側面と上下端部は加工してある。円形孔は1.0～1.3㎝で、上半部に３箇所、中央に３箇所の貫通孔がある。中央の貫通孔の位置から、円枠型田下駄の足板としたが、上下の加工や孔が円枠型田下駄足板のそれとは異なることから、さらに再加工されたか、別の製品である可能性も考えられる。

第44図62･63(図版20)も足板とした。第44図62は１－１区の畦畔１の盛土内より出土した足板で、全長44㎝、最大幅は19㎝である。スギ材の板目板で、全体形は長方形に近い。上下端部の角は丸く削られている。上下１箇所の方形孔と中央に４箇所の方形孔がある。左側面に近い孔は鼻緒とは関係のないものであろう。第44図63は３区の畦畔内12ｂ層と12ｂ層下部より出土した。縦方向に折れた状態だったが、資料整理段階で接合した。長方形の板目板の上下角を削り落としてある。全長は44.8㎝、幅は17.7㎝、厚さは2.1㎝で、表･裏面の一部に面調整した手斧痕がある。貫通孔は上下に２箇所ずつ、中央には３箇所の方形孔と、やや上部寄り中央に１箇所、貫通していない方形孔がある。また上下端に径0.8～0.9㎝の円形の小孔が穿たれている。

第45図64（図版21）は３区の畦畔６内12ｂ層下より出土した円枠型田下駄の足板である。スギ材で、木目は板目方向である。全長は40.1㎝、幅は19.3㎝、厚さは2.35㎝の長方形を呈する。鼻緒状の貫通孔はあるが、各側面に加工の痕がなく、裏面の一部に面調整の手斧痕が見える程度である。貫通孔は５箇所ある。あまり丁寧な穿孔ではなく粗い。上部中央に１箇所、下半部に２列に４箇所の孔が並

ぶ。第 44 図 58 のような板材から分割された直後の段階で、足板の未製品であるかもしれない。

第 45 図 65（図版 21）は３区の 13 層上面から出土した円枠型田下駄の足板である。表と両側面が面加工された整形板である。裏面は割面のまま残っている。側面に切り込まれた部分はなく、長方形を呈する。下半分は欠損している。残存長は 28.1 ㎝、幅は 9.5 ㎝、厚さは 1.3 ㎝の細長い板である。上部に２箇所、その下には中央に１箇所、折損部分に２箇所の縦長の貫通孔があったようである。孔は横が 1.1 ～ 1.3 ㎝、縦が 1.8 ～ 3.1 ㎝の長方形となっている。

第 45 図 66（図版 21）は２区 17 ｂ層より出土した。残存長が 32.5 ㎝、幅 8.6 ㎝、スギ材の板目板で作られた円枠型田下駄の足板である。表・裏は割面であるのに対し、左右側面は加工されている。中央部には鼻緒状に３箇所の円形孔がある。孔は１㎝未満の小孔で、右下の孔は２箇所、穿たれていた痕跡がある。

第 45 図 67（図版 21）は２区 15 ～ 16 層より出土した足板である（図版 13 －５）。全長は 46.2 ㎝、幅は 15.9 ㎝、厚さは 1.6 ㎝を測る。表･裏は割面で、スギの大径木から分割した時のままの湾曲が残っている。下端部は切断痕があり、右側面だけ面加工されている。また両側面には上下に２箇所ずつＶ字状の切り込みがある。中央には 0.9 ～ 1.4 ㎝径の円形孔が貫通している。

第 45 図 68（図版 21）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した、中央部分で折れた円枠型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、残存長は 33.3 ㎝、折損部分の最大幅が 14.2 ㎝、厚さは 1.95 ㎝である。表は割面の一番膨らんでいるところを手斧で縦方向へ削っている。左右側面は面加工している。貫通孔は方形で、上部に１箇所（2.2 × 2.3 ㎝）、鼻緒部分は２箇所（2.0 × 2.15 ㎝）が確認できる。

第 45 図 69（図版 21）は２区の遺構外 15 ～ 16 層より出土した、下駄である。全体に風化が酷く、面調整等は見えない。全長 25.5 ㎝、最大幅は 14.4 ㎝、厚さは 1.8 ㎝で、スギの柾目材を使用している。貫通孔は長方形の孔が鼻緒状に３箇所ある。田下駄として使われたかどうかは判断できない。

第 45 図 70（図版 21）は角枠型田下駄の枠木に付属する桟木であろうか。上部は欠損している。残存長は 27.1 ㎝、最大幅は 2.5 ㎝である。全面加工されていて、断面中央は丸みがあり、下端部は各面から削り、長方形断面になっている。

第 45 図 71（図版 21）は１－２区の遺構外 13 ｂ層より出土した。円形曲物を転用して作られた製品で、上下端部に頭を作り出している。全長 52.3 ㎝、最大幅は 3.85 ㎝、厚さは 1.6 ㎝の板状である。表･裏は曲物の面をそのまま使い､左右両側面は割面となっている｡上端部は曲物底板のカキ底の加工が残っている。紡織具に位置付けたが、その他の用途に使われた可能性もある。

第 46 図 72 ～ 80（図版 21・22）は運搬具、容器、祭祀具等である。

第 46 図 72（図版 21）は天秤棒状の木製品である。樹種はスギの分割材から加工された製品で、全面に手斧による加工痕がある。全長は 56.5 ㎝、最大幅は 5.5 ㎝で、全体に丁寧に面調整され、中央部の断面は円形となっている。上部は上端部に向かって削られ、端部からやや下方に、10 ㎝程の長さを持つ角状材が軸とは直角方向に差し込まれている。下端部は周囲から斜めに刃物で切りこまれ、中央部は折り取られたようになっている。同様の製品は過去の上土遺跡の調査でも発見されている（註４）。また平成 26 年に静岡市教育委員会が実施した曲金北遺跡（第 18 次）でも、同じ形状の木製品が出土している（註５）。用途は運搬具の天秤棒と報告されていることが多いものの､はっきりとした用途はわかっていない。今後、民具例等と比較していく必要があるだろう。

第 46 図 73（図版 22）は１－１区の 14 層より出土した刳り物の椀である。最大径は 13.0 ㎝､高さ 5.75 ㎝、厚みは部位により異なるが 0.6 ～ 1.7 ㎝を測る。口縁部は一部欠損し、丸底で、底径は８㎝程ある。材質はスギの板目材から刳り抜いてある。木目は 0.1 ㎝以下と、非常に細かい。内椀面は一部黒く変色

している。側面（外椀面）や底部には加工痕が見えるが、加工痕は不明瞭で、削りの後に磨かれている可能性もある。

第 46 図 74（図版 22）は３区の畦畔６上層で出土した曲物の底板である。スギの追い柾目材が使われている。円形で、直径は 11.4 ～ 12.4 ㎝で、厚みは 1.05 ㎝である。全面、加工してあるが、裏面は腐食が進んでいる。側面には木釘の痕跡が４箇所、確認できる。間隔から欠損部分にも１箇所の木釘があったかもしれない。曲物としては小型の製品である。

第 46 図 75 は１－２区の畦畔２内から出土した、厚さ 0.4 ㎝の薄板で、スギの板目材を使っている。幅は 7.5 ㎝で、上端部は両側面を斜めに切り落としてある。側面は加工されており、下方は欠損しているが、下端部から５㎝ほど上に筋状の圧痕がある。形状と樹種選択から、曲物の側板の端部分であろう。

第 46 図 76 も１－２区の 13 ｂ層より出土した薄板である。材はヒノキで、厚さは 0.5 ㎝の板目材である。全長は 26.1 ㎝、幅は 9.2 ㎝で、上端部は切断され、樺綴じの孔が数箇所ある。中央よりやや下には幅 0.7 ㎝の樹皮が入った樺綴じ痕がある。これも形状と樹種選択から、曲物の側板であろう。

第 46 図 77（図版 22）は２区の 14 層上面で出土した刳り物の槽である。左半部は欠損しているが、上部は丸く、下部は直線状の形状になっていたと思われる。縁辺部は下方の一部が残存しているだけで、大部分が欠損している。残存長は 60.55 ㎝、底部の残存幅は 16.45 ㎝、最大厚は 3.4 ㎝である。上方に行くほど、全体の厚さが薄くなっている。内側は浅く、縁はさほど高くはなかったようである。外面には手斧の痕跡がわずかにみえるが、全体には不明瞭である。材質はスギの板目材で、内面側が木表になる。

第 46 図 78（図版 22）は２区の 14 層上面で出土した槽の口縁部分破片である。破片のため全体の形状は不明だが、口縁部分の厚みから見て、大型の槽であったと想像できる。材はスギの柾目である。残存長は 14.8 ㎝で、内面には手斧の痕が見える。

第 46 図 79(図版 22)は４区の 12 層より出土した薄い板状の加工品である。全長 19.4 ㎝、最大幅は 2.7 ㎝、厚さは 0.5 ㎝である。スギの板目材で、表面と両側面は加工面、裏面は割面のままとなっている。上部の両側面にＶ字状の切り込みを入れて、頭部を作り出している。上端部は斜めに切断され、下方は欠損している。形状は人形のように見える。

第 46 図 80(図版 22)は４区の畦畔７内、12 ｂ層最上部より出土した。上部と左下側面が欠損している。全長は 26.4 ㎝、最大幅は 4.3 ㎝、厚さは 0.5 ㎝で、スギの柾目材が使われている。上端部は丸い形に削り、両側面にＶ字状の切り込みを入れて、頭部を作り出している。薄板祭祀具の人形の可能性がある。

第 47 図 81 ～第 49 図 92 は(図版 23 ～ 25)、建築部材として使われた可能性のある大型の木製品である。

第 47 図 81（図版 23）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。全長が 130 ㎝を超える大型木製品である。スギの丸太材から剥ぎ取られた板目材で、表面は表皮で節を切り落とし、裏面は割面となっている。上端部は刃物で切断された痕がある。下方は欠損し、全体の形状・寸法は不明である。表面の一部と側面に手斧加工の痕があるものの、丁寧な整形の痕跡はない。上部に 7.5 × 5.7 ㎝の長方形の貫通孔がある。梁・桁行等の建築材として用いられた可能性がある。

第 47 図 82（図版 23）は２区の木製品集中区で 15 ～ 16 層より出土した。上端部は刃物で切断した痕があり、下方は欠損している。残存長は 137.9 ㎝、最大幅は 12.75 ㎝、最大厚は 3.2 ㎝で、板状を呈する。表面は表皮下の面で中心線の高い部分や枝が出ていた部分を手斧で削っている。右側面は加工があり、左側面と裏面は割面のままである。建築部材として加工・使用されたものであろう。

第 47 図 83(図版 23)は１－１区の 14 層より出土した。全長は 86.85 ㎝、最大幅は 11.7 ㎝、厚さは 8.6 ㎝で、スギの板目材である。裏面は表皮下面で、残る表面や両側面が割面である。上端部は表面と裏面

の両側から、幅４㎝程の手斧で切断されているため、横方向から見ると逆Ｖ字状になっている。中央左寄りには節の痕がある。左側面下方には、長さ 20.75 ㎝、幅 4.8 ㎝の溝が切り込まれている。建築部材として使われたものと考えられる。上端部は転用する際に切断した可能性もある。下端部は手斧による加工痕が見える。

第 47 図 84（図版 23）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した角材である。スギの板目材で、裏面は表皮下面で、それ以外は割面である。全長は 82.05 ㎝、最大幅は 7.0 ㎝、厚さは 5.1 ㎝を測る。上端部は欠損している。下端部も欠損しているが、幅 1.2 ㎝程のホゾ孔があった可能性がある。

第 47 図 85（図版 23）は板目材のスギ板である。木目からして、表皮面に近い部分から割りとられている板で、各面とも加工の痕はなく割面のままである。82・84 と同じく、2 区の木製品集中区、15 ～ 16 層より出土した。上・下端部は、手斧により切断されて折りとられた痕がある。全長は 78.8 ㎝、最大幅は 21.1 ㎝、最も厚いところで５㎝程ある。台輪もしくは壁板として使用した建築部材を転用する際に、切断した可能性がある。

第 47 図 86（図版 23）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した。スギの板目材で、全長は 45.8 ㎝、最大幅は 17.0 ㎝、最大厚は 2.1 ㎝である。表・裏面は割面、左右側面は加工面となっている。表面右側は最も膨らみがある所にだけ手斧で面を削っている。一方、裏面でも左端部分を上から下まで手斧で面を削っている。手斧幅は 3.5 ～ 4.0 ㎝程であったと思われる。中央の右寄りには、2.5 × 2.5 ㎝の方形孔が１箇所ある。上下端部は表面と裏面から手斧で切断された痕が残っている。壁板等に使用された整形板材を切断して、再利用しようとした可能性がある。

第 47 図 87（図版 23）は１－１区 14 層より出土したサワラの半裁材で、表面と上端面に加工痕がある。裏面は表皮下面で、表側は割面である。上端部は切断痕があり、下端部は火を受けて炭化している。残存長は 60.5 ㎝、最大幅は 17.2 ㎝で厚さは 9.5 ㎝を測る。上端部から 13.3 ㎝程下には、短軸方向に幅 5.4 ㎝の溝が切り込まれている。加工時の刃物痕が見える。台輪や梁・桁材等の建築部材として使われていたものと思われる。

第 48 図 88（図版 24）は１－２区の遺構外 14 ｂ層より出土した大型の整形板である。全長は 147.0 ㎝、幅 18.35 ㎝板の厚さは 1.9 ㎝で、スギの板目材である。スギの大径木から割り出された材で、木目は追い柾目で、表・裏面は割面となっている。平坦な板にするために表面の左右と裏面の一部を手斧で平坦に削っている。ただ、表面は風化しているため、手斧痕が見えない。右側面は直角に側面を作っているが、左側は裏面側が斜めになるよう加工してある。上下端部は切断の痕がある。一方の側面を斜めに削る加工を施してあることから、掘立柱建物の壁板等に使われた建築部材の可能性がある。

第 48 図 89（図版 24）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。全長 144.8 ㎝、幅 19.1 ㎝の整形された板状木製品で、88 とほぼ同寸法である。表面は風化しているため手斧痕が見えないが、裏面は手斧痕の残りが良い。割面の側面極を手斧で削り、厚みを調節している。左右側面は真っ直ぐに面加工している。上端部は表・裏面から端部に向かって薄く削られている。下端部にも同様の加工が施されている。また短軸方向の圧痕がある。88 と同様に掘立柱建物等の壁板として使われていた可能性が高く、柱材等へ差し込むために上下端部の厚みを薄くしてあるのだろう。

第 48 図 90（図版 24）も２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した整形板である。88 や 89 とほぼ同じ寸法で、全長が 141.8 ㎝、最大幅は 24.5 ㎝、板の最大厚は 2.2 ㎝を測る。木裏にあたる表面は全面に手斧による面調整がある。一方の木表側は割面のままである。手斧は上部から下部へ一定方向に並んでおり、手斧の幅は５㎝以上あったのではないかと思われる。上端部は切断された面となっている。下端部と左右両側面は面加工されている。やはり 88・89 と同様、掘立て柱建物の壁板材として使われていた建築部材であろう。

第 49 図 91（図版 25 に展開写真あり）は２区の畦畔３内より出土した建築部材の垂木である。樹種はイヌマキの芯持ち材で、全長は 208.1 ㎝、直径は 6.45 ～ 6.7 ㎝を測る。上端部は先端を逆Ｖ字形に切り落としてある。上部には長さ 11.5 ㎝、幅 4.9 ㎝の抉り部分を手斧で削ってある。全体は表皮下面であるため、枝部部分は刃物で切り落とされた痕が複数箇所に残っている。下端部は 27 ㎝程、風化して欠損した状態である。建築部材の板材や角材がスギ材であるのに対し、垂木にイヌマキを使う傾向は、静岡平野だけではなく、静岡県内でも同じ状況がみられる。年代も弥生時代以降の出土例もあるが、やはり垂木はイヌマキ材を使っている。垂木はイヌマキを使うという樹種選択は、年代が奈良時代や平安時代になっても変わらないようである。

第 49 図 92（図版 24）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギ板で、木目は板目方向である。全長は 178.2 ㎝、最大幅は 7.9 ㎝、厚さは 2.3 ㎝と細長い形状を持つ。各面とも割面で、面調整されたところは見当たらない。上下端部は切断された痕がある。上端部から 39 ㎝下の右側面に手斧による長さ８㎝ほどの浅い抉りが入っている。刃物方向は上から下へ入る。また左側面中央には長さ 14.3 ㎝の浅い抉り込みがある。さらに左側面の下端部にも抉り込みがある。板の長さやスギ材であること等から、建築部材と考えられるが、梁・桁行材として使われたものであろうか。

第 49 図 93 ～第 56 図 164（図版 25 ～ 31）までは、用途の特定ができない木製品である。

第 49 図 93（図版 25）は３区より出土した杭状木製品である。樹種はスダジイで芯持ち材が使われている。表面は表皮下面だが、欠損した部分が多い。上部には斜めに削られた面がある。下方は欠損している。

第 49 図 94（図版 25）も３区より出土した。ヒノキ属の芯持ち材で、上端部から 10 ㎝ほど下部分を手斧で削り、有頭状の形状を作っている。下方は火を受けて炭化している。残存長は 71.1 ㎝、直径は 7.3 ～ 7.8 ㎝を測る。建築部材の一つとして使われていたものか。

第 49 図 95（図版 25）は１－３区より出土したスギ材の棒状木製品である。上端部は丸く加工され、下端部は欠損している。全面加工により整形されている。残存する長さは 95.5 ㎝で、元々は１ｍ以上あったと考えられる。断面形は円形に近く、直径は 2.5 ～ 2.9 ㎝である。表面の一部が火を受けて炭化している。

第 49 図 96（図版 25）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギ材で、長さは 106.2 ㎝、最大幅は 4.1 ㎝、厚さは 3.5 ㎝の角棒状木製品である。上下端部は欠損している。表・裏面と右側面は加工面で、左側面のみ割面となっている。下方の角に小さな切込みがあり、その裏面には緊縛したような圧痕がある。一部、風化が著しい部分もある。木製品集中区では建築部材が多く出土していることから、本製品もその一部と思われる。

第 49 図 97（図版 25）は 96 と同じく２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した角棒状木製品である。スギの分割材で、上端部は切断され、下端部は欠損している。左右側面は加工面だが、その他は割面のままである。残存長は 86.4 ㎝、最大幅は 4.3 ㎝、厚さは 3.75 ㎝を測る。建築部材の一部と思われる。

第 49 図 98（図版 25）は 96・97 と同様、２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した、一部を面加工してある分割材である。接合点はないが、第 55 図 157 と同一個体である可能性が高い。スギ材で、長さは 69.15 ㎝、幅は 3.9 ㎝、厚さは 3.1 ㎝、上下端部は欠損しているが断面は角棒状で、３面が加工面、１面は割面である。下端部より 22 ㎝程上まで側面を抉るように削る加工が施されている。

第 50 図 99（図版 25）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。長さは 93.0 ㎝、幅 4.3 ㎝、厚さは 2.6 ㎝の棒状木製品である。元々は１ｍ以上の長さがあったと思われる。表面と左右両側面は丁寧な面加工があり、裏面は割面となっている。下端部は欠損している。材はヒノキの分割材を使っている。

第 50 図 100（図版 25）は３区の 13 層上面より出土した。棒状の木製品である。スギの分割材から削り出されているが、上部は欠損している。残存長は 105.2 ㎝、最大幅は 5.2 ㎝、厚さは 3.5 ㎝で、下端部の８㎝程は薄くなっている。断面形は楕円形に近い。全面に加工されているが、工具の痕跡は見えないことから、表面は磨かれていると思われる。

第 50 図 101（図版 26）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した、全面に細かい加工痕が残る棒状木製品である。裏面と下方は破損している。上方は加工された端部が残っている。残存長は 72.7 ㎝、最大幅は 5.4 ㎝、厚さは 1.2 ㎝程ある。直径も５㎝以上の円形と想定されることから、第 53 図 133 と同様、天秤棒の一部と思われる。

第 50 図 102（図版 26）は１－２区の 13 ｂ層より出土した。４面とも加工されたスギ材の整形板である。長さは 57.4 ㎝、最大幅は 5.1 ㎝、厚さは 1.9 ㎝を測る。上端部は左側面を一部切り欠き、下端部は欠損している。切り欠きは長さ 5.3 ㎝、幅２㎝である。丁寧に加工された板だが、具体的な用途場所は特定できない。

第 50 図 103（図版 26）は３区 12 層より出土した板状木製品である。スギの分割材だが、４面とも加工はなく、割面である。下方は欠損している。上部には雑な切り欠きがあるが、その上と下とでは幅が異なる。残存長は 79.6 ㎝、最大幅は 4.3 ㎝、厚さは 1.85 ㎝を測る。

第 50 図 104（図版 26）は３区の 12 層最下部より出土した板状の木製品である。スギの板目材で、各面とも割面で、面加工はなく、整形された板ではない。全長は 100.0 ㎝で、左側面が欠損しているため、残存する最大幅は 8.3 ㎝、最大厚は 3.2 ㎝を測る。欠損した左側に刃物で荒く切り欠かれた部分がある。

第 50 図 105（図版 26）は３区の畦畔６内、12 ｂ層下部より出土した板状の木製品である。ほぼ完形で、全長は 118.9 ㎝、最大幅は 9.5 ㎝、板の厚さは 1.0 ㎝、表・裏面は割面で、左右側面は切断面となっている。上端面は水平に切断されているが、下端部はU字状に加工されている。１ｍを超える長さを持つスギ材の整形板であることから、建築部材の一つと考えられる。

第 50 図 106（図版 26）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した、スギ材の板である。上端面と右側面は加工面で、表と左側面は割面、裏は表皮下面で、大径木から分割された板であることがわかる。丁寧な面調整はない。下端部は刃物で切断されている。残存長は 58.7 ㎝、最大幅は 10.4 ㎝、厚さは 2.6 ㎝を測る。上端から 2.2 ㎝下の中央に 0.9 × 0.85 ㎝の方形孔がある。元々は１ｍを超える長さがあったと想定されることから、建築部材として使われていたと思われる。

第 50 図 107（図版 26）は３区 12 層下部より出土した。ヤナギ属の芯持ち材で、有頭状の形をしている。下方は欠損しており、残存長は 18.2 ㎝、直径は 4.0 ～ 4.6 ㎝である。上端部は斜めに先端へ向かって削られている。上端から６㎝ほど下から周囲を削っている。表面は表皮下面で、面加工はない。

第 50 図 108（図版 26）は１－３区の 10 層より出土した加工製品である。スギの分割材から削って作られた製品で、全面加工されているが下方は欠損している。残存長は 10.0 ㎝、幅は 2.8 ㎝、厚さは 3.7 ㎝である。長方形に削られた材に大きなホゾ孔を切り込んでいる。裏面は火を受けて炭化している。何かの把手か、柄の一部とも考えられる。

第 50 図 109（図版 26）は、１－２区の畦畔２裾、13 ｂ層より出土した。スギの分割材を加工した角棒状の製品である。上部には切断した痕があり、下部は欠損している。残存長は 28.8 ㎝、幅と厚さは 2.0 ㎝を測る。表・裏と右側面が加工面で、左側面は割面である。表面上部には長さ 2.9 ㎝の切り込みがある。丁寧に加工された製品だが、用途は不明である。

第 50 図 110（図版 26）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土したスギ材の板状木製品である。長さは 18.8 ㎝、幅は 3.7 ㎝、厚さは 1.5 ㎝で、４面とも割面である。上端部は切断痕があり、そこから１㎝程下の両側面から切り込みを入れて、有頭状になっている。下端部は欠損している。

第 50 図 111（図版 26）は４区の攪乱層（３層相当）より出土した。一部、折れているが、ほぼ完全な形状が残っている。スギ材の板目板で、長さは 38.4 ㎝、幅は 2.8 ㎝、厚さは 1.1 ㎝で、４面とも加工が施されている。しかし表面が風化しているため、加工痕ははっきりとしていない。上部の両側面には浅い切り込みを入れ、有頭状になっている。下方に行くほど、全体に細くなっている。

第 51 図 112（図版 26）は３区の遺物集中、13 層上面より出土した棒状の木製品である。スギの分割材を丁寧に削っている。表面は筋状に加工痕が見えるが、裏面は割面が残っている。長さは 23.3 ㎝、幅は 1.3 ～ 1.6 ㎝である。上端部は丸く削られ、下端部は欠損している。

第 51 図 113（図版 26）は３区 12a 層より出土した。サワラの半裁材を加工した製品である。上下は欠損している。表面は手斧により面調整してある。裏面は表皮下面がそのまま残っている。残存長は 24.1 ㎝、最大幅は 6.25 ㎝、厚さは 3.7 ㎝である。表面の上半部左右には、側面を８㎝程、浅く削っている。裏面側には貫通していない 3.1 ㎝× 3.4 ㎝の方形穴が浅く切り込まれている。建築部材の一部であった可能性もある。

第 51 図 114(図版 27)は３区の畦畔６上 10 ～ 11 層より出土した棒状製品である。材はスギの柾目で、分割材より整形している。長さは 44.9 ㎝、幅は 2.3 ㎝、厚さは 1.2 ㎝で、細い棒状で、断面形は楕円形に近い。別々に取り上げた３点が接合した。上端部は両側面を削り、四角い頭を作り出している。下端部は欠損している。全体は加工された面だが、研磨されているのか、工具の痕跡は見えない。

第 51 図 115（図版 27）は１－２区の 13 ｂ層より出土した。素材はカヤの芯持ち材である。上部は二股に枝分かれする部分だが、欠損している。表面は表皮下面のままで、下方は長さ 13.1 ㎝程、一段削り落としている。下端部は切断面となっている。残存長は 30.9 ㎝、直径は 1.7 ～ 2.0 ㎝を測る。何かの部材として使われていたと思われるが、用途は不明である。

第 51 図 116（図版 27）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギの分割材から加工した製品である。上端部は欠損し、下端部は切断された痕がある。左側面に６㎝程の長さの厚みを持った部分があり、その下方にも同じような部分があったようである。表面には３箇所の窪みがある。長さは 36.7 ㎝、最大幅は 3.0 ㎝、厚さは 3.4 ㎝を測るが、製品の使い道は不明である。

第 51 図 117（図版 27）は１－２区の 13 ｂ層より出土した棒状製品である。下端部は欠損しており、残存長は 52.7 ㎝、最大幅は 2.6 ㎝、厚さは 1.0 ～ 1.1 ㎝を測る。上部は両側面から浅いＶ字に切り込みを入れて、有頭状になっている。さらに 11 ㎝下にも同じような切り込みが入っている。側面は丸みを持つ加工だが、工具の痕跡は見えない。

第 51 図 118（図版 27）は３区の遺物集中 12 層下部より出土した。スギの分割材から角棒状に整形されている。上端部は側面から切り込みを入れて、有頭状になっており、下端部は欠損している。残存長は 34.3 ㎝、幅は 2.7 ㎝、厚さは 2.1 ㎝で、左側面だけ加工がある。他の面は割面の状態である。

第 51 図 119（図版 27）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギの分割材から整形している板で、中央で折れているが、全体が完存している。長さは 40.4 ㎝、幅は 3.7 ㎝、厚さは 1.6 ㎝である。板は４面とも割面で、板目の緩い湾曲が残っている。上下には左右両側面からＶ字に切り欠いていて、頭を作り出している。円枠型田下駄の足板と組み合わせる横木か、角枠型田下駄（大足）の枠の部材等の可能性がある。

第 51 図 120（図版 27）は３区の 12 層最下部より出土したヒノキ材の板目板である。右側面側が欠損している。残存長は 33.1 ㎝、残存幅は 3.85 ㎝、厚さは 1.15 ㎝である。表・裏と左側面は加工面である。欠損部分が多く、元の形は想定できない。上部には短軸方向に浅い溝が切り込まれている。

第 52 図 121（図版 27）は２区の 15 ～ 16 層最上部より出土したスギ材の角棒状木製品である。分割材から４面の角材に加工してある。上下は欠損している。残存長は 38.9 ㎝、幅は 5.0 ㎝、厚さは 4.15

cmである。左側面だけが割面で、他３面は加工面である。右側面には上から下まで中心が浅く窪んでいる。厚みのある角材であることから、建築部材の一つであった可能性がある。

第 52 図 122（図版 27）は２区の木製品集中区 17 ｂ層最上部より出土した。スギの分割材で、角材に加工されたと思われる。上下は欠損し、左側面と下半部が火を受けて炭化しているため、元々の形状が想定できない。表は手斧で削られた加工面である。右側面と裏は割面となっている。残存長は 44.0 cm、幅は 6.15 cm、厚さは 4.7 cmを測る。上部の欠損部には 1.5 cm角の方形孔の痕跡がある。

第 52 図 123（図版 28）は３区の 12 層から出土した、非常に丁寧に整形された板状木製品である。ほぼ完形品で、全面、加工が施されている。スギの板目材で、全長は 45.5 cm、幅は 9.2 cm、厚さは 1.8 cmである。板の上下には、両側面から切り欠かれた部分がある。表は緩やかに湾曲した面で、裏は全面に手斧痕が残る平坦面となっている。側面の角も丸く仕上げてある。下方の切り欠きには縦方向に筋が刻まれている。

第 52 図 124（図版 28）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギ材の板目板である。形状は長方形で、上下端部は切断された痕跡がある。表・裏と両側面は４面とも加工されている。表は上から下方向へ手斧痕が連続している。板の全長は 25.1 cm、幅は 7.3 cm、板の厚さは 1.25 cmを測る。

第 52 図 125（図版 28）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。材はカヤの追い柾目板である。ほぼ長方形だが、上部はわずかに幅が狭くなっている。上端部は左右の角を斜めに切り落としてある。下方は切断された面である。表は手斧で面を削っているが、加工の方向は見えない。下方向には斜めの筋状圧痕がある。板の長さは 25.8 cm、最大幅は 6.8 cm、厚さは 1.1 cmである。

第 52 図 126(図版 28)は２区の 13 ｂ層最下部より出土した板状の木製品である。スギの追い柾目材で、表・裏とも割面のままで面調整されていない。長さは 24.5 cm、最大幅は 9.4 cm、厚さは 1.2 cmで、上端部は切断痕、下端部は欠損している。下端部の欠損箇所には上面幅 2.3 cmの方形孔がある。建築部材の一部と考えられる。

第 52 図 127 は２区の木製品集中区 16 層より出土した。ヒノキの板状製品で、板目材である。表・裏と左側面は割面で、右側面だけが加工してある。上面は切断痕があり、下面は欠損している。上部には径 0.5 ～ 0.65 cmの円形孔が貫通している。残存長は 21.0 cm、幅は 4.3 cm、厚みは 1.1 cmを測る。形状と樹種から、第 53 図 130 と同一の可能性がある。

第 53 図 128（図版 28）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギの板目板で、形状は矢板状である。４面とも割面で、手斧による整形はされていない。上部は欠損し、10 cm幅で真っ直ぐに下方へ伸び、下端部から 16 cm程上から、両側面を斜めに切り、下方先端を尖らせてある。下端部は欠損している。中央右寄りには貫通していない直径 0.9 ～ 1.0 cmの円形穴がある。

第 53 図 129 は３区畦畔６上部より出土した板状の木製品である。サワラの板目材で、表面は風化しており、各面とも割面である。上部は欠損しており、残存長は 27.8 cm、最大幅は 8.5 cm、厚さは 1.5 cmである。長方形の板の中央より、やや上に左右に離れた円形孔がある。サワラ材で作られた製品は古墳時代以前には当地で見られないが、奈良時代以降、サワラ材で作られた製品が出てくる。サワラ材は中部高地で出土する木製品によく見られ、スギやヒノキ材とよく似ていることから、その代替えとして樹種選択しているようである。各地との流通に伴い､製品として当地に入ってくる可能性も考えられる。

第 53 図 130（図版 28）は２区の木製品集中区 16 層より出土した。長方形の板で、ヒノキの板目材で作られている。上端部は切断痕があり、下端部は欠損している。残存長は 35.5 cm、最大幅は 4.7 cm、厚さは 1.1 cmである。４面とも割面で、手斧等で面整形した痕跡は見られない。上方には中央に 0.7 × 0.7 cmの円形孔が貫通している。第 52 図 127 と良く似ており、同一製品の可能性がある。

第 53 図 131（図版 28）は３区 12 層上面より出土した板状製品である。ヒノキの板目材で、長方形

を呈する。表・裏は割面で、左右両側面は加工面、上・下端部は切断面となっている。長さは 27.2 ㎝、幅は 7.0 ㎝、厚さは 0.9 ㎝で、上部中央に 0.7 × 0.9 ㎝の方形の小孔がある。127 や 130、132 と形状がよく似ている。

第 53 図 132（図版 28）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。細長い板状の木製品で、ヒノキの板目板である。上端部は形状を残し、下端部は欠損し、中央付近で折れている。残存長は 33.2 ㎝、幅は 3.6 ㎝、厚さは 1.1 ㎝で、４面とも加工されている。上部中央には 0.8 × 0.8 ㎝の円形孔がある。全体に風化している。

第 53 図 133（図版 29）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。残存長が 107.4 ㎝、最大径 5.5 ㎝の棒状木製品である。スギの分割材から加工している。面全体に整形の加工痕があり、断面形は円形に近い。直径は上部に最大値があり、下へ行くほど徐々に細くなる。上端部は欠損、下端部は杭状に再加工されている。また下端部には、幅 1.4 ㎝、長さは 3.4 ㎝程の長方形のホゾ穴痕が見える。下方に近い所には短軸方向の刃物痕がある。おそらく天秤棒等から杭に転用されたと考えられる。上土遺跡から出土した木製品のなかで、第 46 図 72 や、第 50 図 101 なども天秤棒の可能性がある。

第 53 図 134（図版 29）は３区 13 層より出土した棒状木製品である。全体に加工されたスギ材の角柱状で、先端を杭状に加工している。加工面は２面で、残る２面は割面である。全長 91.5 ㎝、厚さは 3.8 ㎝、最大幅は 4.7 ㎝程で、ほぼ中央付近に集中して刃物痕が残っている。下から 27 ㎝程の表面に工具が集中的にあたった痕がある。

第 53 図 135（図版 29）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。角棒状で、上部は欠損し、下端部より６㎝上まで杭状の加工痕がある。４面とも割面である。左側面は火を受けて、部分的に炭化している。残存長は 54.8 ㎝、幅は 3.25 ㎝、厚さは 2.3 ㎝を測る。

第 54 図 136（図版 29）は１－１区の 14 層より出土した棒状の木製品である。樹種はイヌマキ属の芯持ち材で、表皮下面のまま表面加工はない。長さは 114.8 ㎝、直径は 3.2 ～ 3.4 ㎝を測る。上端部には斜め方向に工具痕がある。下端部から 5.85 ㎝の部分は杭状に加工されている。樹種選択からして、建築部材の垂木とも考えられる。

第 54 図 137（図版 29）は１－２区の遺構外 17 層で土中に打ち込まれた状態で出土した杭状木製品である。材はサワラの芯持ち材で、直径 6.6 ～ 6.8 ㎝程の雑木から作られている。上部は欠損し、下端部は複数の方向から工具で削られている。樹皮は残っておらず、表皮下面のままである。

第 54 図 138（図版 29）は１－１区の畦畔１盛土内より出土した杭状木製品である。樹種は広葉樹のアカメガシワの芯持ち材で、３箇所で折れている。上部は欠損し、下方は杭状に先端を尖らせている。表皮下面のままで、枝を掃う以外の加工はされていない。残存長は 54.1 ㎝、直径は 5.2 ～ 5.5 ㎝である。杭には様々な種類の樹種が使われており、近隣に自生する雑木を使っているものと思われる。

第 54 図 139（図版 29）は２区の深掘りトレンチ内の 14 ～ 15 層より出土した杭状木製品である。各面とも割面だが、建築部材等の大型製品から転用されたものの可能性がある。上部は 20 ㎝程、腐食が激しく進んでいる。残存長は 68.1 ㎝、幅は 6.1 ㎝、下端部から 48 ㎝程上から杭状に加工している。樹種はスギの分割材である。

第 54 図 140（図版 29）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。樹種はコジイの芯持ち材で、表皮下面のままである。上・下端部は切断痕がある。下端部は杭状の加工もある。あまり利用されない樹種であることから、手近な雑木を杭に使用したと想定される。

第 54 図 141（図版 29）は２区の遺構外 15 ～ 16 層より出土した杭状木製品である。ほぼ完形の状態で残っている。樹種はスギで、分割材から角柱状にしている。長さは 46.9 ㎝、幅は 2.5 ㎝、厚さは 1.7 ㎝で、右側面が加工され、それ以外は割面である。下端部から５㎝の部分を杭状に加工している。

第 54 図 142（図版 29）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。杭状に加工されたスギの追い柾目で、木目は粗い。上端部は欠損し、下端部から 10 ㎝程まで両側面から工具で削って先端を尖らせている。残存長は 61.3 ㎝、幅は 6.5 ㎝、厚さは最大で 3.5 ㎝ほどある。表と左側面は加工された面で、裏面は割面となっている。建築部材等を再加工して、分割してから杭に転用した可能性がある。

第 54 図 143（図版 29）は１－１区の 14 層より出土した。スギの分割材を角棒状に加工してある。４面とも加工した面である。上端部は３㎝程やや細く削られていて、下端部は欠損している。残存長は 29.3 ㎝、幅は 1.95 ㎝、厚さは 1.6 ㎝を測る。全体に火を受けているため、加工の痕跡は見えず、特に中央部分が炭化により収縮している。

第 54 図 144（図版 29）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した大型の木製品である。スギの分割材で、表は表皮下面、その他は割面のままである。上端部は切断痕があり、下端部から９㎝ほど上まで両側面を斜めに切って、杭状に加工してある。長さは 145.3 ㎝、最大幅は 10.7 ㎝、厚さは 4.1 ㎝である。

第 54 図 145（図版 29）は３区の畦畔６内 12 層より出土した大型の木製品である。スギの分割材で角柱状にしてある。残存長は 147.0 ㎝、幅は 7.9 ㎝、厚さは 5.8 ㎝で、４面とも面調整は無く、割面のままである。上端部は欠損しているが、端部から 7.5 ㎝下まで、段差をつけた加工が裏表にある。下端部より 13.4 ㎝上まで杭状の加工がある。中央から下に横方向の刃物痕が複数ある。上部の段差は、ホゾまたは切り欠きに差し込んで組み合わせる建築部材として使われていた可能性がある。杭状の加工は、転用するための二次加工の可能性がある。

第 55 図 146（図版 30）は２区の畦畔１の構築土①より出土した。スギの分割材で、棒状の木製品に加工している。上部は切断面、下部は欠損している。欠損部以外は、すべて加工面で、断面は多角形状になっている。長さは 18.7 ㎝、幅は 3.0 ㎝、厚さは 2.3 ㎝を測る。上部には表と右側面に切り欠いた部分がある。表の切り欠きは長さが 2.8 ㎝、右側面の切り欠きは長さ 3.8 ㎝ほどある。用途は不明である。

第 55 図 147（図版 30）は１－２区の 13 ｂ層より出土した板状の製品である。スギの分割材から作られている。裏面の一部が加工面だが、その他の面は割面である。長さは 36.6 ㎝、幅は 5.0 ㎝、厚さは 1.9 ㎝を測る。中央の右寄りに 2.45 × 1.7 ㎝の方形孔がある。下方には短軸方向に緊縛痕のような窪みがある。

第 55 図 148（図版 30）は１－２区の遺構外 13 ｂ層最下部より出土した。スギの分割材から作られたもので、板目板である。４面とも割面で、長方形の下方には段差が作り出してある。下端部は欠損している。残存長は 21.25 ㎝、幅は 5.7 ㎝、最大厚は 2.3 ㎝を測る。

第 55 図 149（図版 30）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギの分割材で、裏は表皮直下の面、他３面は割面である。上端部は幅４㎝前後の手斧で斜めに切断した痕がある。表側は下半部が火を受けて炭化している。裏側も下端部と左右側面が炭化している。長さは 53.9 ㎝、最大幅は 11.05 ㎝、厚さは 4.1 ㎝を測る。建築部材を再利用して転用するために適当な長さに切断したと思われる。

第 55 図 150（図版 30）は１－２区の 13 ｂ層より出土したスギの追い柾目板である。全体に風化が激しい。上部は両側面を削り細くしている。上下端部は欠損している。残存長は 45.25 ㎝、幅は 9.65 ㎝、板の厚みは 1.4 ㎝である。右側面寄りに長方形の孔が３箇所ある。

第 55 図 151（図版 30）は２区の木製品集中区 15 ～ 16 層より出土した。スギの分割材から整形された製品で、表側は整形後に磨かれている。上下端部と裏側は欠損している。残存長は 53.2 ㎝、最大幅は 6.1 ㎝、厚さは 1.5 ㎝である。丁寧な整形であることから、生活道具として使われていたものだろうが、欠損部分が多く、用途を特定できない。

第 55 図 152（図版 30）は２区の疑似畦畔基部より出土した。スギの分割材から整形した製品である。

細長い棒状で、上端は丸く整形、下端部は欠損し、残存長は27.2㎝、幅は1.5㎝、厚さは1.0㎝を測る。断面形は表が蒲鉾状に丸く整形され、裏は平坦面となっている。製品の用途は不明である。

第55図153(図版30)は１－１区の14層より出土した角棒状木製品である。スギ材で、上端部は欠損、下端部は先端が10㎝程、炭化している。残存長は46.3㎝、幅は2.3㎝、厚さは1.65㎝の細長い棒状で、４面とも割面となっている。

第55図154（図版30）は２区の木製品集中区15層下部より出土した。角棒状の木製品で、スギの板目材である。残存長は30.6㎝、幅は2.05㎝、厚さは1.55㎝で、上端部は欠損しているが、下端部は左右側面を斜めに切り落として、先端を尖らせている。表・裏と右側面は加工面で、左側面は割面となっている。

第55図155（図版30）は１区の14層より出土した。同一個体だが、接合点がないため、図面上は別々に分けている。スギの芯持ち材で、2.2～2.7㎝の直径がある。全体に樹皮が残っており、元の長さは２m以上あったと思われる。上端部は側面から切り込みを入れて、頭を作り出している。下端部には工具で削った痕がある。

第55図156（図版30）は２区の木製品集中区15～16層より出土した。イヌマキ属の芯持ち材で、完形品である。長さは172.35㎝、直径は3.4㎝を測る。上下端部は工具で切り落とした痕跡があり、小枝部分を掃ってある。表皮は残存せず、表皮下面がそのまま残っている。木材がイヌマキ属の樹種選択をしていることや、芯持ち材であることからして、建築部材の一つと思われ、垂木等の用途が考えられるが、加工の痕はない。

第55図157（図版30）は２区の木製品集中区15～16層より出土した。スギの分割材から角棒状に加工されている。４つの面はすべて加工面で、一定方向の手斧痕がある。上部は欠損、中央で折れており、そこから下の右側半分が欠損している。下端部には７㎝ほど、火を受けて炭化している部分がある。全長は144.8㎝、最大幅は3.5㎝、厚さは3.0㎝で、元は150㎝以上あったと想定される。第49図98と同一製品の可能性があるが、接点がない。全体の長さから建築部材の一つと考えられる。

第56図158（図版31）は３区の12層上面より出土した。スギの分割材から作られた板目板である。上部は欠損し、下端部は左右側面を斜めに切り落として、先端部を作り出している。各面とも割面で、残存長は26.5㎝、幅は2.0㎝、厚さは1.4㎝である。

第56図159（図版31）は３区の畦畔６裾より出土した製品である。スギの分割材から整形された板目方向の棒状で、断面形は半月の形になっている。表は丸みを持っており、裏は平坦になっている。面には手斧痕がないことから、整形後に表面を磨いているだろう。残存長は46.5㎝、最大幅は3.8㎝、厚さは2.3㎝である。欠損部分が多いため、どのような用途に使われたかは、わからない。

第56図160（図版31）は２区の木製品集中区15～16層より出土した。スギの分割材で作られた角棒状木製品である。上下端部は欠損している。残存長は53.4㎝、幅は2.6㎝、厚さは1.7㎝を測る。４面とも割面で、面加工はしていない。

第56図161(図版31)は１－２区の13ｂ層畦畔２裾より出土した。樹種はイヌマキ属で、長さ125.9㎝、直径3.45～3.55㎝程の芯持ち材で棒状の形状を持つ。表皮は無く、表皮下面のままで、枝は掃われている。上端部は欠損し、下端部は工具で斜めに切り落とされている。イヌマキ属は建築部材の垂木に使われる樹木で、その枝の長さや撓りを利用している。161も建築部材であった可能性がある。

第56図162（図版31）は３区の畦畔６上10～11層より出土した。スギの分割材から加工した棒状の製品である。木目は板目で、断面形は半月状になっている。上端部は斜めに切断してあり、下端部は欠損している。表は面を加工してあり、裏は割面の状態である。残存長は118.6㎝、幅は5.7㎝、厚さは2.7㎝を測る。

第 56 図 163（図版 31）は１－３区の 13 層上面で出土した棒状木製品である。ほぼ完形で、全長は 134.4 ㎝、最大幅は 4.1 ㎝、厚さは 2.5 ㎝である。スギの分割材から加工され、全面加工面である。上部は角柱状だが下方に行くほど、徐々に細身になり、円形に近い断面形となっている。上下端部は使用によるためか､丸くなっている。下方から 50 ㎝ほど右側面が火を受けて炭化している。用途は不明だが、長さのある棒状製品であることから、建築部材の一つと考えられる。

第 56 図 164（図版 31）は２区の 16 層より出土した全長 136.1 ㎝の完形品である。上下端部は切断した痕跡がある。スギの分割材から加工された製品で、全面に手斧による面調整が施されているが、上部は表と裏を削り込んで、扁平に作り出されている。下方は面を削った手斧痕が残っている。全長は 136.1 ㎝、幅は 3.4 ㎝、上部の厚さは 1.8 ㎝で、下部の厚さは最大 3.3 ㎝を測る。全面丁寧に加工された製品だが、何の用途に使用されたかは不明である。

第 56 図 165（図版 31）は２区畦畔脇 15 層より出土した棒状木製品である。イヌマキ属の芯持ち材で、上端部が欠損している。残存長は 38.1 ㎝､直径は 2.4 ～ 2.9 ㎝を測る。表面は表皮下の面が残っている。垂木等の可能性がある。

原木（2 区　W－ 217）は２区の遺構外 17 ｂ層より出土した。加工製品ではなく、原材木である。長さは 137 ㎝、幅 71 ㎝、厚さは 40 ㎝を測る。小口面に材を切り出してきたときのものと思われる工具の痕跡がある。材はヒノキであった。今回は図化せず、写真のみ図版に掲載した（図版 31）。この他にも１－３区 12 層上面で出土したスギ材(3 区　W－ 25)など､原材料と思われる非加工材が見つかっている。

種実は包含層より 39 点のモモ核が出土した。同定結果を第６章第２節に掲載した。

註

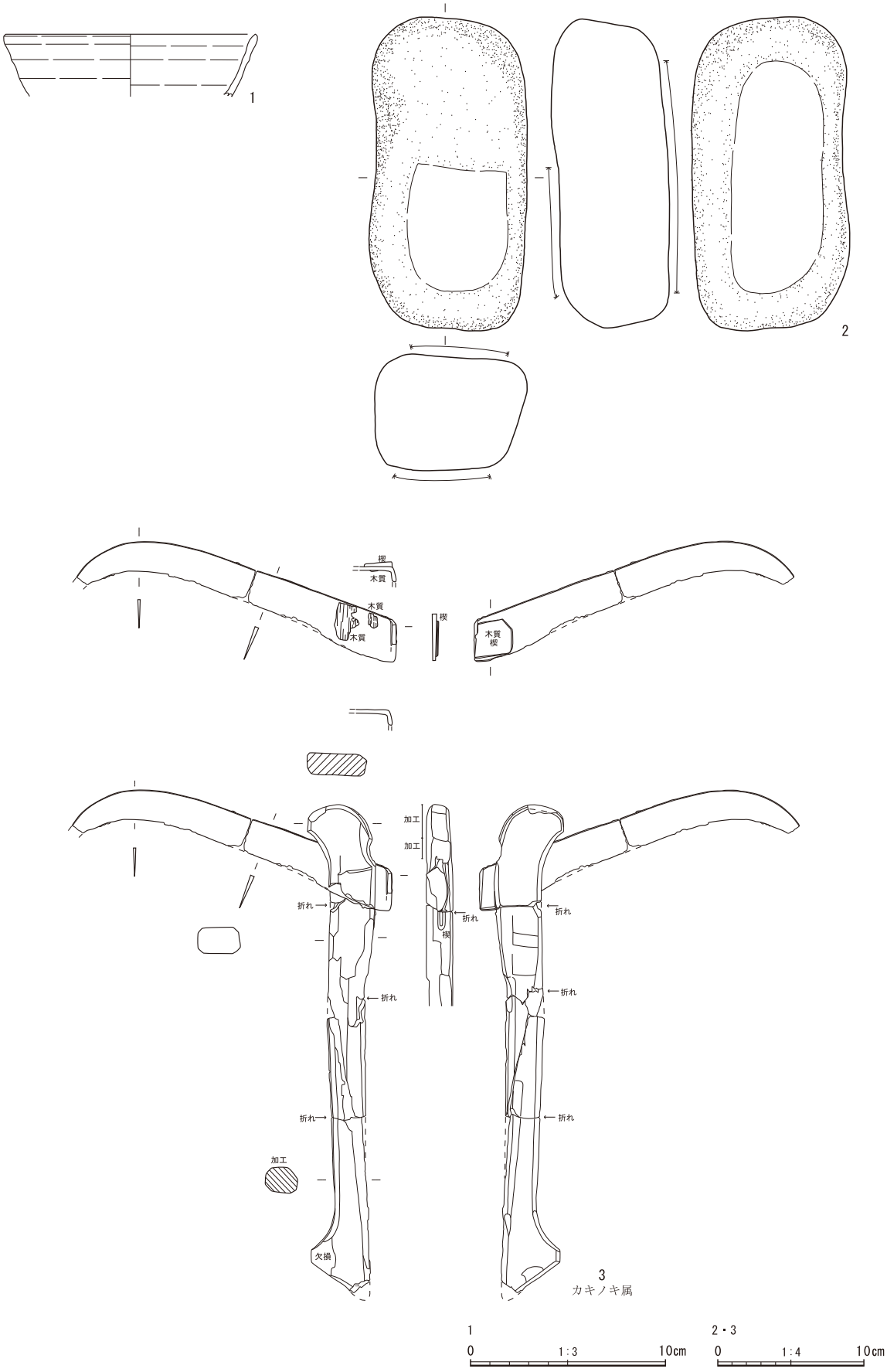
１　鎌刃を鎌柄に固定する際に楔を使っていることは、首都大学東京の山田昌久教授も指摘している。

２　「カキ底」については『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編）本文編』の詳細による。

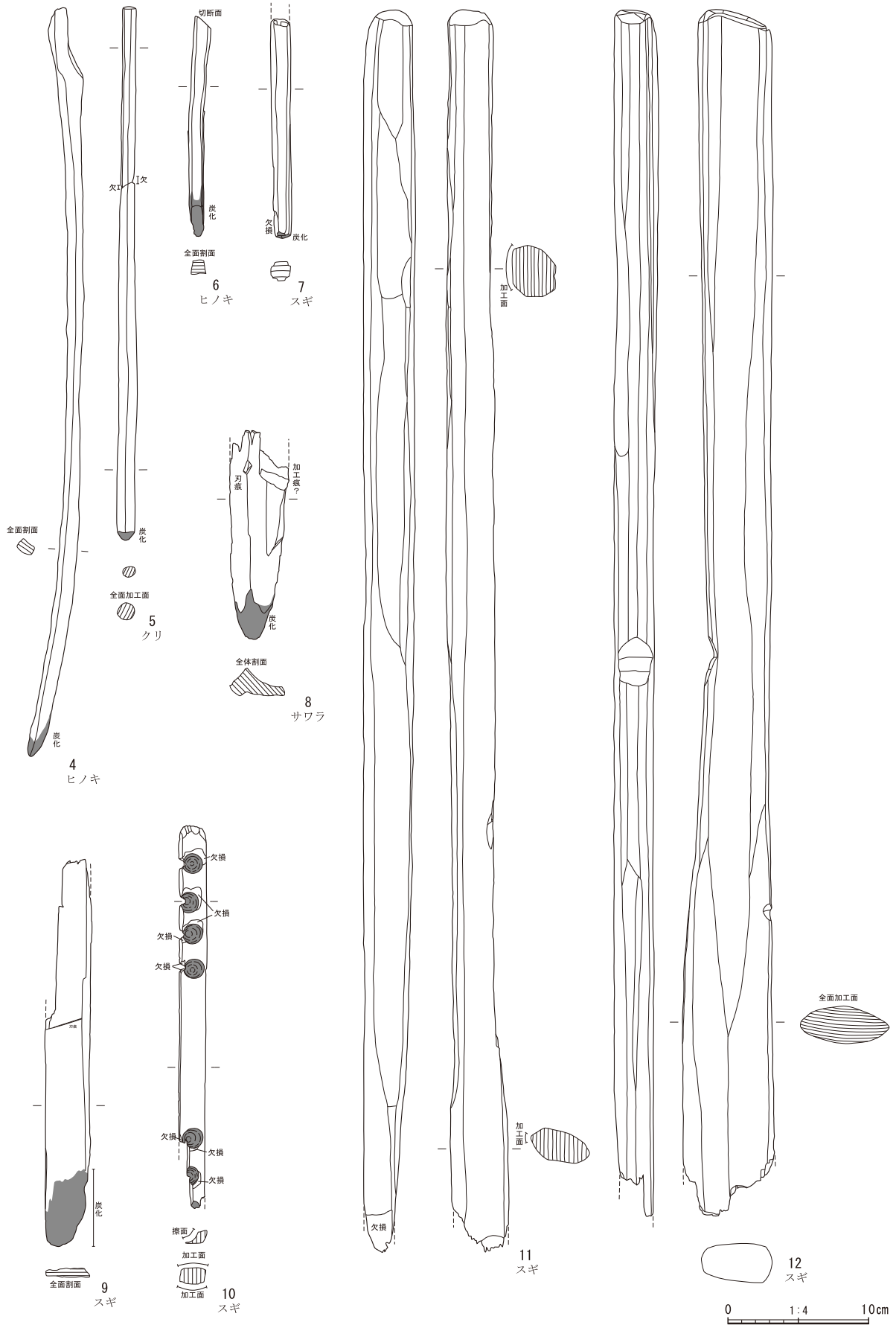
３　角枠型田下駄は､隣接する池ヶ谷遺跡（『池ヶ谷遺跡Ⅲ（遺物編）』や曲金北遺跡（『曲金北遺跡（遺物･考察編）』）で完形に近い製品が出土している。また、過去に行われた上土遺跡の調査（『上土遺跡（立石地区）Ⅱ（遺物編）』）でも、角枠型田下駄の全体形状がわかる木製品が出土している。

４　『上土遺跡・岳美遺跡』（静岡県埋蔵文化財センター調査報告第 54 集）参照。

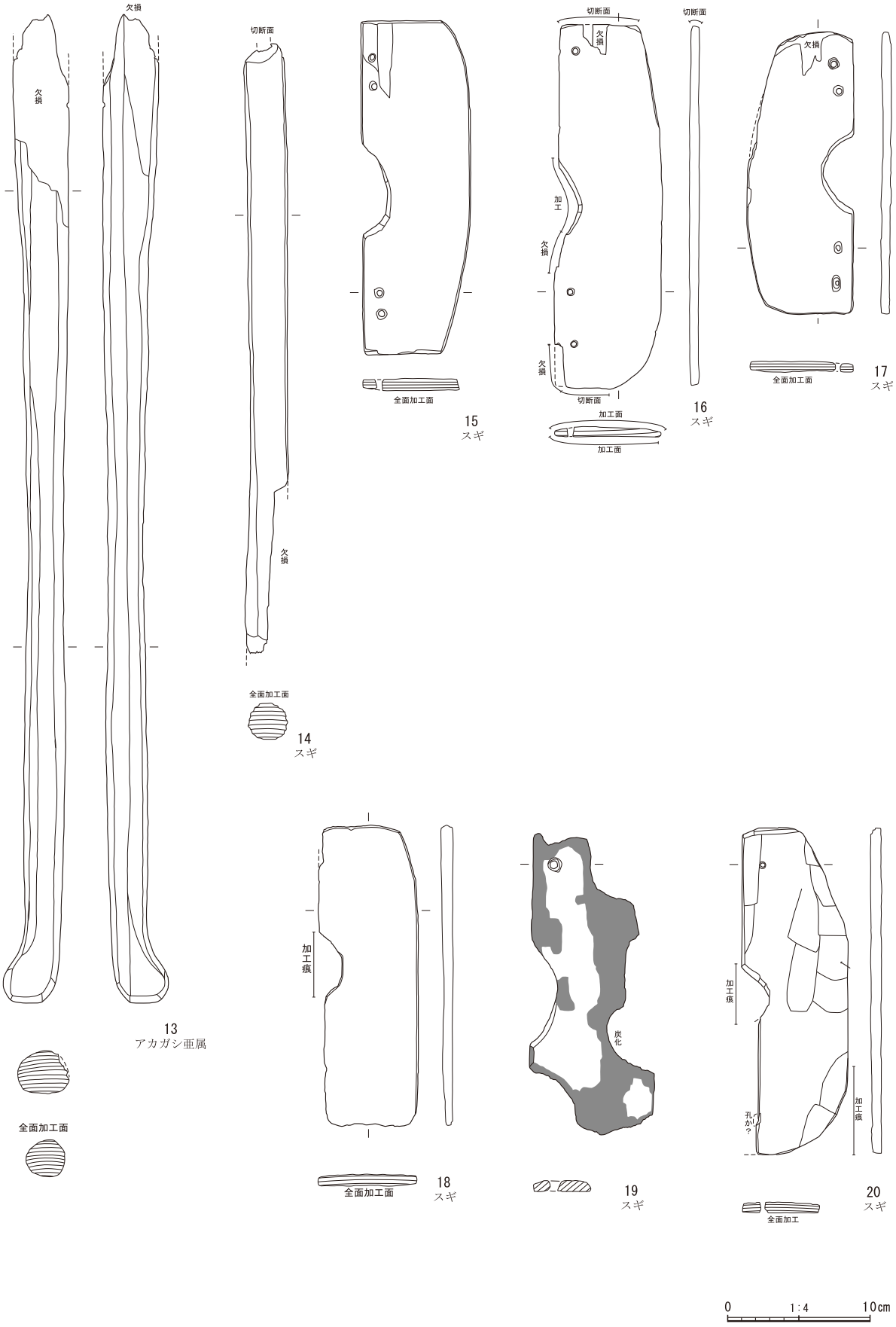
５　『曲金北遺跡（第 18 次）』（静岡市教育委員会）による。



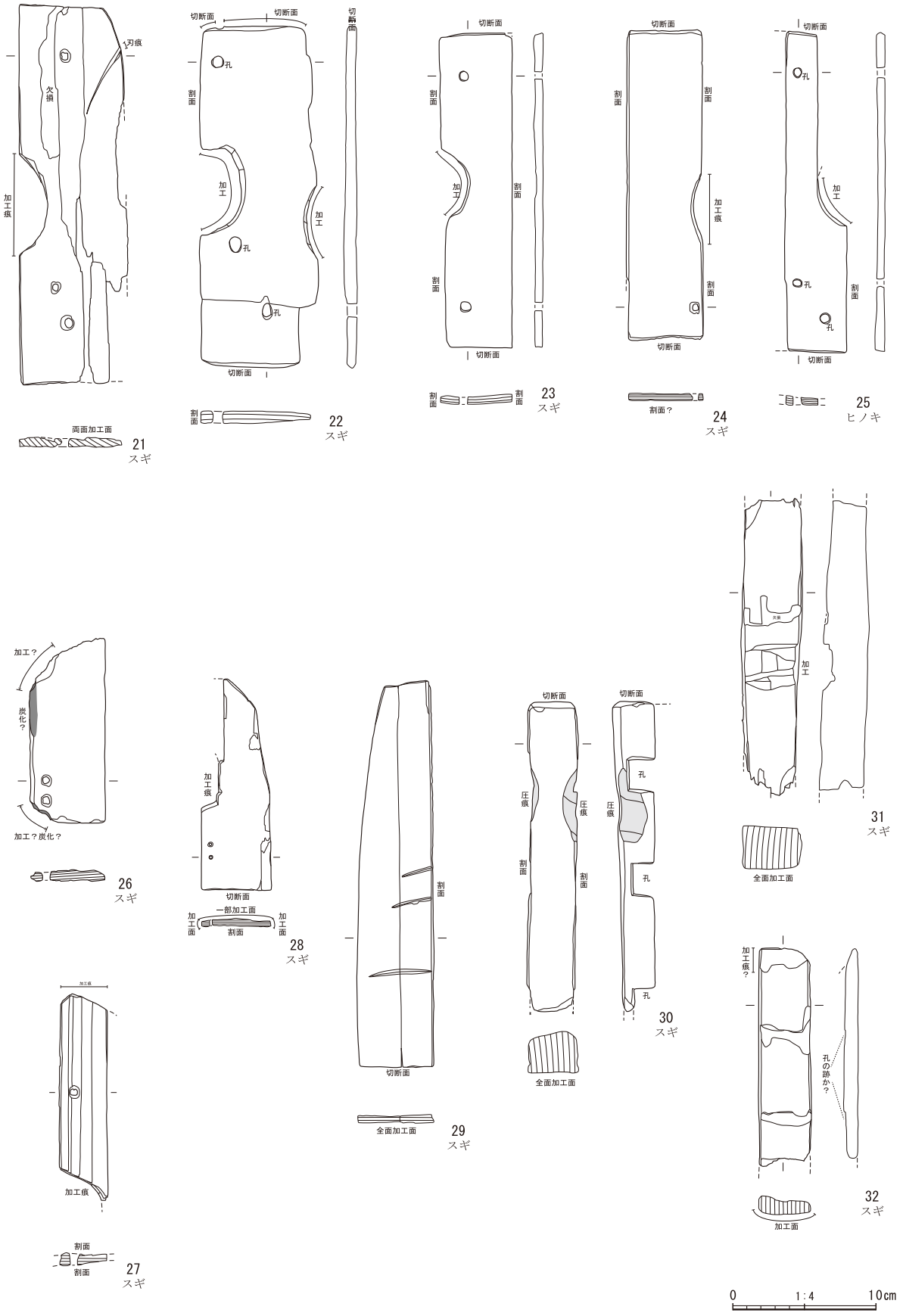
第 37 図　出土遺物実測図 1



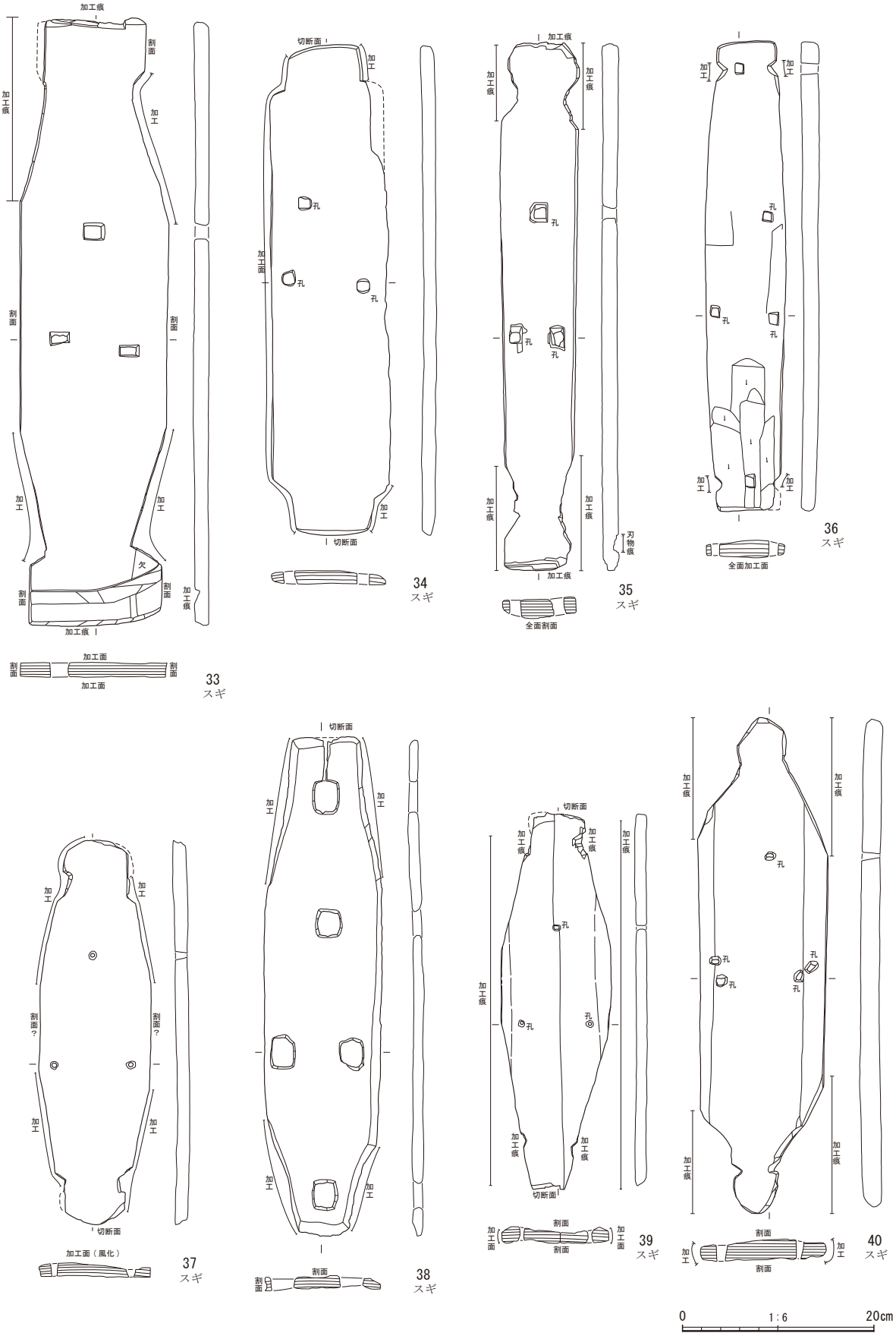
第 38 図　出土遺物実測図２



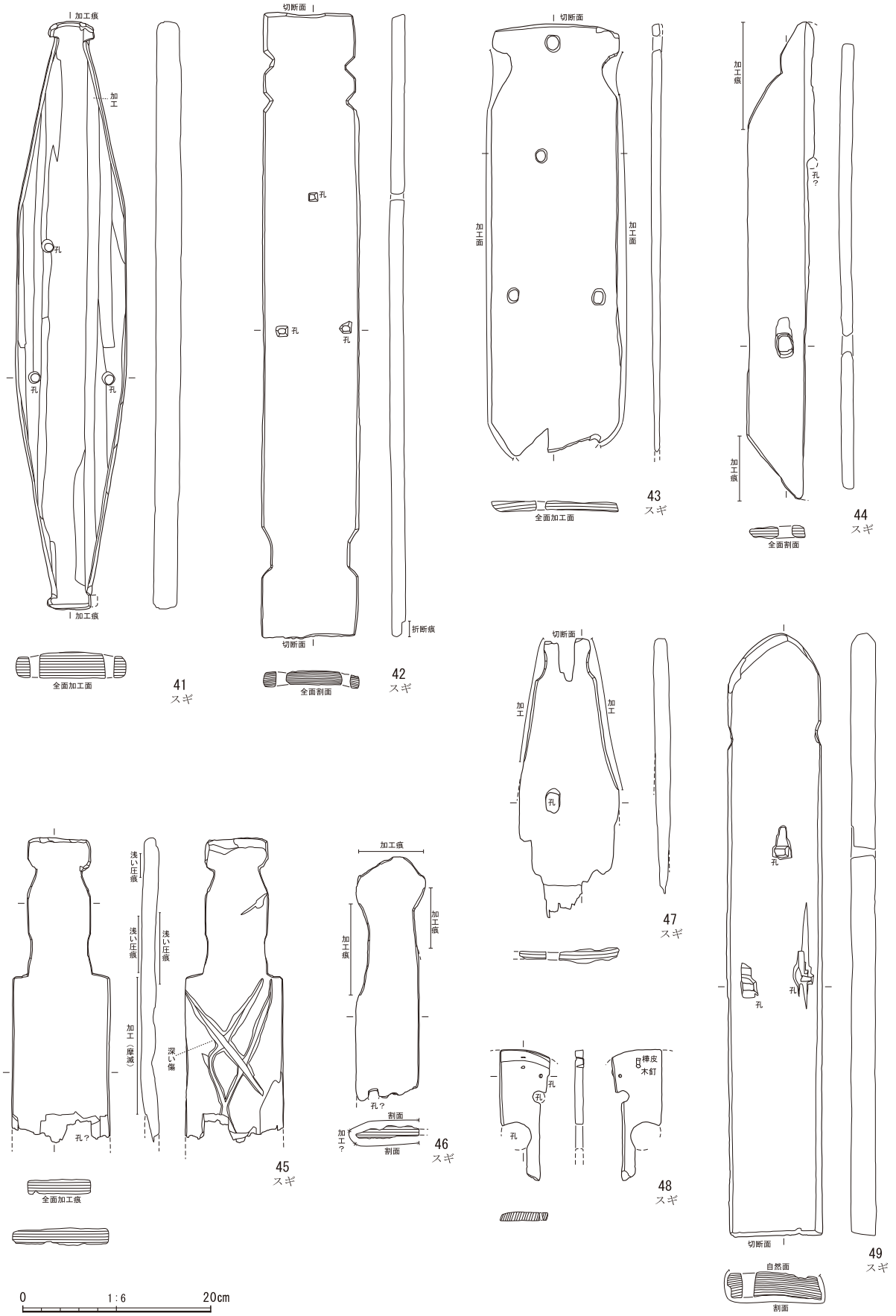
第 39 図　出土遺物実測図３



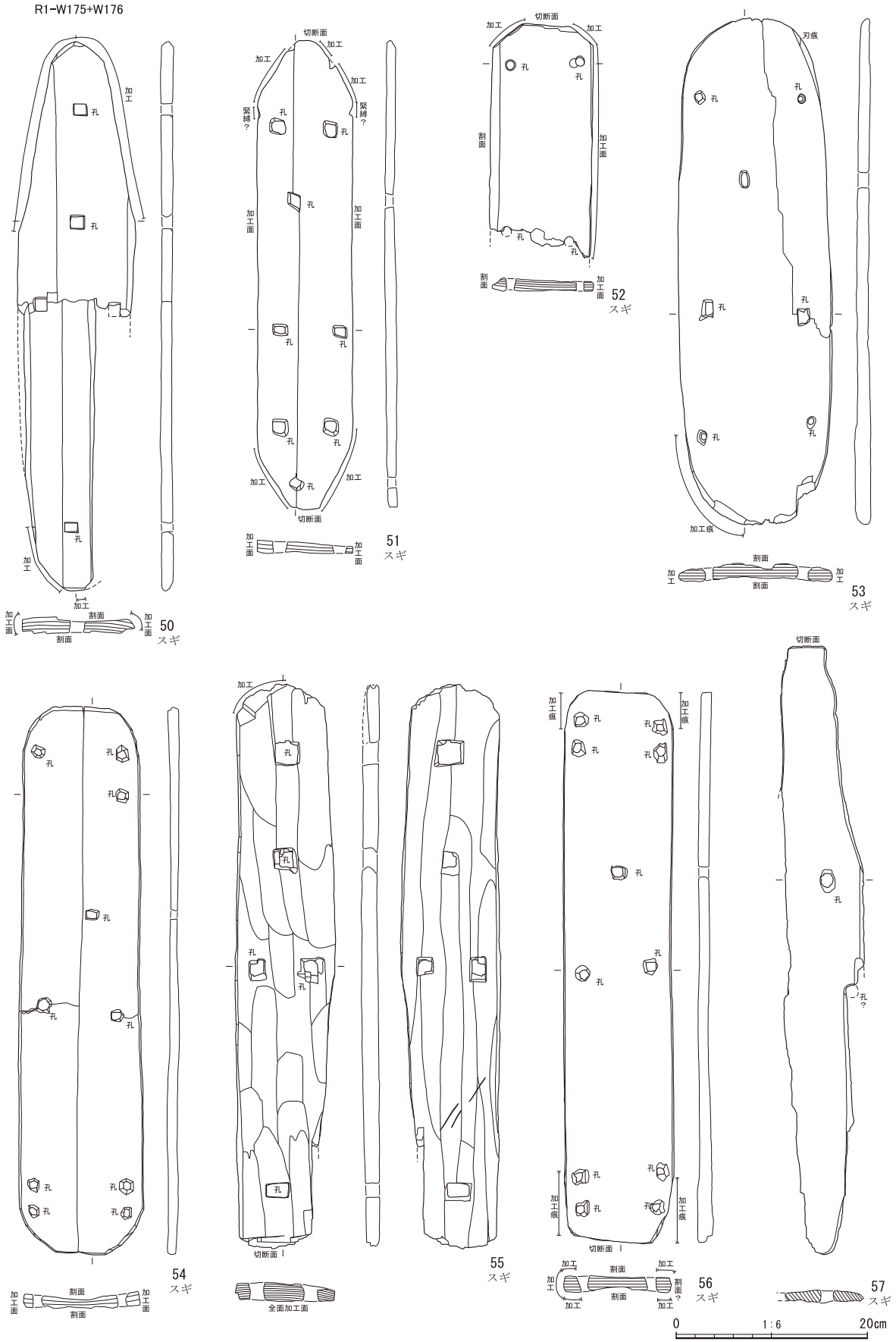
第 40 図　出土遺物実測図４



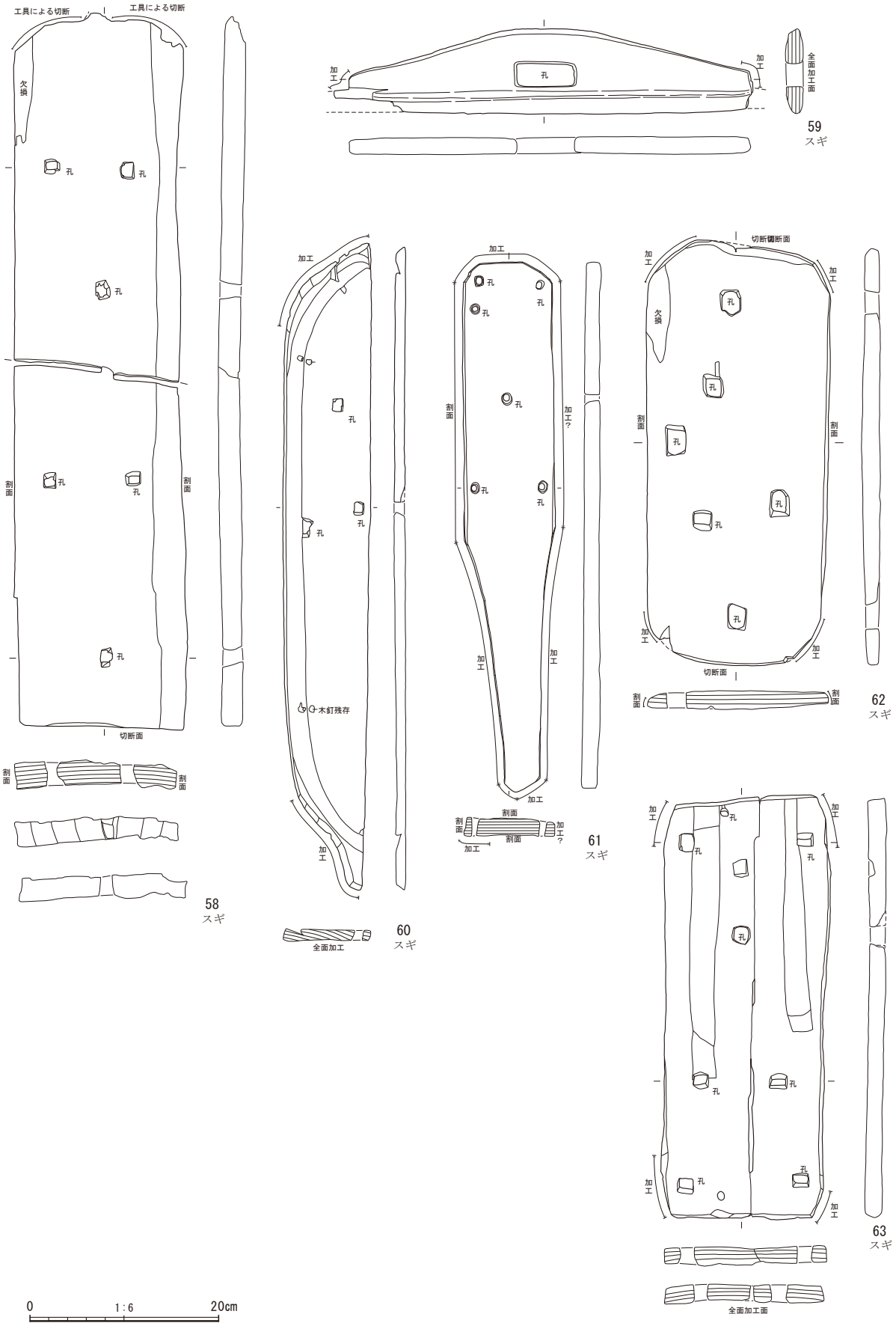
第 41 図　出土遺物実測図５



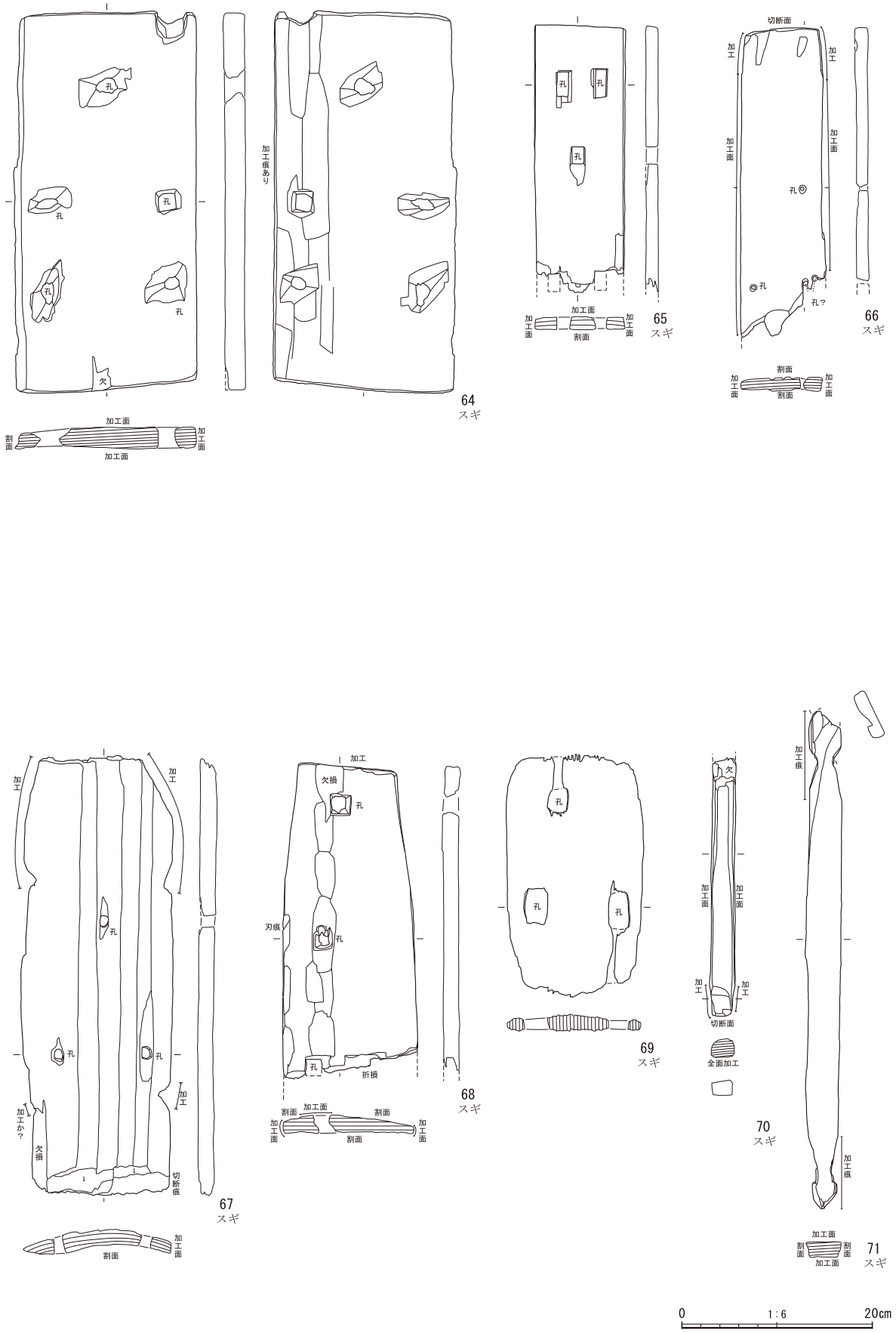
第 42 図　出土遺物実測図６



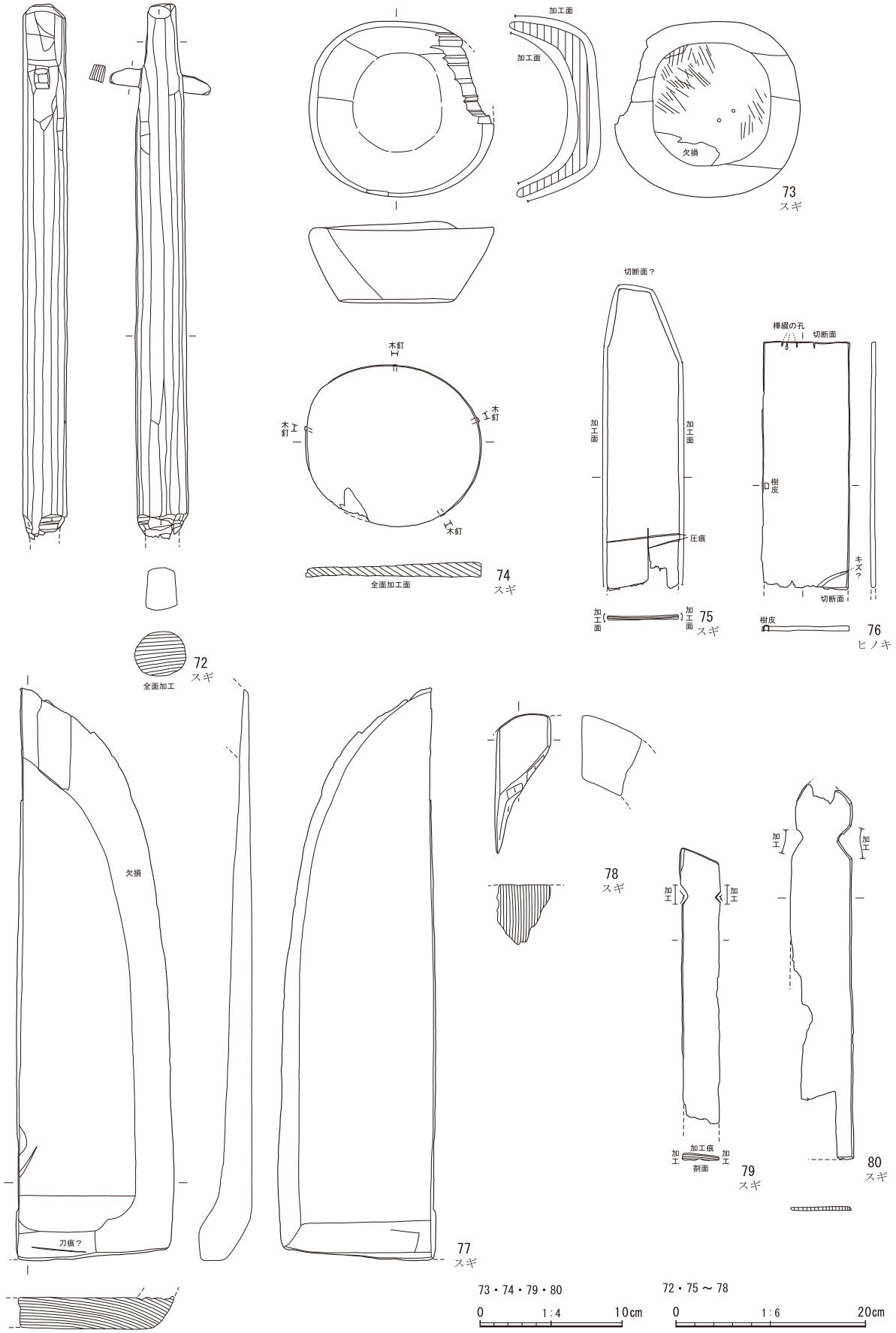
第 43 図　出土遺物実測図７



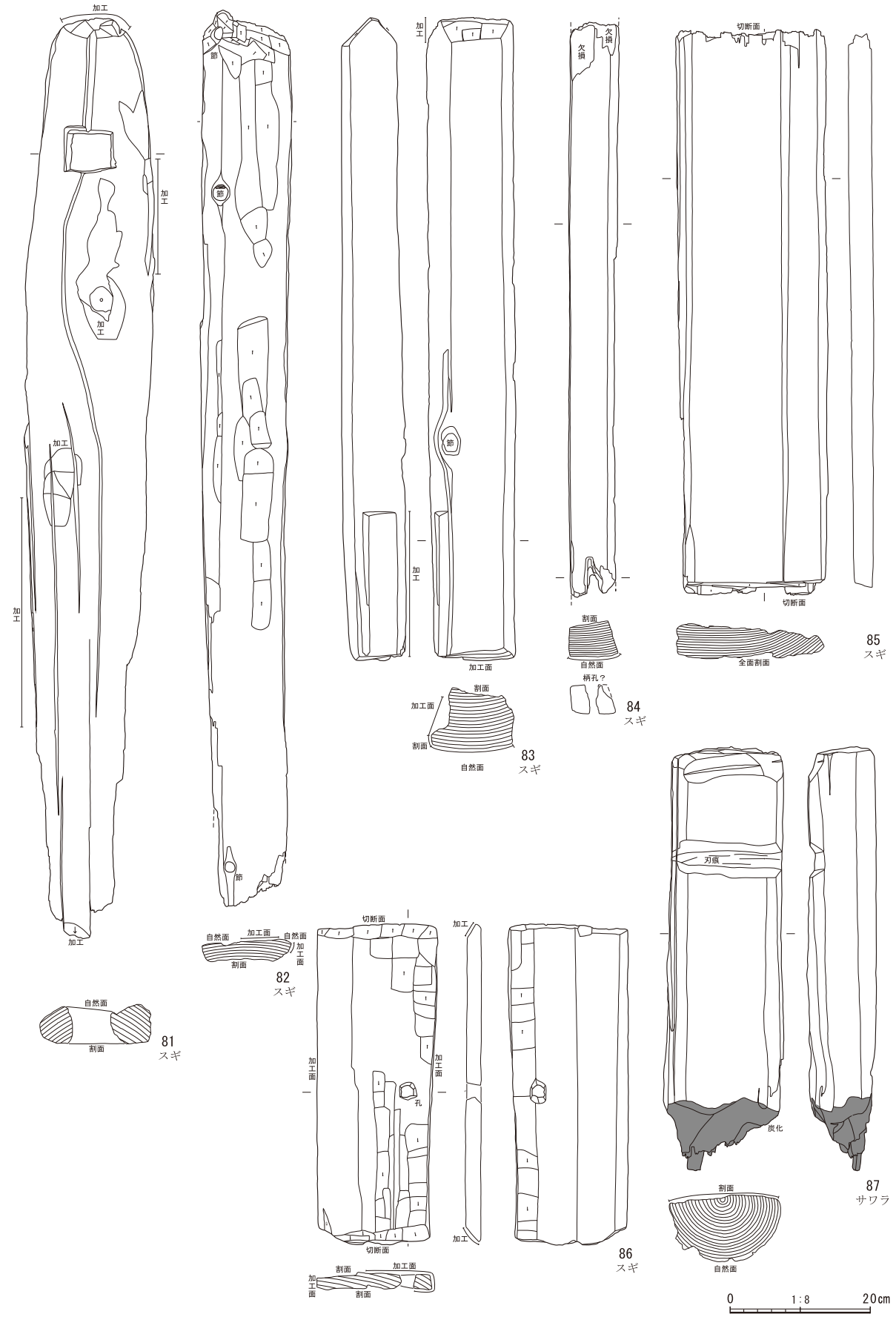
第 44 図　出土遺物実測図８



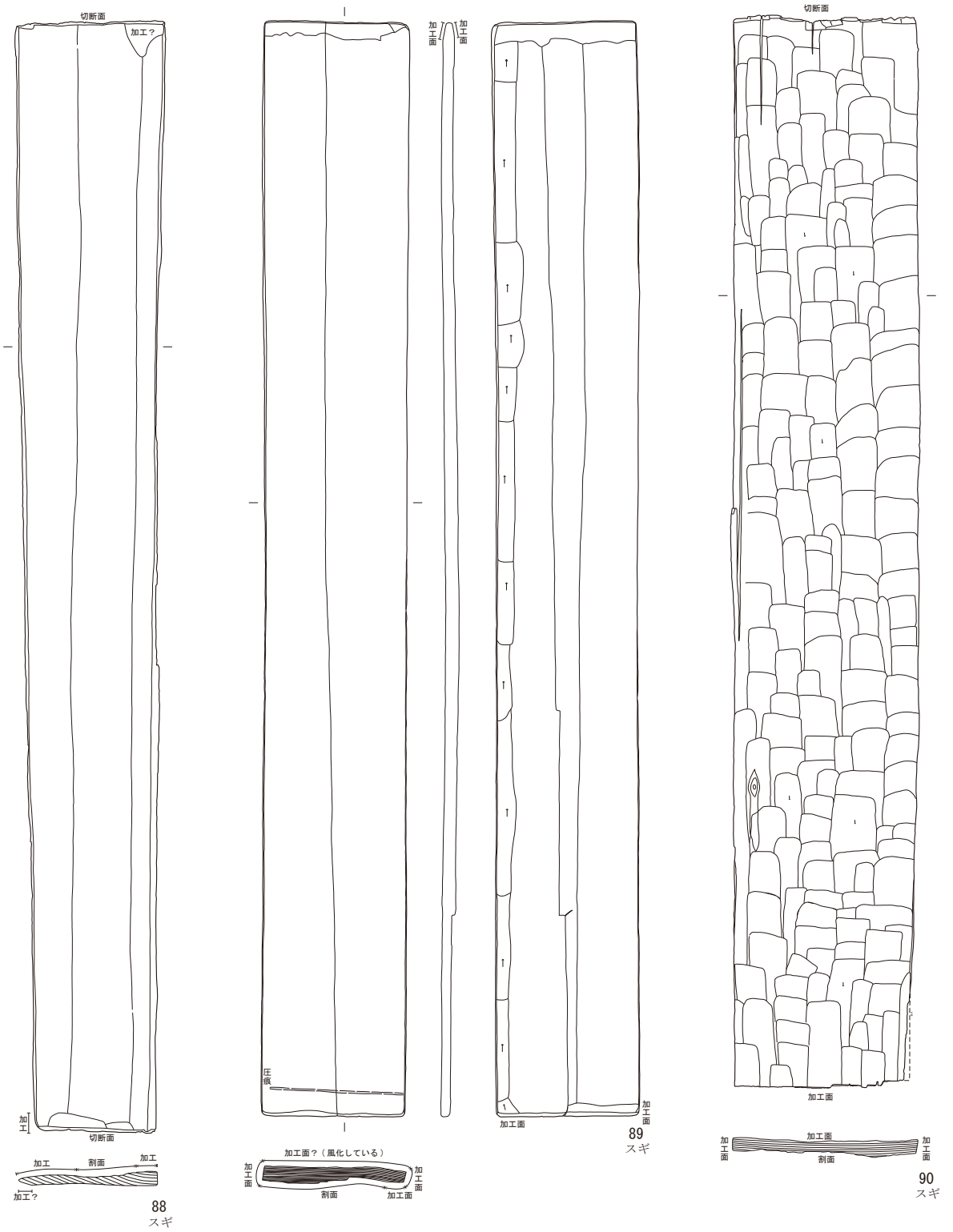
第 45 図　出土遺物実測図９



第 46 図　出土遺物実測図 10

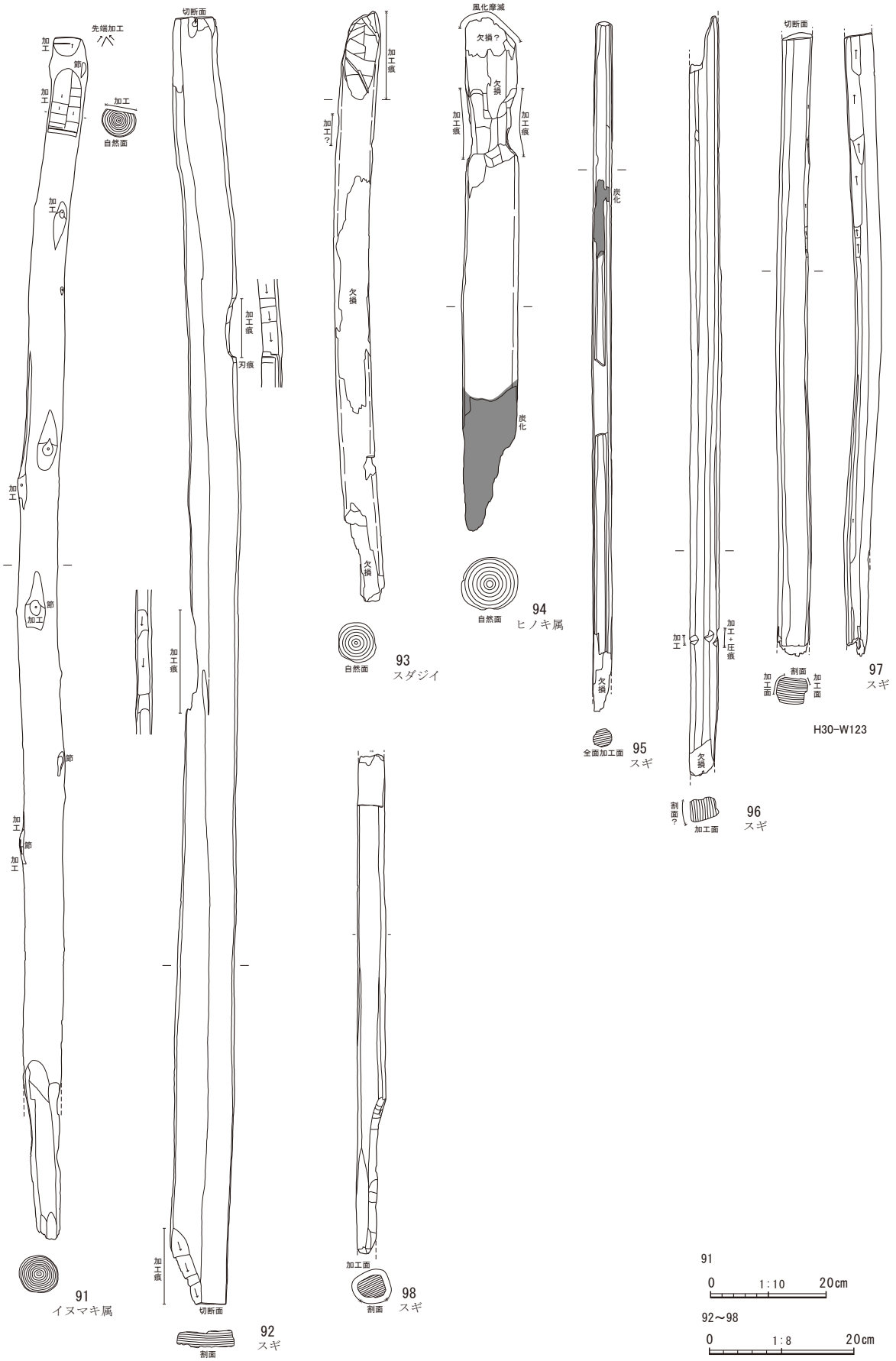


第 47 図　出土遺物実測図 11

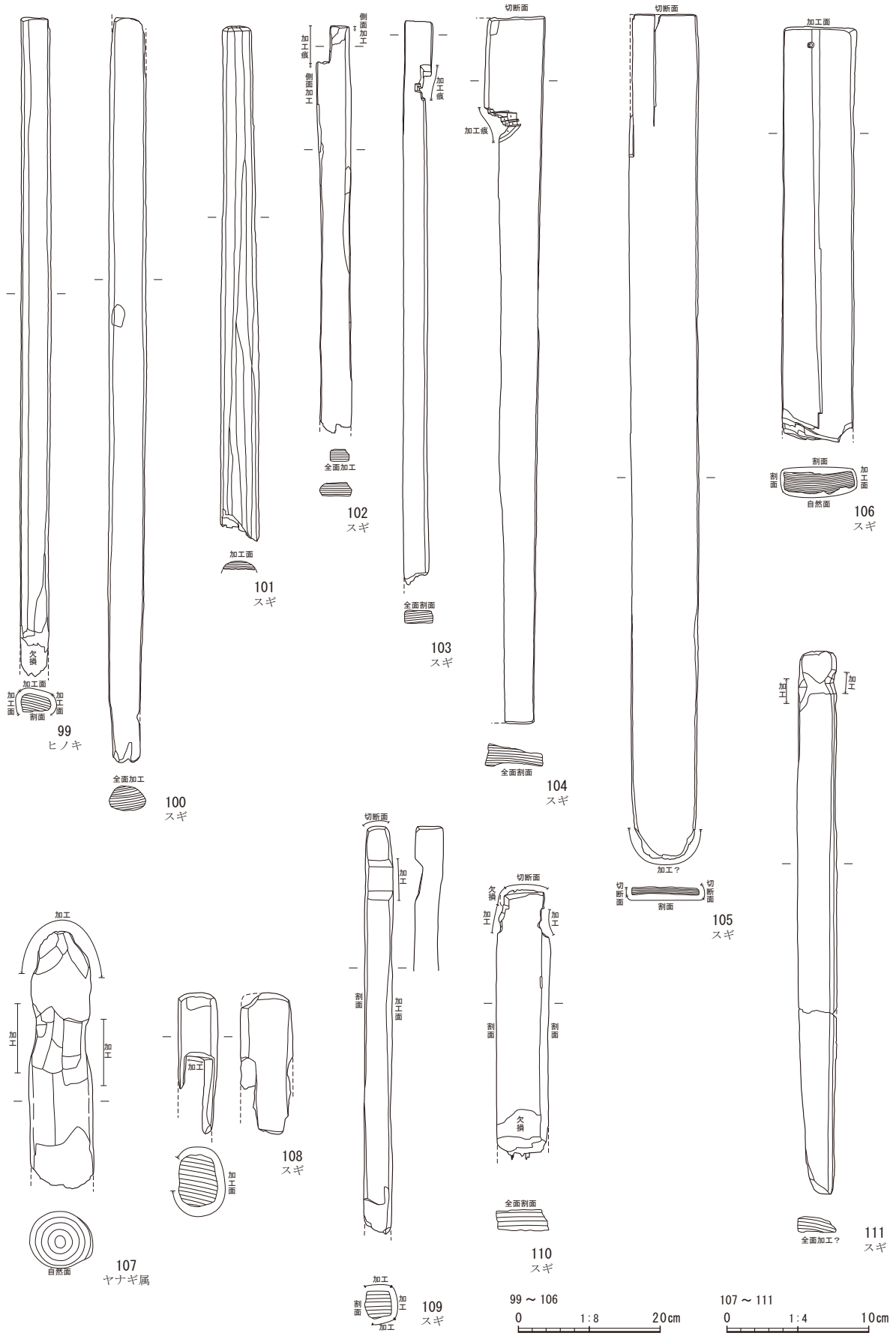


0　1:8　20cm

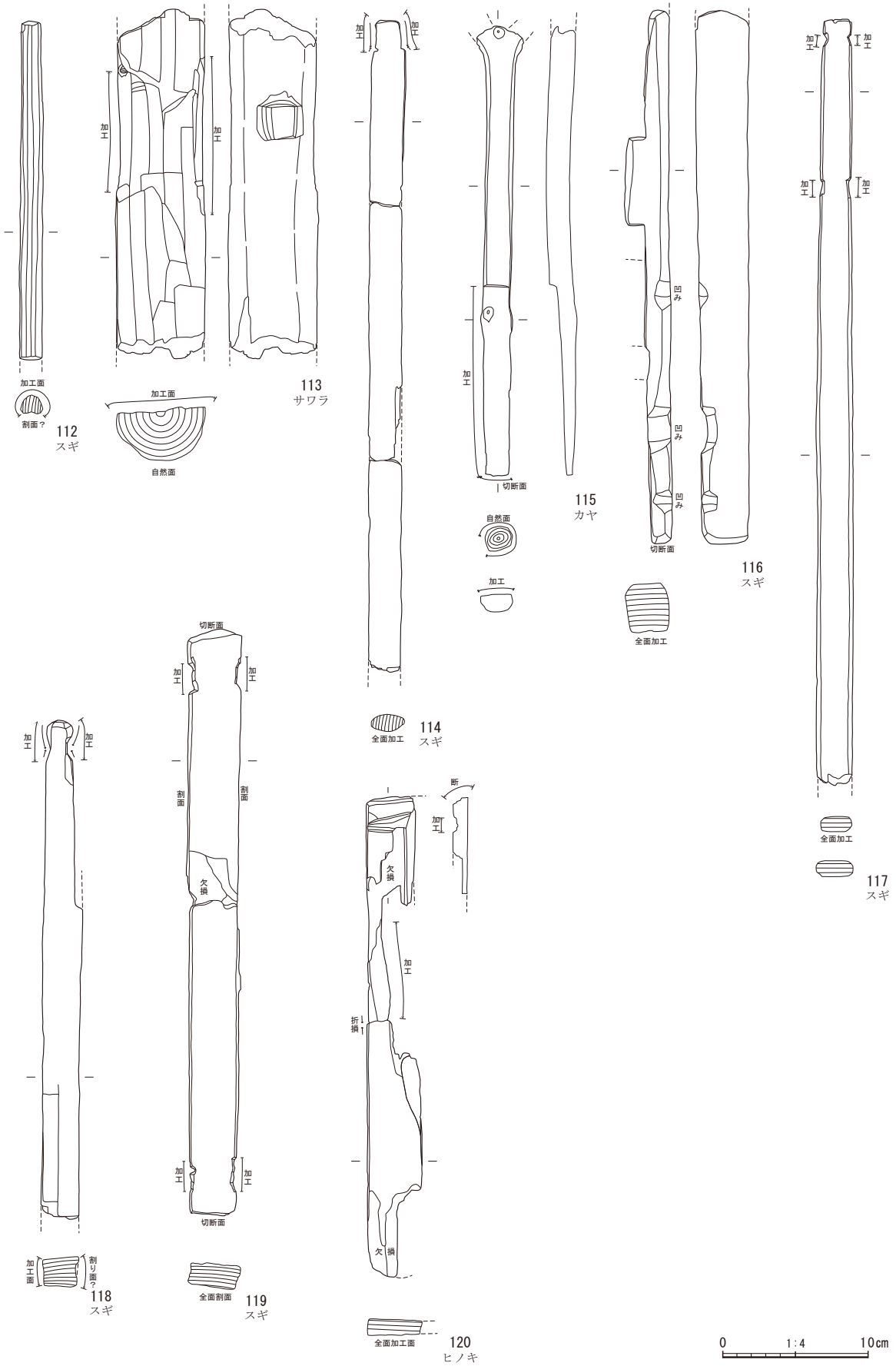
第 48 図　出土遺物実測図 12



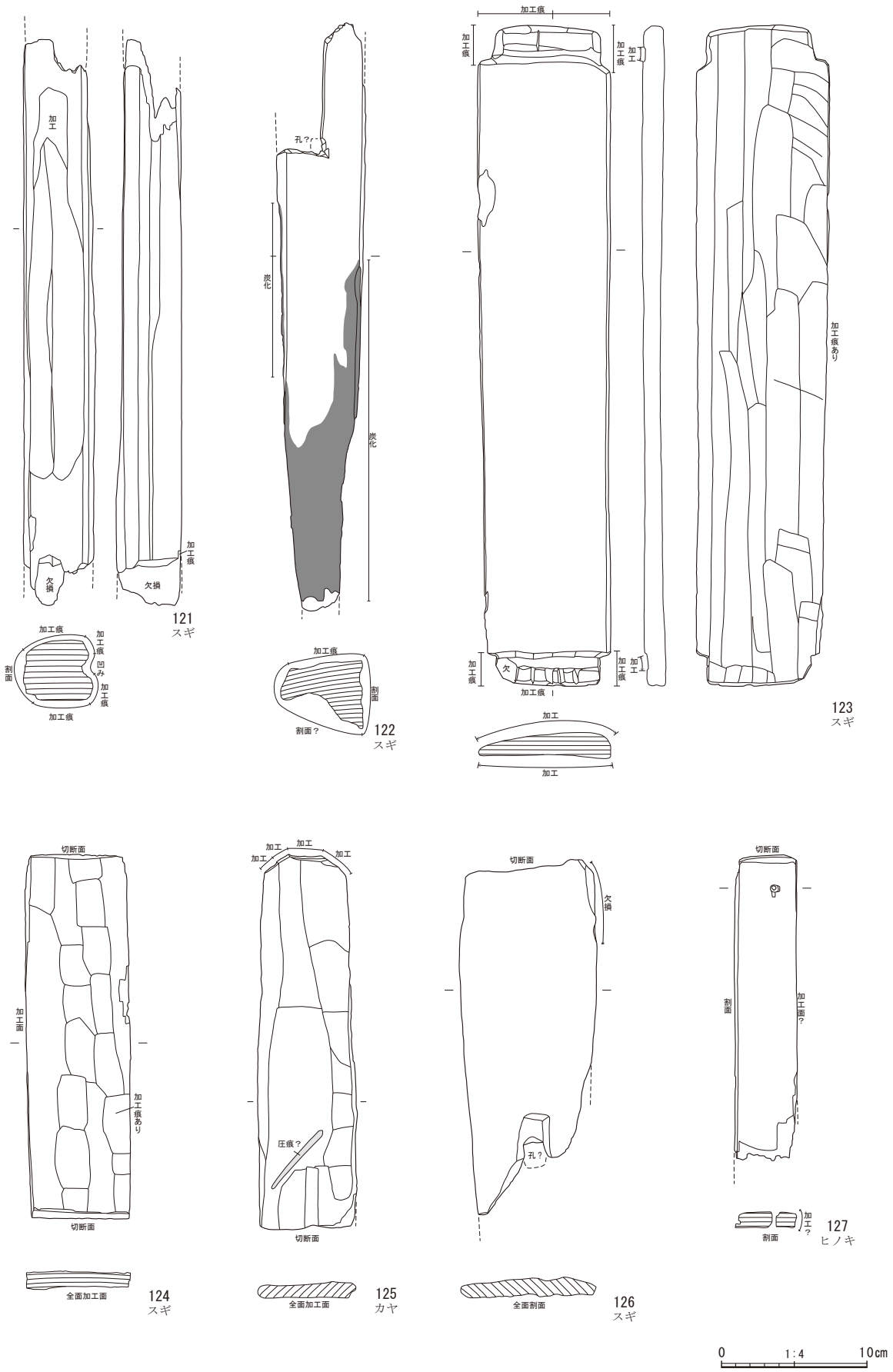
第 49 図　出土遺物実測図 13



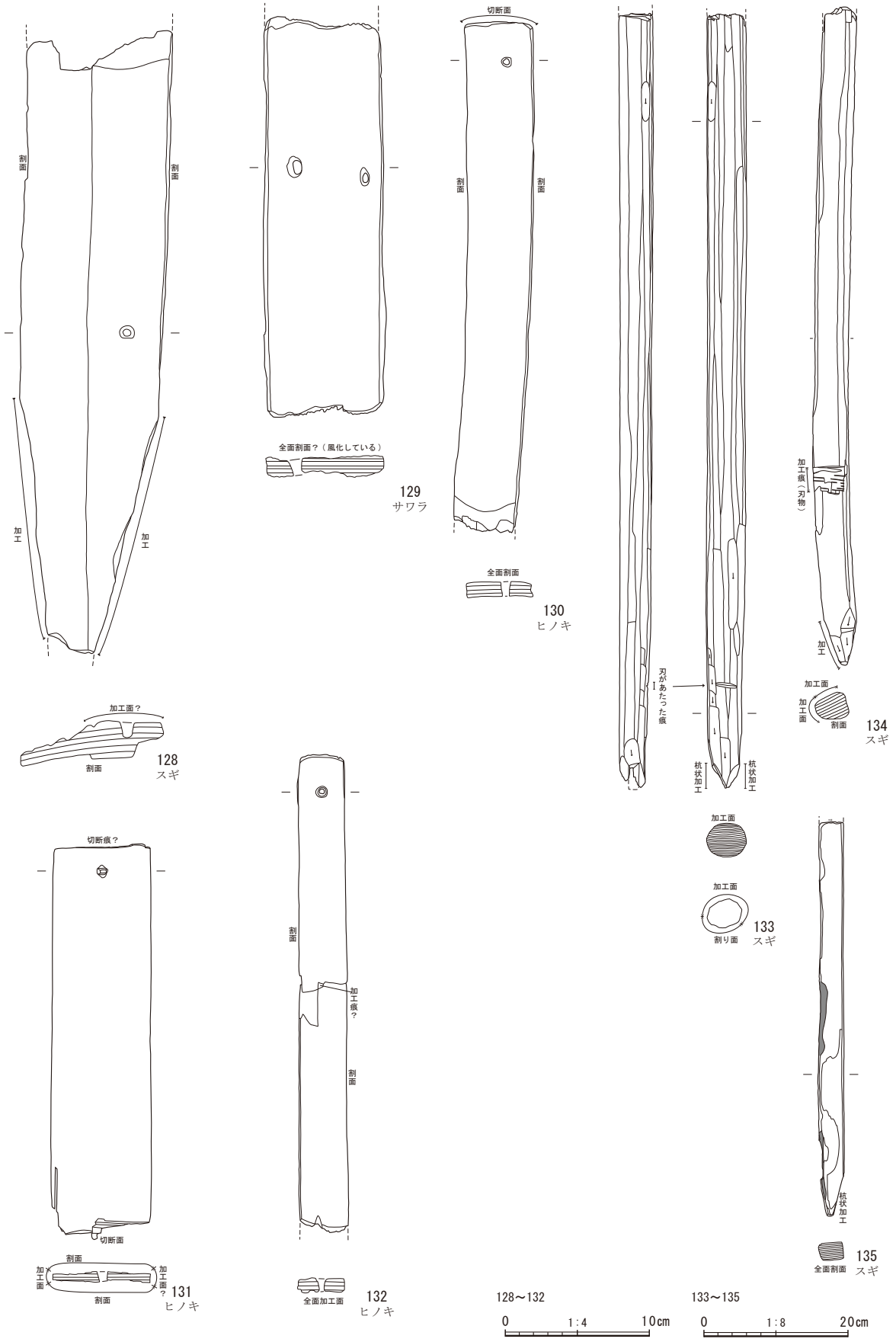
第 50 図　出土遺物実測図 14



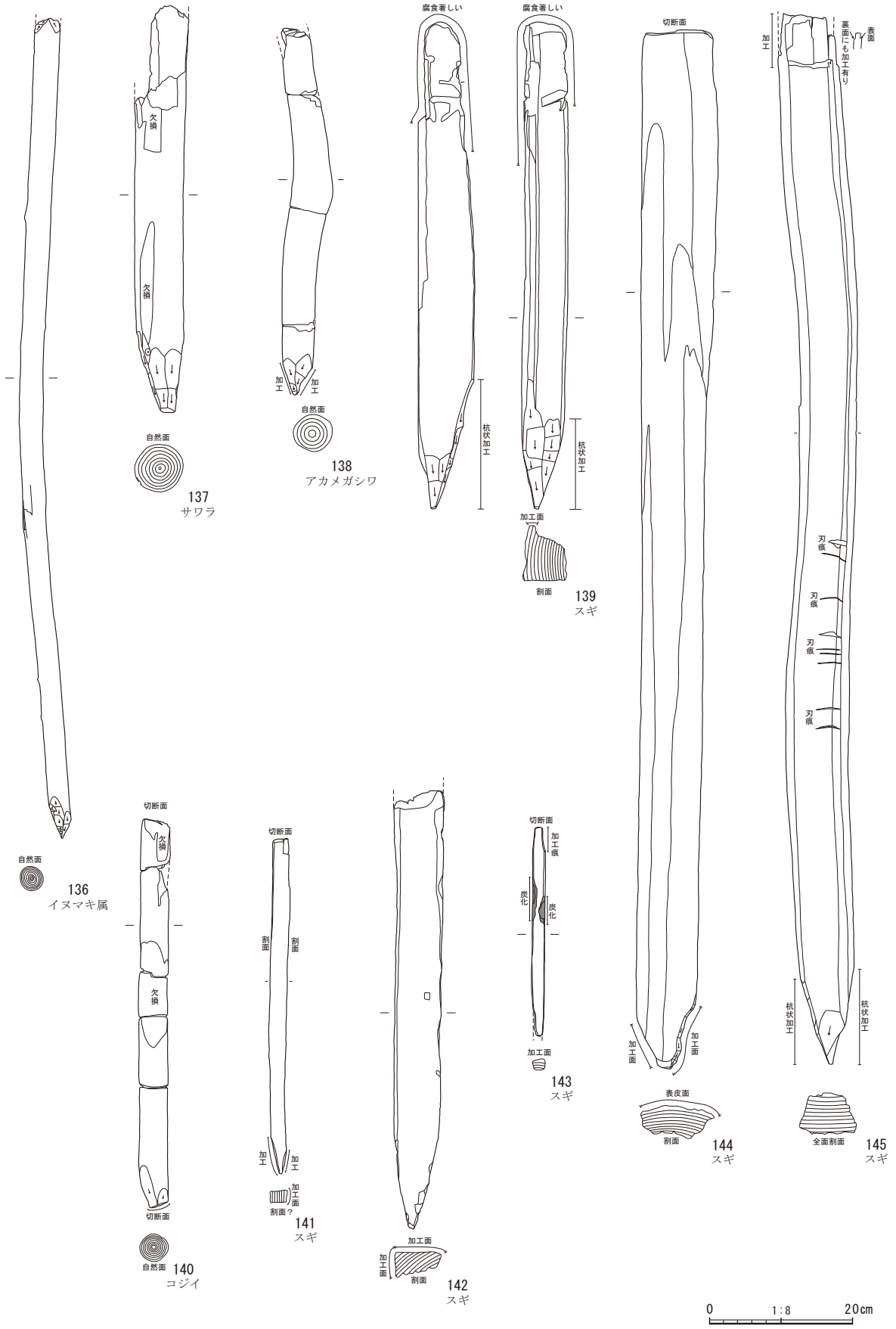
第 51 図　出土遺物実測図 15



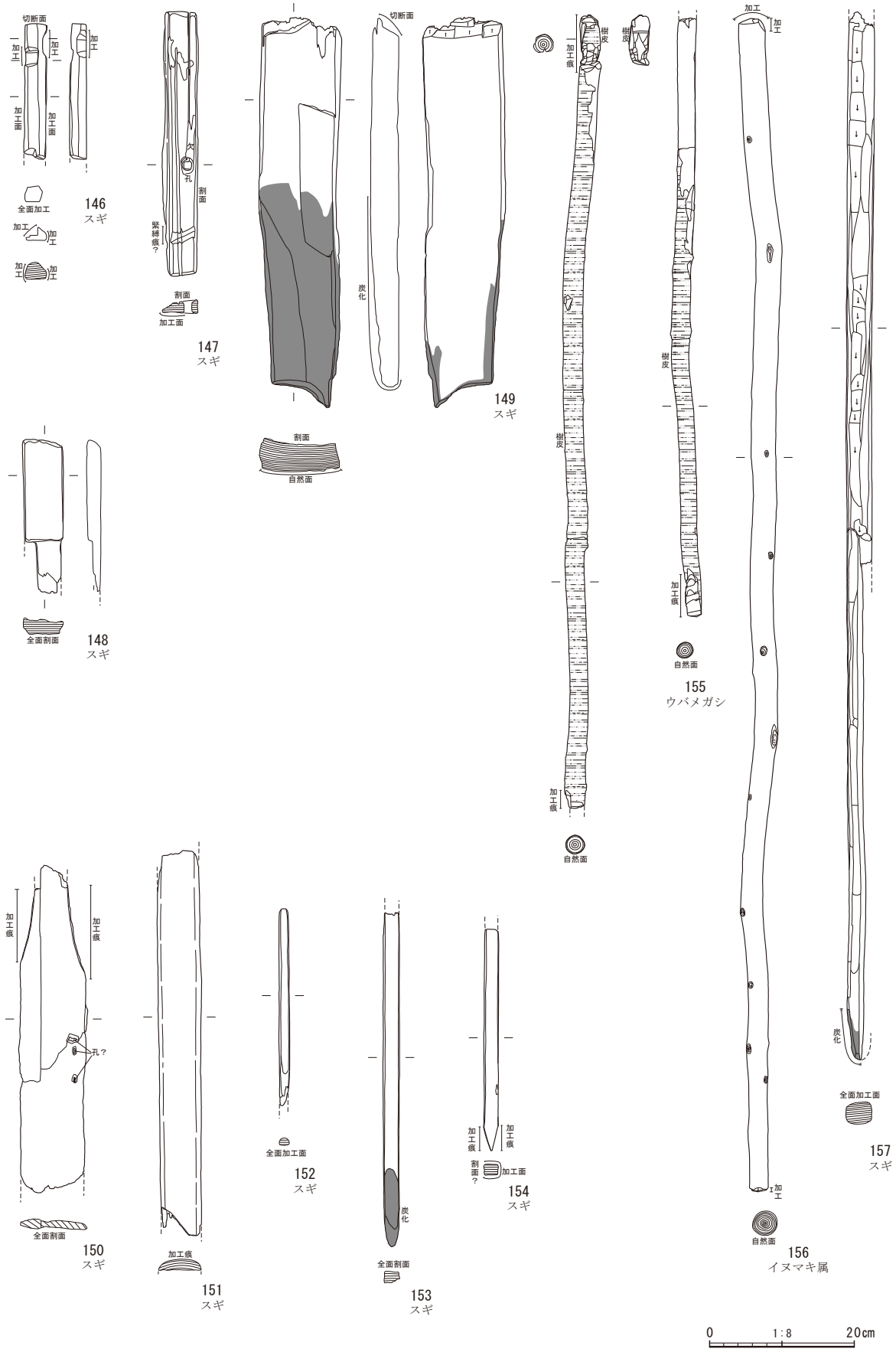
第 52 図　出土遺物実測図 16



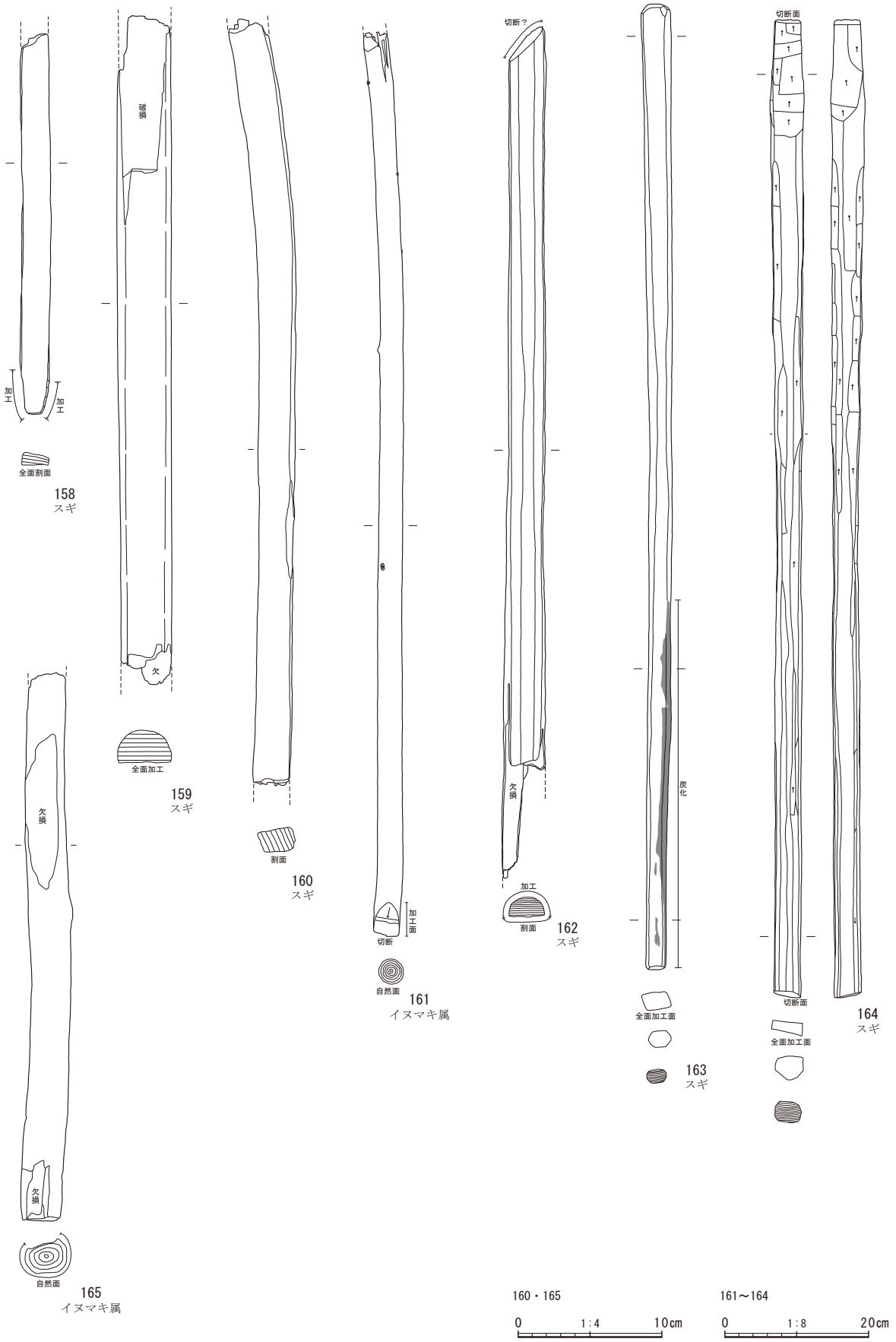
第 53 図　出土遺物実測図 17



第 54 図　出土遺物実測図 18



第 55 図　出土遺物実測図 19



第 56 図　出土遺物実測図 20

第５章　まとめ

第１節　条里制水田について－これまでの成果をふまえて－

上土遺跡の発掘調査は、過去における複数箇所の調査で奈良時代に整備された条里制水田の広がりが確認されてきたが、それが北側にどこまで及ぶかという問題に主眼が置かれた。

今回の発掘調査計画は、平成 29 年度と平成 30 年度、平成 31 年度（令和元年度）の３年間をかけて、本発掘調査を行うこととなった。これまでに確認された大畦畔は、北から西へ 39 度傾く方向の条里計画線に沿って構築されたことが分かっている。立石エリアの調査区も、これに基づいて設定され、大畦畔が想定される位置へ、１区から４区まで分割した。

平成 29 年度に行われた１－１区では東西方向の大畦畔（畦畔１）が検出され、平成 30 年度に西側に隣接する２区で畦畔１から続く大畦畔（畦畔３）が見つかっている。同年度に実施した１－２区の調査では、畦畔１と交差する南北方向の大畦畔（畦畔２）も検出した。続く平成 31 年度（令和元年度）は１－３区で畦畔２から続く大畦畔（畦畔４）を検出した。また同区では　畦畔４と並行する小畦畔（畦畔５）も確認した。３区では東西方向の大畦畔（畦畔６）を調査した。４区は後世の地盤改良による攪乱が酷く、畦畔の検出も危ぶまれたが、調査区の北端で、東西方向の大畦畔（畦畔７）を確認することができた。

３年間の調査成果として、条里制水田は麻機沼の近くまで広がり、条里型地割が存在することが明らかとなった（第 57 図）。大畦畔は北側から北西側へと、さらに広がっていく可能性が高いと言える。

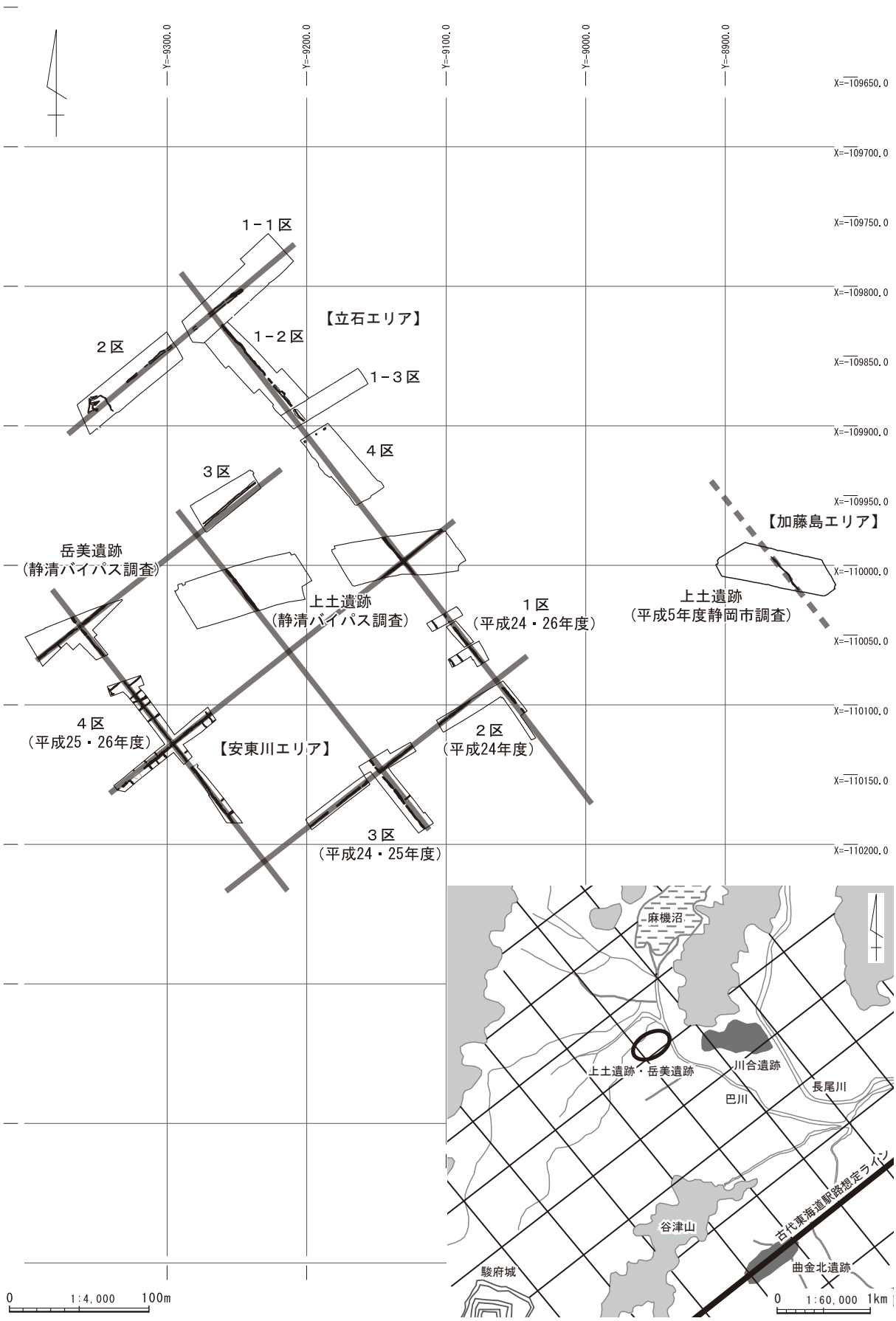
一方、東側は、平成５年に静岡市教育委員会が発掘調査した加藤島エリアで、大畦畔が見つかっている。ここから東は南沼上丘陵の南裾に広がる川合遺跡群が展開する。川合遺跡群は安倍郡衙関連遺跡として知られており、ここでも条里制水田が見つかっている。さらに長尾川を越えて東側にある瀬名遺跡でも大畦畔は確認されている。

西側に転じれば、上土遺跡に隣接する岳美遺跡や賤機丘陵の東裾にある池ヶ谷遺跡にも条里制水田がある。静岡平野の北部・中部の条里については、当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が 1996 年に刊行した『上土遺跡（立石地区）Ⅱ（遺構編）』の第 209 図に埋没条里と地籍図に残された表層条里について図示され、詳細な考察が書かれている。今回の調査は、これより北側に続く埋没条里を検出したことが、最大の成果と言える。

第２節　出土遺物について

上土遺跡の出土品は、水田という生産域であることから、集落域とは異なり、生活用具の主体である土器や石製品、鉄製品は非常に少なく、ここでの主体は木製品であった。多くの木製品は大畦畔の補強のために埋め込まれているか、大畦畔の近辺、または水田覆土から出土した。特に２区の西端では、木製品が集中して出土した地点を検出した（第 23 図）。２区の大畦畔（畦畔３）の延長線上にあたる場所ではあるが、畦畔は確認されてはいない。木製品はいずれも大型で、建築部材の壁板等に用いられていた可能性がある。おそらくは大畦畔の構築材として持ち込まれたと想定される。

平成 29 年度から令和元年までの発掘調査では、人為的な加工のある木製品を取り上げ、当センター



第 57 図　これまでの調査との関連性

で保管している。令和２～３年度に行った資料整理で、これらを分類・接合した後に図化し、写真撮影をした。資料整理の結果、出土した木製品の構成は、これまでの調査で出土した木製品のそれと、ほぼ同様であった。最も多く見られた木製品は、やはり生産域という場所柄、円枠型田下駄や角枠型田下駄と泥除け等の農耕土木具であった。次いで、畦畔を構築するために転用された建築部材や、杭等の土木材が出土した。一方で、生活用具は極端に少ない。しかし、火切り臼や火切り杵（第 38 図５・10）は、今回の調査に限らず、過去の調査でも出土している。集落ではない生産域と言う場所で発火具が出土する、その出方に意味があるのかもしれない。

今回、特に注目されたのは鎌である。木柄に鉄製の鎌刃が装着された状態で出土した（図版 13 －４）。使用状態で出土する鎌は、出土例が少ない。また装着状態が詳細にわかる資料としても貴重な発見となった。さらに鎌刃と木柄を固定させるために、別材の楔が両面に咬ませてあったことも明らかになった（第 37 図３　図版 15）。装着状態を示す鎌が出土する機会も希少であるが、今後、発見の折には、楔の存在に注意が必要であろう。

木製品の約９割がスギ材であることも、これまでの静岡平野の傾向と同じである。田下駄や泥除けには、暗黙の規範があるかのようにスギ材を選択して使っている。一方、建築部材の垂木はイヌマキ属を使い、曲物の側板にはヒノキ、杭等は雑木といった、明確な用材選択がなされていたことが樹種同定結果に表れている（第５章　第９・10 表、第６章　第１節）。スギ材のほかにヒノキ材やサワラ材が含まれることがある。特にサワラは中部高地でよく見られる針葉樹材で、スギやヒノキの代わりに使用されている。こうした素材は、製品として持ち込まれているのか、素材として持ち込まれているのか、今後、検討を要するであろう。

製品ではなく、原木の状態で水田に持ち込まれた木もある。２区の大畦畔（畦畔３）の下で、第 13 層にめり込んだ状態で、ヒノキの原木が出土した（第 21 図　図版 31）。原木には切り出されたときの工具痕跡が残っているが、目的・用途は、はっきりとしない。

円枠型田下駄や角枠型田下駄の足板については、過去の岳美遺跡において詳細な形態分類がなされており、今回の出土品では、それに照らし合わせた。泥除けについても同様である。

なお、今回の発掘調査で出土した木製品は全て、樹種同定を行っている。樹種同定は東北大学名誉教授の鈴木三男先生にお願いした。報告書に掲載した木製品は第６章第１節にて樹種の同定結果を報告し、観察表へ樹種名を記載した（第９表）。本節では報告書に掲載しなかった木製品とその樹種同定結果の一覧表を掲載した（第 10 表）。

参考文献

天石夏実　1995 「南沼上古墳群」『ふちゅーる』№.３　静岡市教育委員会

石川昌之　1999 「田成ケ谷古墳群」『ふちゅーる』№.７　静岡市教育委員会

伊東隆夫・山田昌久編　2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース』 海青社

加藤芳朗　1993 「静岡県・池ヶ谷遺跡をめぐる地形・地質的背景」『池ヶ谷遺跡Ⅱ（自然科学編）』第 46 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1985 『宮下遺跡（遺構編）』第９集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986 『内荒遺跡（遺構編）』第 10 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989 『川合遺跡（遺構編）図版編』第 21 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990 『川合遺跡（遺構編）本文編』第 25 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991 『川合遺跡　八反田地区Ⅰ』第 33 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992 『池ヶ谷遺跡　遺構編Ⅰ』第 38 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993 『池ヶ谷遺跡Ⅱ（自然科学編）』第 46 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995a 『岳美遺跡Ⅰ（遺構編）』第 60 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995b 『川合遺跡　八反田地区Ⅱ（本文編）』第 63 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996a 『池ヶ谷遺跡　Ⅳ』第 76 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996b 『上土遺跡（立石地区）Ⅰ（遺構編）』第 77 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998 『川合遺跡 志保田地区』第 102 集
佐藤達雄　1990 「安倍川流域の古墳群」・「巴川・庵原川流域の古墳群」『静岡県史　資料編２考古二』
静岡県　1930 『静岡県史』第一巻
静岡県　1931 『静岡県史』第二巻
静岡県教育委員会　1994 『静岡県埋蔵文化財年報（平成３年度）』
静岡県教育委員会　2001 『静岡県の前方後円墳－資料編－』
静岡県教育委員会文化財保護課　2017 『静岡県文化財年報（平成 28 年度）』
静岡県教育委員会文化財保護課　2018 『静岡県文化財年報（平成 29 年度）』
静岡県考古学会　2003 『静岡県の横穴式石室』
静岡県埋蔵文化財センター　2017 『上土遺跡・岳美遺跡』第 54 集
静岡市教育委員会　1993 『有永１号墳』静岡市埋蔵文化財調査報告 31
静岡市教育委員会　1999 『惣ヶ谷古墳群』静岡市埋蔵文化財調査報告 53
静岡市立登呂博物館　1990 『特別展　静岡・清水平野の古墳時代』
鈴木悦之　1995 「上土遺跡（第２次調査）」『ふちゅーる』№３　静岡市教育委員会
鈴木一有・田村隆太郎編　2019 『賤機山古墳と東国首長』（『季刊考古学』別冊 30）雄山閣
鈴木一有　2019 「東海地方における古墳時代後期の地域社会」（前掲『賤機山古墳と東国首長』掲載）
滝沢誠・久永雅宏　2018 「静岡市麓山神社後古墳出土の石枕」『静岡県考古学研究』№.49
中野宥　1985「静岡市域の古墳の分布について（前）」『静岡県博物館協会学芸職員研究紀要』８昭和 59 年度
農林水産省農林水産技術会議事務局他監修　1999 『新版　標準土色帖　1999 年版』
長谷川秀厚　2003 「駿府場内遺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』第 57 集　静岡県教育委員会
平野吾郎　1990 「川合遺跡」「内荒遺跡」「駿河国府跡」『静岡県史　資料編２　考古二』静岡県
八木広尚　1995 「上土遺跡（第３次調査）」『ふちゅーる』№３　静岡市教育委員会
矢田勝　2015 「五畿七道の条里　２　東海道　駿河」『古代の都市と条里』 吉川弘文館
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992 『瀬名遺跡Ⅰ（遺構編Ⅰ）本文編』第 40 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994 『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）本文編』第 47 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ）本文編』第 79 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995 『池ヶ谷遺跡Ⅲ（遺物編）』第 62 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『曲金北遺跡（遺構編）』第 68 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997 『曲金北遺跡（遺物・考察編）』第 92 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『岳美遺跡Ⅱ（遺物編）』第 75 集
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『上土遺跡（立石地区）Ⅱ（遺物編）』第 78 集
静岡県埋蔵文化財センター　2012 『曲金北遺跡Ⅱ』第 16 集
静岡市教育委員会　2015 『曲金北遺跡（第 18 次）』静岡市埋蔵文化財調査報告書

第６表　出土土器観察表

番号	図版番号	区	出土位置	種別	器種名	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	色調	焼成	備考
1	15	3	畦畔裾　12a 層	須恵器	坏身	10	(13.0)	(3.2)	灰色 N 6/	良	

第７表　出土石製品観察表

番号	図版番号	区	出土位置	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
2	15	1-1	畦畔１　盛土内	台石・砥石	21.2	10.5	8.0	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取	備考
3	15	2 区	西端部 Tr 16 層下部	農耕土木具	鎌	鉄製鎌柄	組合わせ（柄）	カキノキ属	刃:26.9 柄:(33.4)	刃:2.95 柄:4.4	刃:0.25 柄:1.8	柾目	
4	16	3 区	畦畔上部	工具	発火具	付け木	-	ヒノキ	53.2	1.9	1.1	板目	先端炭化
5	16	2 区	疑似畦畔？基盤	工具	発火具	火切杵	-	スギ	37.9	1.45	1.2	柾目	炭化
6	16	1-2 区	13 b 層	工具	発火具	付け木	-	ヒノキ	15.6	1.6	1.05	板目	炭化
7	16	1-1 区	14 層	工具	発火具	火切杵	-	スギ	(15.6)	1.55	1.35	板目	炭化
8	16	3 区	畦畔内	工具	発火具	付け木？	-	サワラ	(14.9)	4.2	1.95	追柾目？	炭化
9	16	1-2 区	畦畔裾	工具	発火具	付け木	-	スギ	(27.5)	3.35	0.65	板目	炭化
10	16	2 区	疑似畦畔？基盤	工具	発火具	火切臼	-	スギ	(27.2)	2.0	1.2	柾目	炭化
11	16	1-1 区	14 層	農耕土木具	鍬	柄？	-	スギ	(88.2)	4.1	3.6	板目	
12	16	1-2 区	13 b 層	用途不明品	その他・不明	その他・不明	-	スギ	(85.7)	6.5	2.8	板目	
13	16	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	鍬	柄？	-	アカガシ亜属	(69.4)	3.9	3.05	柾目	
14	16	2 区	17 b 層上部	農耕土木具	鍬	柄？		スギ	(42.8)	2.8	2.5	板目	
15	17	3 区	12 a 上層	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	23.5	7.7	0.9	板目	
16	17	2 区	14 層上面	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	25.6	7.5	0.7	板目	
17	17	1-2 区	13 b 層	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	19.9	7.5	0.8	板目	
18	18	1-2 区	畦畔最上部	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	21.2	7.05	0.85	板目	
19	19	3 区	12 層上面	農耕土木具	鍬	泥除け？	-	スギ	21.2	8.8	0.8	追柾目	炭化
20	17	1-2 区	13 b 層	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	23.0	7.5	0.8	板目	
21	17	2 区	14 層上部	農耕土木具	鍬	泥除け	-	スギ	26.6	7.6	0.7	追柾目	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
22	17	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	鍬	泥除け	－	スギ	23.9	8.3	0.9	板目	
23	17	1-1 区	14 層	農耕土木具	鍬	泥除け	－	ヒノキ	22.0	5.0	0.5	板目	
24	17	1-2 区	遺構外 14 層上部	農耕土木具	鍬	泥除け？	－	スギ	21.7	5.4	1.55	板目	
25	17	1-1 区	14 層	農耕土木具	鍬	泥除け	－	ヒノキ	22.5	(4.3)	0.5	板目	
26	17	3 区	畦畔真上	農耕土木具	鍬	泥除け？	－	スギ	13.0	5.3	0.8	板目	炭化
27	17	2 区	15 ～ 16 層	農耕土木具	鍬	泥除け？	－	スギ	(14.45)	(3.4)	0.9	板目	
28	17	1-2 区	13 b 層	農耕土木具	鍬	泥除け	－	スギ	22.2	7.4	0.9	板目	
29	17	1-2 区	遺構外 13 b 層最下部	農耕土木具	鍬	泥除け？	－	スギ	27.1	5.4	0.6	板目	
30	18	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	馬鍬	台	－	スギ	(21.7)	3.5	2.9	柾目	
31	18	1-2 区	13 b 層	農耕土木具	馬鍬	台？	－	スギ	(20.7)	4.3	2.9	柾目	
32	18	1-2 区	13 b 層	農耕土木具	馬鍬	台？	－	スギ	(15.25)	3.7	1.3	柾目	
33	18	1-2 区	遺構外 14 層上面	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	63.7	15.6	1.55	板目	W 379 の枠とセット関係 楕円形曲物転用
34	18	1-1 区	14 層	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	踏み板	スギ	51.3	11.9	1.4	板目	
35	18	2 区	調査区西側 Tr 内 16 層最下	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	55.25	8.3	2.0	板目	
36	18	3 区	13 上面	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	49.2	8.5	1.8	板目	
37	18	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	40.2	11.7	1.3	板目	
38	18	2 区	15 ～ 16 層 最上部	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	52.1	12.4	1.4	板目	
39	18	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	39.2	10.6	1.7	板目	
40	18	3 区	13 上面	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	51.9	13.7	2.3	板目	
41	19	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	62.7	11.9	2.8	板目	
42	19	1-1 区	14 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	66.7	9.9	1.5	柾目	
43	19	1-2 区	畦畔裾 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	46.0	13.5	1.0	板目	
44	19	4 区	12 層上部	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	50.8	7.2	1.4	板目	
45	19	1-2 区	畦畔内 17 b 層上面	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	(32.5)	10.5	1.85	板目	
46	19	3 区	畦畔上部	農耕土木具	田下駄？	円枠型田下駄	踏み板	スギ	(26.0)	(7.5)	1.4	板目	
47	19	1-1 区	14 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	(29.8)	(10.6)	1.4	板目	
48	19	2 区	13 b 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄？	踏み板？	スギ	(13.9)	(5.3)	0.9	追柾目	樺皮・木釘
49	19	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	64.3	10.2	2.6	柾目	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
50	19	3 区	13 上面・12 下部	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	57.5	12.4	1.4	板目	
51	19	1-1 区	14 層	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	踏み板	スギ	49.1	10.0	1.0	板目	
52	19	2 区	畦畔内	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	(24.5)	10.6	1.2	板目	
53	20	3 区	畦畔裾 12 a	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	53.1	16.2	1.9	板目	
54	20	3 区	畦畔内 12 b 下	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	57.4	13.0	1.2	板目	
55	20	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	59.1	10.4	1.9	柾目	
56	20	3 区	畦畔内 12 b	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	－	スギ	57.9	11.6	1.8	板目	
57	20	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	踏み板	スギ	63.7	(8.15)	1.4	柾目	
58	20	1-2 区	畦畔裾最上部	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	75.8	17.6	2.9	板目	
59	20	1-1 区	14 層	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	横木	スギ	(44.5)	9.1	1.9	板目	
60	20	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	68.6	9.3	1.1	追柾目？	楕円形曲物転用
61	20	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	56.2	9.9	2.0	板目	
62	20	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	45.1	19.5	1.9	板目	
63	20	3 区	畦畔内 12 b・12 b 下	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	44.8	17.7	2.1	板目	
64	21	3 区	畦畔内 12 b 下	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	40.1	19.3	2.35	板目	
65	21	3 区	13 層上面	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板？	スギ	(28.1)	9.5	1.3	板目	
66	21	2 区	木製品集中区 17 b 層	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	踏み板	スギ	(32.5)	8.6	1.5	板目	
67	21	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	46.2	15.9	1.6	板目	
68	21	1-1 区	畦畔 1 盛土内	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板	スギ	(33.3)	14.2	1.95	板目	
69	21	2 区	遺構外 15 ～ 16 層	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	踏み板？	スギ	25.5	14.4	1.8	柾目	
70	21	1-2 区	遺構外 17 b 層	農耕土木具	田下駄	角枠型田下駄	桟？	スギ	(27.1)	2.5	1.9	板目	
71	21	1-2 区	遺構外 13 b 層	編み具・紡織具？	その他・不明	－	－	スギ	(52.3)	3.85	1.6	板目	曲物を転用
72	21	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	運搬具	天秤棒	天秤棒	－	スギ	(56.5)	5.5	4.7	板目	
73	22	1-1 区	14 層	容器	椀	刳物	－	スギ	12.4 × 13.0	5.75	0.6 ～ 1.7	板目	内椀面、一部黒く変色
74	22	3 区	畦畔上層	容器	不明	曲物	底板	スギ	11.4	12.4	1.05	追柾目	木釘
75		1-2 区	畦畔内	容器	桶	曲物	側板	スギ	(31.9)	7.5	0.4	板目	
76		1-2 区	13 b 層	容器	桶	曲物	側板	ヒノキ	(26.1)	9.2	0.5	板目	樹皮
77	22	2 区	14 層上面	容器	槽？	刳物	－	スギ	(60.55)	(16.45)	3.4	柾目	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	スギ樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
78	22	2 区	14 層上面	容器	槽？	刳物	－	スギ	(14.8)	(5.9)	(6.3)	柾目	
79	22	4 区	12 層	祭祀具	形代	人形？	－	スギ	(19.4)	2.7	0.5	板目	
80	22	4 区	西壁土層断面畦畔内 12 b 層再上部	祭祀具	形代	人形？	－	スギ	(26.4)	4.3	0.3	柾目	
81	23	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材	梁・桁？	その他・不明	－	スギ	131.4	15.9	5.25	板目	
82	23	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(137.9)	12.75	3.2	柾目	
83	23	1-1 区	14 層	建築部材	その他・不明		－	スギ	86.85	11.7	8.6	板目	
84	23	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材	その他・不明	－	－	スギ	(82.05)	7.0	5.1	板目	
85	23	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材	その他・不明	その他・不明	－	スギ	78.8	21.1	5.0	板目	
86	23	1-1 区	畦畔 1 盛土内	建築部材	その他・不明	その他・不明	－	スギ	45.8	17.0	2.1	板目	
87	23	1-1 区	14 層	建築部材	その他・不明	その他・不明	－	サワラ	60.5	17.2	9.5	芯持材	炭化
88	24	1-2 区	遺構外 14 b 層	建築部材	壁？	その他・不明		スギ	147.0	18.35	1.9	柾目	
89	24	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	144.8	19.1	2.1	板目	
90	24	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材	その他・不明			スギ	141.8	24.5	1.8 ～ 2.2	板目	
91	25	2 区	畦畔内	建築部材	垂木	その他・不明	－	イヌマキ属	208.1	6.7	6.45	芯持材	
92	24	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	建築部材				スギ	178.2	7.9	2.3	板目	
93	25	3 区	13 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スダジイ	81.75	7.0	5.5	芯持材	
94	25	3 区	12 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ属	71.1	8.0	7.3	芯持材	炭化
95	25	1-3 区	13 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(95.5)	2.9	2.5	板目	炭化
96	25	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(106.2)	4.1	3.5	柾目	
97	25	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(86.4)	4.3	3.75	板目	
98	25	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(69.15)	3.9	3.1	板目	157（W 121･146）と同一か（接点なし）
99	25	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ科	(93.0)	4.3	2.6	板目	
100	25	3 区	13 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(105.2)	5.2	3.5	板目	
101	26	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(72.7)	5.4	(1.2)	板目	
102	26	1-2 区	13 b 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(57.4)	5.1	1.9	板目	
103	26	3 区	12 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(79.6)	4.3	1.85	板目	
104	26	3 区	12 層最下部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	100.0	8.3	3.2	板目	
105	26	3 区	畦畔内 12 b 下	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	118.9	9.5	1.0	板目	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
106	26	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(58.7)	10.4	2.6	板目	
107	26	3 区	12 層下部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヤナギ属	(18.2)	4.6	4.0	芯持材	
108	26	1-3 区	10 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(10.0)	2.8	3.7	板目	
109	26	1-2 区	畦畔裾 13 b 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(28.8)	2.0	2.0	板目	
110	26	2 区	木製品集中区	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(18.8)	3.7	1.5	柾目	
111	26	4 区	攪乱（3 層相当）	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	38.3	2.8	1.1	板目	
112	26	3 区	遺物集中 13 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(23.3)	1.6	1.3	柾目	
113	26	3 区	12 a 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	サワラ	(24.1)	6.25	3.7	芯持材	
114	27	3 区	畦畔上 10 ～ 11 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(44.9)	2.3	1.2	柾目？	
115	27	1-2 区	13 b 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	カヤ	(30.9)	2.0	1.7	芯持材	
116	27	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(36.7)	3.0	3.4	板目	
117	27	1-2 区	13 b 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(52.7)	2.6	1.1	板目	
118	27	3 区	遺物集中 12 下部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(34.3)	2.7	2.1	板目	
119	27	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	40.4	3.7	1.6	板目	
120	27	3 区	12 層最下部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ	33.1	(3.85)	1.15	板目	
121	27	2 区	15 ～ 16 層最上部	施設材・器具材	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(38.9)	5.0	4.15	板目	
122	27	2 区	木製品集中区 17 b 層最上部	施設材・器具材	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(44.0)	6.15	4.7	板目	炭化
123	28	3 区	12 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	45.5	9.2	1.8	板目	
124	28	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	25.1	7.3	1.25	板目	
125	28	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	カヤ	(25.8)	6.8	1.1	追柾目	
126	28	2 区	13 b 層最下部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(24.5)	9.4	1.2	板目	
127	28	2 区	木製品集中区 16 層	施設材・器具材	その他・不明	その他・不明	－	ヒノキ	(21.0)	4.3	1.1	板目	
128	28	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(43.2)	10.0	2.5	板目	
129	28	3 区	畦畔上部	施設材・器具材	その他・不明	－	－	サワラ	(27.8)	8.5	1.5	板目	
130	28	2 区	木製品集中区 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ	(35.5)	4.7	1.1	板目	
131	28	3 区	12 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ	27.2	7.0	0.9	板目	
132	28	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	ヒノキ	(33.2)	3.6	1.1	板目	
133	29	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	スギ	107.4	5.5	4.7	板目	天秤棒から杭に転用？

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
134	29	3 区	13 層	土木材	杭	－	－	スギ	(91.5)	4.7	3.8	板目	
135	29	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	スギ	(54.8)	3.25	2.3	板目	左側面炭化
136	29	1-1 区	14 層	土木材	杭	－	－	イヌマキ属	114.8	3.2	3.4	芯持材	
137	29	1-2 区	遺構外 17 ｂ層	土木材	杭	－	－	サワラ	(56.9)	7.2	6.6	芯持材	
138	29	1-1 区	畦畔 1 盛土内	土木材	杭	－	－	アカメガシワ	(51.4)	7.1	5.2	芯持材	
139	29	2 区	Tr 内 14 ～ 15 層	土木材	杭	－	－	スギ	(68.1)	6.1	7.7	柾目	
140	29	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	コジイ	54.4	4.0	3.9	芯持材	
141	29	2 区	遺構外 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	スギ	46.9	2.5	1.7	柾目	
142	29	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	スギ	(61.3)	6.5	3.5	追柾目？	
143	29	1-1 区	14 層	土木材	杭？	－	－	スギ	(29.3)	1.95	1.6	板目	炭化
144	29	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	土木材	杭	－	－	スギ	145.3	10.7	4.1	板目	
145	29	3 区	畦畔内 12 層	土木材	杭	－	－	スギ	(147.0)	7.9	5.8	板目	
146	30	2 区	1 号畦畔 畦畔構築土①					スギ	(18.7)	3.0	2.3	板目	
147	30	1-2 区	13 ｂ層	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	36.6	5.0	1.9	板目	
148	30	1-2 区	遺構外 13 ｂ層最下部	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(21.25)	5.7	2.3	板目	
149	30	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	53.9	11.05	4.1	板目	炭化
150	30	1-2 区	13 ｂ層	用途不明品	その他・不明	－	－	スギ	(45.25)	9.65	1.4	柾目	
151	30	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(53.2)	6.1	(1.5)	板目	
152	30	2 区	疑似畦畔基部	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(27.2)	1.5	1.0	板目	
153	30	1-1 区	14 層	用途不明品	その他・不明	その他・不明		スギ	(46.2)	2.3	1.65	板目	炭化
154	30	2 区	木製品集中区 15 層下部	用途不明品	その他・不明	その他・不明	－	スギ	(30.6)	2.05	1.55	板目	
155	30	1-1 区	14 層上面	用途不明品	その他・不明	－	－	ウバメガシ	(111.0)/(82.7)	5.3/4.25	2.7/2.2	芯持材	樹皮
156	30	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	イヌマキ属	172.35	3.4	3.4	芯持材	
157	30	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(144.8)	3.5	3.0	板目	炭化
158	31	3 区	12 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(26.5)	2.0	1.4	板目	
159	31	3 区	畦畔裾	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(46.5)	3.8	2.3	板目	
160	31	2 区	木製品集中区 15 ～ 16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(53.4)	2.6	1.7	柾目	
161	31	1-2 区	畦畔裾 13 ｂ層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	イヌマキ属	(125.9)	3.45	3.55	芯持材	

第８表　出土木製品観察表

番号	図版番号	区	遺構	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取	備考
162	31	3 区	畦畔上 10 ～ 11 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(118.6)	5.7	2.7	板目	
163	31	1-3 区	13 層上面	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	134.4	4.1	1.95 ～ 2.5	板目	右側面コゲあり
164	31	2 区	16 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	スギ	(136.1)	4.3	1.8 ～ 3.3	板目	
165	31	2 区	畦畔脇 15 層	施設材・器具材	その他・不明	－	－	イヌマキ属	(38.1)	2.9	2.4	芯持材	

第９表　出土木製品一覧表

取上 No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
W2	1-1	14 層	カヤ	土木具	杭			90	4	4	
W5	1-1	14 層	スギ	土木具	杭	杭？		45	5	2	
W14	1-1	畦畔 1 盛土内	イヌマキ属	その他	加工材			65	6	5	
W16	1-1	畦畔 1 盛土内	マツ属 複維管束亜属	その他	非加工材	芯持ち材		48	14	12	
W18	1-1	14 層	スギ	その他	加工材	分割材		43	11	2	
W19	1-1	14 層	スギ	その他	加工材			77	6	4	
W24	1-1	畦畔 1 盛土内	カヤ	建築部材				206	14	7	
W27 ①～⑤	1-1	畦畔 1 盛土内	コジイ	土木具	杭	杭？		42	4	4	
W28	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		薄板	19	4	0.5	
W29	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		薄板	94	6	0.5	
W30	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		板状	30	4	0.5	
W31	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		薄板	67	4	0.5	
W32	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材	？		34	8	3	
W33	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材	？		26	4	1	
W34	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		薄板	61	5	0.5	
W35	1-1	畦畔 1 盛土内	スギ	その他	加工材		薄板	63	6	0.5	
W37	1-1	畦畔 1 盛土内	イヌマキ属	その他	加工材		薄板	64	5	0.5	
W40 ①～⑩	1-1	畦畔 1 盛土内	コジイ	土木具	杭			103	4	3	
W1	2	畦畔 1 肩	イヌマキ属	その他	加工材			49	4	2.8	
W2	2	畦畔 1 肩	スギ	その他	加工材			24	4	0.3	
W3	2	14 層上部	スギ	その他	加工材			27	2	1.3	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W4	2	9 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	84	4	1.7	
W6	2	14 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3	1	
W7	2	13a 層	スギ	その他	加工材	分割材	割材	72	5	2.5	
W9	2	14 層上部	スギ	その他	加工材	分割材		21	2	2	
W10	2	14 ～ 15 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3	1.8	
W11	2	14 層上面	スギ	その他	加工材			27	2	1.5	
W12	2	14 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42	4	1	
W13	2	13b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	62	4	1.5	
W14	2	13b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	薄板状	27	4	0.3	
W16	2	13b 層下部	スギ	その他	加工材			23	2	1.8	
W17	2	14 ～ 15 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	40	6	0.8	
W20	2	14 層上面	スギ	その他	加工材	分割材		37	4	1	
W22	2	13b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	角状木製品	42	4	3	
W23	2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材		17	3	1.5	
W25	2	14 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	3	1.5	
W26	2	14 ～ 15 層	サワラ	土木具	杭			53	9	5.8	
W27	2	疑似畦畔？下部	スギ	その他	加工材	分割材	用途不明	17	2	1	
W31	2	畦畔 1 構築土①	イヌマキ属	その他	加工材	分割材		38	4	2.2	
W32	2	17b 層最上部	スギ	その他	加工材	分割材		27	5	2.2	
W33	2	17b 層最上部	スギ	その他	加工材	分割材		18	3	2	
W34	2	17b 層最上部	イヌマキ属	その他	非加工材			25	3		
W35	2	17b 層上部	ヒノキ科樹皮	その他	加工材	分割材		23	4	0.5	
W36	2	17b 層上部	スギ	その他	加工材	分割材		19	2	0.4	
W37	2	17b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	15	4	0.3	
W38	2	15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材		10	2	0.4	
W40	2	15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状加工品	20	3	2.5	
W42	2	畦畔 1 構築土	スギ	その他	加工材	分割材	板状	25	5	0.3	
W43	2	17b 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	4	2.7	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W44	2	17b 層上部	スギ	その他	加工材	分割材		17	3	0.3	
W46	2	15 ～ 16 層	ハンノキ属 ヤシャブシ節	その他	加工材	分割材	棒状	108	3	2.5	
W47	2	17b 層最上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状？	57	11	5.5	
W48	2	17b 層	スギ	その他	加工材	分割材		24	5	3	
W50	2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	24	4	1	
W53	2	畦畔構築土②層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	34	3	1.5	
W54	2	畦畔脇 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	107	5	1.5	
W55	2	15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	角棒状	15	2	0.9	
W56	2	15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	73	9	6.5	
W57	2	15 ～ 16 層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材	加工木	125	3	2.3	
W58	2	15 ～ 16 層	ムクロジ	その他	加工材	分割材	棒状	27	2	0.5	
W63	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	12	3	0.5	
W64	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	17	6	0.3	
W65	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	19	3	0.6	
W66	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	24	4	0.8	
W68	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	コジイ	その他	加工材	分割材	棒状	83	4	3.7	
W71	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	6	1	
W73	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	20	6	0.5	
W74	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	43	6	0.5	
W75	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	21	2	1.5	
W76	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	45	5	1	
W77	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	17	3	0.5	
W78	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	31	5	1	
W79	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	287	5	1.2	
W80	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	26	3	1.7	
W82	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	コナラ属	その他	加工材	分割材		8	3	1.8	
W84	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	建築部材			建築材？ 割材	50	6	5.5	
W85	2	木製品集中区 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	6	1.2	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W87	2	木製品集中区15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材		50	4	2.1	
W88	2	木製品集中区15～16層	ムラサキシキブ属	その他	加工材	分割材	加工木 杭？	87	4	3.5	
W89	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		37	4	1	
W90	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	2	1	
W91	2	木製品集中区15～16層	スギ	建築部材				92	3	2.7	
W94	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		37	3	1.5	
W95	2	木製品集中区15～16層	スギ	建築部材			建築材？	119	6	2.5	
W96	2	木製品集中区15～16層	スギ	建築部材			建築材？	144	6	3.5	
W97	2	木製品集中区15～16層	イヌマキ属	その他	加工材	分割材	棒状材	122	3	3	
W98	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	3	0.7	
W99	2	木製品集中区15～16層	スギ	建築部材				67	8	1.2	
W100	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		46	4	1.2	
W101	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	2	0.6	
W102	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		29	8	1.2	
W104	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		42	2	2	
W105	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		74	20	8	
W106	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		25	3	1	
W107	2	木製品集中区15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材		177	4	1.6	
W109	2	木製品集中区15～16層	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	165	5	3.5	
W111	2	木製品集中区15～16層	エゴノキ属	その他	加工材	分割材	棒状	181	5	4.5	
W112	2	木製品集中区15～16層	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	233	4	3.5	
W113	2	木製品集中区15～16層	コナラ属	その他	加工材	分割材	棒状	85	4	4	
W114	2	木製品集中区15～16層	エゴノキ属	その他	加工材	分割材	棒状	207	4	3.6	
W115	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		18	3	1.5	
W116	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		14	3	2.6	
W117	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		12	3	0.5	
W118	2	木製品集中区15～16層	クリ	その他	加工材	分割材		71	9	4	
W119	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		43	4	1.8	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W126	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	26	2	0.4	
W132	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	81	8	1.5	
W133	2	木製品集中区15～16層	コナラ属	その他	加工材	分割材	棒状材	133	4	3.8	
W135	2	木製品集中区15～16層	クスノキ科Ｃ	土木具	杭			122	4	4.2	
W138	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木材	39	3	2.2	
W141	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	220	11	2	
W142	2	木製品集中区15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	79	11	3.3	
W143	2	木製品集中区15～16層	クスノキ科Ｄ	その他	加工材	分割材	棒状	68	4	3.2	
W147	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		48	4	1.8	
W148	2	木製品集中区15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材		17	2	1	
W149	2	木製品集中区15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	25	3	0.5	
W150	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	5	2	
W151	2	木製品集中区15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	34	3	1	
W152	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42	5	1.8	
W153	2	木製品集中区15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	60	3	1.4	
W154	2	木製品集中区15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	21	2	0.4	
W155	2	木製品集中区15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	19	2	0.3	
W157	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状加工具	70	8	4.2	
W163	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		18	4	0.3	
W164	2	木製品集中区15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		35	7	1.5	
W168	2	木製品集中区16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	27	2	1.4	
W170	2	木製品集中区16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	4	1.7	
W171	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1.5	
W173	2	木製品集中区16層下部	クスノキ科Ｃ	その他	加工材	分割材	棒状	130	4	3.5	
W174	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24	3	1	
W175	2	木製品集中区16層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材		36	7	5.5	
W176	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1	
W177	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	4	1.4	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W178	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	11	3.2	
W180	2	15～16層	スギ	土木具	杭		杭状	86	4	3.5	
W182	2	木製品集中区17a層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26	3	1.7	
W183	2	木製品集中区17a層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	59	3	2.3	
W185	2	木製品集中区16層	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	148	4	3.2	
W186	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	64	4	1.5	
W188	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	11	5	1.7	
W189	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	166	3	1.5	
W190	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	165	3	1	
W191	2	木製品集中区16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	193	3	1.2	
W192	2	木製品集中区16層 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	90	9	2	
W193	2	木製品集中区17b層	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	82	45	23	
W194	2	調査区西側Tr内16層	イヌマキ属	その他	加工材	分割材	棒状	42	2	1.7	
W195	2	調査区西側Tr内16層	クスノキ科C	その他	加工材	分割材	棒状	68	3	2.3	
W196	2	調査区西側Tr内16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	4	1.5	
W197	2	調査区西側Tr内16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材		37	2	0.8	
W198	2	調査区西側Tr内16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	4	2	
W199	2	調査区西側Tr内16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	4	0.5	
W200	2	調査区西側Tr内16層	スギ	その他	加工材	分割材		19	3	0.5	
W201	2	調査区西側Tr内15	スギ	その他	加工材	分割材		14	1	1.2	
W202	2	調査区西側Tr内砂層	イヌマキ属	その他	加工材	分割材	棒状	43	2	2	
W203	2	木製品集中区東側断面畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	5	0.5	
W204	2	木製品集中区東側断面畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材		10	3	0.5	
W205	2	調査区西側Tr内16層	イヌマキ属	土木具	杭		杭状	33	6	3	
W206	2	調査区西側Tr内 16層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	3	0.5	
W207	2	調査区西側Tr内16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	7	3	0.9	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W208	2	調査区西側 Tr 内砂層	スギ	その他	加工材	分割材		7	2	1	
W209	2	調査区西側 Tr 内16 層	スギ	その他	加工材	分割材		7	2	0.3	
W210	2	調査区西側 Tr 内砂層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	8	1.5	
W211	2	調査区西側 Tr 内16 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材		23	5	0.4	
W212	2	調査区西側 Tr 内砂層	サカキ	土木具	杭		杭状	53	4	3.5	
W214	2	疑似畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26	2	1	
W216	2	木製品集中区16 層最下部	クスノキ科 D	その他	加工材	分割材	棒状	91	3	3.2	
W217	2	遺構外 17b 層	ヒノキ	その他	加工材		原材加工有	137	71	40	
W303	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24	2	0.3	
W307	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	63	4	3	
W310	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	10	0.5	
W311	1-2	畦畔肩	ヒノキ	その他	加工材	分割材		96	9	8.5	
W312	1-2	畦畔肩	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	78	4	1.2	
W313	1-2	13b 層	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	77	5	4	
W314	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	32	2	1.2	
W316	1-2	13b 層	ヒノキ	その他	加工材	分割材		29	2	1	
W318	1-2	13b 層	スギ	土木具	杭		杭状	58	4	2.6	
W320	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	49	2	1.7	
W321	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材		11	3	0.5	
W328	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	51	7	1.7	
W329	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	1.7	
W330	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	38	5	1.7	
W332	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	31	5	1.1	
W333	1-2	14 層	コジイ	その他	加工材	分割材	棒状	27	3	3.5	
W334	1-2	13b 層	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	48	2	2	
W335	1-2	畦畔裾 13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	3	0.3	
W337	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	13	5	1	
W338	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	2	
W340	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	6	0.5	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W341	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	8	0.5	
W342	1-2	13b 層最下部	ヒノキ	その他	加工材	分割材		26	2	1.2	
W343	1-2	13b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	32	3	1	
W344	1-2	13b 層最下部	スギ	建築部材				34	6	4	
W345	1-2	13b 層最下部	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	40	4	2.8	
W347	1-2	畦畔上 13b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	3	1.5	
W349	1-2	畦畔内	ヒノキ属	その他	加工材	分割材	板材	11	3	0.3	
W350	1-2	畦畔最下部	ヒノキ	その他	加工材	分割材		13	1	0.9	
W351	1-2	畦畔内（直立）	スギ	その他	加工材	分割材	板材	33	7	0.8	
W352	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	34	2	0.5	
W353	1-2	畦畔裾	スギ	その他	加工材	分割材	板材	6	3	0.3	
W354	1-2	畦畔下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	27	4	0.5	
W355	1-2	畦畔裾下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	12	3	0.3	
W356	1-2	畦畔裾下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	17	2	1.3	
W357	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	21	4	1.1	
W358	1-2	畦畔内	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	23	2	1.1	
W359	1-2	畦畔最上部	ヤナギ属	土木具	杭			25	4	5	
W362	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	29	6	0.9	
W363	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10	2	0.3	
W364	1-2	畦畔最下部	スギ	土木具	杭			72	10	7.5	
W366	1-2	遺構外 13b 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材		10	4	0.3	
W369	1-2	遺構外 17b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板材（杭？）	98	4	1.5	
W370	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	24	4	1	
W371	1-2	畦畔内 15 ～ 16 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	22	3	1	
W372	1-2	畦畔裾 17b 層最上部	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	27	2	1	
W373	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	サワラ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	1.3	
W375	1-2	遺構外 13b 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	30	4	2.5	
W376	1-2	畦畔裾部	スギ	その他	加工材	分割材	加工製品	12	2	0.5	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W377	1-2	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	加工板材	24	4	0.5	
W379	1-2	遺構外 14 層上面	マタタビ属	農耕土木具	田下駄	円枠型田下駄	枠				W378 とセット
W380	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	20	2	2	
W382	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	13	2	0.5	
W383	1-2	遺構外 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	3	2.4	
W384	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	8	2	1.5	
W385	1-2	畦畔脇 畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18	3	1.6	
W386	1-2	畦畔内 畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	2	1.5	
W387	1-2	畦畔内 畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	3	1.5	
W388	1-2	畦畔内 畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	34	4	1.5	
W389	1-2	遺構外 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	20	3	0.3	
W390	1-2	遺構外 14 層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材	棒状	4	2	1	
W391	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	2	1	
W392	1-2	遺構外 17b 層	スギ	土木具	杭			102	17	12	
W393	1-2	遺構外 17b 層	ヒノキ科樹皮	その他	加工材	分割材	板状	75	9	9.5	
W394	1-2	畦畔内 畦畔構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	板状	40	5	0.7	
W395	1-2	遺構外 15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材		12	5	2.3	
W396	1-2	畦畔内 17b 層 最上部	スギ	その他	加工材	分割材		41	5	0.7	
W397	1-2	15 ～ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	45	3	1.7	
W398	1-2	畦畔内 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	4	2.5	
W400	1-2	畦畔内 15 ～ 16 層 最下部	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	24	2	1.8	
W401	1-2	畦畔内 15 ～ 16 層 最下部	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	2.4	
W402	1-2	遺構外 17b 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	11	2	0.3	
W403	1-2	遺構外 17b 層 最上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	2	0.9	
W404	1-2	畦畔内 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	4	0.4	
W1	1-3	7 ～ 9 層	スギ	土木材	杭		杭状	45.5	5	3.5	
W3	1-3	10 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	3	1.2	
W4	1-3	10 層	スギ	土木材	杭		杭	46.5	3.5	1.8	
W5	1-3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	50	2.5	1.8	
W6	1-3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	31	2.5	1.5	
W7	1-3	11 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	4	0.6	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
W8	1-3	11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38.5	4	0.5	
W9	1-3	9 ～ 11 層	スギ	土木材	杭		杭	53	3	3	
W10	1-3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	31.5	2.1	1.2	
W11	1-3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	17.5	2.5	0.5	
W12	1-3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	2.5	0.5	
W13	1-3	8 ～ 9 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	34.7	1	0.5	
W14	1-3	8 ～ 9 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	122.5	2.5	1	
W15	1-3	10 層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材		30	4	3.5	
W16	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	96	5.5	1	
W17	1-3	7 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22.5	2.5	1	
W18	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	11	2	1.2	
W19	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18.2	2	0.8	
W20	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	9	1.5	0.5	
W21	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	14.5	2.2	0.5	
W22	1-3	12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18.2	2	0.8	
W23	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	3.2	0.5	
W24	1-3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	2	2	
W25	1-3	12 層上部	スギ	その他	非加工材		原材？	40	18	17	
W26	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	19.5	5	1	
W27	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	39	3	0.8	
W29	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17.5	2	1	
W30	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10.5	3.5	0.5	
W31	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26.5	2.5	1.5	
W32	1-3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	33	4	2.5	
W33	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	2	1.5	
W35	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	55	7	2.5	
W36	1-3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	15.5	5	0.5	
W37	1-3	7 ～ 9 層	サワラ	その他	加工材	分割材	棒状	35	3	2	
W38	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	119	5	1	
W39	1-3	12 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2.2	1.8	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
W40	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	44.5	3.5	1	
W41	1-3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	92	3	1	
W42	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	3.7	0.4	
W43	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26	2	1	
W44	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	1.5	1.2	
W45	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	3.5	0.5	
W46	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.7	2	0.5	
W47	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	47.5	2.5	0.2	
W48	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	4	0.5	
W49	1-3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	1.8	0.3	
W50	1-3	12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	2.9	1.5	
W51	4	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	13	2.5	0.3	
W52	4	12 層上面	ヤナギ属	その他	加工材	分割材		9	3	1.2	
W53	4	攪乱？	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	51.5	3	2	
W54	4	攪乱？	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28.5	5	3.5	
W56	4	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11	2	0.3	
W59	4	攪乱（12 層相当）	ツガ属	その他	加工材	分割材	板状	21.5	2.5	0.4	
W60	4	攪乱（12 層相当）	マツ属 複維管束亜属	その他	加工材	分割材	板状	9.5	3	0.3	
W61	4	攪乱（12 層相当）	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	7.5	3	0.3	
W62	4	12 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	47	6.5	3.5	
W63	4	12 層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	40	6	2	
W64	4	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	41.5	1.8	1	
W66	3	畦畔裾	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	1	
W67	3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24.5	2	0.3	
W68	3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	39	6.2	3.3	
w69	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16.5	2.7	2	
w71	3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28.5	2.5	0.5	
w73	3	畦畔真上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	2.5	0.2	
w75	3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21.5	2	0.5	
w76	3	12 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	41.5	2	0.7	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名１	器種細分名２	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
w77	3	畦畔上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42.5	3.5	0.5	
w78	3	畦畔真上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	46.5	6	0.3	
w79	3	畦畔上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	10	0.3	
w81	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	50	2	1	
w82	3	畦畔真上	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	37.2	2.3	1.5	
w84	3	12層上部	スギ	土木材	杭		杭	82.5	3.5	2.5	
w85	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.5	7	2.5	
w86	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	4.2	1.5	
w87	3	畦畔裾	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	7	1.5	0.8	
w88	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	40.5	2	1	
w90	3	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11.5	3	1.5	
w91	3	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	1.5	0.8	
w92	4	12層上面	スギ	土木材	杭		杭	42.5	4.5	2.4	
w94	4	12層	クマノミズキ	その他	加工材	分割材	棒状	137	9	7	
w95	4	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	17.5	4.7	1	
w96	4	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	4.5	2	
w98	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3.7	1	
w100	3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3	1.8	
w101	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	4.3	3.5	
w102	3	13層上面	スギ	土木材	杭		杭	71	3.5	3.3	
w103	3	13層上面	アカガシ亜属	土木材	杭		杭	142	11.5	6	
w104	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	35	4	1.5	
w105	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	4.5	1.5	
w106	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	3.7	1	
w107	3	13層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	47	2	1.5	
w109	3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	93	12	2.5	
w112	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	26	5	1	
w113	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3.5	1	
w114	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3.5	1.3	
w115	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	29	4	3.3	

第９表　出土木製品一覧表

取上No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
w116	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	63	5.5	1.5	
w117	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	45.5	2	1	
w118	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	85	2	0.8	
w120	3	畦畔上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	30	1.8	1.2	
w121	3	畦畔上層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38.5	2	1.5	
w122	3	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	23.5	2	1	
w124	3	畦畔裾	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21.5	2.5	1	
w125	3	畦畔下（13 層上面）	サワラ	その他	加工材	分割材	棒状	14.5	1	1	
w127	3	12 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	10.5	3	0.5	
w129	3	畦畔下層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	9.5	1.5	1	
w130	3	畦畔上部	スギ	その他	加工材	分割材	不明木製品	14.5	6	4.5	
w131	3	畦畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18.6	6.2	1.2	
w133	3	13 層上面（畦畔上面）	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	9	3.3	1.5	
w134	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	5.5	1	
w135	3	畦畔裾（12 層）	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1.5	
w136	3	畦畔裾	スギ	その他	加工材	分割材	板状	40	3	0.8	
w137	3	畦畔中（12 層）	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	4	0.4	
w138	3	畦畔脇（12 層）	スギ	その他	加工材	分割材	板状	25	3.5	2	
w139	3	畦畔下（12b 層）	スギ	その他	加工材	分割材	不明木製品	31.5	6	4	
w140	3	13 層下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	47.5	4	2	
w141	3	12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	1	
w144	3	畦畔内（12b 層）	スギ	その他	加工材	分割材	板状	13	5.6	2.5	
w148	3	畦畔内（12b 層下部）	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	36	2.5	2	
w149	3	畦畔内（12b 層）	スギ	土木材	杭		杭	107	4	2	
w150	3	畦畔内（12b 層下面）	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	43.5	2.2	2.2	
w151	3	畦畔内（12b 層）	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	3.5	1.2	
w152	3	畦畔内（12b 層下面）	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.5	3.5	0.8	
w153	3	畦畔内（12b 層下面）	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	4	1.6	
w155	3	畦畔内（12b 層下面）	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	25.5	2.5	0.5	

第９表　出土木製品一覧表

取上 No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名 1	器種 細分名 2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w156	3	畦畔内 (12b 層下部)	サワラ	その他	加工材	分割材	棒状	15.5	2.5	0.6	
w161	3	畦畔 (12b 層)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	8.5	3	0.4	
w162	3	畦畔裾 (12a 層下部)	サカキ	土木材	杭		杭	20.5	4.5	3.8	
w165	3	遺物集中 13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10	5	1	
w166	3	遺物集中 13 層上面	スギ	土木材	杭		杭？	32	4	4	
w167	3	遺物集中 13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	70	4	4	
w169	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	49	2	2	
w172	3	遺物集中 13 層上面	アカガシ亜属	その他	加工材	分割材	棒状	63	3	3	
w173	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	2	1.5	
w174	3	遺物集中 13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	6	5	
w177	3	畦畔裾部 13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	116	11	1	
w178	3	13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	46	8	5	
w179	3	12 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	3	1	
w180	3	12 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	34	5	2	
w183	3	13 層上面	アカメガシワ	土木材	杭		杭	35	4	2	
w184	3	12 最下層	スギ	建築部材				52	5	4	
w185	3	12 層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	65	9	2	
w186	3	12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	166	6	2	
w187	3	12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	6	2	
w188	1-3	西壁土層断面 6 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	5	1	
w190	4	西壁土層断面 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	1	1	
w191	3	畦畔内 12b 層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	40	5	3	
w194	3	畦畔裾 13 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	30	4	1	
w195	3	畦畔内 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	33	12	2	
w196	3	10 ～ 11 層	スギ　根材	その他	加工材	分割材	棒状	10	2	1.5	
w197	3	畦畔上 10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	52	2	0.5	
w200	3	畦畔構築土	イヌマキ属	土木材	杭		杭	37	4	4	
w201	3	畦畔脇 12a 層	ヒノキ	土木材	杭		杭	23	4	3	
w203	3	12a 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	2	1	

第９表　出土木製品一覧表

取上 No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名 1	器種 細分名 2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w204	3	10 ～ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	10	1	1	
w205	3	畦畔内 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	2.5	1	
w206	3	畦畔内 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	3	1	
w207	3	12b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	20	1	0.5	
w210	3	遺物集中 12 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	5	2	
w211	3	12a 最下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	31	8	1	
w212	3	12a 下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	38	3	2	
w213	3	12b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	45	5	3	
w214	3	12a 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	2	1	
w215	3	12a 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	36	3	2	
w216	3	12a 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11	3	1	
w217	3	13 層	サカキ	土木材	杭		杭	58	4	4	
w218	3	13 層	スダジイ	土木材	杭		杭	65	5	5	

第６章　自然科学分析

第１節　上土遺跡出土木材の樹種

鈴木三男

静岡市葵区立石地内の上土遺跡から平成 29 年度～令和元年度の発掘調査で出土した木材 577 点の樹種を調べた。

上土遺跡は静岡平野北部の賤機（しずはた）丘陵と南沼（みなみぬまがみ）上丘陵の間の麻機（あさはた）低地に位置する水田地帯にあり、現標高は約７m程である。この地域一帯は奈良時代～平安時代の条里制水田であったことが周辺の遺跡調査で明らかになっており、平成 29 年度～令和元年度の発掘調査でも大畦畔、小畦畔に区画された水田が検出された。出土した木材の多くはこの大畦畔を安定したものとするために打ち込まれ、組み込まれた木材で、多くは木製農具や建築部材等の転用材である。

これらの木材の樹種を調べた結果、静岡県内の弥生時代～中世の他の遺跡と同じようにスギ材の圧倒的多用が確認された。以下に同定された樹種を記載するとともに上土遺跡における用材について若干の考察を試みた。

Ⅰ．同定された樹種

1．マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Haploxylon　マツ科

写真図版 I-1a-c（SZ-17329）

水平・垂直の樹脂道を持つ、年輪が明瞭な針葉樹材で、早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はゆるやかである。垂直樹脂道の多くは晩材部にある。樹脂細胞は無い。放射組織は単列と紡錘形があり、放射柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む薄壁の分泌細胞からなる。放射組織の上下に１～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には歯牙状肥厚があるが保存状態が十分でなくその形状はよく観察できない。放射仮道管の有縁壁孔は軸方向仮道管の有縁壁孔より小さい。放射柔組織の水平壁は平滑で薄く、分野壁孔は大型の窓状で１分野に１個あり、分野のほぼ全域を占める。

垂直・水平の樹脂道を持ち、窓状の分野壁孔を持つことからマツ科のマツ属であることが分かり、分野壁孔が分野の大部分を占め、放射仮道管の内壁に歯牙状突起を持つことから、複維管束亜属であることが分かる。静岡県地方に分布する複維管束亜属には丘陵部に普通なアカマツ Pinus densiflora Siebold et Zucc. と沿岸部に多いクロマツ P. thunbergii Parl. があるが、両者の区別点である放射仮道管内壁の歯牙状突起の形態が良く観察できないため、このいずれとも決めることが出来ないので「複維管束亜属」とした。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する常緑の針葉樹で、痩せた土地、陽光地、二次林に多い。幹径１m以上、樹高 30 mの大木となる。静岡県内にも海岸近くから山地帯までもっとも普通に見られる針葉樹の一つで、特に二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強い。大材が得られることもあり、建築材（特に基礎、土台回り，棟木など）、土木用材、器具材などに幅広い用途があるほか、坑木などの特用がある。クロマツは塩害に強いことから沿岸部に多く、特に近世以降は砂浜の緑化によく用いられている。樹性、材質等はアカマツとほとんど同じで、同じように利用される。本遺跡出土材は加工材、非加工材とされるもの各１点である。なお、「上土遺跡・岳美遺跡」（静岡県埋蔵文化財センター 2017）にはアカマツが報告されている。

2. ツガ属　Tsuga　マツ科

写真図版 I-2a-c（SZ-17616）

水平・垂直の両樹脂道を欠く針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で、晩材部は一般に幅は狭い。軸方向要素はほとんど仮道管のみからなるが､年輪界付近にまれに樹脂細胞が混じる。放射組織は単列、背はあまり高くなく、放射柔細胞と放射仮道管からなり、後者は放射組織の上下縁にあり、ほぼ１細胞層である。放射仮道管の有縁壁孔は小さく、内壁に鋸歯状突起やらせん肥厚はなく、なめらか。樹脂細胞と放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔を持つ、いわゆるモミ型壁孔である。分野壁孔は小さいトウヒ型～ヒノキ型で、１分野２－６個程度ある。以上の形質からマツ科のツガ属の材と同定した。

ツガ属は本州から九州の山地帯にツガ Tsuga sieboldii Carr.、温帯上部から亜高山帯にかけてコメツガ T. diversifolia（Maxim.）Masters. が分布している。静岡県でも標高 500 mほどの山地にはツガがあり、富士山や南アルプスなどの山岳地帯にはコメツガが分布している。いずれも樹高 20 m以上、幹径１mになる常緑高木で、いずれの材も木理通直で緻密、軽軟あるいはやや重硬で、建築材、各種器具材、土木材、パルプに用いられる。本遺跡出土材は加工材１点である。

3. イヌマキ属　Podocarpus　マキ科

写真図版 I-3a-c（SZ-17410）

年輪が全く目立たない緻密な針葉樹材で、出土材の保存性は良い。早材から晩材への移行はとても緩やかで、晩材部は年輪界附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞は横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、ヒノキ科のような黒褐色の樹脂様物質を蓄積していないので、横断面では見つけにくい。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、ヒノキ科のように数珠状に肥厚したり、マツ科のモミ型壁孔のようになることは無い。放射組織は背の低い単列で、放射柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキ～トウヒ型で、１分野あたり１－２個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

我が国のイヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ Podocarpus macrophyllus（Thunb.）Lambert と紀伊半島南部より南西に分布するナギ P. nagi（Thunb.）Zoll. et Moritzi の２種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布から本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。静岡県内の弥生時代～中世の遺跡からは他府県では例を見ない量のイヌマキ属の木材（多くは丸木弓や柱材）が出土している。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強く、建築材（柱、土台回り）によく使われたが、資源量が限られているので現在ではほとんど使われることはない。本遺跡出土材は垂木、杭、その他加工材など合計 15 点（2.6%）と比較的多い。

4. ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc.　ヒノキ科

写真図版 II-4a-c（SZ-17805）

出土材は多くの場合スギに比して色が淡く、明るい褐色を呈するのが一般的である。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。年輪は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは目立たない。仮道管はスギより細い。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に緩く集まって散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔細胞のみからなり、分野壁孔はスギより一回り小さい中型のヒノキ～トウヒ型で、１分野に１－２個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心に大型の建築物

の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。本遺跡出土材は曲げ物側板､泥よけ､付け木のほか加工材合わせて 24 点（4.2%）で､スギに次いで多い樹種である。

5. サワラ　Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.　ヒノキ科

写真図版 II-5a-c（SZ-17618）

ヒノキ、スギによく似た針葉樹材で、水平・垂直の両樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。年輪はヒノキより目立つがスギより目だたない。早材から晩材への移行はややゆるやか～やや急で、晩材部はやや多い～少ない。仮道管はヒノキと同等で、スギより細い。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、１分野当たり普通２個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北南部から本州中部の山地帯上部（温帯）に広く分布する常緑高木で、樹高 30 m、幹径１mに達する。静岡県では北部山中に多い。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に強いので桶類に、また、匂いが無いので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質はやや劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は建築部材、付け木、加工材など 18 点（3.1%）でヒノキに次いで多い。

5’.　ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科

仮道管がスギより細く、早材から晩材への移行がやや急な針葉樹材で、樹脂細胞の形態などからヒノキかサワラのいずれかと判断されたが、分野壁孔の保存が悪くそのいずれとも判断できなかったものである。出土材は加工材１点である。

6. スギ　Cryptomeria japonica（Linn.f.）D.Don　ヒノキ科

写真図版 III-6a-c（SZ-17743）

保存性が良く、出土材は一般に黒褐色を呈する。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急、年輪が詰んだところでは急である。年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異があり、後者はかなり（樹齢数百年）の老齢木と推定される。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な単壁孔があるが､通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で１分野あたり通常 2 個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、ヒノキ科のスギの材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島までの全国の温帯～暖帯に広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、幹径１m以上、樹高 30 mを超える大木になり、大材が得易く、また、材は軽軟で割裂、切断がしやすく、加工が容易で、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。静岡県地方の弥生時代～中世の遺跡では大量のスギ材が出土するのが一般的だが、当遺跡の出土材も大部分（79.7%）がスギ材である。

6‘.　スギ　根材　Cryptomeria japonica（Linn.f.）D.Don　Root wood　ヒノキ科

写真図版 III-7a-c（SZ-17879）

細い丸木で、仮道管、樹脂細胞、放射柔組織からなる針葉樹材である。年輪幅は狭く、早材部仮道管は数～ 10 数細胞、晩材部仮道管は１～２細胞で、早晩材とも幹材に比べて細胞径は大きく、壁は薄い。早材仮道管の放射壁の有縁壁孔はしばしば対列状に２列になる。分野壁孔は幹材よりやや大きく、開口部の大きさに変異があり、ほぼスギ型である。放射組織の高さはほとんどが 10 細胞以下と低く、構成細胞は幹材に比べて大きく、背が高い。これらの形質からスギの根材と同定した。出土材は自然木であると推定される。なお、時代と用途は異なるが、秋田県、石川県などから縄文時代晩期のスギの根材を

使った編組製品が出土している。

6“.　ヒノキ科樹皮　Cupressaceae Bark　ヒノキ科

写真図版 III-8a-c（SZ-17367）

一見、年輪が明瞭な針葉樹材のように見えるが、顕微鏡でよく観察すると、年輪のように見えたのは１細胞厚で接線方向に整列した繊維細胞－柔細胞－篩細胞－柔細胞－繊維細胞の層が繰り返した構造である。また、接線方向に連なる傷害樹脂道もある。これらの形質からヒノキ科の樹皮であると同定された。当遺跡ではヒノキ科ではヒノキ、サワラ、スギの３樹種が同定されているがこのいずれの樹皮も基本構造は全く同じであり、それぞれを区別することはできない。

7. カヤ　Torreya nucifera（L.）Siebold et Zucc.　イチイ科

写真図版 IV-9a-c（SZ-17332）

保存性の良い出土材で、木材組織はしっかりしている。年輪は目立たず、早材部には断面が方形の仮道管が整然と並び､晩材部の仮道管はやや細く厚壁となる｡晩材部の量はわずかである｡樹脂細胞はなく、仮道管と放射柔細胞の２種類の細胞のみからなる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２－３本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり、背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは岩手県南部以南から九州屋久島の暖帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１ｍを超え、樹高は25ｍ以上の大木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、耐朽性、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。神社、仏閣などの特別な建物の建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、特に彫刻材として優れ、仏像や神像、木魚などの木製仏具に、また碁盤、将棋盤などの特用がある。古代～近代にわたり、全国の寺院の木彫仏などに重用されている。本遺跡出土材は加工材４点である。

8. クスノキ科Ｃ　Lauraceae C type　クスノキ科

写真図版 IV-10a-c（SZ-17433）

茶褐色を呈する出土材で保存性は比較的良い。断面が縦長の楕円形～円形の道管が単独あるいは２－３個、主に放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の最大接線径は90μｍ程度。道管の穿孔は単一と横棒が10本以下と数が少ない階段状穿孔が混在する。木部柔組織は周囲状で量は少ない。放射組織は異性、ほぼ２細胞幅で背は低い。木部柔組織と放射組織の直立細胞にやや大きく膨らんだ油細胞がまれに混じる。これらの形質からクスノキ科のクスノキ以外の材であることがわかる。

クスノキ科には多くの属、種があるが、道管が大きく、多量の油細胞を持つクスノキ以外の材の基本構造は共通で互いによく似ている。静岡県に分布するクスノキ科の常緑高木にはヤブニッケイ Cinnamomum japonicum Siebold ex Nakai、タブノキ Machilus thunbergii Siebold et Zucc.、アオガシ（ホソバタブ）Machilus japonica Siebold et Zucc.、シロダモ Neolitsea sericea（Blume）Koidz.、イヌガシ Neolitsea aciculate（Blume）Koidz.、バリバリノキ Actinodaphne longifolia（Blume）Nakai、カゴノキ Actinodaphne lancifolia（Siebold et Zucc.）Meisn.、落葉高木にはカナクギノキ Lindera erythrocarpa Makino、落葉低木にはクロモジ Lindera umbellate Thunb.、アブラチャン Lindera praecox（Siebold et Zucc.）Blume、シロモジ Lindera triloba（Siebold et Zucc.）Blume、ヤマコウバシ Lindera glauca（Siebold et Zucc.）Blume、ダンコウバイ Lindera obtusiloba Blume などがある。これらのうちタブノキは道管の最大接線径が120μｍ前後になり、クスノキに次いで大きいことで区別できる。道管の最大接線径が100μｍ前後になるのはアオガシ、バリバリノキ、カゴノキ、カナクギノキがある。そしてこれらのうち木部柔組織の量が多くて、木部柔細胞と放射組織の

直立細胞に多数の油細胞を持つのはカゴノキのみであることからカゴノキは他の樹種から区別できる。

一方、道管の最大接線径が 100 μｍ前後だが油細胞がまれにしか無いアオガシ、バリバリノキ、カナクギノキなどをここでは「クスノキ科Ａ」とする。さらにダンコウバイ、アブラチャン、クロモジ、ヤマコウバシなどは道管の最大接線径が 60 μｍ程度とクスノキ科の中では最も小さく、また油細胞も希なので、これらを「クスノキ科 B」とする。

本項の出土材（SZ-17433、17453、17471）の道管の最大接線径は 90 μｍ程度で、油細胞は希であることから「クスノキ科Ａ」、「クスノキ科Ｂ」のいずれとも区別が可能で、ヤブニッケイ、カナクギノキ、シロダモなどと一致するので、これを「クスノキ科Ｃ」として区別した。クスノキ科Ｃとしたものは杭、加工材の３点である。なお、ヤブニッケイ、カナクギノキ、シロダモなどのそれぞれを材構造で区別するのは現在は出来ていない。

9. クスノキ科Ｄ　Lauraceae D type　クスノキ科

写真図版 IV-11a-c（SZ-17437）

クスノキ科Ｃによく似た出土材で、道管の最大接線径は 70 μｍ程度と小さく、油細胞は希であることからこれを「クスノキ科Ｄ」とした。静岡県地方に自生するクスノキ科ではイヌガシがこれに該当するが、一般に樹木の最大道管径には個体間、個体以内の部位などにより変異があるのが一般的で、クスノキ科Ｂ、クスノキ科Ｃ、クスノキ科Ｄに該当する樹種でも道管の最大接線径が 70 μｍ前後の値を示すことは十分にあり得ることなので、本項出土材をイヌガシであると決めることは出来ない。出土材は加工材２点である。

10. ハンノキ属ヤシャブシ節　Alnus sect. Bifrucatus　カバノキ科

写真図版 V-12a-c（SZ-17376）

複合した放射方向に長い楕円形の小管孔がほぼ均一に散在する散孔材で、管孔の大きさは年輪内でほとんど変化無く、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は 20 ～ 40 本程の横棒がある階段状、側壁の壁孔は小孔紋で密に交互状にある。木部柔組織は単細胞幅で接線状に連なる。散在状、放射組織は単列で同性、１～ 20 細胞高程度である。道管放射組織間の壁孔は小孔紋で交互状である。以上の形態からカバノキ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。静岡県地方では、伊豆半島の海岸部にオオバヤシャブシ Alnus sieboldiana Matsumura が、県内の丘陵、低山地にはヤシャブシ A. firma Siebold et Zucc. が、そして亜高山帯にはミヤマハンノキ A. maximowiczii Call. がある。材構造ではこれらの種を識別するのは困難だが、遺跡の立地から考えるとヤシャブシである可能性が高いと言える。ヤシャブシは東北地方南部以南の全国の山野に広く分布する樹高 10 ～ 15 m、幹径 30cm ほどの落葉高木で、典型的な陽樹で二次林に多い。材はやや堅硬で木理は緻密、旋作材、床柱、櫛材などの用途がある。本遺跡出土材は加工材１点である。

11. クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科

写真図版 V-13a-c（SZ-17428）

年輪のはじめに円～卵形の大道管が１－３層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周囲状仮道管や木部柔組織と共に集合して火炎状の紋をなす環孔材で年輪が明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で、後者は晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管－放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径１m以上、樹高 30 mになる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得

られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材は加工材１点である。

12. コジイ　Castanopsis cuspidata（Thunb.）Schottky　ブナ科

写真図版 V-14a-c（SZ-17333）

道管形態がクリによく似た環孔材で、年輪の始めに丸～楕円形の中～やや大型の道管が間隔を置いて１－３層に並び、順次径を減じて、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪は明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の２型がある。集合放射組織は時に放射組織細胞の割合が高くなり複合状となるが、コナラ属のように幅広にはならない。道管－放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からブナ科シイノキ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織があることで区別される。

コジイ（別名ツブラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素のひとつである。スダジイが海岸部に多いのに対し、コジイは内陸部に多い。コジイは樹高 20 m、幹径１mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など）、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は杭、土木材、加工材など５点である

13. スダジイ　Castanopsis sieboldii（Makino）Hatusima ブナ科

写真図版 VI-15a-c（SZ-17901）

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の円形～楕円形の道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。幅広い年輪では年輪内側から外側に向かっての道管径の減少率は小さく、あたかもカシ類などの放射孔材に似てくることもある。木部柔組織は接線状で晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一､側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科シイ属のスダジイの材と同定した。道管形態、配列はコジイとほとんど変わらない環孔材であるが、集合状～複合状の放射組織を持たないことから区別される。また、クリに比べ大道管の径が小さく、年輪はじめに間隔を置いて配列することから区別される。東海地方ではスダジイは沿岸部に多く、コジイはやや内陸部に分布する。本遺跡はやや内陸部に位置することから周囲の丘陵地にはコジイが自生していたことが窺われ、スダジイ材は沿岸部からの持ち込みの可能性も考えられる。

スダジイは東北地方の南部以南九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布する常緑高木で、照葉樹林の主要要素の一つで、特に海岸部に多い。樹高 20 m、幹径１m以上となり、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する独特の樹形となる。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はコジイと区別されない。本遺跡出土材は土木材２点である。

14. コナラ属アカガシ亜属　Quercus sect. Cyclobalanopsis　ブナ科

写真図版 VI-16a-c（SZ-17789）

最大接線径が 160 μ m 程度の中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材。木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管－放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属（イチイガシを除く）の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、アカガシ Quercus acuta Thunb.、シラカシ Q. myrsinaefolia Blume、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、東北地方以南の全国の暖帯に広く

分布し、照葉樹林の主要素である。静岡県地方にはこれらの他、アラカシQ. glauca Thunb.、ツクバネガシQ. sessilifolia Blume、ウラジロガシQ. salicina Blumeなどがあり、道管径が格段に大きいイチイガシ以外の樹種を材構造により識別するのは困難である。アカガシ亜属のいずれの材も硬く緻密で強靭で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輛材、柄物など広い用途がある。本遺跡出土材は鋤の柄と思われるもの１点の他，加工材２点がある。

15. ウバメガシ　Quercus phillyraeoides A. Gray　ブナ科

写真図版VI-17a-c（SZ-17636）

アカガシ亜属と同様の放射孔材だが、道管の最大接線径は90μm程度と格段に小さく、また、大放射組織は複合状とならず集合状で幅が狭いことから、コナラ属コナラ亜属のウバメガシの材と同定した。

ウバメガシは静岡県地方の海岸部に多い常緑低木～小高木で、高さ２～10ｍ、幹径10～50cmほどになる。材は重く、極めて堅硬で粘り強く、切削加工は困難だが、硬さを活かした各種器具材、特に堅い木炭である「備長炭」の特用がある。本遺跡出土材は用途不明品の有頭状の木材１点である。ウバメガシの自生は海岸部に限られることから本遺跡出土品は沿岸部からの持ち込みが考えられる。

16. アカメガシワ　Malotus japonicus（Thunb.）Muell. Arg.　トウダイグサ科

写真図版VII-18a-c（SZ-17654）

年輪始めに中型の単独あるいは２個放射方向に複合した楕円形の道管がややまばらにあり、そこから順次径を減じて、晩材部では外形多角形で壁がやや厚く、内腔が丸い小道管がしばしば放射方向に３－５個程度複合したものがまばらに散在する環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は量がやや多いが横断面では繊維細胞との区別が難しい。放射組織は単列異性である。以上の形質からトウダイグサ科のアカメガシワの材と同定した。

アカメガシワは東北地方中部以南の日本列島に広く分布する落葉広葉樹で、典型的な陽樹で二次林に多い。樹高５～10ｍ、幹径10～30cm程度になる。材はやや軽軟で木理粗く、器具材、下駄材などに使われる。当遺跡出土材は杭と加工材の２点である。

17. ヤナギ属　Salix ヤナギ科

写真図版VII-19a-c（SZ-17455）

単独の楕円形あるいは２－数個放射方向に複合した楕円形の管孔が年輪内に密度高く均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向けてゆっくりと減じ、年輪界を挟んで早材と晩材の道管径は明確に異なる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に密にある。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は単列異性で、直立細胞と道管との交差分野の壁孔は蜂の巣状となる。以上の形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

静岡県地方にヤナギ属の樹種は高木から低木のものまで多数あり、材構造での個々の種の識別は困難である。山野に広く分布するバッコヤナギSalix bakko Kimuraは樹高10～15ｍ、幹径50cmになる落葉高木で、材は軽軟、割裂自由で切削加工が容易で、箱板類、小細工ものなどの用途がある。本遺跡出土材は加工材１点である。

18. ムクロジ　Sapindus mukorossi Gaertn.　ムクロジ科

写真図版VII-20a-c（SZ-17383）

年輪始めにややいびつな円～楕円形の大道管が数層並び、順次径を減じて、晩材部では厚壁で多角形の小道管が数個集まって塊となったものが散在する環孔材で、周囲状柔組織および連合翼状柔組織があり、特に晩材部で量が多く、肉眼では多層の縞模様に見える。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、また道管内に黄褐色の透明物質がしばしば詰まっている。放射組織は３～５細胞幅で背は高くなく、接線面で見たときの輪郭が不整形である。これらの形質からムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東地方以西から九州・沖縄までの暖地に比較的希に生える幹径 40cm、樹高 15 mほどになる落葉高木で、東日本で山野に自生することはほとんど無く、しばしば社寺、鎮守様、農家敷地などに植えられるので正確な天然分布は明らかでない。材は軽軟で肌目は粗く､脆いが切削加工容易である。机や箱類、小細工もの、キリ（桐）の代用として下駄などの用途がある。果実にサポニンを含み、若実を「石鹸」の代用にするほか、黒くて丸い種子を羽根つきの羽根の頭にする。本遺跡出土材は加工材１点である。

19. クマノミズキ　Cornus macrophylla Wall.　ミズキ科

写真図版 VIII-21a-c（SZ-17781）

円～いびつな楕円の小道管がほぼ単独で均一に散在する散孔材で、道管径は早材から晩材部にかけて緩やかに小さくなる。道管の穿孔は横棒数が 20 本程度の階段状、道管内壁にらせん肥厚は見られない。木部柔組織は散在状で出土材ではしばしば黒色物質が詰まっていて横断面で黒い小さな点として見える。放射組織は５細胞幅程になる典型的な異性で、接線断面で見ると多列部は紡錘形、１～多細胞の単列の翼部がある。これらの形質からミズキ科ミズキ属のクマノミズキの材と同定した。同じミズキ属のミズキ C. controversa Hemsl. は道管がしばしば複合することにより、また、ヤマボウシ C. kousa Buerger ex Hance は放射組織が幅広いことにより区別される。

クマノミズキは青森県以南、九州屋久島までの暖温帯に広く分布する樹高 12 m、幹径 40cm になる落葉高木で、関東以西に多い。花期はよく似ているミズキより１ヶ月程遅い。材は堅硬でかなり重いが均質で、ミズキ同様梁の特用があり、漆器木地、各種器具材に用いられる。本遺跡出土材は加工材１点である。

20. サカキ　Cleyera japonica Thunb.　モッコク科

写真図版 VIII-22a-c（SZ-17420）

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、道管径は年輪内でほとんど変化しない。道管の穿孔は横棒の多い（40 本ほど）階段状である。木部柔組織は散在状で均一に分布し、目立たない。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からモッコク科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州、南西諸島に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径 20cm、樹高８ｍくらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、萠芽枝がまっすぐによく伸びることから丸木の柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫛等に用いられる。本遺跡出土材は加工材２点である。

21. エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科

写真図版 VIII-23a-c（SZ-17424）

小型の道管が多くは放射方向に数個複合して長楕円形となったものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら比較的均一に散在する散孔材で、年輪後半では道管は径が小さくなり目立たず、独立帯状の木部柔組織が目立つ。年輪界を挟んで極端に道管径が異なり、半環孔材的に見える。道管の穿孔は横棒が 10-20 本程度の階段状である。放射組織は異性で、１－３細胞幅である。以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。

静岡県に自生するエゴノキ属には、エゴノキ Styrax japonicus Siebold et Zucc.、ハクウンボク S. obassia Siebold et Zucc.、コハクウンボク S. shiraianus Makino の３種があり、いずれも落葉小高木である。ハクウンボクとコハクウンボクは多少とも標高のある山地帯に多く、平野部ではエゴノキが普通に生えることから出土材はエゴノキである可能性が高い。エゴノキは北海道最南部以南から九州、南西諸島の温帯から暖帯、亜熱帯に広く分布する落葉小高木で、幹径 20cm、樹高８ｍほどになる。材

は白色で、やや堅硬、緻密均質で粘りがあり、切削加工がよく、木製玩具などに用いられる。当遺跡出土材は加工材１点である。

22. マタタビ属　Actinidia　マタタビ科

写真図版 IX-24a-c（SZ-17507）

年輪始めにいびつな円形の道管がほぼ単独で均一に分布し、晩材部に向かって順次径を減じる環孔材だが、幅の狭い年輪では大道管以外には中小の道管が僅かにあるのみで、ほとんど大道管からなる散孔材のように見える。道管の穿孔は単一、ごく希にある道管同士の側壁は階段状となる。木部柔組織は短接線状～接線状。放射組織は３－５細胞幅程度の異性で、高い単列の翼部を持つ。以上の形質からマタタビ科マタタビ属の材と同定した。日本列島のマタタビ属にはサルナシ Actinidia arguta（Siebold et Zucc.）Planch. Ex Miq.、シマサルナシ A. rufa（Siebold et Zucc.）Planch. ex Miq.、山間地の渓流沿いに多いマタタビ A. polygama（Siebold et Zucc.）Planch ex Maxim. 及びミヤママタタビ A. kolomikta（Rupr. Et Maxim.）Maxim. があり、いずれも木性蔓植物であるが、後２者は蔓の太さが通常１cm 程度にしかならないことから２cm を超える本遺跡出土材には該当しない。また、シマサルナシはサルナシと材構造では区別できないが分布が紀伊半島以西～琉球列島に限られることから本遺跡出土材はサルナシである可能性が高い。

サルナシは北海道～九州の暖帯～冷温帯上部の湿潤地に自生する木性落葉蔓植物で、幹は時には直径 20cm ほどになる。蔓は柔軟性があり、結束材や吊り橋素材などに用いられる。本遺跡出土材は田下駄の環状の枠材と加工材の３点である。上土・岳美遺跡に限らずこの地域の条里制水田址からは少なくない数の円枠型（輪かんじき型）田下駄が出土している。これまで樹種が調べられた限りでは、その踏み板は例外なくスギ材で、円枠材はマタタビ属である。この円枠は直径２cm ほどの丸木であることから、サルナシ材と考えられる。遺跡周辺に位置すると思われる集落周辺ではこの用途に用いるサルナシの蔓を容易に得られる程の自生があったとは考えにくく、多少なりとも離れた山間地で採取してきたものを用いていたことが推定される。

22‘.　マタタビ属　樹皮　Actinidia　Bark　マタタビ科

写真図版 IX-25a-c（SZ-17560）

細くて多角形の篩管とそれに伴う伴細胞、柔組織の塊と繊維組織の塊が交互に出現して文様を成す樹皮で、放射組織は単列で多数ある。この樹皮に付随していた木部組織の形態からこの樹皮はマタタビ属（サルナシ）であると同定された。おそらくは材として出土したものの樹皮部分が剥離したものと思われる。

23. ムラサキシキブ属　Callicarpa　シソ科

写真図版 IX-26a-c（SZ-17403）

小道管が単独あるいは放射方向に２－３個複合して密度低く均一に散在する散孔材で、単独道管の断面はほぼ円形、２個複合の場合８の字形となり、道管壁はやや厚い。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。木部柔組織は随伴状だが目立たない。放射組織は３細胞幅位の異性で背が高い。以上の形質からシソ科のムラサキシキブ属の材と同定した。

静岡県内にはコムラサキ Callicarpa dichotoma（Lour.）K. Koch、ムラサキシキブ C. japonica Thunb. var. japonica、オオムラサキシキブ C. japonica Thunb. var. luxurians Rehder、ヤブムラサキ C. mollis Siebold et Zucc. が分布する。材構造は互いによく似ており、個々を識別するのは困難である。もっとも普遍的なムラサキシキブは樹高２～４m、幹の太さ５～ 10cm になり、根元から生ずる萠芽枝は通直で下部は枝が無く、真っ直ぐな長い棒を得ることが出来る。木材は極めて堅く強靭で、柄物、堀棒、弓などに適する。本遺跡出土材は加工材１点である。

24. カキノキ属　Diospyros　カキノキ科

写真図版 IX-27a-c（SZ-174902）

放射方向に長軸を持つ楕円形の道管が、多くは単独で、時に２－３個放射方向に複合したものが均一に低密度で散在する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な孔紋で密に交互状に分布する。木部柔組織は単細胞幅の接線状、量は比較的多い。放射組織は１－３細胞幅の異性で背は低く、層階状に配列する。以上の形質からカキノキ科のカキノキ属の材と同定した。

静岡県地方にはリュウキュウマメガキ Diospyros japonica Siebold et Zucc.、トキワガキ D. morrisiana Hance が分布し、また、カキノキ D. kaki Thunb.、マメガキ D. lotus L. はいつの時代（おそらく平安時代以前）にか大陸から渡来したもので、現在では農家等で広く植栽されている。これらはいずれも樹高５～ 10 m、幹径 20 ～ 40cm の小高木～高木で、材は堅硬緻密、均質で切削加工は容易であり、床柱や室内の装飾的部分の建築材、箪笥、机など各種家具、そろばんの枠など各種器具材に用いられる。本遺跡出土材は鉄鎌の柄１点であり、材質を活かした利用である。なお、カキノキ材の遺跡からの出土は多くはない。県内では中屋遺跡から中世の丸杭が比較的多数出土し、また、角江遺跡、元島遺跡などでも出土が知られているが、鎌の柄への利用例は初めてである。

Ⅱ．上土遺跡における木材利用

上土遺跡は静岡市葵区立石地区の現況ほぼ水田の低地帯一帯に広がる平安時代の条里制水田址を主体とする。この条里制水田址は西の賤機丘陵と東の南沼上丘陵にはさまれた、静岡平野北部の麻機低地一帯に広がっていて、上土遺跡の西には全く同じ時期の条里制水田址からなる岳美（たけみ）遺跡があり、これらは同じ遺跡の西と東の部分であると看做される。

岳美遺跡は平成４、５年度（1992、1993 年）に発掘調査がなされ、平成６、７年度（1994、1995 年）に遺跡調査報告書が発刊されている。報告書には大畦畔を構築する大量の遺構材や農工具類を報告するもその樹種については触れていない。平成 24 ～ 26 年度（2012 ～ 2014）には岳美遺跡の東部分さらに東に位置する上土遺跡の発掘調査がなされ、平成 29 年度（2017 年）に報告書が刊行され、そこには 770 点の出土材から同定不可だった１点を除いて 35 の樹種が報告された（第 10 表）。今次の上土遺跡出土木材の樹種同定結果はこれに引き続く平成 29 ～令和元年度（2017 ～ 2019 年）に発掘された木材 577 点を調べたものであり、28 の樹種・部位が同定された（第 10 表）。時期的には平安時代を中心とするものの弥生時代～中世に及ぶ遺物であると考えられている。これらのうち、遺物の形状が比較的しっかりしており、本報告書に実測図が掲載される 163 点については付表に樹種を記載した。

上土・岳美遺跡が条里制水田の遺跡であることから、出土する木材は大部分が畦畔の構築材であり、少数が水田面から出土している。畦畔は条里制に則った間隔がほぼ 107 mの縦横の大畦畔と、それらの間に各水田面を仕切る小畦畔が認められ、大畦畔には多量の木材が構築材として使われていることが知られている（2017 年報告書）。大畦畔を構築している木材は、打ち込まれた杭と横架材から成り、その大部分は建築部材、農工具等の転用材であり、大畦畔の礎に埋め込まれていることから、木材利用の最終形態のひとつと言える。

上土・岳美遺跡の出土材の樹種同定結果（第 10 表）の一番の特徴は、大部分（2017 が 85.5％と 2022 が 79.9％）がスギの幹材であることである。スギ材の転用前の用途は付表および 2017 年報告書の出土遺物の記載にあるように各種建築部材、田下駄（踏み板）、泥よけ、棒類などほとんどの用途に亘る。このようなスギ材の多用は登呂遺跡を始めとして静岡県地方の弥生時代～中世に至るほとんどの遺跡で認められることである。スギ材の多用は北陸地方でも顕著であり、山陰、東北地方日本海側でも

ある程度認めることは出来るが、全国的に見た場合、特に近畿、関東地方と比較した場合、極めて特異であると言える。このようなスギ材中心の木材利用が可能となった背景には、東海地方における実に潤沢な天然スギ林の存在であった。登呂遺跡近くでは弥生時代のスギ巨木の埋没林が知られ、当時は若狭地方同様に低地にスギ林が拡がっていたことが明らかとなっている。そして遺跡で使われているスギ材の年輪を調べると、年輪幅が狭くて均一で、明確な早材部と晩材部を持つ材が少なくない。これは樹齢100年以上を経た、恐らくは数百年という老齢大径木の木材であると推測されることから、静岡県地方では中世までは豊富なスギ天然資源を背景に木材利用が図られてきたと言える。ただ、その豊富だった資源も近世にはかなり減少したようで、人工造林が広く行われるようになり、天然杉は天城山中、愛鷹山、駿遠の奥地部などに限られてしまったようである。

一方、スギ材以外の出土は全体の14～20%程度と、スギ材の多さに隠れて量的には乏しいが、その少ない数から同定された樹種数は試料数と比較すると大変多い、と言える。2017年の報告と今回の報告ともスギに次いで多いのはヒノキ材である。同じヒノキ属のサワラも少なくなく、これら２種ともスギ同様年輪幅が狭く均一な材が比較的多く、やはり天然の大径材が使われていたことが窺える。ヒノキに次いで多いのはイヌマキ属で、その自然分布からイヌマキと考えられる。イヌマキ材は腐朽・水湿に特に強く、土木・建築材によく使われていたことが分かった。針葉樹ではこのほかカヤ、マツ（アカマツ、複維管束亜属）、モミ属、ツガ属が同定され、針葉樹材が全体の、2017年度報告では90.6%、本報告では91.7%を占め、針葉樹中心の用材となっていることがよく示されている（第10表）。

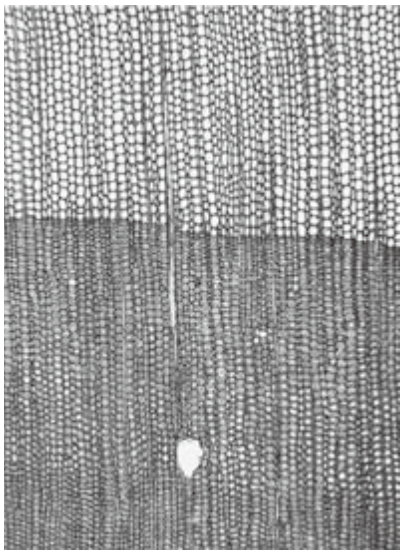
広葉樹は全体の8.8%にしか過ぎないが、樹種は落葉広葉樹が24種（5.0%）、常緑広葉樹が９種（3.5%）、いずれとも判断がつかないものが２種（0.3%），合計35種と、実に多様である。遺跡自体は低地の水田耕作地であり、すぐ近傍にはもちろん森林はなく、出土材は基本的には畦畔構築及び水田耕作に関わって持ち込まれた木材であることから、これらの木材は水田をここで営んだ人たちが住む集落等で使われている木材そのものを表している。その集落は近傍の丘陵地に近いところに推定されるが、クリ、コナラ節、ケヤキ、エゴノキ属、アカメガシワ、イヌシデ節、クヌギ節、ヤシャブシ節、カラスザンショウ、クサギ、リョウブなどの出土は、その集落周囲には暖帯性の二次林が拡がっていたことを推定させる。一方、アカガシ亜属、サカキ、シイ類、ヒサカキ、クスノキ、クスノキ科などの常緑広葉樹の存在は照葉樹林の要素も存在し、実際には部分的に照葉樹林要素がモザイク的に混在する二次林であったと考えられる。これを現在の静岡平野の低丘陵地の景観に重ねると、現在の景観からスギ、マツの人工林を取り去った常緑広葉樹を交えた二次林が拡がっていたと言え、人々はスギ、ヒノキなどの主要針葉樹以外の木材はここから得て利用していたことが窺えた。

第 10 表　上土遺跡出土木材樹種一覧表

樹　　種	*	2017**		2022		2017・2022 合算	
		小計	%	小計	%	合計	%
スギ	C	658	85.5	460	79.7	1118	83.0
スギ　根材	C			1	0.2	1	0.1
ヒノキ	C	24	3.1	24	4.2	48	3.6
サワラ	C			18	3.1	18	1.3
ヒノキ属	C			2	0.3	2	0.1
ヒノキ科	C	1	0.1			1	0.1
ヒノキ科樹皮	C			2	0.3	2	0.1
イヌマキ属	C	10	1.3	15	2.6	25	1.9
カヤ	C	1	0.1	4	0.7	5	0.4
モミ属	C	3	0.4			3	0.2
アカマツ	C	1	0.1			1	0.1
マツ属複維管束亜属	C			2	0.3	2	0.1
ツガ属	C			1	0.2	1	0.1
針葉樹合計		698	90.6	529	91.7	1227	91.1
クリ	D	13	1.7	1	0.2	14	1.0
ヤナギ属	D	1	0.1	7	1.2	8	0.6
マタタビ属	D	3	0.4	3	0.5	6	0.4
マタタビ属樹皮	D			1	0.2	1	0.1
コナラ属コナラ節	D	6	0.8			6	0.4
ケヤキ	D	4	0.5			4	0.3
エゴノキ属	D	1	0.1	2	0.3	3	0.2
イヌビワ	D	3	0.4			3	0.2
サクラ属	D	3	0.4			3	0.2
アカメガシワ	D			2	0.3	2	0.1
クマシデ属イヌシデ節	D	2	0.3			2	0.1
クマシデ属クマシデ節	D	2	0.3			2	0.1
コナラ属クヌギ節	D	2	0.3			2	0.1
クマノミズキ	D			1	0.2	1	0.1
ハンノキ属ヤシャブシ節	D			1	0.2	1	0.1
ムクロジ	D			1	0.2	1	0.1
ムラサキシキブ属	D			1	0.2	1	0.1
カキノキ属	D			1	0.2	1	0.1
カラスザンショウ	D	1	0.1			1	0.1
クサギ	D	1	0.1			1	0.1
トチノキ	D	1	0.1			1	0.1
ブナ属	D	1	0.1			1	0.1
ヤマウルシ	D	1	0.1			1	0.1
ヤマナラシ属	D	1	0.1			1	0.1
リョウブ	D	1	0.1			1	0.1
落葉樹合計	D	47	6.1	21	3.6	68	5.0
コナラ属アカガシ亜属	E	7	0.9	6	1.0	13	1.0
サカキ	E	3	0.4	8	1.4	11	0.8
コジイ	E	1	0.1	5	0.9	6	0.4
スダジイ	E	4	0.5	2	0.3	6	0.4
クスノキ科 C	E			3	0.5	3	0.2
クスノキ	E	4	0.5			4	0.3
シャリンバイ	E	2	0.3			2	0.1
ウバメガシ	E			1	0.2	1	0.1
ヒサカキ	E	1	0.1			1	0.1
常緑樹合計	E	22	2.9	25	4.3	47	3.5
クスノキ科 D	U			2	0.3	2	0.1
クスノキ科	U	2	0.3			2	0.1
不明種合計	U	2	0.3	2	0.3	4	0.3
広葉樹合計		71	9.2	48	8.3	119	8.8
(同定不可)		1	0.1				
総　　計		770		577		1347	

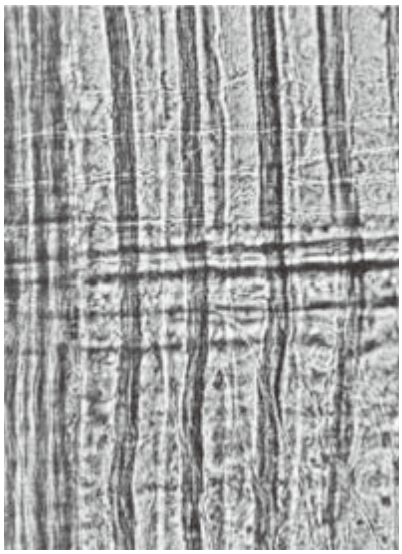
*　C= 針葉樹、D= 落葉広葉樹、E= 常緑広葉樹、U= 不明種

**　2017= 上土・岳美遺跡報告書 2017，2022= 本報告

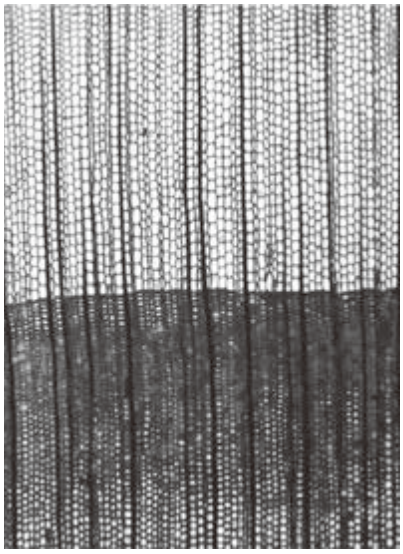


1a.　マツ属複維管束亜属 No.17329 木口×30

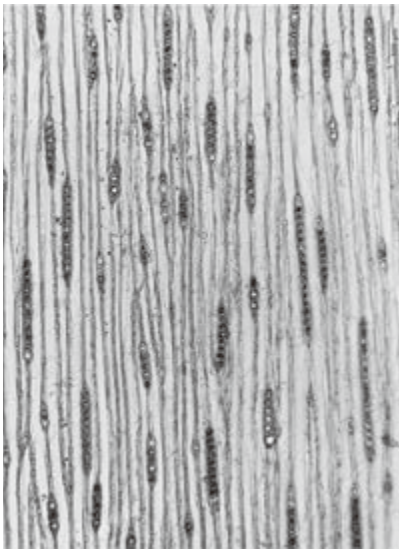
1b.　同　板目×60



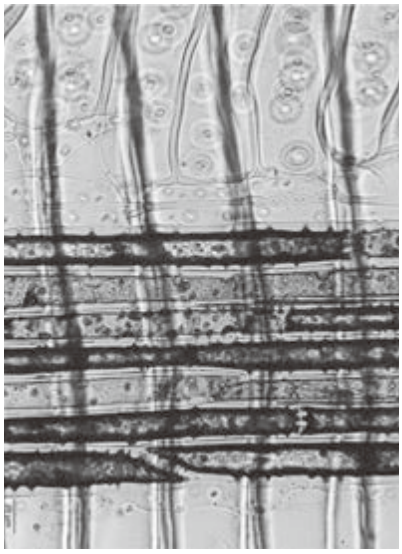
1c.　同　柾目×240



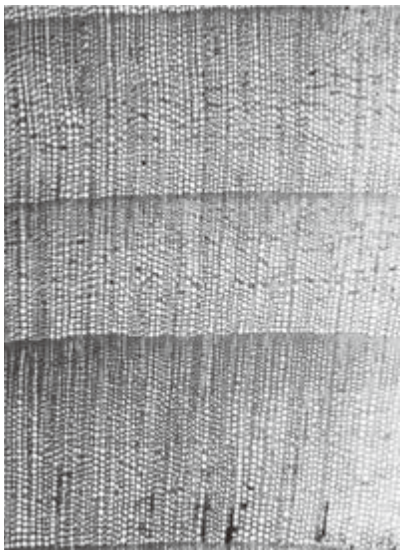
2a.　ツガ属 No.17616 木口×30



2b.　同　板目×60

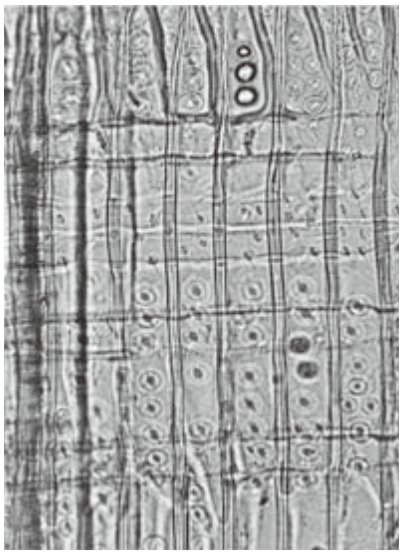


2c.　同　柾目×240



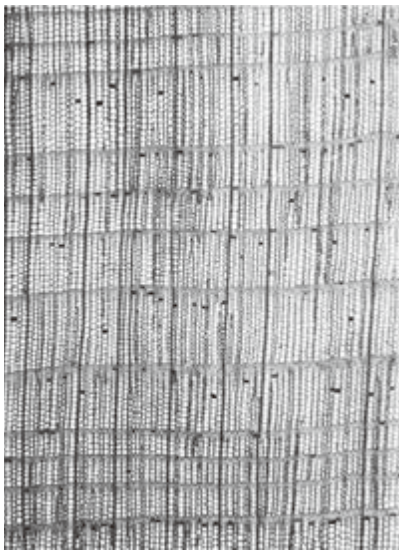
3a.　イヌマキ属 No.17410 木口×30

3b.　同　板目×60

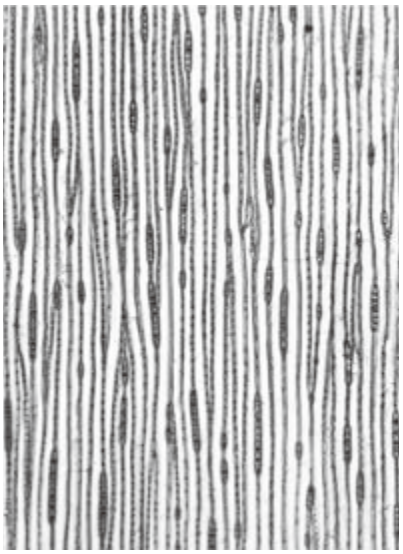


3c.　同　柾目×240

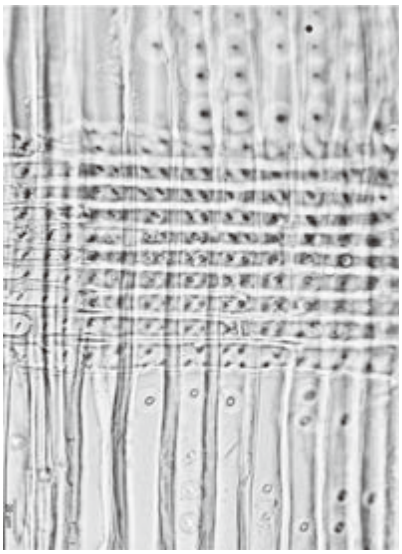
写真５　出土木材顕微鏡写真１



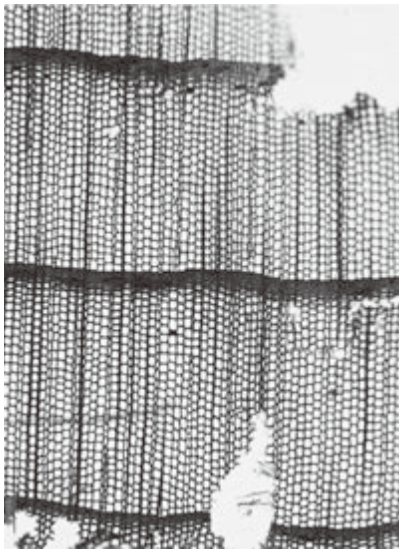
4a.　ヒノキ No.17805 木口× 30



4b.　同　板目× 60

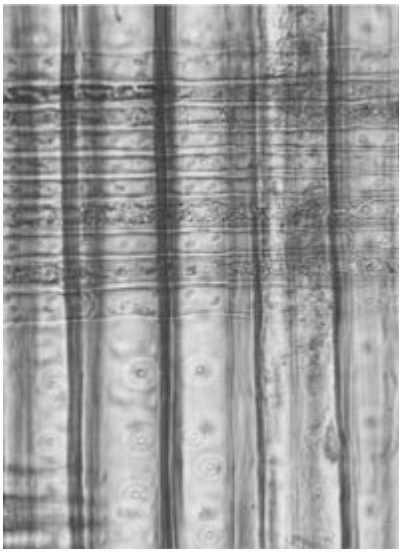


4c.　同　柾目× 240

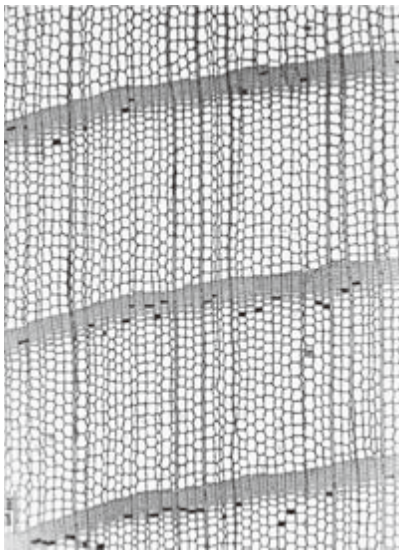


5a.　サワラ No.171618 木口× 30

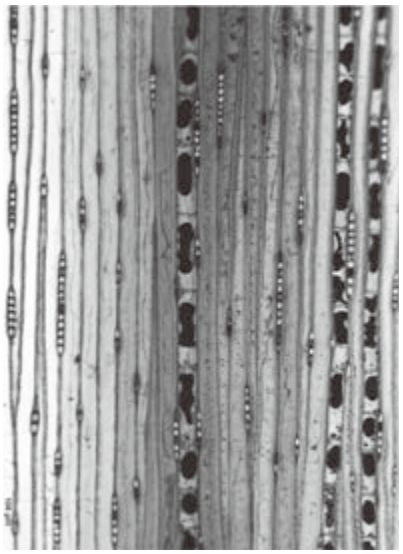
5b.　同　板目× 60



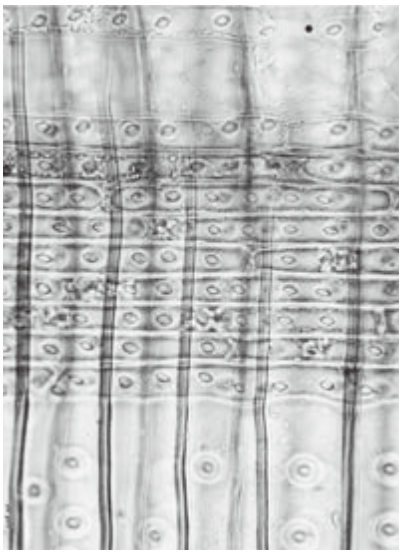
5c.　同　柾目× 240



6a.　スギ No.17743 木口× 30

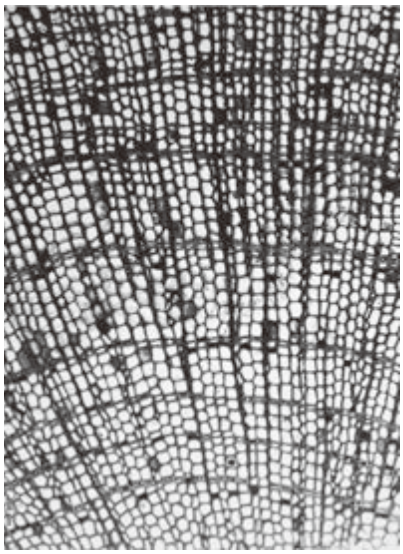


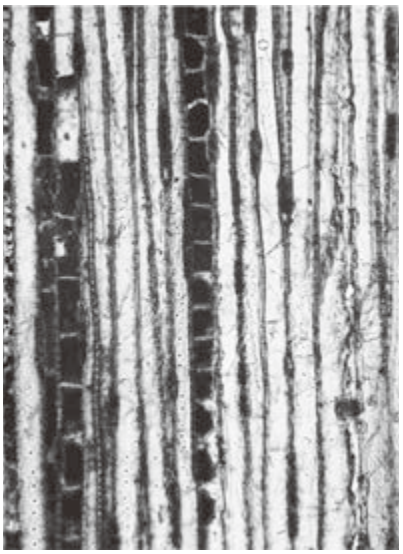
6b.　同　板目× 60

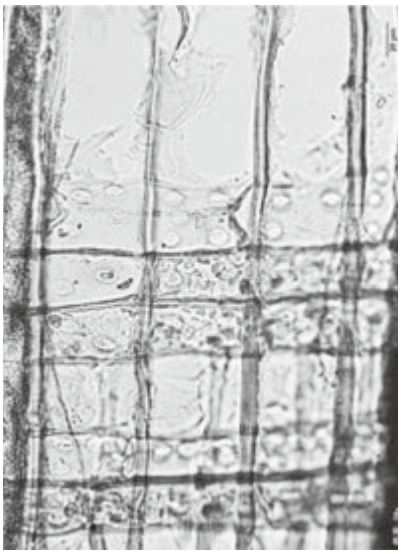


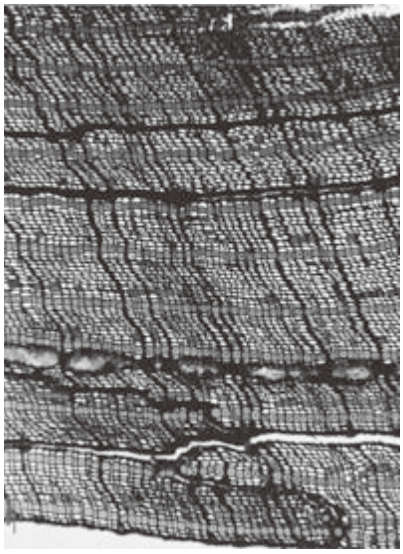
6c.　同　柾目× 240

写真６　出土木材顕微鏡写真２


7a. スギ根材 No.17879 木口× 30

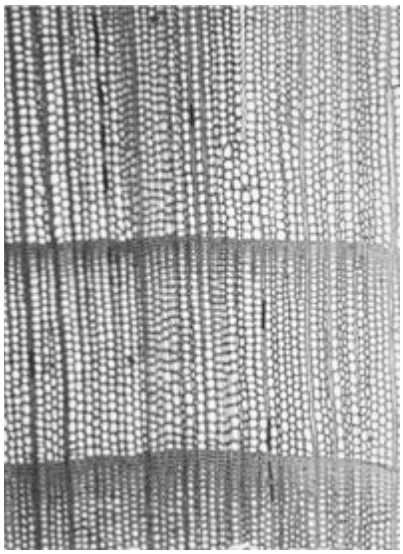

7b. 同　板目× 60

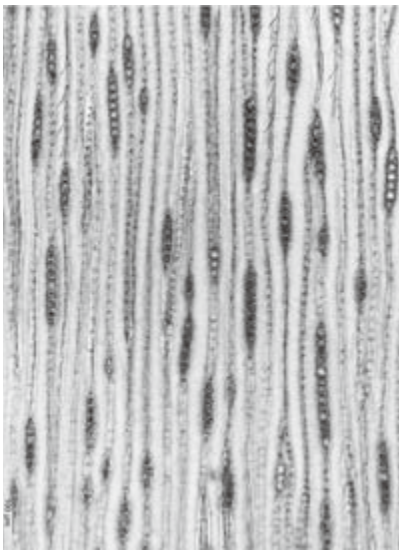

7c. 同　柾目× 240


8a. ヒノキ科樹皮 No.17367 木口× 30

8b. 同　板目× 60

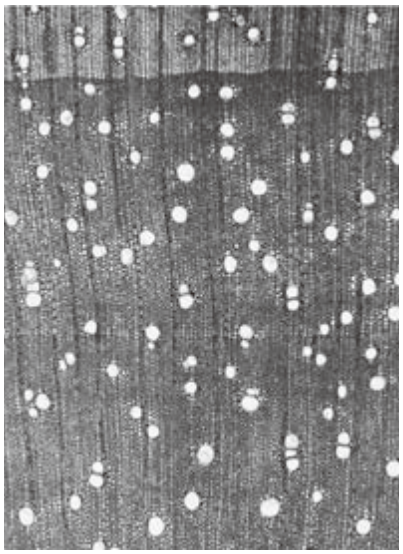
8c. 同　柾目× 240

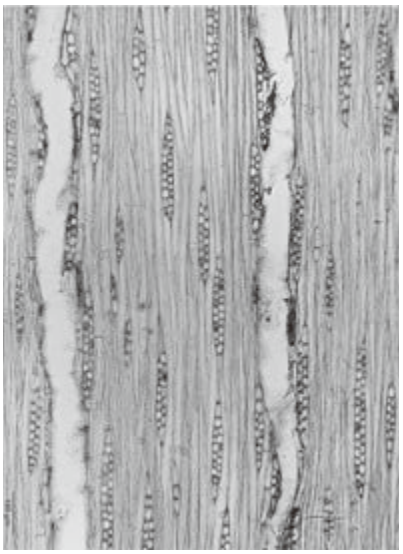

9a. カヤ No.17332 木口× 30


9b. 同　板目× 60

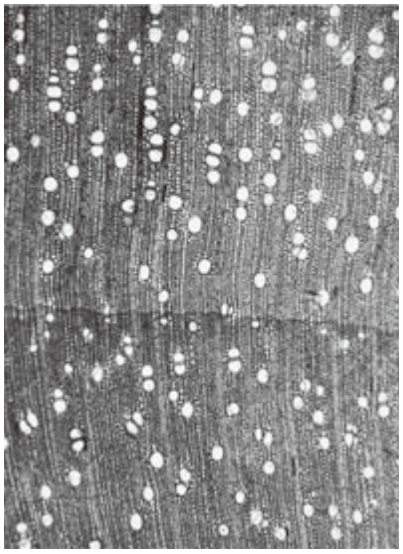
9c. 同　柾目× 240

写真７　出土木材顕微鏡写真３

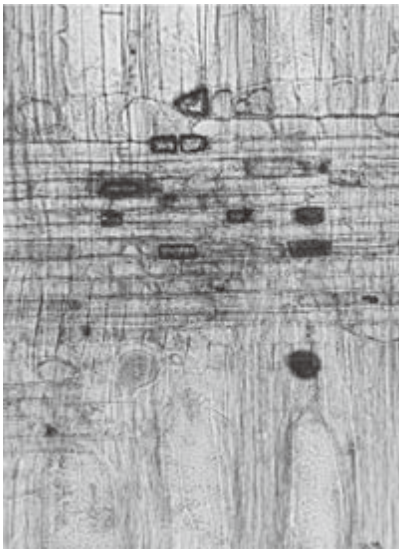

10a. クスノキ科 C No.17433 木口× 30


10b. 同　板目× 60

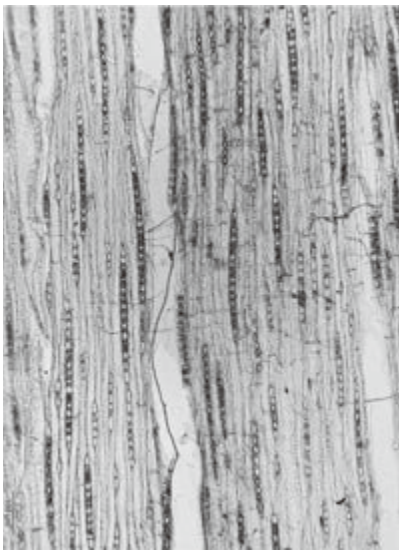
10c. 同　柾目× 120


11a. クスノキ科 D No.17437 木口× 30

11b. 同　板目× 60

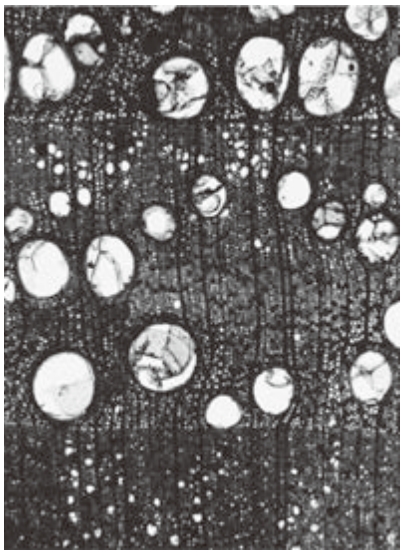

11c. 同　柾目× 120

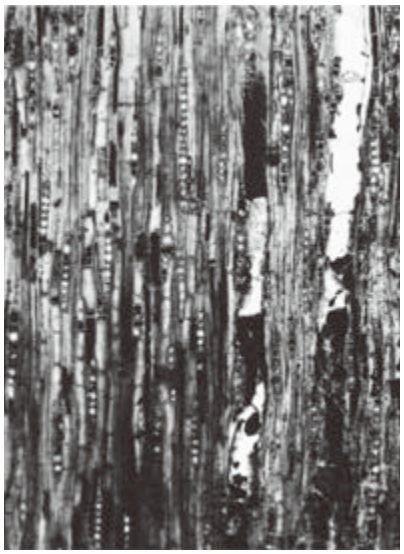
12a. ヤシャブシ節 No.17376 木口× 30

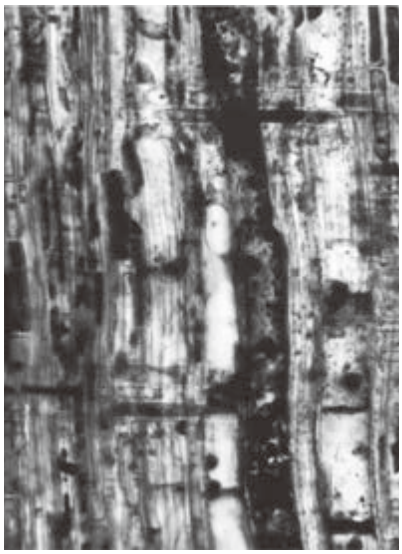

12b. 同　板目× 60

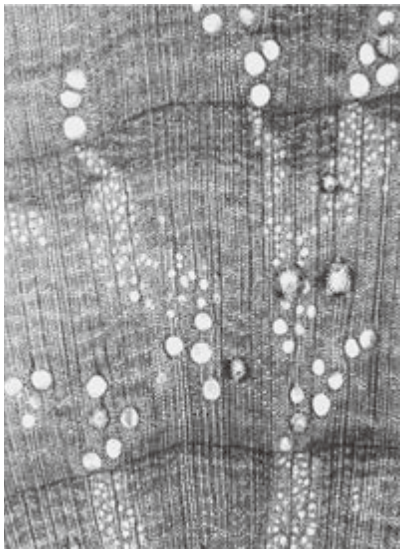
12c. 同　柾目× 120

写真８　出土木材顕微鏡写真４


13a. クリ No.17428 木口× 30

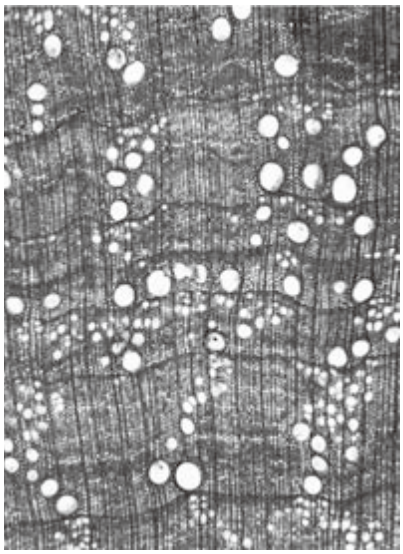

13b. 同　板目× 60

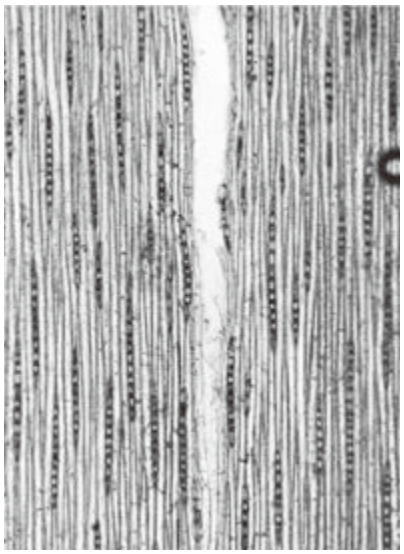

13c. 同　柾目× 120


14a. コジイ No.17333 木口× 30

14b. 同　板目× 60

14c. 同　柾目× 120


15a. スダジイ No.17901 木口× 30


15b. 同　板目× 60

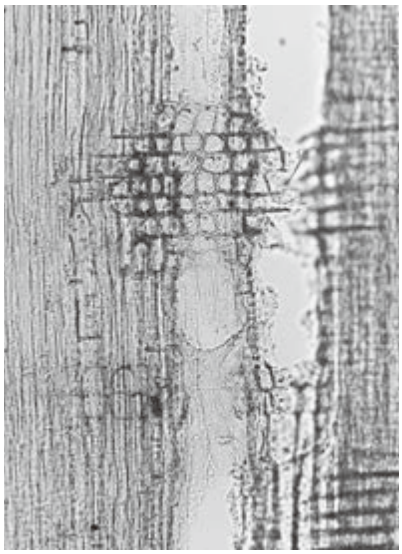
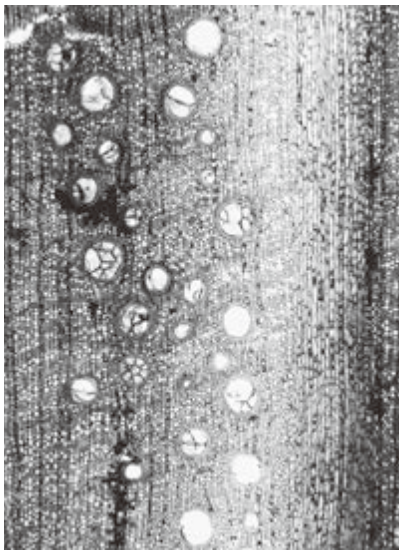
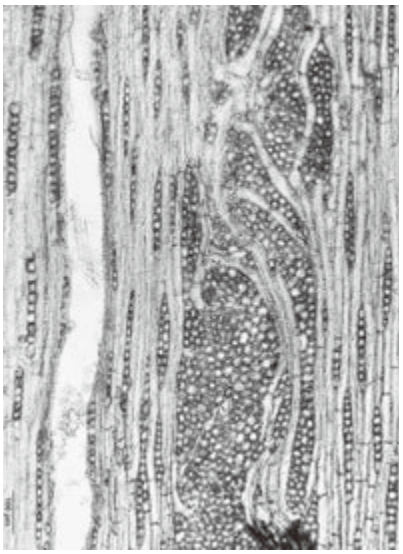

15c. 同　柾目× 120

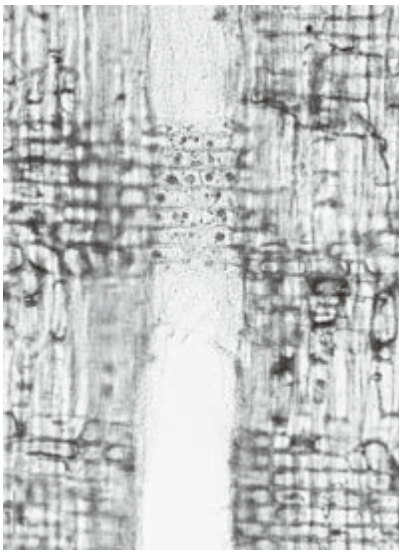
写真９　出土木材顕微鏡写真５



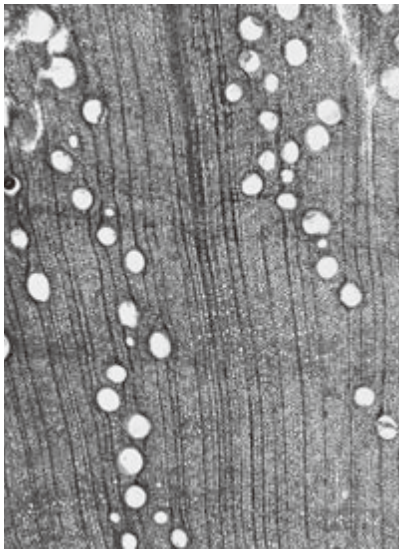
16a. アカガシ亜属 No.17789 木口× 30



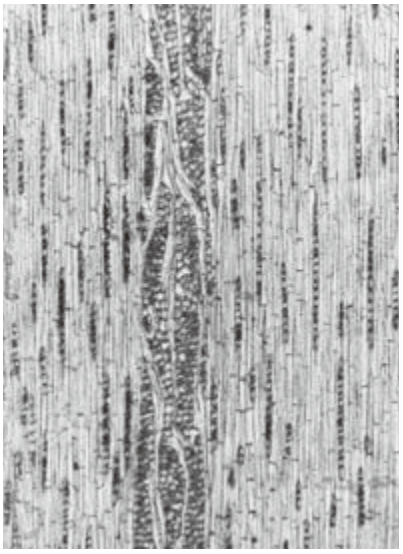
16b. 同　板目× 60



16c. 同　柾目× 120

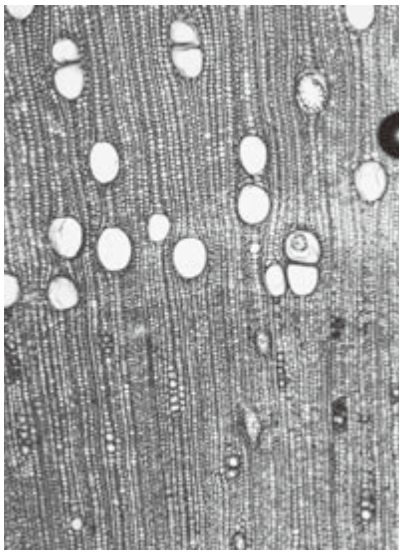


17a. ウバメガシ No.17636 木口× 30



17b. 同　板目× 60

17c. 同　柾目× 120

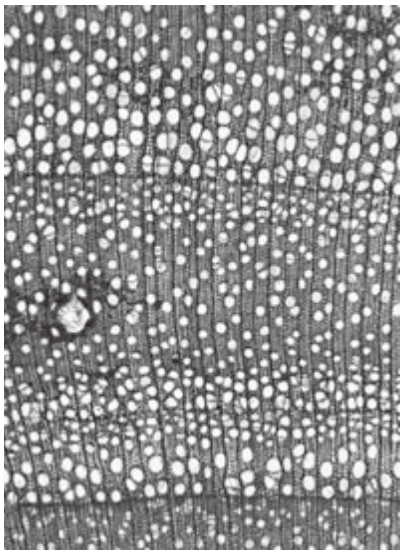


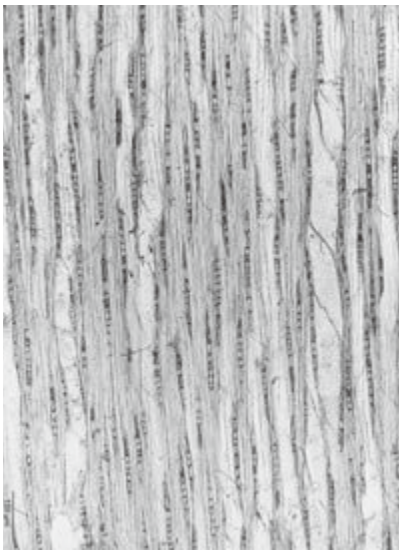
18a. アカメガシワ No.17654 木口× 30

18b. 同　板目× 60

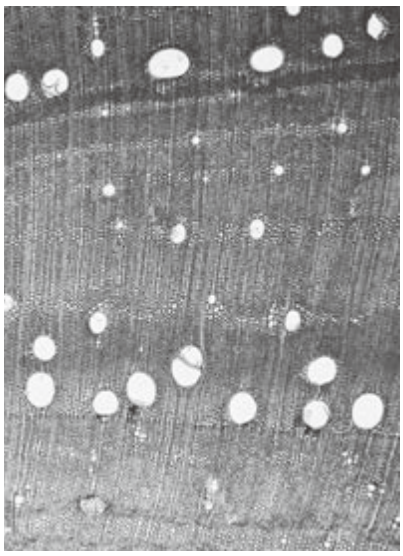
18c. 同　柾目× 120

写真 10　出土木材顕微鏡写真６


19a. ヤナギ属 No.17455 木口× 30

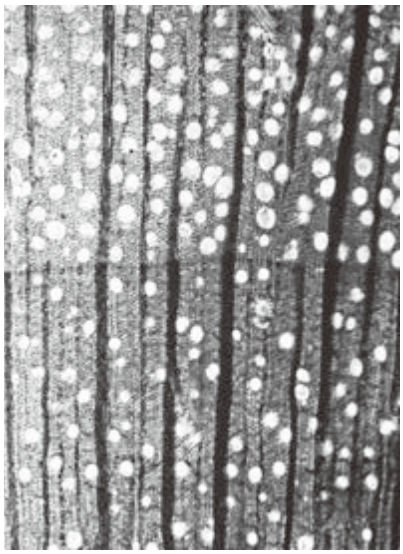

19b. 同　板目× 60

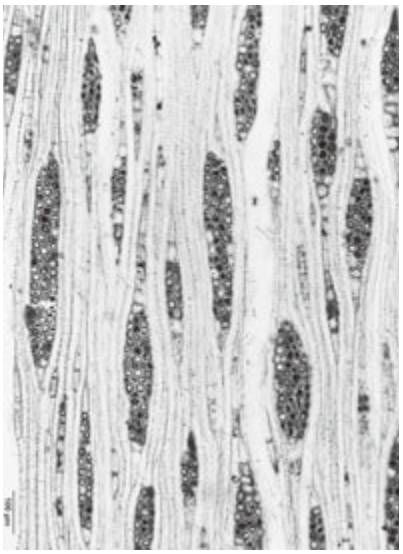
19c. 同　柾目× 120


20a. ムクロジ No.17383 木口× 30

20b. 同　板目× 60

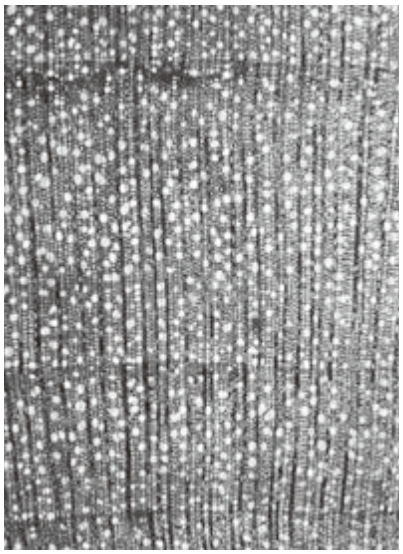
20c. 同　柾目× 120


21a. クマノミズキ No.17781 木口× 30

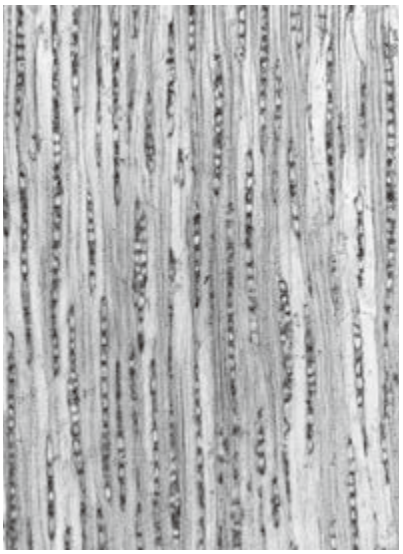

21b. 同　板目× 60

21c. 同　柾目× 120

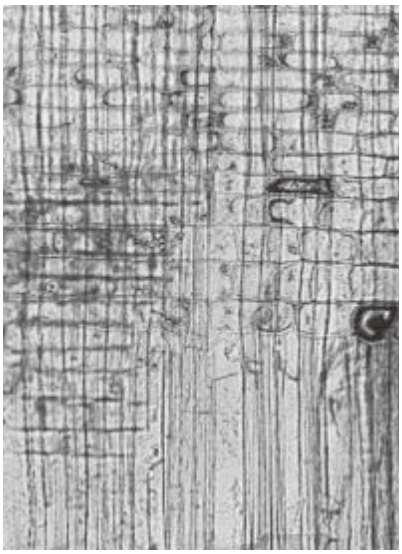
写真 11　出土木材顕微鏡写真７



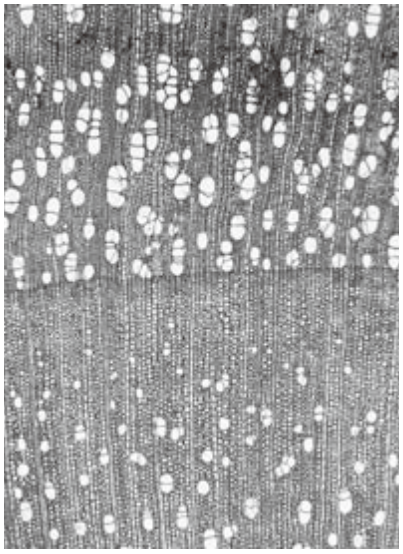
22a. サカキ No.17420 木口× 30



22b. 同　板目× 60



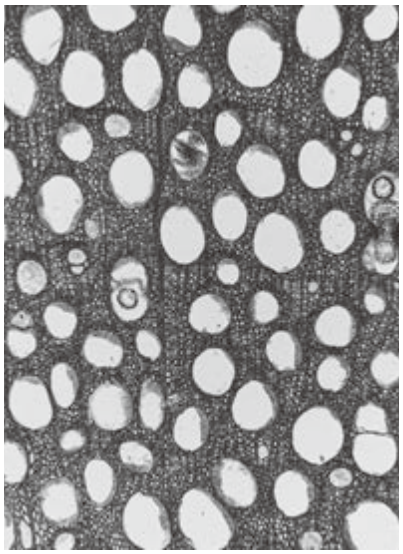
22c. 同　柾目× 120



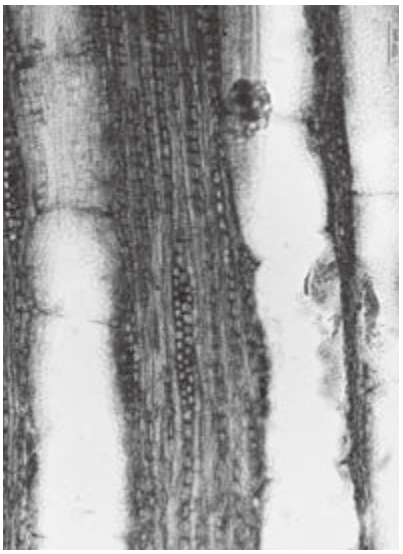
23a. エゴノキ属 No.17424 木口× 30

23b. 同　板目× 60

23c. 同　柾目× 120



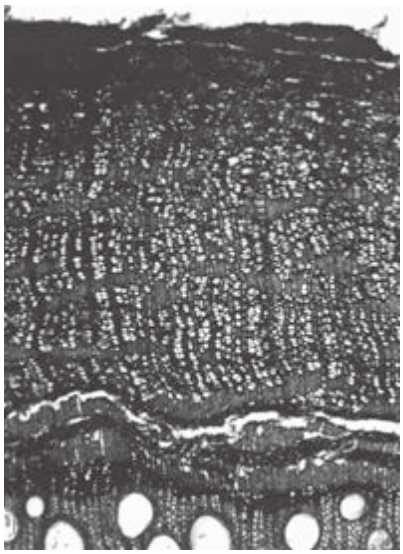
24a. マタタビ属 No.17507 木口× 30

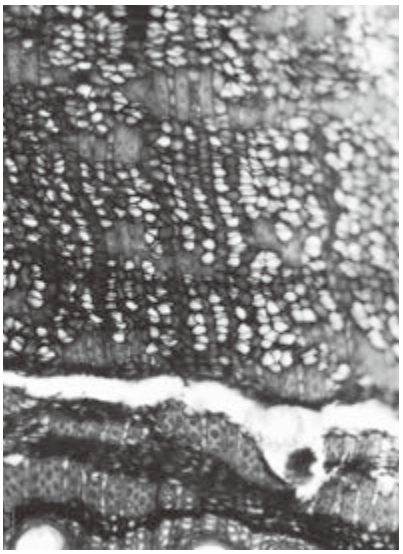


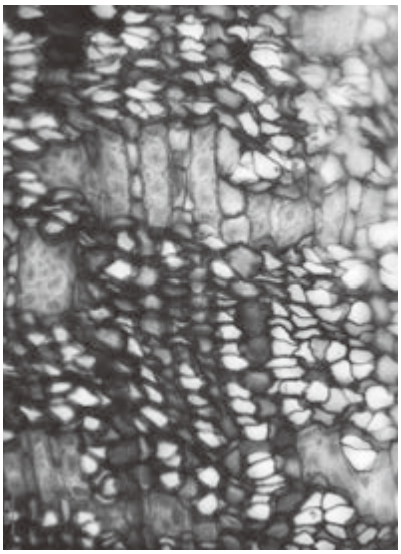
24b. 同　板目× 60

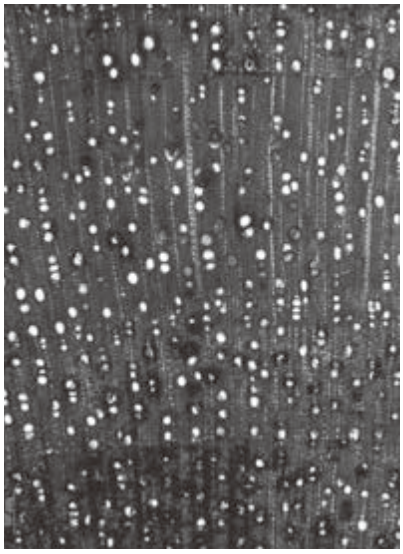
24c. 同　柾目× 120

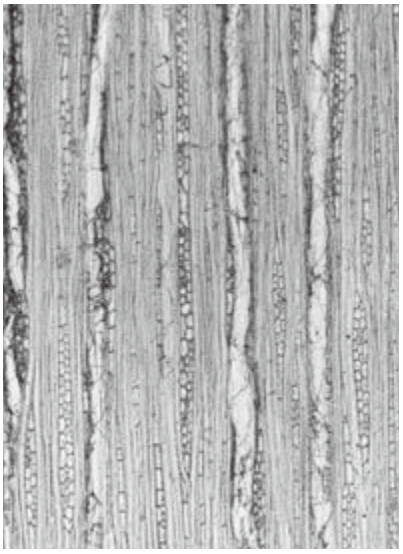
写真 12　出土木材顕微鏡写真８


25a. マタタビ属樹皮 No.17560 木口× 30

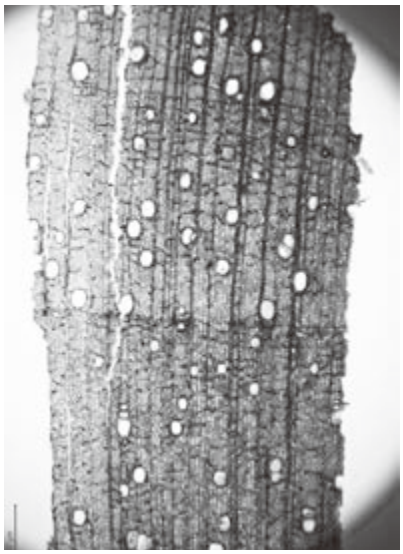

25b. 同　木口× 60

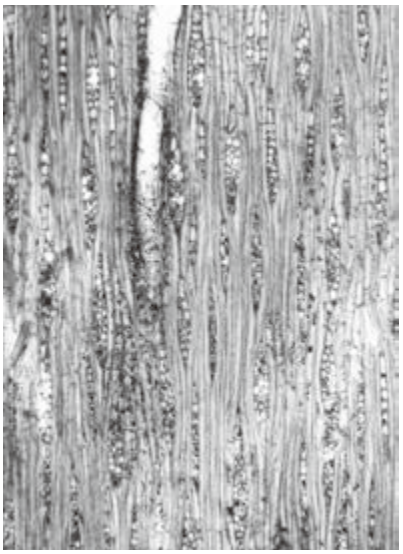

25c. 同　木口× 120


26a. ムラサキシキブ属 No.17403 木口× 30


26b. 同　板目× 60

26c. 同　柾目× 120


27a. カキノキ属 No.17902 木口× 30


27b. 同　板目× 60

27c. 同　柾目× 120

写真 13　出土木材顕微鏡写真９

第２節　上土遺跡種実同定

株式会社古環境研究所

１　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。本報告では、上土遺跡で出土したモモとみられる種実について同定を行い、その特徴を検討する。

２　試料

試料は、上土遺跡の８世紀から９世紀とされる堆積層から採取された土壌より水洗・選別された種実 39 点である。試料の詳細を第 11 表に示す。

３　方法

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。

結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。また、デジタルノギスを用いて、長さ・幅・厚さを計測する。

４　結果

（１）分類群

木本のモモ１分類群が同定された。以下に､同定の根拠となる形態的特徴を記載し、写真を図版に示す。

〔木本〕

モモ　Prunus　persica　Batsch　核（完形・破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある｡形状の計測結果を第12表に示す。

（２）種実群集の特徴

39 点はすべてモモであり、№34 以外は完形であった。なお、金原ほか（1992）によると古墳時代～奈良時代のモモは形態的特徴からＡ～Ｃ類に分類されている（第 58 図)。その分類に従うと、本遺跡で出土

第 11 表　出土種実一覧表

	調査区	出土位置	層位	取上げ番号
1	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ①
2	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ②
3	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ③
4	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ④
5	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑤
6	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑥
7	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑦
8	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑧
9	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑨
10	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑩
11	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑪
12	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑫
13	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑬
14	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑭
15	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑮
16	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑯
17	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑰
18	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑱
19	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑲
20	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ⑳
21	2 区	疑似畦畔？		S1 ～ S19 ㉑
22	2 区		15 ～ 16 層（訂正前）	S20
23	2 区		15 ～ 16 層（訂正前）	S21
24	2 区		15 ～ 16 層（訂正前）	S22
25	2 区	（西端トレンチ）	16 層下部（訂正前）	S23 ～ S27 ①
26	2 区	同上	16 層下部（訂正前）	S23 ～ S27 ②
27	2 区	同上	16 層下部（訂正前）	S23 ～ S27 ③
28	2 区	同上	16 層下部（訂正前）	S23 ～ S27 ④
29	2 区	同上	16 層下部（訂正前）	S23 ～ S27 ⑤
30	不明			番号無し①
31	不明			番号無し②
32	不明			番号無し③
33	1-3 区	畦畔上	12 層	S-1
34	3 区	畦畔真上		S-2
35	3 区	畦畔裾		S-3
36	3 区	畦畔上層		S-4
37	3 区	畦畔上	10 ～ 11 層	S-5
38	3 区	畦畔内	畦畔構築土	S-6
39	3 区	畦畔内		S-7

したモモは全て古い形のＡ類であり、Ａ類の中でも後出するタイプにあたる。律令期には左右不対象で厚みのあるタイプの出土例が多く、今回の試料では№１、８、17、33 がそれにあたる。計測の結果、平均値は長さ 24.69 ㎜、幅 19.64 ㎜、厚さ 15.35 ㎜であり、最大値は長さ 30.23 ㎜、幅 25.18 ㎜、厚さ 19.66 ㎜、最小値は長さ 19.89 ㎜、幅 15.80 ㎜、厚さ 13.36 ㎜であった。

第 12 表　出土モモ核の計測値一覧表

試料	状態	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	長さ×幅	長さ／幅	長さ／厚さ	幅／厚さ	タイプ	写真中番号
1	完形	25.82	20.26	15.65	523.11	1.27	1.65	1.29	A	
2	完形	27.78	25.18	18.20	699.50	1.10	1.53	1.38	A	
3	完形	25.94	22.40	15.75	581.06	1.16	1.65	1.42	A	
4	完形	24.69	20.72	16.69	511.58	1.19	1.48	1.24	A	1
5	完形	24.74	19.28	15.14	476.99	1.28	1.63	1.27	A	
6	完形	23.55	19.47	14.79	458.52	1.21	1.59	1.32	A	
7	完形	26.40	21.86	16.00	577.10	1.21	1.65	1.37	A	
8	完形	23.66	16.80	13.36	397.49	1.41	1.77	1.26	A	2
9	完形	27.76	21.93	16.83	608.78	1.27	1.65	1.30	A	3
10	完形	23.34	20.34	15.24	474.74	1.15	1.53	1.33	A	
11	完形	25.15	20.67	16.89	519.85	1.22	1.49	1.22	A	
12	完形	24.77	20.68	15.79	512.24	1.20	1.57	1.31	A	
13	完形	22.97	18.76	15.07	430.92	1.22	1.52	1.24	A	
14	完形	23.03	20.09	15.64	462.67	1.15	1.47	1.28	A	4
15	完形	24.11	20.27	16.41	488.71	1.19	1.47	1.24	A	
16	完形	24.77	20.49	15.61	507.54	1.21	1.59	1.31	A	5
17	完形	24.09	18.22	13.56	438.92	1.32	1.78	1.34	A	
18	完形	23.16	19.23	15.58	445.37	1.20	1.49	1.23	A	
19	完形	23.80	17.99	14.30	428.16	1.32	1.66	1.26	A	
20	完形	24.16	21.46	16.41	518.47	1.13	1.47	1.31	A	6
21	完形	23.64	19.36	15.09	457.67	1.22	1.57	1.28	A	
22	完形	22.68	19.27	14.43	437.04	1.18	1.57	1.34	A	
23	完形	28.32	20.67	16.97	585.37	1.37	1.67	1.22	A	7
24	完形	24.46	18.85	14.41	461.07	1.30	1.70	1.31	A	
25	完形	22.08	18.71	15.46	413.12	1.18	1.43	1.21	A	
26	完形	30.23	24.87	19.22	751.82	1.22	1.57	1.29	A	
27	完形	26.45	21.92	16.49	579.78	1.21	1.60	1.33	A	8
28	完形	24.34	19.09	14.98	464.65	1.28	1.62	1.27	A	
29	完形	22.97	19.40	15.37	445.62	1.18	1.49	1.26	A	
30	完形	28.30	22.70	19.66	642.41	1.25	1.44	1.15	A	
31	完形	26.59	22.16	15.85	589.23	1.20	1.68	1.40	A	
32	完形	25.95	21.02	15.72	545.47	1.23	1.65	1.34	A	9
33	完形	21.83	15.80	14.90	344.91	1.38	1.47	1.06	A	
34	半分	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	完形	28.55	21.15	16.92	603.83	1.35	1.69	1.25	A	10
36	完形	24.12	20.16	15.95	486.26	1.20	1.51	1.26	A	
37	完形	21.79	19.38	14.85	422.29	1.12	1.47	1.31	A	
38	完形	19.89	18.21	14.80	362.20	1.09	1.34	1.23	A	
39	完形	22.35	18.29	14.86	408.78	1.22	1.50	1.23	A	
平均値		24.69	20.19	15.76						
最大値		30.23	25.18	19.66						
最小値		19.89	15.80	13.36						

５　考察

上土遺跡において種実同定を行った結果、すべて木本種実のモモであった。モモは食用となる栽培植物であり、稲作とともに伝来したとされている。多くの遺跡から出土し、食用、薬用、祭祀等に利用されてきた。本遺跡で出土したモモの形態をみると、古墳時代から古代にみられるものの特徴を有している。これらは栽培されていたか、もしくは持ち込まれたものが利用された後、投棄されたと考えられる。

参考文献

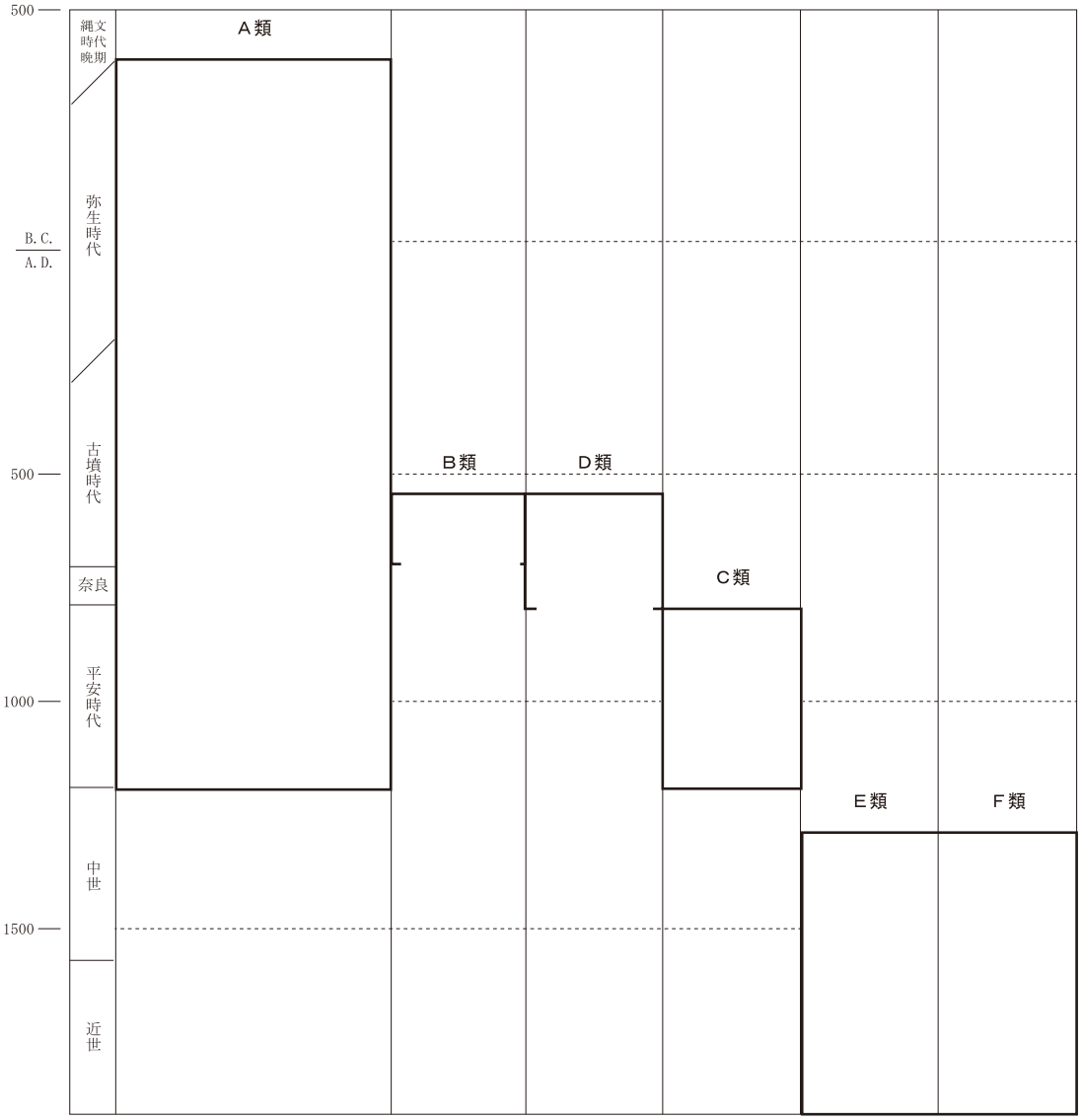
笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

金原正明・粉川昭平（1992）モモ核を中心とする古代の有用植物の変遷．日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集，p. 76-77.

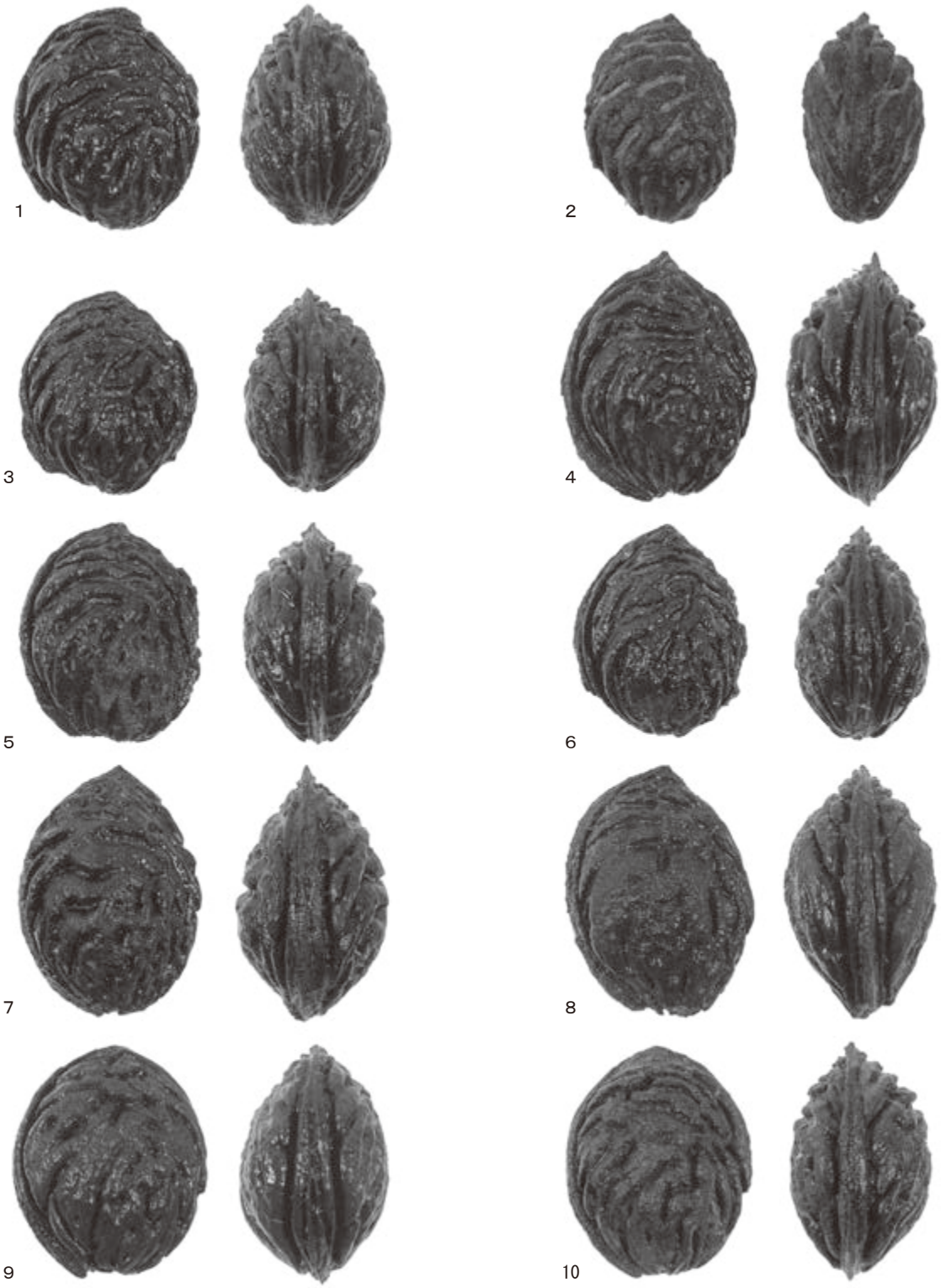
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No. 409，ニューサイエンス社，p. 15－19.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p. 165－174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276－283.



第 58 図　モモ核変遷図　金原ほか（1992）より抜粋



１．２区 疑似畦畔？ S1～S19④
２．２区 疑似畦畔？ S1～S19⑧
３．２区 疑似畦畔？ S1～S19⑨
４．２区 疑似畦畔？ S1～S19⑭
５．２区 疑似畦畔？ S1～S19⑯
６．２区 疑似畦畔？ S1～S19㉑
７．２区 15～16層(訂正前) S21
８．２区（西端トレンチ）16層下部(訂正前) S23～S27③
９．不明 番号無し③
10．３区 畦畔裾 S-3

写真 14　出土種子

第３節　上土遺跡検出の火山灰同定分析

株式会社古環境研究所

１　はじめに

東海地方の静岡市周辺には、富士、天城、伊豆諸島のほか、北関東地方、中部地方、九州地方などの火山に由来するテフラが分布している。すでに、それらの多くの諸特徴は、テフラ・カタログ（町田・新井 1992･2003･2011）に掲載されており、遺跡の発掘調査の際にテフラの調査分析を実施することで、考古遺物や遺構の層位や年代などがわかるようになっている。

静岡市上土遺跡では、平成 29 年度に実施された発掘調査で泥炭層中に白色火山灰層が確認され、テフラ分析の結果、神津島天上山テフラ（Iz － Kt，838 年）である可能性が高いと判断された。

今年度の調査区においても、同じく泥炭層中に白色火山灰層が検出されたことから、テフラ分析（火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定）を実施して、指標テフラとの同定を行った。分析対象は、２区調査区東壁 13b2 層と２－１区調査区南壁 13b 層の２試料である。土層観察によると、分析対象となる各テフラは、非常に細粒の白色火山灰層（層厚 0.3cm ～ 0.6 cm程度）である。

２　テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

２区調査区東壁 13b2 層、２－１区調査区南壁 13b 層について、テフラ検出分析及び火山ガラスの形態（一部色調）別含有率や、軽鉱物ならびに重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

１）送付試料から高純度部を適量採取。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）恒温乾燥器により 80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察（テフラ検出分析）。
５）分析篩により 1/4 ～ 1/8mm と 1/8 ～ 1/16mm の粒子を篩別。
６）偏光顕微鏡下で 1/4 ～ 1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態（一部色調）別含有率、軽鉱物や重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を第13表に示す。両試料には多くの火山ガラスが含まれている。火山ガラスは、無色透明の繊維束状軽石型や分厚い中間型ガラスである。

第 13 表　テフラ検出分析表

試料名	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
2 区 調査区東壁 13 b 2 層				***	pm(fb)，md	無色透明	(mc)
2-1 区 調査区南壁 13 b 層				***	pm(fb)，md	無色透明	(mc)

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，＊少ない，(*)：非常に少ない．最大径の単位は mm.
bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，sc：スコリア型，sp：スポンジ状発泡，fb：繊維束状発泡.
ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，mc：雲母.　重鉱物の（）は量が少ないことを示す.

次に、火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第 59 図に、その内訳を第 14 表に示す。

１）２区調査区東壁 13b2 層

試料に含まれる火山ガラスの含有率は 80.8％に達する。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（40.8％）、中間型（38.4％）、スポンジ状軽石型（1.2％）、無色透明バブル型（0.4％）である。また、この試料に含まれる軽鉱物と重鉱物の含有率はそれぞれ 10.8％と 0.4％で、重鉱物には雲母（黒雲母）が認められる。

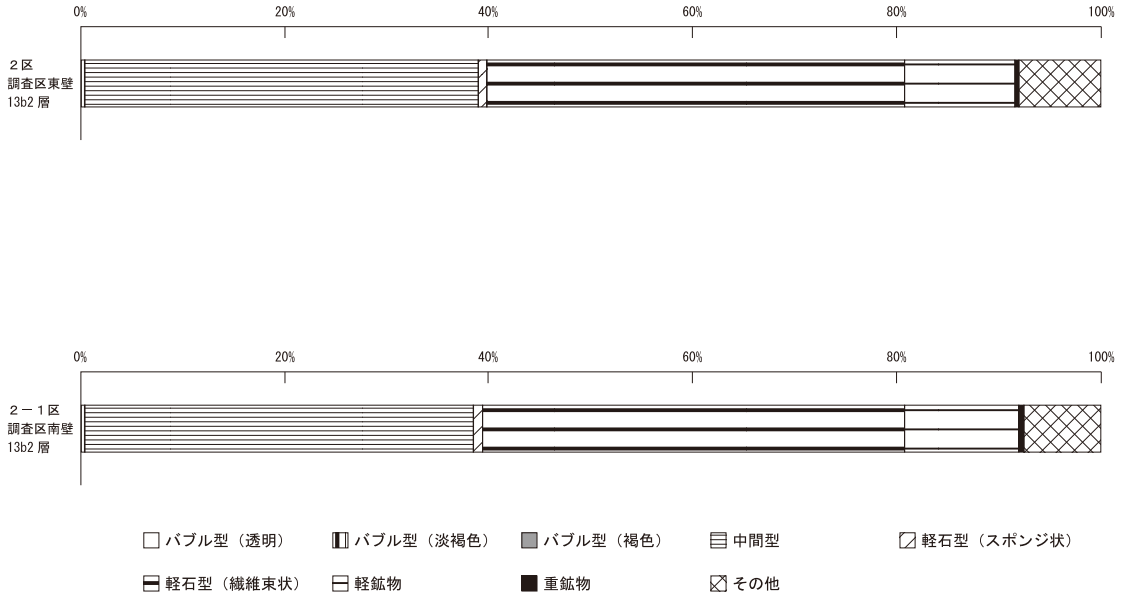
２）２－１区調査区南壁 13b 層

試料に含まれる火山ガラスの含有率は 80.4％である。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（41.2％）、中間型（38.0％）、スポンジ状軽石型（0.8％）、無色透明バブル型（0.4％）である。また、この試料に含まれる軽鉱物と重鉱物の含有率はそれぞれ 11.2％と 0.8％で、重鉱物には雲母（黒雲母）が認められる。

第 14 表　火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw (br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合　計
2 区 調査区東壁 13b2 層	1	0	0	96	3	102	27	1	20	250
2-1 区 調査区南壁 13b 層	1	0	0	95	2	103	28	2	19	250

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．数字は粒子数．



第 59 図　上土遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム

３．屈折率測定（火山ガラス）

（１）測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させることを目的として、２区調査区東壁 13b2 層、２－１区調査区南壁 13b 層に含まれる 1/8-1/16㎜の火山ガラスを対象に、温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）にしたがって屈折率特性の把握を行った。

（２）測定結果

屈折率測定結果を第 15 表に示す。この表には、東海地方とその周辺に降灰する後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて記載した。２区調査区東壁 13b2 層に含まれる火山ガラス（34 粒子）の屈折率（ｎ）は、1.494-1.496、２－１区調査区南壁 13b 層に含まれる火山ガラス（33 粒子）の屈折率（ｎ）は、1.495-1.497 である。

第 15 表　屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率（n）	測定点数	
上土遺跡　2 区 調査区東壁 13b2 層	1.494-1.496	34	本報告
上土遺跡　2-1 区 調査区南壁 13b 層	1.495-1.497	33	本報告
東海地方とその周辺に降灰する珪長質の代表的な指標テフラ			
伊豆新島向山（Iz-Nm，886 年）	1.490-1.497		1）
伊豆神津島天上山（Iz-Nm，838 年）	1.494-1.497		1）
天城カワゴ平（Kg，約 3,100 年前）	1.493-1.503		1）
鬼界アカホヤ（K-Ah，約 7,300 年前）	1.505-1.513		1）
立川ローム上部ガラス質（UG，約 1.5 ～ 1.65 万年前）	1.500-1.503		1）
姶良 Tn（AT，約 2.8 ～３万年前）	1.498-1.501		1）
含雲母グリース状（G，約５万年前？）	1.500-1.502		1）

１）：町田・新井（2011）．温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）．
本報告：温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）．

４．考察

テフラ検出（火山ガラス比分析）ならびに火山ガラスの屈折率測定の対象となった２区調査区東壁 13b2 層、２－１区調査区南壁 13b 層のテフラ層は、層相および火山ガラスの色調や形態の特徴、黒雲母を含むこと、さらに火山ガラスの屈折率特性などから、いずれも 838 年の伊豆神津島天上山テフラ（Iz － Kt，一色，1982，菅ほか，1992，町田・新井，1992，2003，2011）に同定される可能性が高い。なお、両テフラ層はいずれも純度が高いことから一次堆積層の可能性が高い。

５．まとめ

静岡市上土遺跡で検出されたテフラ試料２点（非常に細粒の白色火山灰層）を対象に、テフラ分析（火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定）を行った。その結果、いずれも神津島天上山テフラ（Iz － Kt，838 年）に同定される可能性が非常に高いと判断された。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」，東京大学出版会，p.138-149.

壇原　徹(1993)温度変化型屈折率測定法.日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，p.149-158.

一色直記（1982）「神津島地域の地質」．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，133p.

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第２刷）」．東京大学出版会，336p.

菅　香世子・小林勝己・印牧もとこ・宮原智哉・遠藤邦彦（1992）神津島南部の火砕流堆積物．火山，37，p.71-83.

第４節　上土遺跡出土プラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

ここでは、上土遺跡の発掘調査で検出された水田耕作土およびその他の層準についてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性ならびに周辺植生と環境について検討した。

２　試料

分析試料は、２区調査区西壁、２区３号ベルト東側、２区調査区東壁で採取された 17 点、２－１区調査区南壁、２－１区第５ベルト南側で採取された 11 点の計 28 点である。分析対象層準を結果表に示す。なお、現地調査および試料採取は、平成 30 年 12 月 14 日と平成 31 年１月 18 日に実施した。

３　方法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。

１）土壌サンプルの表面約５㎜を除去後、新鮮な部分の土壌約 10 cm^3を採量する。
２）採量した試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）する。
３）試料約１ｇに直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02g 添加する。
４）電気炉灰化法（550℃・６時間）により脱有機物処理を行う。
５）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）により分散する。
６）沈底法により 20 μｍ以下の微粒子を除去する。
７）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、ネザサ節は 0.48、メダケ節は 1.16、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山 2000）。

４　結果

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらについて定量を行い、その結果を第 16 表、第 60・61 図に示した。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節･チシマザサ節･スズタケなど）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）

〔イネ科－その他〕

未分類等

〔その他〕

海綿骨針

第 16 表　プラント・オパール分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群（和名・学名）		2 区西壁						2 区 3 号ベルト東側							2 区東壁			
		10 層	12 層	13a 層	13b1 層	13b2 層	14 層	13b 層	14 層	15 層	16 層	17b 層	畦畔構築土①	畦畔構築土②	13b 層	14 層	15-16 層	17b 層
イネ科	Gramineae (Grasses)																	
イ　ネ	Oryza sativa	8			4	4	16	13	10	14	12		9	4	9	8	12	
ヨシ属	Phragmites	4		94	8	4	4		5	5	16		23		31	16	15	
ススキ属型	Miscanthus type	16		20	33	8	29	18	10	19	16	8	18	20	18	4	31	14
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																	
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	4			4		8								4	4	4	
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	8		8	8		4	4	5		4		9	4	4	4		
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	4		4	12	4	24	4	5	5	4		9	4	4		19	4
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	4									8		5		4	4	4	
その他	Others						12	9			8		5					
未分類等	Unknown	24	7	37	25	30	37	27	31	33	24	15	36	28	53	53	39	25
(海綿骨針)	sponge	12				25	24	13	5	5	4		14	8	4	8	15	
プラント・オパール総数		72	7	163	94	50	134	75	66	76	92	23	114	60	127	93	124	43

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡・cm）																		
イ　ネ	Oryza sativa	0.23			0.12	0.12	0.48	0.39	0.30	0.42	0.36		0.26	0.12	0.26	0.24	0.34	
ヨシ属	Phragmites	0.25		5.93	0.52	0.27	0.26		0.33	0.30	1.02		1.42		1.95	1.02	0.98	
ススキ属型	Miscanthus type	0.19		0.25	0.41	0.11	0.35	0.22	0.13	0.23	0.20	0.10	0.22	0.25	0.22	0.05	0.38	0.18
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.02			0.02		0.04								0.02	0.02	0.02	
メダケ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.09		0.09	0.10		0.05	0.05	0.06		0.05		0.10	0.05	0.05	0.05		
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.03		0.03	0.09	0.03	0.18	0.03	0.04	0.04	0.03		0.07	0.03	0.03		0.14	0.03
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.01									0.02		0.01		0.01	0.01	0.01	

５　考察

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行う際には、通常、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたり 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山,2000)。ただし､最近の調査では密度が 3,000 個 / ｇ程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 / ｇとして検討を行う。また、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで､これらの植物の出現状況を検討することで､堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

１）２区調査区西壁

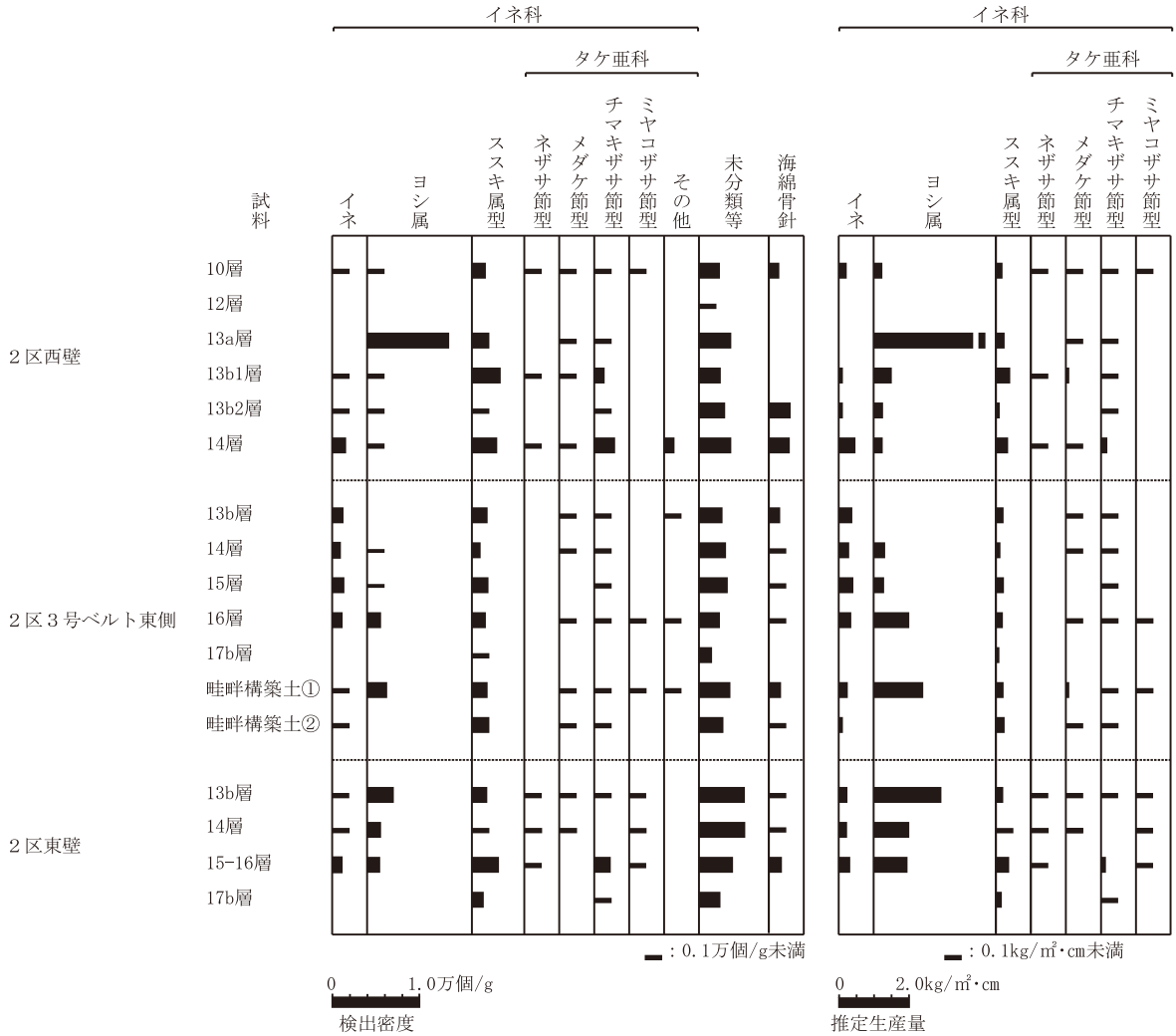
本地点では、10 層、13b1 層、13b2 層、14 層でイネが検出されている。プラント・オパール密度はそれぞれ 800 個 / ｇ、400 個 / ｇ、400 個 / ｇ、1,600 個 / ｇと低いかやや低い値であり、稲作跡の判

断基準値とされる 3,000 個 /g には達していない。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。もしこれらの層で稲作が行われていたならば、イネのプラント・オパール密度が低いことの要因として、１）稲作が行われた期間が短かった、２）稲の生産性が低かった、３）耕作土が流出した、４）土層の堆積速度が速かった、などのことが考えられる。

なお、13a 層ではヨシ属が非常に高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が極めて卓越している。このことから、13a 層の時期の調査地はヨシ属などの繁茂する湿地の環境であったと推定される。また、13b2 層以外ではススキ属型が比較的高い密度であることから、これらの層では周辺の比較的乾いたところにはススキ属が生育していたとみられる。

２）２区３号ベルト東側

ここでは、13b 層、14 層、15 層、16 層でイネが検出されている。プラント・オパール密度は 1,000 ～ 1,400 個 / g であり、いずれもやや低い値である。なお、本地点では畦畔とみられる高まりが認められ、その上部（畦畔構築土①）と下部（畦畔構築土②）からは少量ではあるがイネが検出されている。このことから、畦畔に関連する耕作層とみられる 15 層および 16 層では、調査地において稲作が行われていた可能性が考えられる。また、畦畔の築造あるいは補強にあたっては水田土壌が利用された可能性が考えられる。13b 層と 14 層については稲作が行われて可能性はあるものの、他所からプラント・オパールが



第 60 図　プラント・オパール分析結果１

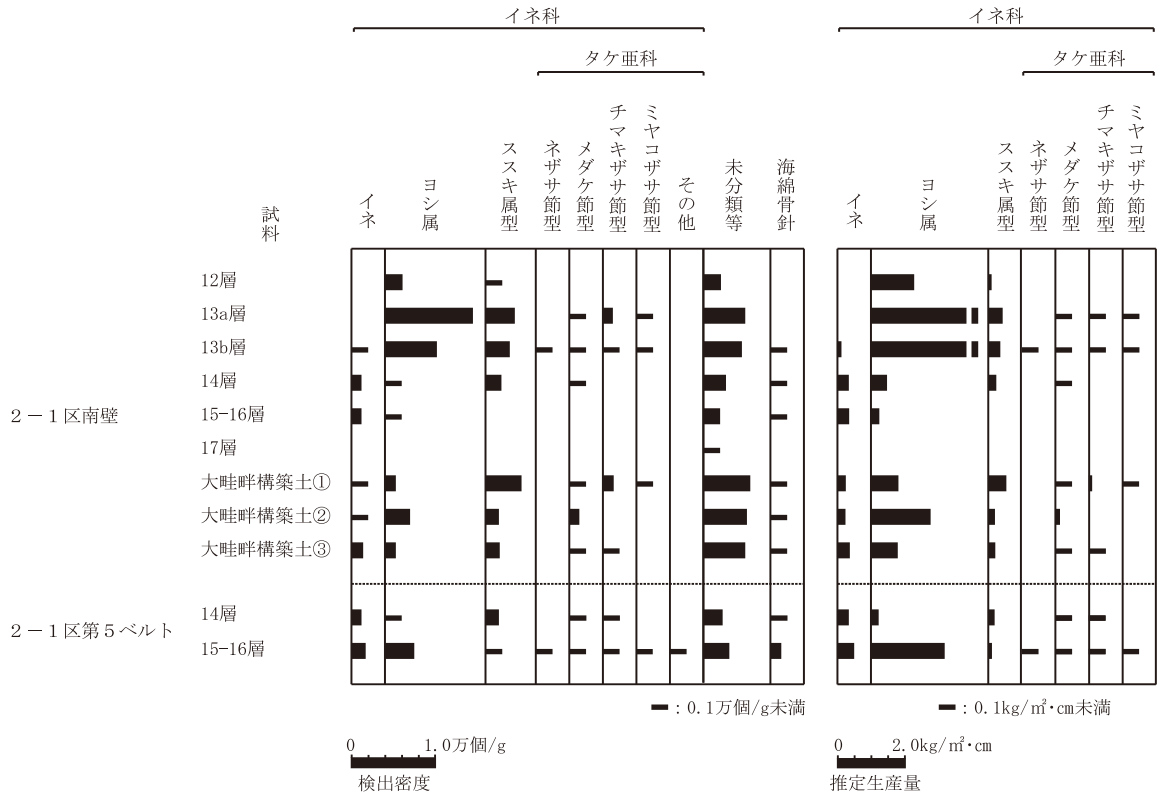
混入した危険性も否定できない。仮にこれらの層で稲作が行われていたならば、プラント・オパール密度が低いことの要因としては、先述したようなことが考えられる。

なお、13b 層、15 層、16 層、畦畔構築土①と畦畔構築土②ではススキ属型が比較的高い密度であることから、これらの層の時期は周辺の比較的乾いたところや畦畔にススキ属が生育していたと推定される。

３）2 区調査区東側

本地点では、13b 層、14 層、15 － 16 層でイネが検出されている。プラント・オパール密度は、順に 900 個 /g、800 個 /g、1,200 個 /g と低いかやや低い値である。ここでは、15 － 16 層に対応する畦畔状高まりが確認されている。このことから、調査地では 15 － 16 層において稲作が行われていた可能性が考えられる。13b 層と 14 層については稲作が行われていた可能性はあるものの、他所からプラント・オパールが混入したことも考えられる。仮にこれらの層で稲作が行われていたならば、上述したようなことが考えられる。

なお、13b 層ではヨシ属が高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が卓越している。このことから、当該層の時期の調査地はヨシ属が生育するような湿地あるいは湿った環境であったと推定される。15 － 16 層ではススキ属型が比較的高い密度であることから、調査地周辺の比較的乾いたところあるいは畦畔にススキ属が生育していたとみられる。



第 61 図　プラント・オパール分析結果２

４）２－１区調査区南側

ここでは、13b 層、14 層、15 ～ 16 層でイネが検出されている。プラント・オパール密度は、それぞれ 400 個 /g、1,200 個 /g、1,200 個 /g と低いかやや低い値である。なお、ここでは大畦畔が検出されており、上位より大畦畔構築土①、大畦畔構築土②、大畦畔構築土③からも低密度ではあるがイネが検出されている。したがって、大畦畔は水田に伴うものであり、対応する耕作層とみられる 14 層と 15 ～ 16 層では、調査地において稲作が行われていた可能性が考えられる。また、大畦畔の築造あるいは補強には水田土壌が利用されていた可能性が示唆される。

13a 層と 13b 層ではヨシ属が非常に高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が極めて卓越している。このことから、両層の堆積時の調査地はヨシ属などの繁茂する湿地の環境であったと推定される。大畦畔構築土①ではススキ属型が高い密度であることから、大畦畔あるいは近傍の比較的乾いたところにはススキ属が生育していたとみられる。

５）２－１区調査区第５ベルト

本地点では、14 層と 15 ～ 16 層でイネが検出されている。プラント・オパール密度はそれぞれ 1,200 個 /g、1,700 個 /g とやや低い値である。なお、ここでも両層に対応する畦畔状の高まりが検出されていることから、14 層と 15 ～ 16 層において稲作が行われていた可能性が考えられる。

15 ～ 16 層ではヨシ属が高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が卓越している。このことから、15 ～ 16 層の時期の調査地周辺はヨシ属が生育するような湿地あるいは湿った環境であったと推定される。

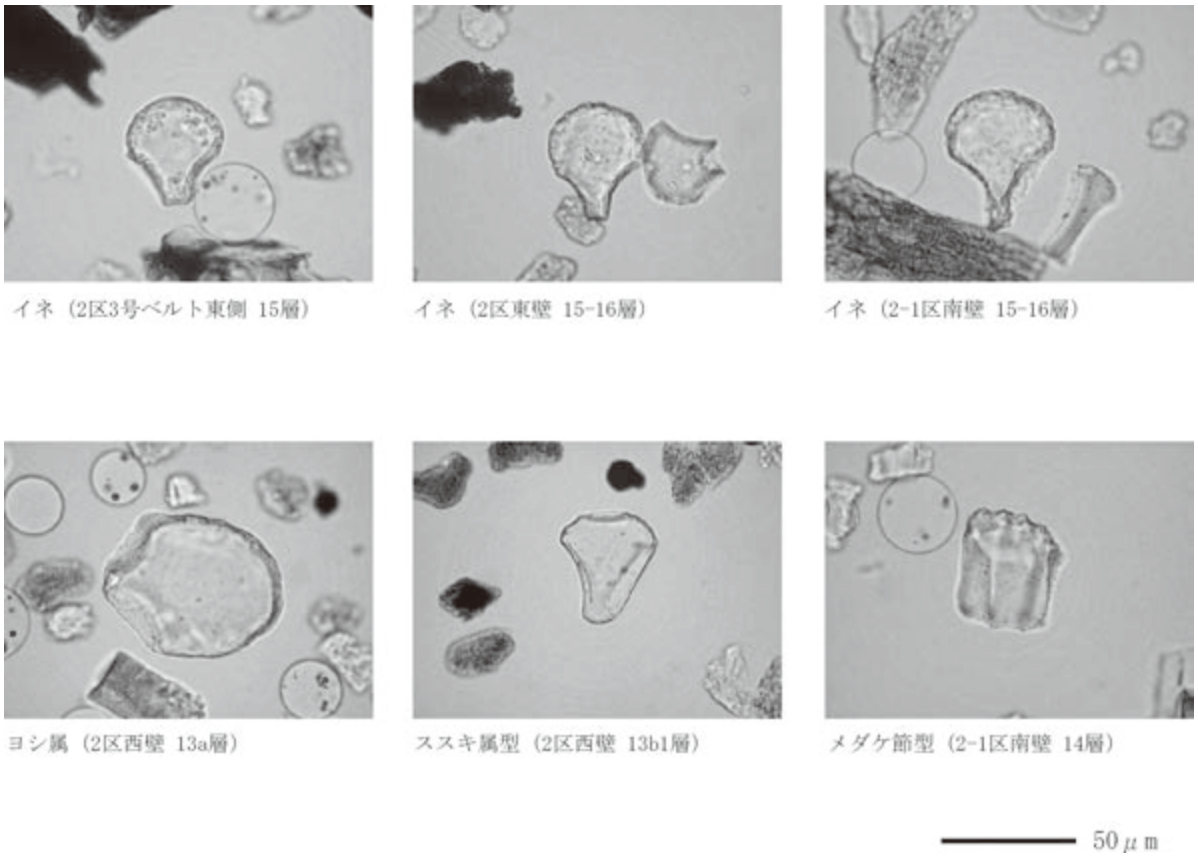


写真 15　上土遺跡のプラント・オパール写真１

６．まとめ

上土遺跡における稲作の可能性と周辺環境を検討することを目的として、プラント・オパール分析を行った。その結果、２区３号ベルト東側の 15 層と 16 層、２区調査区東側の 15 ～ 16 層、２－１区調査区南側の 14 層と 15 ～ 16 層において稲作が行われていた可能性が認められた。また、２区３号ベルト東側で検出された畦畔、２－１区調査区南壁で検出された大畦畔からもイネが検出され、これらが水田に伴う構築物であったことが認められた。13a 層と 13b 層の時期の調査地は、ヨシ属の繁茂する湿地の環境であったと推定された。なお、畦畔や周辺の乾燥したところにはススキ属などが生育していたと推定された。

参考文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p. 69-84.

藤原宏志（1976）プラント･オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p. 73-85.

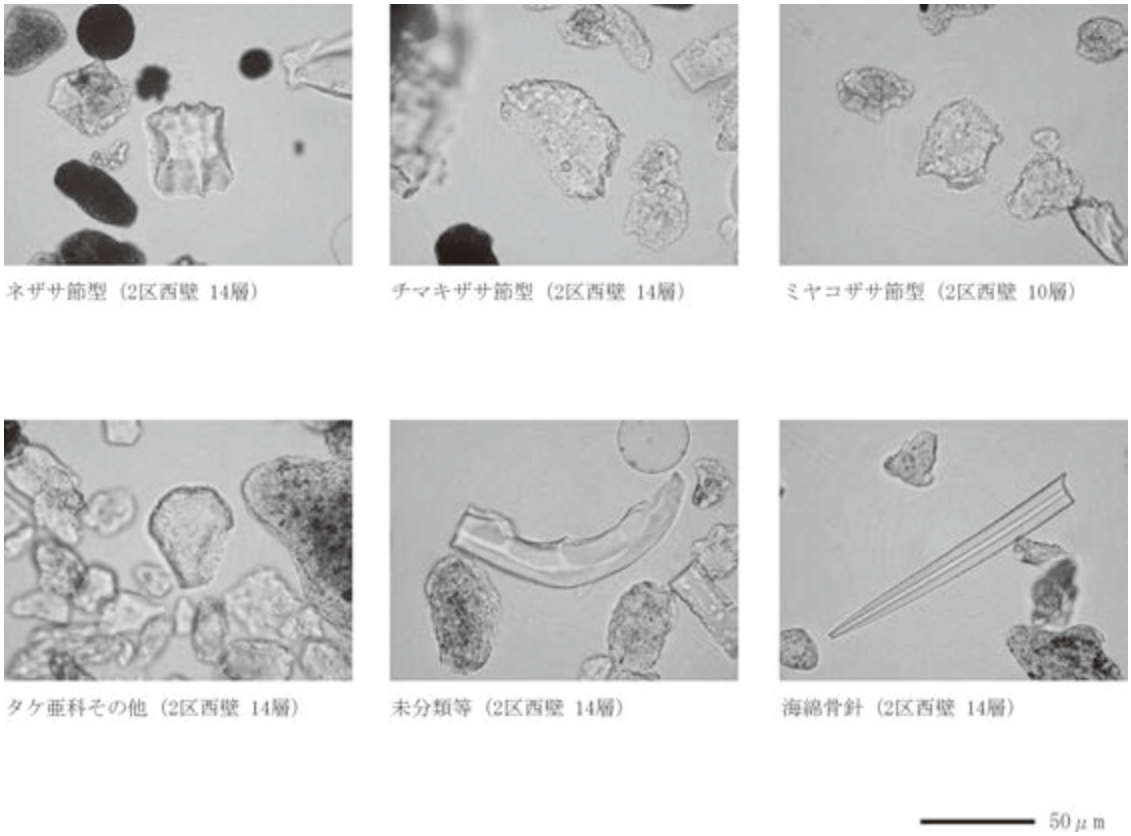


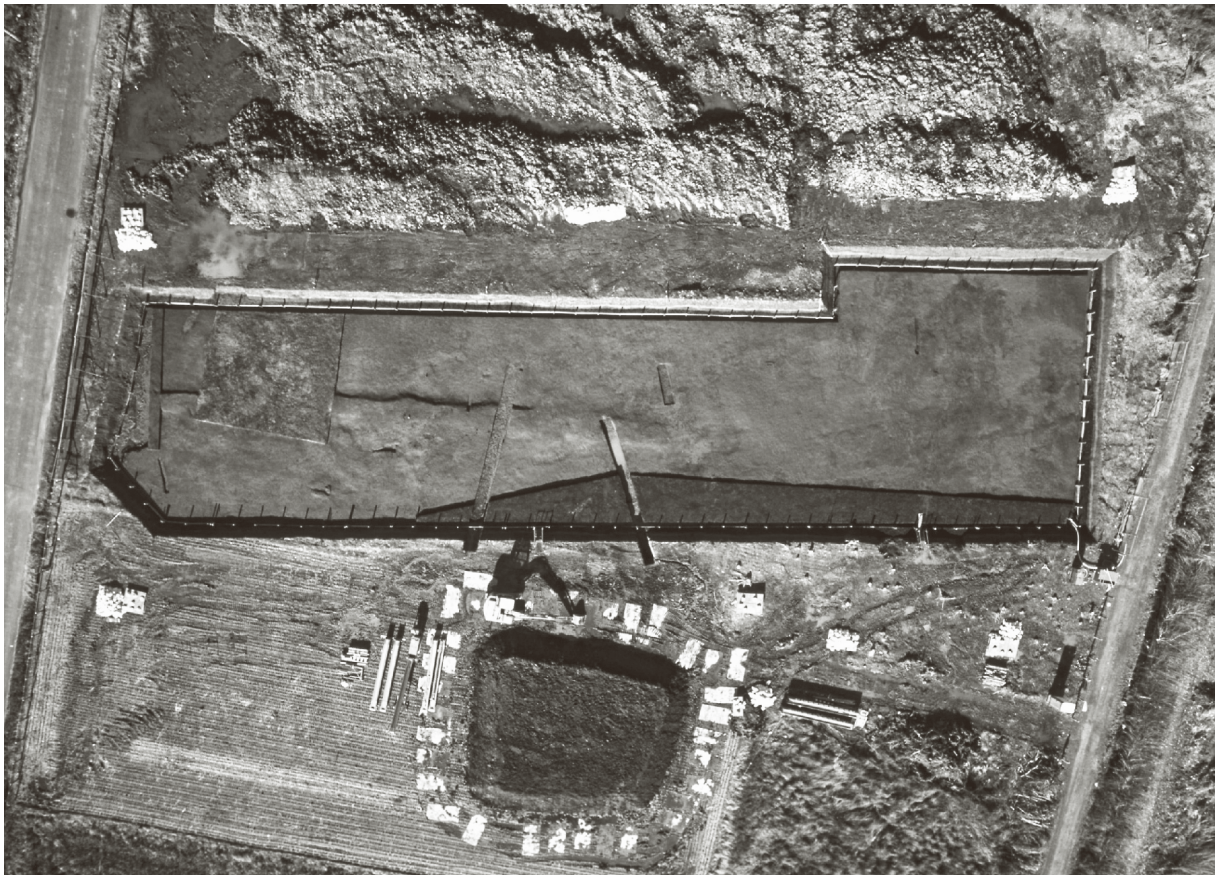
写真 16　上土遺跡のプラント・オパール写真２

写真図版

図版1

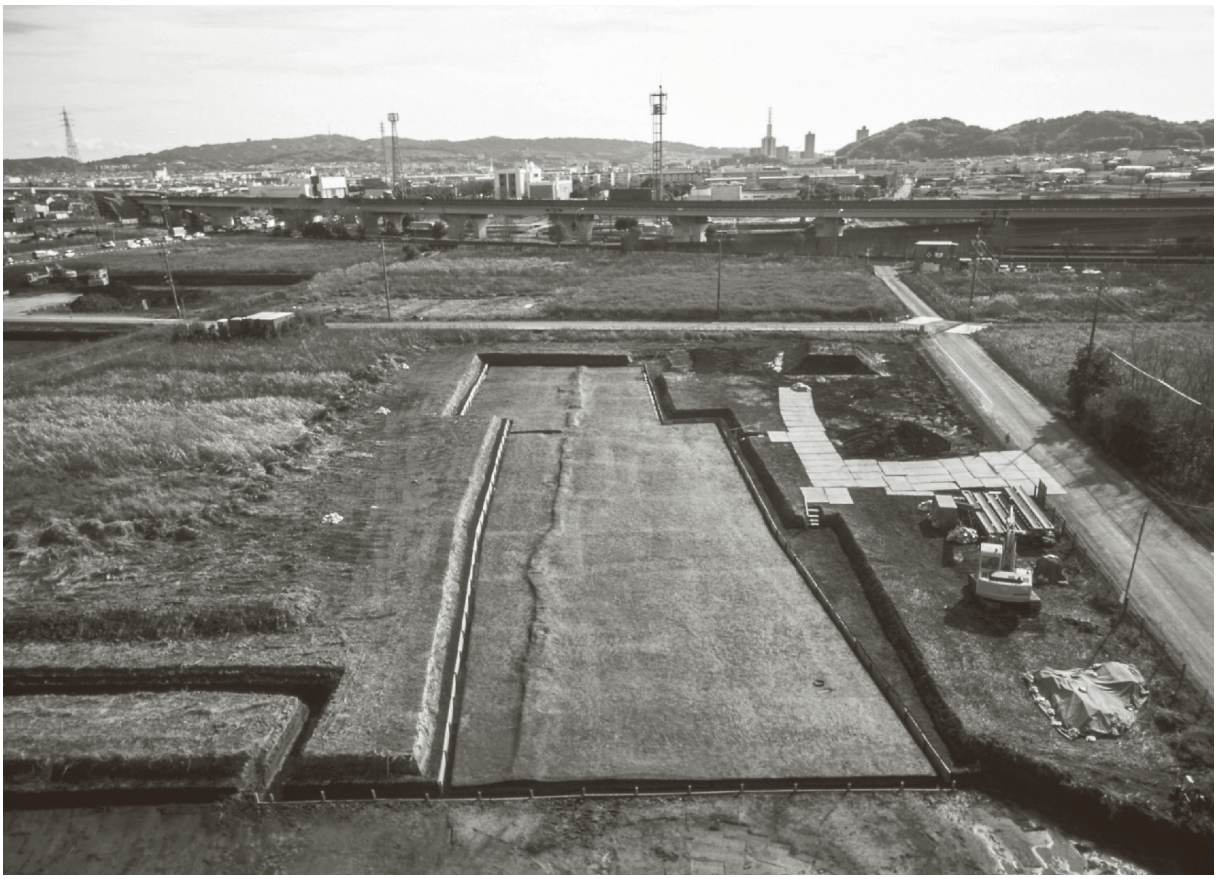
立石エリア調査区全景（合成写真）

1　1－1区　調査区西側および畦畔1（北東から）



2　1－1区　調査区全景

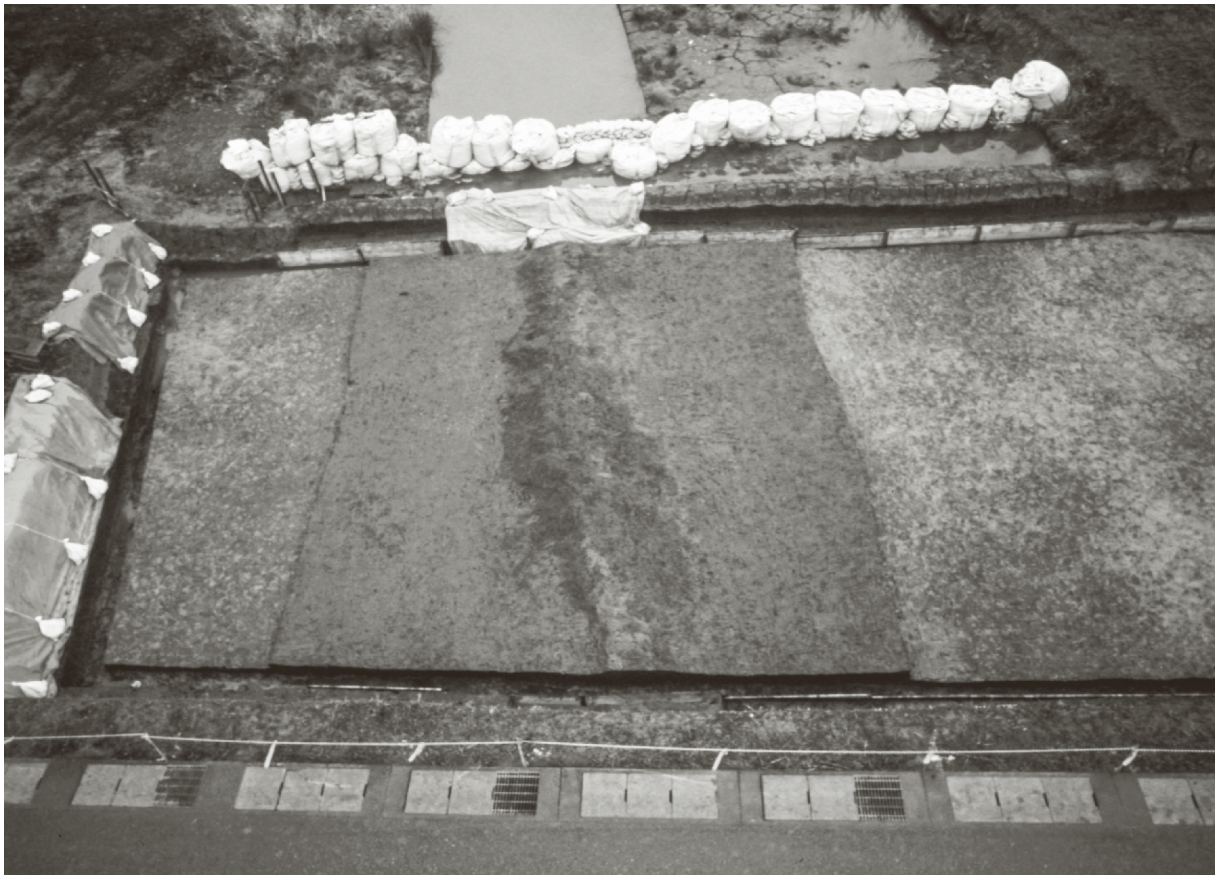
図版3



1　1－2区　調査区遠景（北西から）

2　1－2区　調査区全景

1　1－3区　調査区遠景（南から）



2　1－3区　調査区西側および畦畔4（南東から）

図版5

1　2区　調査区遠景（北西から）

2　2区　調査区全景

1　3区　調査区遠景（南西から）

2　3区　調査区全景

図版7

1　4区　調査区遠景（北西から）

2　4区　調査区北側および畦畔7

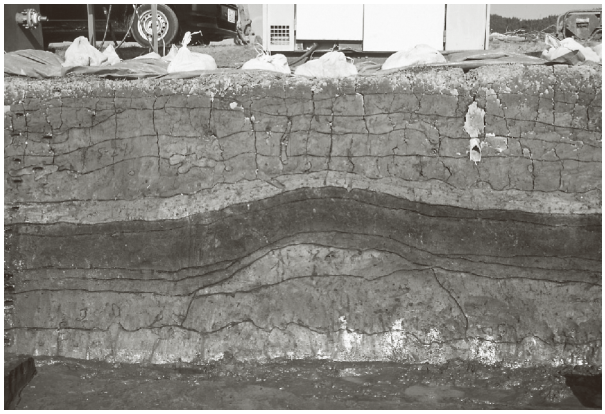
1　1-1 区　畦畔１土層断面（土層帯４）（南西から）

2　1-2 区　畦畔２土層断面（第５ベルト南面）（南東から）

3　1-3 区　畦畔４とその付近の土層断面（調査区南壁）（北西から）

4　1-3 区　畦畔５とその付近の土層断面（調査区北壁）（東南から）

5　２区　畦畔３土層断面（第１ベルト）（南西から）



6　３区　畦畔６土層断面（調査区北東壁）（南西から）

7　３区　畦畔６土層断面（調査区南西壁）（北東から）

8　４区　畦畔７土層断面（調査区西壁北端部）（北東から）

図版9

1　1-1 区　畦畔１土層断面（土層帯５）（北東から）

2　1-1 区遺物出土状況（椀と田下駄）

3　1-1 区　木製品集中地点１遺物出土状況（畦畔東端部）（北東から）

4　1-1 区　木製品集中地点１遺物出土状況（畦畔東端部）（北東から）

5　1-1 区　角枠型田下駄出土状況

6　1-1 区　畦畔内泥除け出土状況

7　1-1 区　泥除け他出土状況

8　1-1 区　田下駄出土状況

1　1-2 区　畦畔２検出状況（南東から）

2　1-2 区　畦畔２土層断面（第２ベルト南側）（南東から）

3　1-2 区　畦畔２土層断面（第４ベルト南側）（南東から）

4　1-2 区　畦畔２取水口？北側の土層断面（南西から）

5　1-2 区　畦畔２取水口？南側の土層断面（南西から）

6　1-2 区　円枠型田下駄の円枠と足板出土状況

7　1-2 区　田下駄出土状況

8　1-3 区　畦畔４検出状況（南東から）

図版 11

1　1-3 区　畦畔４土層断面（調査区西壁）（南東から）

2　1-3 区　調査区南東壁西端部土層断面（北西から）

3　1-3 区　調査区北東壁土層断面（南西から）

4　1-3 区　調査区北西壁東端部土層断面（南東から）

5　1-3 区　畦畔４下部遺物出土状況（南東から）

6　1-3 区　畦畔４補強材検出状況（東から）

7　1-3 区　調査区東側遺物出土状況（南西から）

8　２区　畦畔３検出状況（北東から）

1　２区　畦畔３土層断面（第３ベルト北東側）（北東から）

2　２区　畦畔３土層断面（第５ベルト南西側）（南西から）

3　２区　畦畔３補強材検出状況

4　２区　畦畔３補強材？検出状況（調査区西側）

5　２区　木製品集中地点２遺物出土状況（北から）

6　２区　木製品集中地点２遺物出土状況

7　２区　火きり臼と火きり杵出土状況

8　２区　天秤棒出土状況

図版 13

1　２区　田下駄出土状況

2　２区　田下駄等出土状況

3　２区　田下駄出土状況

4　２区　木柄付鉄鎌出土状況（北東から）

5　２区　田下駄出土状況

6　２区　泥除け出土状況

7　３区　畦畔６土層断面（第１ベルト西側）（南西から）

8　３区　畦畔６土層断面（第２ベルト西側）（南西から）

1　３区　畦畔下遺物出土状況

2　３区　遺物出土状況（調査区南西コーナー部）（北東から）

3　４区　調査区北半および畦畔７検出状況（南西から）

4　４区　畦畔７（西側）検出状況（東から）

5　４区　畦畔７（東側）検出状況（南西から）

6　４区　調査区東南端部遺物出土状況（北西から）

7　４区　用途不明木製品出土状況（北東から）

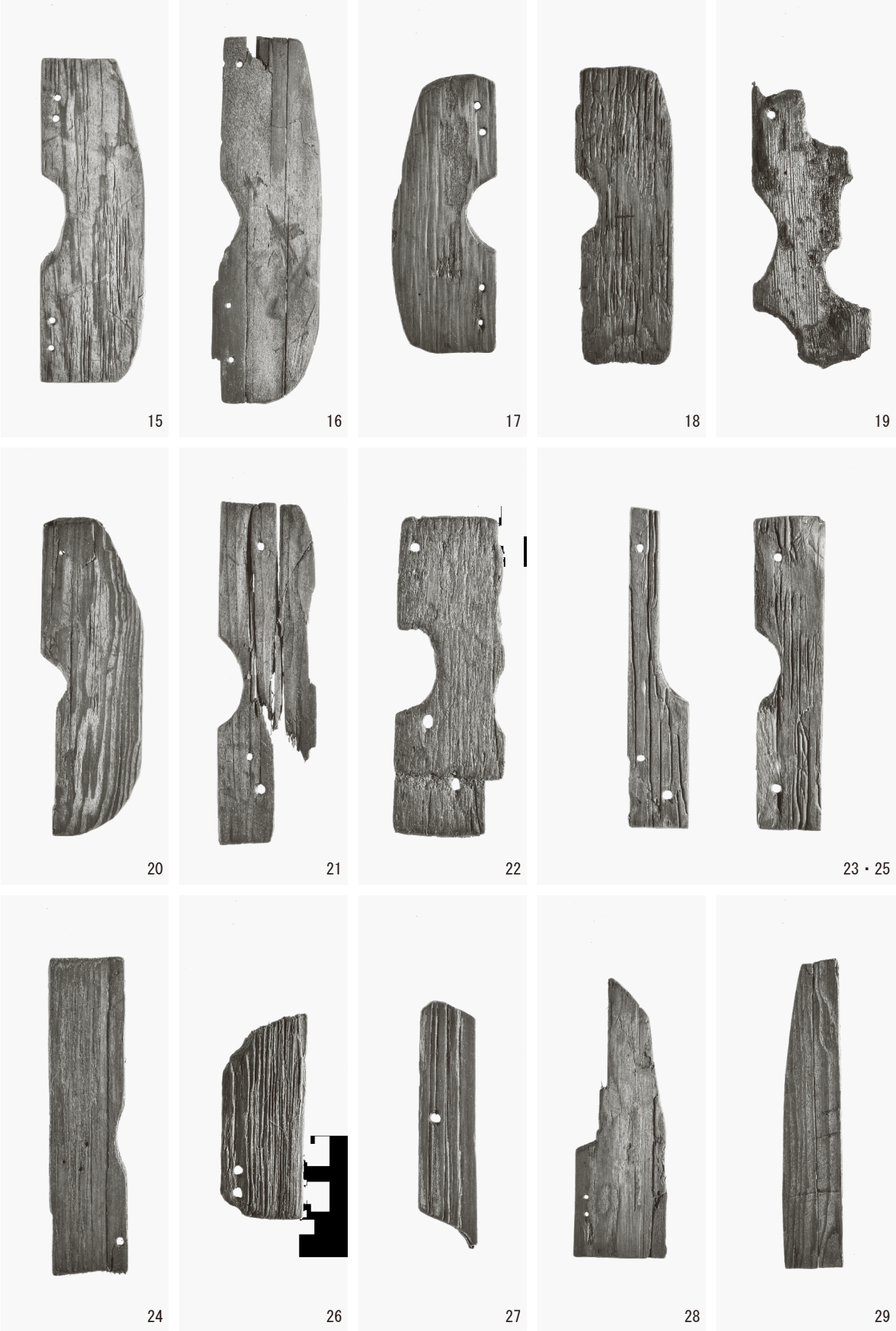
8　４区　田下駄出土状況

図版 15

出土遺物1

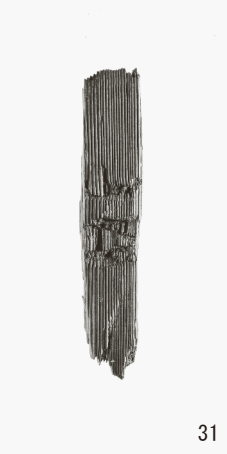
出土遺物2

図版 17



出土遺物3

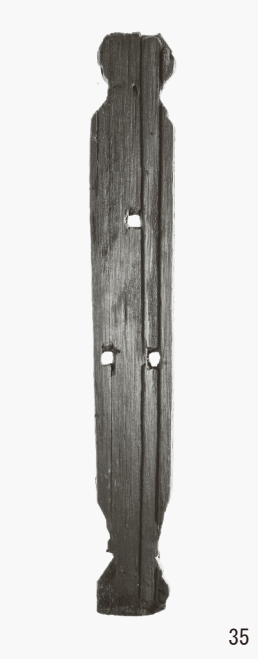
30


31

31

33

34


35

36

40

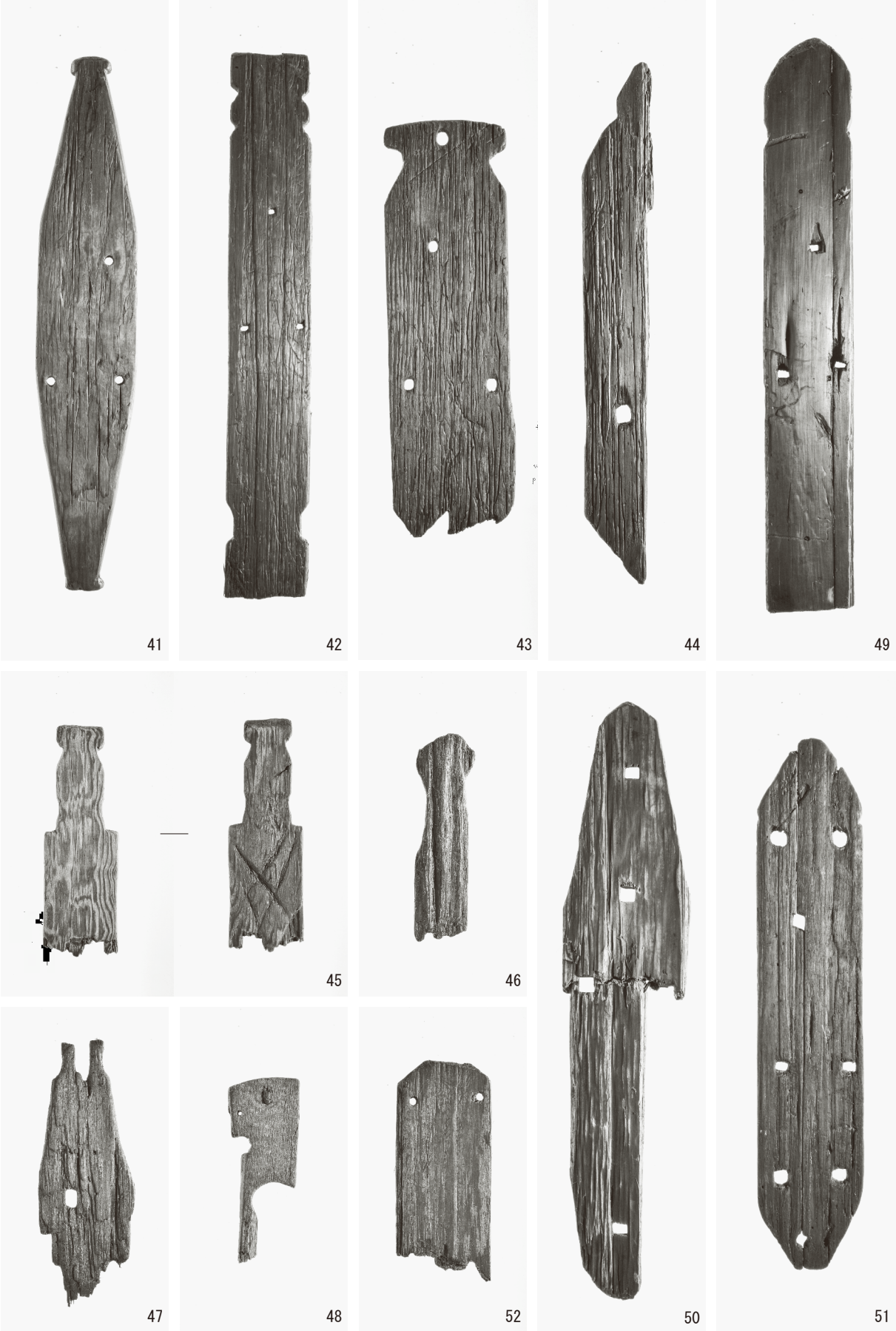
37

38

39

出土遺物4

図版 19



出土遺物5

54

55

56

57

53

59

60

61

62

63

58

出土遺物6

図版 21

64

65

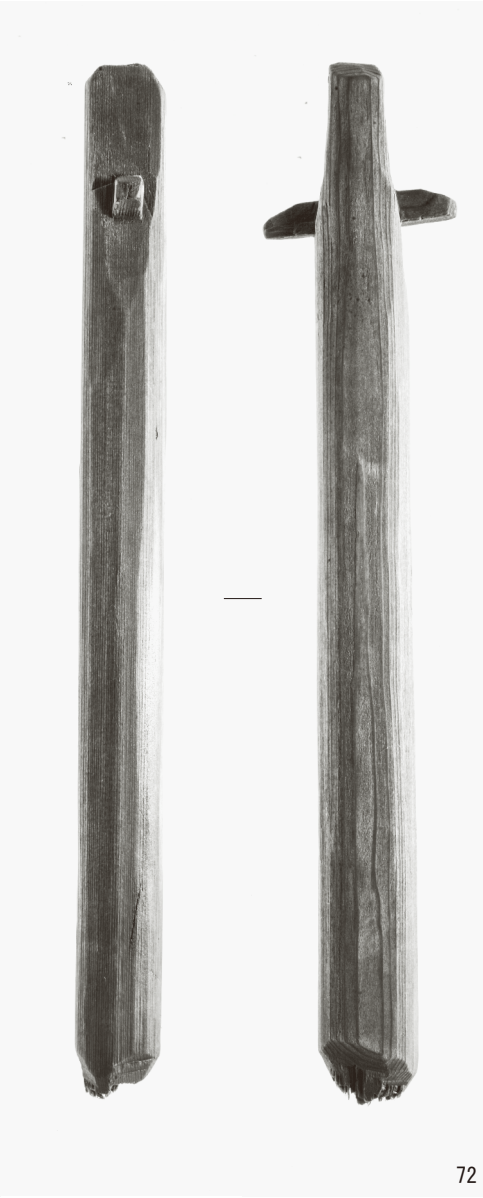
66

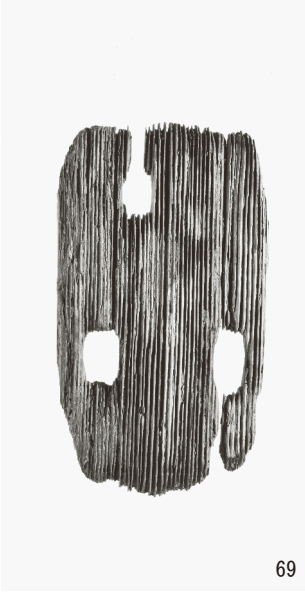
68

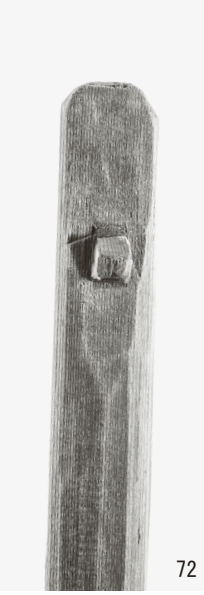
67

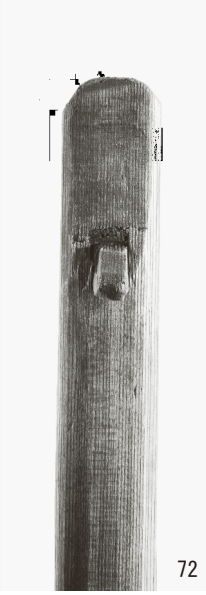
70

71


72


69


72


72

出土遺物7

出土遺物8

図版 23

81

82

83

84

86

85

87

出土遺物9

88

89

90

92

出土遺物 10

図版 25

出土遺物 11

101

102

103

104

105

107

108

109

106

111

110

113

112

出土遺物 12

図版 27

114

115

116

117

118

119

120

121

122

出土遺物 13

130

132

128

123

124

125

126

127

129

131

出土遺物 14

図版 29

133

134

135

136

144

145

137

138

139

140

142

141

143

出土遺物315

出土遺物 16

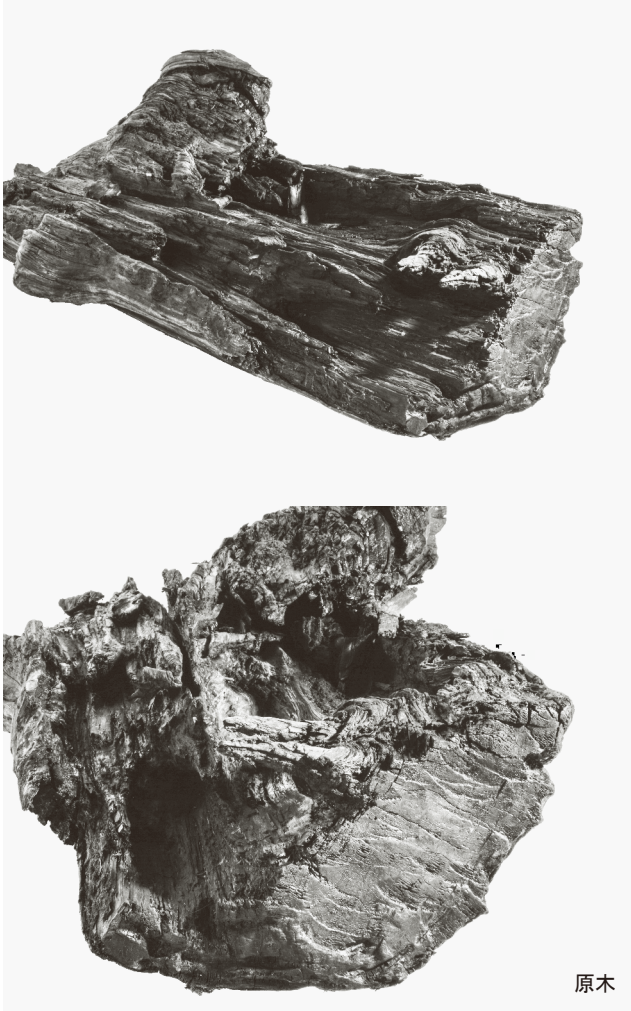
図版 31

158

159

160

161


原木

162

163

164

165

出土遺物 17

報告書抄録

ふりがな	あげつちいせきに
書名	上土遺跡Ⅱ
副書名	平成 29 ～令和４年度 二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 64 集
編著者名	中川律子　木崎道昭　鈴木三男
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒 421-3203　静岡県静岡市清水区蒲原 5300-5　　TEL　054 － 385 － 5500（代）
発行年月日	2022 年 3 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町	遺跡番号					
上土遺跡（あげつちいせき）	静岡県静岡市葵区（しずおかけんしずおかしあおいく） 立石（たていし）7-18 他	22102		35°　00’92”	138°　39’87”	20171030 ～ 20180326 20180921 ～ 20190305 20191007 ～ 20200306	6, 668 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上土遺跡	水田跡	奈良時代	畦畔・水利施設	土器（須恵器）、金属製品（鉄鎌）、木製品（鎌柄、火切り臼、火切り杵、鍬柄、泥除け、馬鍬、円枠型田下駄、角枠型田下駄、天秤棒、刳物、曲物、建築部材（壁、垂木他）、畦畔材（杭、横木）、非加工材）	

要約

上土遺跡は、平成４～５年度に国道１号線バイパス（静清バイパス）建設に伴う発掘調査が行われた。平成 23 ～ 28 年度には二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）事業に伴う発掘調査が行われ、今回は、同事業に伴う発掘調査の２期目にあたり、立石エリアを調査対象とした。

立石エリアは国道１号線バイパスの北側に位置し、東に巴川や南沼上丘陵、北にある麻機沼から続く低湿地帯である。これまでの調査成果により、８世紀から９世紀初頭の条里制水田が当地一帯に広がっていたことが分かっており、今回の調査でも、１辺が約 107 ｍの方形区画を持つ条里にかかわる大畦畔が確認された。いずれの大畦畔も北から西へ 39 度に傾いた方向性を持ち、条里計画線に沿って、粘土を盛り上げた構造であった。なかには大畦畔の強度を保つために、畦畔の内部に再利用された建築部材や土木材等が埋め込まれていた。立石エリアでも安東川エリアや加藤島エリアと同じ状況であることが確認され、条里制水田の広がりが、麻機沼に近いところまで及んでいたことを示す成果が得られた。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 64 集

上土遺跡Ⅱ

静岡市

平成 29 年度～令和４年度掛二級河川巴川（麻機遊水地第２工区）
総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

令和４年３月 28 日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒 421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原 5300-5
TEL　054-385-5500（代）
FAX　054-385-5506

印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒 410-0058　静岡県沼津市沼北町 2 丁目 16 番 19 号
TEL　055-921-1839（代）
FAX　055-924-3898